— 茨城県土浦市 —

山川古墳群（第３次調査）

土浦市総合運動公園建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第10集

2007

土　浦　市
土浦市教育委員会
山川古墳群第三次調査会

— 茨城県土浦市 —

山川古墳群（第３次調査）

土浦市総合運動公園建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第10集

2007

土　浦　市
土浦市教育委員会
山川古墳群第三次調査会

山川古墳群第３次調査航空写真

８号墳２号埋葬施設

序

土浦市は霞ヶ浦や桜川の水に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところであり、貝塚、古墳、集落跡等数多くの遺跡が存在しております。

遺跡は当時の様子を知る手掛かりとなるだけでなく、現代の私達が豊かに生活することのできる先人の偉業の一つでもあります。

このような貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えることは私達の大切な責務であり、郷土土浦発展のためにも重要なことと思います。

このたびの山川古墳群第３次発掘調査は、市内常名地区での土浦市による総合運動公園建設事業に伴い実施されたものです。

今回の調査では古墳時代前期を中心に数多くの古墳が確認され、茨城県内でも有数な規模を誇る古墳群であることが理解できます。そして、過去の調査でも部分的に確認されていた方形に溝を巡らせた中世の館跡の全体像が明らかとなりました。

本調査によって、市内常名地区の古代文化の究明にいささかなりとも役立つことができますならば幸甚であります。

最後になりましたが、調査から報告書の刊行にあたり、関係各位の皆様のご協力とご支援に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成19年１月

土浦市教育委員会
教育長　冨永　善文

例　言

1．本書は山川古墳群第三次調査会が実施した、土浦市常名2710番地ほかに所在する山川古墳群第３次調査の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は事業者である土浦市が計画する、総合運動公園建設事業に伴う事前調査として実施したものである。

3．遺跡の発掘調査は平成17年９月１日から平成17年12月１日まで実施し、大渕淳志（〔有〕日考研茨城）が担当した。発掘調査面積はおよそ6,500㎡である。

4．出土品の整理及び報告書の作成は小川和博（〔有〕日考研茨城）が担当し、平成17年度が12月14日より平成18年３月15日まで実施し、平成18年度が平成18年６月２日より平成19年１月31日まで行った。

5．本書の原稿執筆は小川、大渕、関口　満（上高津貝塚ふるさと歴史の広場）が行った。それぞれの担当については、各原稿の末に担当者名を明記した。また本書の編集は小川・関口が行なった。

6．山川古墳群第三次調査会組織

会　　長	須田直之（土浦市文化財保護審議会長）
副 会 長	日下部和宏（土浦市教育委員会教育次長）〔平成17年度〕
	長南幸雄（土浦市教育委員会教育次長）〔平成18年度〕
理　　事	大塚　博（土浦市文化財保護審議会委員）
理　　事	伊藤賢司（土浦市役所建築指導課長）
理　　事	広瀬昌則（土浦市教育委員会文化課長）〔平成17年度〕
	古谷満寿（土浦市教育委員会文化課長）〔平成18年度〕
監　　事	堀越昭二（土浦市博物館協議会委員）
	久松一夫（土浦市教育委員会総務課長）
事務局長	宇津野利雄（上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長）〔平成17年度〕
	今泉登至（上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長）〔平成18年度〕
事務局次長	塩谷　修（上高津貝塚ふるさと歴史の広場主査）〔平成17年度〕
事務局員	石川　功（上高津貝塚ふるさと歴史の広場係長）〔平成18年度〕
	黒澤春彦（上高津貝塚ふるさと歴史の広場係長）
	堀部　猛（上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹〔平成17年度〕、係長〔平成18年度〕）
	比毛君男（土浦市教育委員会文化課主幹）
	由水寿美代（上高津貝塚ふるさと歴史の広場主事）
事務局員兼出納員	関口　満（上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹〔平成17年度〕、係長〔平成18年度〕）

○発掘作業

調査担当	大渕淳志　小川和博
調　査　員	遠藤啓子

現地調査作業員　飯田陽子　石黒　勇　泉　章子　海老原龍生　小野　豊　大久保敦子
郡司征子　斉藤与志朗　佐賀　剛　佐賀　実　志間信子　下山豊二
露久保三郎　寺嶋靖子　友部政夫　中島秀雄　中島とみ子　中島貞雄
中野富美子　中村　薫　平林敬子　松浦博子　矢口　勇　谷中　昌
山口知子　吉田みち
事　務　員　鈴木ひと美

○整理作業
調査主任　小川和博　大渕淳志
調査員　遠藤啓子
整理調査作業員　小川知美　大野美佳　大渕由紀子
事　務　員　鈴木ひと美

7．山川古墳群第三次発掘調査は大渕淳志（〔有〕日考研茨城）が担当した。出土遺物の整理及び報告書の作成は小川和博（〔有〕日考研茨城）が中心となり大渕が補佐した。
8．遺構写真は現地調査担当者が撮影し、遺物写真撮影は小川が行った。
9．本書に関わる出土品及び記録図面・写真などは一括して上高津貝塚ふるさと歴史の広場に保管してある。なお、記録や遺物の整理・保管に際しては、山川古墳群第三次調査の出土資料について、UYⅢの略称を付している。
10．発掘調査及び出土品の整理に関わり、次の諸氏又は諸機関のご協力・ご教示を賜った。記して謝意を表したい。（五十音順　敬称略）
茨城県教育委員会　茨城県県南教育事務所　土浦市都市整備部公園街路課　土浦市文化財保護審議会
武智測量設計株式会社　丸一土木有限会社　川井正一　川村満博　鈴木敏弘　瓦吹　堅
今平昌子　山岸良二

凡　例

1．山川古墳群第３次調査の地区設定は、同古墳群第１次調査区の東側、同古墳群の第２次調区の南側を実施した。この調査区内には、日本平面直角座標第Ⅸ系座標を基準とした20m四方の基準杭を設定し、それを４m間隔に細分してグリッド表記を行った。今回のグリッド表記は山川古墳群第２次調査区や神明遺跡第３・４次調査区内の表記と一連のものである。ちなみに、調査区内のＸ－46グリッドの北西角はＸ＝11,200、Ｙ＝31,900である。

2．報告書中の遺構の記号は以下のとおりである。

古墳（TM）、竪穴住居跡（ＳＩ）、掘立柱建物跡（ＳＢ）、土坑（ＳＫ）、竪穴状遺構（ＳＸ）、溝跡（ＳＤ）、井戸跡（ＳＥ）、屋外炉跡（ＳＦ）、柱穴跡（Ｐ）、柱穴状遺構（Pit）、撹乱（Ｋ）

※古墳や方形館跡を形成する方形の溝跡については、第２次調査から継続し同様な番号を付してある。これ以外の遺構については、第３次調査で各々１号から番号を付けてある。なお、第１次調査で表記した○号方形周溝墓の名称は○号墳に変更してある。

3．遺構・遺物実測図中の表示は以下のとおりである。

焼土　石　胎土中の繊維　土器の赤彩

この他の実測図中の表示は、その図面中に指示してある。

4．土層観察と遺物における色調の同定は、『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

5．本書中の遺構、遺物の表示は次のとおりである。

(1)水糸レベルは海抜高度を示す。

(2)遺構の縮尺は、竪穴住居跡（１／60）、古墳（１／100）、土坑・屋外炉跡・竪穴状遺構等（１／50）、柱穴群（１／100）である。これ以外の縮尺の図面もあり、それらについてはスケールを変えてある。

(3)遺構の文章中（　）付の計測値は現存値を示す。遺物観察表中の（　）付の計測値は現在値又は推定値を示す。

(4)遺物の縮尺は原則として1／３で示したが、器種によってはスケールを変えてある。

(5)弥生時代の竪穴住居跡の「主軸方向」は、炉や柱穴などの位置から主軸を決め、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。例（Ｎ－23°－Ｅ）。

(6)古墳の「主軸方向」は、現状の形態的特徴から主軸を決め、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。例えば方墳の場合には、長辺のある方向を主軸としている。

(7)古墳周溝の計測値は、土層断面図や掘り方断面図実測部分の中央付近で計測しているため、最深の数値を示していない場合がある。

本文目次

口絵（山川古墳群第３次調査航空写真　８号墳２号埋葬施設）
序文
例言・凡例
目次
第１章　調査に至る経緯……1
第２章　遺跡の環境……2
　第１節　地理的環境……2
　第２節　歴史的環境……2
　第３節　山川古墳群の分布状況……7
第３章　山川古墳群第３次調査……9
　第１節　調査の方法……9
　第２節　調査区の設定……9
　第３節　調査日誌……11
　第４節　調査の概要……12
　第５節　遺構と遺物……15
　（1）旧石器時代・縄文時代の遺構と遺物……15
　　1．土坑……15
　　a）陥穴……15
　　b）土坑……17
　　2．屋外炉跡……21
　　3．柱穴状遺構……21
　　4．遺構外出土遺物……24
　　a）縄文土器……24
　　b）石器……30
　（2）弥生時代の遺構と遺物……32
　　1．竪穴住居跡……32
　（3）古墳時代の遺構と遺物……35
　　1．古墳……35
　　2．竪穴状遺構……93
　（4）中世・近世の遺構と遺物……96
　　1．掘立柱建物跡……96
　　2．柱穴群……96
　　3．竪穴状遺構……107
　　4．溝跡……109
　　5．土坑……116
　　6．井戸跡……116
　　7．遺構外出土遺物……118
第４章　総括……126
写真図版
抄　録

挿図目次

第１図　周辺の遺跡位置図……3
第２図　常名台遺跡群の発掘調査区位置図……5
第３図　山川古墳群分布図……7
第４図　グリッド設定図……10
第５図　山川古墳群（第３次調査）遺構配置図……13
第６図　１・４・９・10号土坑実測図……16
第７図　２・５・６・７・８・11号土坑実測図……18
第８図　12・13・14・18号土坑実測図……20
第９図　19号土坑、１・２号屋外炉跡、１号柱穴状遺構実測図……22
第10図　６・８・11・14号土坑出土遺物……23
第11図　遺構外出土遺物（１）……25
第12図　遺構外出土遺物（２）……26
第13図　遺構外出土遺物（３）……27
第14図　遺構外出土遺物（４）……28
第15図　遺構外出土遺物（５）……31
第16図　１号住居跡実測図……33
第17図　１号住居跡出土遺物……34
第18図　２号住居跡実測図……34
第19図　７号墳実測図（１）……36
第20図　７号墳実測図（２）……37
第21図　８号墳実測図（１）……38
第22図　８号墳実測図（２）……39
第23図　８号墳実測図（３）……40
第24図　８号墳１・２号埋葬施設実測図……40
第25図　８号墳全測図（第２次調査分含む）……41
第26図　12号墳実測図（１）……43
第27図　12号墳実測図（２）……44
第28図　７・８・12号墳出土遺物……45
第29図　13号墳実測図……46
第30図　８・14・17号墳実測図（１）……48
第31図　14号墳主体部実測図（１）……48
第32図　８・14・17号墳実測図（２）……49
第33図　14号墳主体部実測図（２）……51
第34図　14号墳主体部出土遺物……51
第35図　15号墳実測図……52
第36図　16号墳実測図（１）……55
第37図　16号墳実測図（２）……57
第38図　16号墳１・２号埋葬施設実測図……57
第39図　15・16（１）号墳出土遺物……59
第40図　16号墳出土遺物（２）……60
第41図　18号墳実測図（１）……62
第42図　18号墳実測図（２）……63

第43図　18号墳１号埋葬施設実測図……63
第44図　19号墳実測図……65
第45図　20号墳実測図（１）……67
第46図　20号墳実測図（２）……67
第47図　21号墳実測図……68
第48図　21号墳１号埋葬施設実測図……68
第49図　22号墳実測図（１）……70
第50図　22号墳実測図（２）……71
第51図　23号墳実測図……72
第52図　24号墳実測図（１）……74
第53図　24号墳実測図（２）……75
第54図　25号墳実測図（１）……76
第55図　25号墳実測図（２）……77
第56図　26号墳実測図……78
第57図　27号墳実測図……80
第58図　18・20・21・22・24・26（１）号墳出土遺物……81
第59図　26（２）・27号墳出土遺物……82
第60図　28号墳実測図（１）……85
第61図　28号墳実測図（２）……87
第62図　28号墳出土遺物……88
第63図　29・30号墳実測図（１）……90
第64図　29・30号墳実測図（２）……91
第65図　31号墳実測図……92
第66図　１・２・３・６・９号竪穴状遺構実測図……94
第67図　６号竪穴状遺構出土遺物……95
第68図　１号掘立柱建物跡、５号柱穴群実測図（１）……97
第69図　５号柱穴群実測図（２）……99
第70図　１号掘立柱建物跡実測図（２）……100
第71図　１号掘立柱建物跡実測図（３）……101
第72図　１号掘立柱建物跡実測図（４）……102
第73図　１号柱穴群実測図……104
第74図　２号柱穴群実測図……105
第75図　３号柱穴群実測図……106
第76図　４号柱穴群実測図……106
第77図　４・５号竪穴状遺構実測図……108
第78図　７・８号竪穴状遺構実測図……110
第79図　２・３・５号溝跡実測図……112
第80図　４・６号溝跡実測図……115
第81図　３・15・16・17号土坑、１号井戸跡実測図……117
第82図　中世出土遺物（１）……119
第83図　中世出土遺物（２）……120
第84図　山川古墳群第３次調査前期方墳・円墳集成図……130
第85図　６号溝跡（SD06）確認状況図……132

表 目 次

表１．周辺の遺跡一覧……3
表２．現在確認されている山川古墳群の古墳一覧……8
表３．土器片錘計測表……29
表４．石器計測表……30
表５．山川古墳群第３次調査出土遺物観察表……121
表６．掘立柱建物跡及び柱穴群柱穴計測表……123
表７．山川古墳群第３次調査前期方墳・円墳規模計測表……128

写真図版目次

PL.1　山川古墳群第３次調査航空写真
PL.2　山川古墳群（第１～３次調査）等合成写真
PL.3　調査前風景、１号土坑、２号土坑
PL.4　３号土坑、４号土坑、７号土坑、９号土坑、10号土坑、11号土坑、12号土坑、13号土坑
PL.5　14号土坑、15号土坑、16号土坑、17号土坑、18号土坑、19号土坑、１号屋外炉跡、２号屋外炉跡
PL.6　１号住居跡、１号住居跡遺物出土状況、２号住居跡
PL.7　７号墳全景、８号墳全景、８号墳１号埋葬施設
PL.8　８号墳２号埋葬施設、８号墳土層断面、13号墳全景
PL.9　14号墳全景、14号墳主体部、14号墳主体部掘り方
PL.10　15号墳全景、16号墳全景、16号墳１号埋葬施設
PL.11　16号墳遺物出土状況
PL.12　18号墳全景、18号墳遺物出土状況、19号墳全景
PL.13　20号墳全景、21号墳全景、21号墳１号埋葬施設
PL.14　22号墳全景、22号墳遺物出土状況、23号墳全景
PL.15　24号墳全景、25号墳全景、26号墳遺物出土状況
PL.16　27号墳全景、28号墳全景、29・30号墳全景
PL.17　30号墳全景、29号墳全景、31号墳全景
PL.18　１号竪穴状遺構、３号竪穴状遺構、４号竪穴状遺構、５号竪穴状遺構、６号竪穴状遺構、７号竪穴状遺構、８号竪穴状遺構、９号竪穴状遺構
PL.19　１号柱穴群全景、１号柱穴群Ｐ55遺物出土状況、１号掘立柱建物跡・５号柱穴群全景
PL.20　１号掘立柱建物跡・５号柱穴群全景、６号溝跡、６号溝跡
PL.21　６号溝跡、４号溝跡、１号井戸跡
PL.22　古墳時代出土遺物（１）
PL.23　古墳時代出土遺物（２）
PL.24　古墳時代出土遺物（３）
PL.25　古墳時代出土遺物（４）
PL.26　中世出土遺物

第１章　調査に至る経緯

今回の調査は、土浦市が川口運動公園に代わり計画する新たな総合運動公園建設事業に伴うものである。調査は1993（平成５）年から継続して行われ、昨年までに北西原遺跡（1993・1994・1995・2002年調査）、山川古墳群（1995・2003年調査）、弁才天遺跡（1996年調査）、神明遺跡（1997・2001・2002・2004年調査）、西谷津遺跡（2002年調査）の５遺跡、合計11.25haの本調査を済ませている。

2005（平成17）年度調査の経緯は、年度当初に総合運動公園建設事業を担当する市都市整備部公園街路課と土浦市教育委員会との間で本年度の発掘調査に関わる協議が持たれたことが始まりとなる。この協議で、本年度の発掘調査は山川古墳群を約6,500㎡調査する方向で合意した。そして、土浦市教育委員会では本年度の発掘調査について調査費用と調査期間の積算を行うと同時に、今後の総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財調査やその取扱い方法について検討を行った。

その結果、６月22日付で山川古墳群第３次調査の経費積算書及び工程表を担当課に提示した。その中で、従来の発掘調査の契約方法を見直し、今回の調査については2005（平成17）年度・2006（平成18）年度の２ヵ年の事業として計画した。2005年度は発掘作業と基礎的な整理作業を行い、2006年度は残りの整理作業と報告書刊行までを見込んでいる。そして、今後の同事業における埋蔵文化財の取扱いについては、文化財保護の観点から、できるだけ過去の調査成果を反映した同公園内施設配置計画をして頂けるよう申し送りした。その後、今回の山川古墳群第３次調査に関わる費用や工程については土浦市で了承され、発掘調査実施に向け動き出すことになる。

その後、６月30日付で土浦市都市整備部公園街路課長から土浦市教育委員会文化課長宛てに「総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査について」の依頼文が提出され、これを受け土浦市教育委員会では、平成17年度常名地区総合運動公園建設事業に伴う発掘調査のため、山川古墳群第三次調査会を設立した。同調査会は７月27日付で茨城県教育委員会教育長宛てに埋蔵文化財発掘調査の届出を行い、それを受けた市教育委員会では７月28日付土教委発第1082号で、先の埋蔵文化財発掘調査の届出を進達した。これを受けた茨城県教育委員会は、８月５日付文第1598号の「埋蔵文化財の発掘調査について」の通知文を山川古墳群第三次調査会に、同日付文第1599号で土浦市教育委員会宛てにそれぞれ通知した。

発掘調査の実施にあたっては、８月２日付で土浦市（担当：公園街路課）と山川古墳群第三次調査会が山川古墳群発掘調査業務委託契約書を締結した。その後、発掘調査実施までの作業について、委託者・受託者などで現地打ち合わせを行った。そして、調査対象箇所の草刈や調査エリアの測量・位置出し、表土の排除・搬出など事業者にて実施し調査開始を迎えた。

（関口　満）

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境（第１図）

土浦市は茨城県南部の中央、霞ヶ浦の北西部「土浦入り」の最奥部に位置する。近隣の市町村には、市域の北側にかすみがうら市及び石岡市、西側につくば市、南側に牛久市及び稲敷郡阿見町が存在する。なお、旧来市域の北西に位置した新治郡新治村については、平成18年２月20日に土浦市と合併した。

土浦市域は大きく分け北部の新治台地と南部の筑波稲敷台地、その間に形成された桜川低地に分かれる。桜川低地は古鬼怒川によって形成されたもので、現在は県西部の筑西市の岩瀬町付近を源とする桜川が流れ霞ヶ浦に注いでいる。先の両台地の地質学的な知見としては、表土層下に風性火山灰による関東ローム層が堆積し、その下層には常総粘土層や龍ヶ崎砂礫層が堆積している。そして、この桜川沿いの両台地には所謂「谷津」が樹枝状に発達し、茨城県南部の霞ヶ浦沿岸地域の特徴的な地形を形成している。この谷津部分ではその地形を利用した谷津田と呼ばれる水田耕作がなされることが多い。

土浦市が計画する総合運動公園建設予定地が存在する常名の台地（「常名台」と通称される）は、市街地から北西方向2.5kmの新治台地の一角を占め、およそ国道６号バイパスと常磐自動車道に挟まれた地域をさす。この付近の標高は25～30mを測る。この常名台には桜川低地から規模の大きなＹ字状の谷津が奥深く入り込み、独特な地形を形成している。この谷津を取り囲むように本事業の対象となる北西原遺跡・北西原古墳群・神明遺跡・山川古墳群などの遺跡群（「常名台遺跡群」と呼称する）が存在する。

常名台の台地上は平坦で土地利用は主に畑作が行われているが、国道125号線以北や国道６号バイパス以東は市街化が進行している。また、同台地下の南裾やY字状の谷津の出口付近を中心に常名の集落が展開している。

今回発掘調査を行った山川古墳群の調査エリアは、総合運動公園建設予定地内の南端部分に位置する。調査区の面積はおよそ6,500㎡で、台地上の平坦な場所に設定されている。

（関口　満）

第２節　歴史的環境（第１図）

以下は過去の常名台遺跡群の調査成果を中心に取り上げ述べてみたいと思う。

旧石器時代：常名台遺跡群でも旧石器時代の遺物・遺構検出を目的とした調査がなされ、現在までに神明遺跡（１）第４次調査や山川古墳群（４）第２次調査などでローム層中からの遺物出土を確認している。特に、先の山川古墳群の調査では、ローム層中から遺物集中地点１ヶ所と近接して炉跡が１基確認された。同炉跡出土炭化物のＣ14年代測定では、およそ３万年前のものと推定されている。

縄文時代：常名台遺跡群の中でも神明遺跡（１）については、2001年の試掘調査の結果、縄文時代の遺構・遺物が濃密な状況で確認された。それは同遺跡の北半部分であり、中期後半の加曽利Ｅ１式やＥ２式期を中心に遺構群が展開し、大規模な集落跡の存在が予想される。また、神明遺跡第３次調査では中期の地点貝塚が確認されている。常名台の西方に位置する坂田地内では、前期の馬場先貝塚（18）や後期～晩期の中台貝塚（21）が存在している。

弥生時代：これまで、北西原遺跡第２次調査から竪穴住居跡１軒が確認されていたのみであったが、今回

第１図　周辺の遺跡位置図

表１．周辺の遺跡一覧（第１図の番号に符合）

番号	遺　跡　名	時　代
1	神明遺跡（常名台遺跡群）	旧石器、縄文、古墳、中世
2	北西原遺跡（常名台遺跡群）	旧石器、縄文、古墳
3	北西原古墳群（常名台遺跡群）	古墳
4	山川古墳群（常名台遺跡群）	古墳
5	弁才天遺跡（常名台遺跡群）	縄文、古墳、奈良、平安
6	西谷津遺跡（常名台遺跡群）	古墳、奈良、平安
7	天神脇遺跡	縄文、古墳、奈良、平安
8	西谷津西遺跡	古墳
9	常名天神山古墳	古墳
10	瓢箪塚（挑戦塚）古墳	古墳（湮滅）
11	八幡下遺跡	古墳
12	羽黒後遺跡	縄文
13	坂の上遺跡	縄文
14	小坂の上遺跡	縄文
15	中畑遺跡	縄文
16	アラク遺跡	縄文、中世
17	石橋古墳	古墳
18	赤御堂遺跡・馬場先貝塚(旧下坂田鹿島前貝塚)	縄文、古墳
19	坂田稲荷山古墳	古墳
20	釈迦久保古墳群	古墳
21	中台遺跡・中台貝塚(旧下坂田貝塚)	縄文、中世
22	下坂田古墳群	古墳
23	武者塚古墳群１号墳	古墳

の山川古墳群から竪穴住居跡が２軒確認された。しかしながら、常名台遺跡群内の弥生時代の遺構・遺物は全体的に希薄である状況は今も変わらない。

古墳時代：今までの調査の結果、北西原遺跡（２）第１～３次調査エリアから神明遺跡（１）第３・５次調査エリアにかけ前期の集落跡が発見され、西谷津遺跡（６）や弁才天遺跡（５）では前期や後期の集落跡が発見されている。いずれの遺跡も中央の谷津を意識して展開している。集落跡の規模としては、特に北西原遺跡から神明遺跡にかけ確認された前期の集落跡は規模が大きく、確認された竪穴住居跡の数は100軒を数える。そして、同遺跡群内においては中期の竪穴住居跡は全く見られず、後期の集落跡は西谷津遺跡や弁才天遺跡で確認されている。

常名台遺跡群の中で前期の集落跡と墳墓群のあり方は興味深く、台地北側の北西原遺跡から神明遺跡を中心に大集落が形成される一方、台地南側の山川古墳群（４）第１～３次調査を中心に古墳が盛んに造られた様子が理解できる。その集中する様子は今回の山川古墳群第３次調査が良く示している。そして、山川古墳群第１～３次調査によって、前期の古墳（以前にはその多くを方形周溝墓とした）のみならずそれ以降も継続して造営され、終末期の古墳も確認されている。また、台地北側の北西原遺跡第１・２・５・６次調査区内の北西原古墳群（３）では終末期の古墳が確認されている。そして、総合運動公園建設予定地の南方の常名台縁辺部では、４世紀末から５世紀初めに位置付けられる前方後円墳の常名天神山古墳（９）が存在し、近接して今は湮滅した瓢箪塚（挑戦塚）古墳（10）が存在し、今回調査した山川古墳群との関係が興味深い。また、常名台西方の坂田地内には武者塚古墳群１号墳（23）を始め、釈迦久保古墳群（20）や下坂田古墳群（22a・22b）などが今も存在する。

奈良・平安時代：常名台遺跡群の中で西谷津遺跡（６）や弁才天遺跡（５）から同時代の集落跡が発見されている。特に、弁才天遺跡では奈良時代の竪穴住居跡35軒が確認され、市内において検出例の少ないこの時代の遺構・遺物が豊富に出土している。また、このほかの遺跡での遺構の検出例は稀で、山川古墳群（４）第１次調査で１軒の竪穴住居跡が検出されたのみである。

中世：常名台遺跡群の中では、山川古墳群（４）第２～３次調査エリアから神明遺跡（１）第１・３・４次調査エリアにかけ、方形に区画された溝跡が確認されている。その方形区画内の中央部分には掘立柱建物跡や井戸跡などの施設が見つかっており、以前から方形館跡と考えられてきた。これらの遺構に関わって出土した遺物は中世前期の13世紀から14世紀のものが中心となるようである。これら遺構群が確認された土地については館跡の伝承は全くなく、調査によって初めて明らかになったものである。そして、方形に区画された館跡の周辺でも掘立柱建物跡などの遺構が確認されている。

（関口　満）

第２図　常名台遺跡群の発掘調査区位置図

第３節　山川古墳群の分布状況（第３図）

山川古墳群では過去の分布調査や発掘調査で、いわゆる方形周溝墓や古墳を含めた古墳時代の墳墓が数多く確認されている。第１・２次調査報告では本古墳群で確認された墳墓の表記について、古墳を○号墳として、方形周溝墓を○号方形周溝墓と表記した。しかしながら、本報告では過去に方形周溝墓としたものについて、古墳時代に作られた墳墓は古墳とする考えのもと扱い、○号墳と名称変更することにした。その考え方の根底には、本古墳群内で確認されている墳墓がいずれも古墳時代になって作られたものであり、弥生時代に位置付けられるものが全く存在しない状況や、墳丘の存在が明確でなく方形の周溝のみが確認される古墳時代の墳墓を方墳及び方形周溝墓として区別して表記することの困難さもある。そして、本古墳群内で確認されている墳墓の表記を○号墳によって統一性を持たせることの方が、本古墳群の内容理解のための一助になると考えた。よって、第１次調査で１・２・３号方形周溝墓としたものは、今回32・31・33号墳と変更して報告することにした。

過去の調査での遺構確認状況は、今回の第３次調査区西側に近接した第1次調査区では、４世紀代の33・31・32号墳（旧１・２・３号方形周溝墓）や５世紀代の７号墳が確認され、古墳群が南東方向へ密集する状

第３図　山川古墳群分布図

況を暗示させている。そして、第１次調査区でもより西方の調査区では、４世紀末から５世紀代の４・５・６号墳が散発的に確認されている。

この状況に比べ第２次調査区では、調査エリア東端寄りに６世紀末から７世紀代の２・３・９・11号墳が展開している。ちなみに、２号墳は調査エリア外に墳丘の盛土が残っている。そして、第３次調査区に隣接した調査エリアでは４世紀代の大型の方墳と想定される８号墳が確認されている。このほか、総合運動公園建設予定地外になるが、第３次調査区の南側に盛土が残ると思われる１号墳が存在する。

先の発掘調査や確認調査の状況から、今回の第３次調査エリア内には７・８・31号墳の一部が残り、第１次調査区から続く古墳群が密に展開することが予想されていた。

表２．現在確認されている山川古墳群の古墳一覧

番号	表　記	種　別	形　状	規模(m)	年　代	備　考
1	１号墳	古墳	円？	(径18)	？	未調査。事業地外の墓地に高まりあり。
2	２号墳	古墳	円？	径約38	7C	第２次調査。
3	３号墳	古墳	帆立貝	長23.3	6C末～7C	第２次調査。
4	４号墳	古墳	円	径21.5	5C後半～末	第１次調査。
5	５号墳	古墳	円	径12.5	5C ？	第１次調査。
6	６号墳	古墳	円？	径約20	4C末～5C	第１次調査。
7	７号墳	古墳	方？	長15	5C	第１・３次調査。本報告参照。
8	８号墳	古墳	方	長36.2	4C	第２・３次調査。本報告参照。
9	９号墳	古墳	前方後方	長23	7C中葉	第２次調査。
10	10号墳	古墳	円	径11.2	5C	第２次調査。
11	11号墳	古墳	円	径約25	7C	第２次調査。
別図	12～30号墳	古墳				第３次調査。本報告参照。
31	31号墳	古墳	方	長8.4	4C	第１・３次調査。旧２号方形周溝墓。本報告参照。
32	32号墳	古墳	方？	長19.5	4C	第１次調査。旧３号方形周溝墓。
33	33号墳	古墳	方	長13.45	4C	第１次調査。旧１号方形周溝墓。

※規模は古墳外縁・外周の最大の長さを示す。年代は『山川古墳群（第２次調査)』2004による。

参考文献

墓制研究班　「君津地方における方形周溝墓・方墳の統計的分析」『研究紀要Ⅶ』財団法人　君津郡市文化財センター　1996
小森哲也　「方形周溝墓か方墳か」『峰考古―宇都宮大学考古学研究会誌―』第13号　宇都宮大学考古学研究会　1998
土浦市教育委員会　『神明遺跡（第1次・２次調査)』　1998
茨城県教育委員会　『茨城県遺跡地図』　2001
土浦市教育委員会　『常名台遺跡群確認調査　神明遺跡（第３次調査)』　2002
土浦市教育委員会　『山川古墳群確認調査　西谷津遺跡　北西原遺跡（第６次調査）　神明遺跡（第４次調査)』　2003
土浦市教育委員会　『北西原遺跡（第１次調査)』　2004
土浦市教育委員会　『北西原遺跡（第３次・第４次調査）　山川古墳群（第１次調査)』　2004
土浦市教育委員会　『山川古墳群（第２次調査)』　2004
土浦市教育委員会　『神明遺跡（第５次調査)』　2005
土浦市教育委員会　『弁才天遺跡　北西原遺跡（第５次調査)』　2006

（関口　満）

第３章　山川古墳群第３次調査

第１節　調査の方法

今回の調査は、事業地内の南端にあたり、2001（平成13年）に確認調査を実施した「常名台遺跡群」の南側が対象となっている。その範囲はトレンチによる確認調査で溝等の遺構が検出された19a、19b、20a、20b、21a、22トレンチ（註１）すべてが含まれている。しかも、ここは平成７年に実施した「山川古墳群第１次調査」（註２）区の東側、および2002（平成14年）に実施した「神明遺跡第４次調査」（註３）区と翌2003（平成15年）に実施した「山川古墳群第２次調査」（註４）区の南側に隣接した地点にあたり、それぞれの調査区で完掘できず、部分確認された遺構のうち、いくつかは今回の調査で規模等を明らかにすることができるものと期待された。なかでも問題のある遺構のうち、山川古墳群第１次調査における、いわゆる方形周溝墓や古墳群で、旧２号方形周溝墓（今回の報告で31号墳と改名する）と７号墳の規模や形態の把握があり、また同第２次調査において８号墳と命名した大型方墳の南側の限界を明らかにすること、また1997（平成９年）の神明遺跡第１次調査と第４次調査および山川古墳群第２次調査において問題視されていた方形館跡と考えられる中世の溝跡（第２次調査では堀とも表現している）SD06の南側の限界が確認できないものかなど課題とすべき問題は山積みされていた。

なお、事前の確認調査や周辺区域の本調査結果に基づき確定された調査対象面積は約6,500㎡である。まず、調査は重機による表土層除去から開始し、その後遺構確認は人力によって精査を行い、既調査によって命名されている遺構については、できるだけ踏襲することとし、検出されたすべての遺構を順次調査することとした。その結果、かつてない遺構数量となった。特に墳丘の存在が明確ではなく、方形の周溝で囲まれた古墳時代前期の方墳などが調査区全面に整然と確認され、古墳群がこの台地南端に集中して作られていたことが判明し、さらに方形館跡に代表される中世遺構群も確実に存在していたことが明確となった。その他、縄文時代の土坑や弥生時代の住居跡が検出されている。

註釈

１）小川ほか　『常名台遺跡群確認調査　神明遺跡（第３次調査）』2002
２）比毛ほか　『北西原遺跡（第３次・第４次調査）　山川古墳群（第１次調査）』2004
３）大渕ほか　『山川古墳群確認調査　西谷津遺跡　北西原遺跡（第６次調査）　神明遺跡（第4次調査）』2003
４）小川ほか　『山川古墳群（第２次調査）』2004

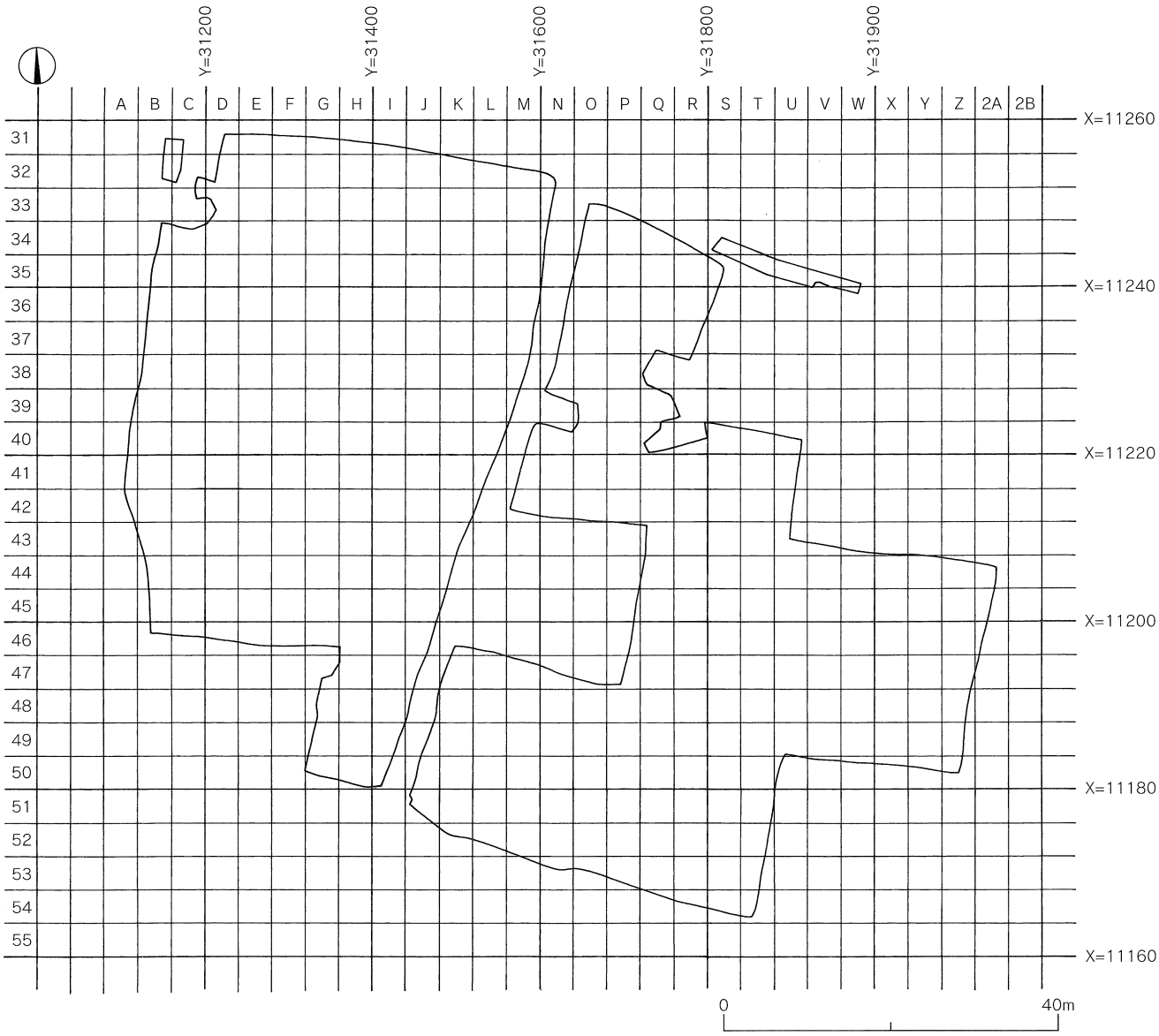
（小川和博）

第２節　調査区の設定（第４図）

既に隣接して実施された神明遺跡第３・４次調査および山川古墳群第２次調査時の調査区設定をそのまま今調査区に踏襲して用いることとした。これによって、基準点およびグリッド単位の呼称は継続させた。まず基準点ついては、今までどおり日本平面直角座標第Ⅸ系のＸ＝11,380m、Ｙ＝31,820mの交点を基点とし、新たに調査区に基準杭Ｘ＝11,200m，Ｙ＝31,900mを設定し、調査区内に20m四方の大グリッド基本杭を設け、さらにこの大グリッドを東西方向と南北方向にそれぞれ５分割して、４ｍ×４ｍの小グリッドを設定し、前回の調査で使用したグリッド名をそのまま継続した。特に小グリッド名であるアルファベットと算用数字の組合せ表記は全く同じである。

さらに遺構名や遺構番号についても、なるべく継続させた。これは前回でも触れたが、隣接する神明遺跡や山川古墳群第１次調査で検出した同一遺構名の呼称が別名称になる危惧があり、整理段階で混乱を招くと判断したからである。しかしながら、墳墓関係については、度重なる検討の結果、山川古墳群第１次調査で確認された古墳時代のいわゆる方形周溝墓については、古墳時代になり作られた「方墳」との認識のもと「○号墳」とすることによって、かつて用いた第１～３号方形周溝墓の名称は「31～33号墳」と改名している。その他、既に命名されている遺構名についてはそのまま使用し、新たに発見された遺構を順次追加していくこととした。今回は12号墳から新たな遺構名を付けていくこととなった。しかし、３回にわたる調査で検出された方形館跡である溝跡（神明遺跡第４次調査）または堀跡（山川古墳群第2次調査）としたSD06はそのまま使用しているが、それ以外は山川古墳群第３次調査として住居跡、掘立柱建物跡、土坑、竪穴状遺構、井戸跡はすべて１号から付け、また溝跡SD06を除く溝跡についても１号から振っている。

（小川和博）



第４図　グリッド設定図

第３節　調査日誌

2005（平成17）年
８月23日～31日　調査区の表土除去作業実施。
９月１日　発掘調査開始。南東側から遺構確認精査を行う。座標杭打ちを開始する。
９月２日～８日　遺構確認精査作業及び座標杭打ちを行う。
９月９日　８・12号墳、溝跡SD01、竪穴状遺構SX01遺構検出作業。
９月13日　８号墳の遺構検出を終了し、周溝内から井戸跡SE01を検出する。
９月14日　８・12号墳、竪穴状遺構SX02土層断面写真撮影。
９月15日　溝跡SD06、８・12号墳、竪穴状遺構SX01・02の土層断面写真撮影・実測。
９月21日　溝跡SD01平面図等実測・写真撮影・ベルト除去、住居跡SI01・土坑SK02調査。
９月22日　住居跡SI01、溝跡SD02・03、８・14・15号墳調査。
９月27日　溝跡SD06・02平面図等実測、14号墳土層断面図実測・写真撮影。
９月28日　14号墳主体部調査、溝跡SD06写真撮影、溝跡SD02ベルト除去。
９月29日　８・16号墳の周溝内から完形品の土師器検出。
10月４日　掘立柱建物跡SB01等の調査。５号柱穴群から銭貨出土。
10月５日　16号墳の周溝から完形品の土師器検出。
10月７日　14・16号墳の周溝内から完形品の土師器出土。
10月12日　16・21・22号墳、土坑SK11、屋外炉跡の調査。
10月13日　22・23・24・30号墳、土坑SK12・13の調査。
10月14日　22・23・26・29・30号墳、土坑SK08・12・13、掘立柱建物跡SB01調査。
10月19日　24・25・18号墳周溝内調査。
10月20日　18・24・25・26・27号墳の周溝内調査。
10月21日　８・14・26・28、29・30号墳、土坑SK03調査。
10月25日　溝跡SD06、住居跡SI02、24・25・26・28号墳、竪穴状遺構SX04 調査。
10月29日　７・29号墳、竪穴状遺構SX06・07・08、溝跡SD04の調査
11月１日　竪穴状遺構SX06・07・08、７・18号墳、溝跡SD06・04の調査。
11月２日　竪穴状遺構SX09、土坑SK15・16・17・19土層断面写真撮影・実測、竪穴状遺構SX06・07・08、住居跡SI02、５号柱穴群平面・断面図実測
11月３日　掘立柱建物跡SB01、13・18・25号墳、住居跡SI01、竪穴状遺構SX03、土坑SK02・05・06・08平面・断面図実測。
11月５日　掘立柱建物跡SB01、土坑SK04・07・09・10の平面・断面図実測
11月８日　５号柱穴群土層断面写真撮影・実測、掘立柱建物跡SB01等平面・断面図実測。
11月９日　掘立柱建物跡SB01・５号柱穴群、21・24・26・27・29・30号墳平面・断面図実測。
11月12日　５号柱穴群、19・20・21号墳平面・断面図実測、遺構清掃。
11月15日　５号柱穴群、14号墳、溝跡SD02・03、05平面・断面図実測、24・26・27・29・30号墳写真撮影。
11月17日　掘立柱建物跡SB01、井戸跡SE01、竪穴状遺構SX02、08・18号墳周溝平面・断面実測。
11月18日　16・21・22号墳の周溝内埋葬施設平面・断面図実測、全測図・等高線測量図実測、13・29号墳、５号柱穴群完掘写真撮影。
11月19日　12・18・21・22・24・26・27・28号墳、土坑SK11・19、竪穴状遺構SX06、溝跡SD07、掘立柱建物跡SB01の遺物取り上げ。５号柱穴群、土坑SK14～19、竪穴状遺構SX09完掘写真撮影
11月22日　８・15・16号墳、住居跡SI01、溝跡SD02遺物取り上げ。14・15号墳、住居跡SI01、溝跡SD02・03・05、５号柱穴群完掘写真撮影、全測図・等高線測量図実測。
11月24日　８・12号墳、土坑SK18、溝跡SD01完掘写真撮影作業。
11月27日　16号墳、掘立柱建物跡SB01及び柱穴群完掘写真撮影。
11月28日　航空撮影のため調査区内全体清掃。
11月29日　航空撮影のため調査区内全体清掃。航空写真撮影
11月30日　発掘調査器材の撤収。
12月１日　重機によって８号墳にかかる道路部分を一部表土排除し遺構確認を行うが、主体部は確認されない。井戸跡SE01を重機によって深く掘削、土器や陶磁器片が出土。現地作業終了。

（大渕淳志）

第４節　調査の概要

今回調査した山川古墳群第３次調査では、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代および中近世の遺構・遺物が検出された。

まず旧石器時代では明確な遺構の検出はなかったものの、ナイフ形石器１点のほか剥片が調査区南側で出土している。

縄文時代では、陥穴４基のほか屋外炉跡２基と土坑11基が検出された。出土遺物として早期から後期かけての土器片が出土しているものの、中心となる時期は前期中葉である。しかし、遺構内からの出土遺物の少なさから時期を確定できていない遺構が多く、そのため遺物量が多いとはいえ前期に限定することはできなかった。また土器片のほかにも磨製石斧等の石器が出土している。

弥生時代は２軒の住居跡が検出された。１軒は遺構の切り合いにより削平され、遺物の出土はなかったものの、１号住居跡とした住居跡からは後期の土器片と共に土製紡錘車が出土している。

古墳時代は本遺跡の中心となる時期で、方墳などが調査区の大半を占地している。特に前期の古墳群が中心となっているが、いずれも墳丘の存在が明確ではなく、第１次調査時においていわゆる方形周溝墓としたものが多くを占めている。しかし、今回の報告にあたっては、古墳時代に作られた墳墓を古墳とする認識のもと、すべてを古墳として扱った。したがって、古墳時代前期のものは方墳が17基と円墳１基となった。また、これらとは別に明らかに中期古墳である方墳１基と後期古墳と判断できる箱式石棺を伴う帆立貝式前方後円墳が１基ある。そして、前期以降のものとして方墳１基と円墳１基が確認された。その他、長方形もしくは長楕円形を呈する竪穴状遺構が５基検出された。なかでもＳＸ06からは前期の壷形土器が出土しており、埋葬施設（土壙墓）の可能性が考えられ、そのほかの古墳時代の竪穴状遺構についても同様な性格が推定される。

中世では、神明遺跡第１・３・４次調査、山川古墳群第２次調査で確認された方形区画溝の西側と南側の限界が把握できた。未調査部分を残しているため、今回でも全貌を明らかにできた訳ではないが、東西長約125m、南北約103mの規模をもつ方形館跡であることを明確にした。この溝内側の館跡内では、掘立柱建物跡１棟をはじめ、柱穴群、竪穴状遺構４基、土坑４基、井戸跡１基のほか、溝跡４条が検出されている。なお、館跡外においても、中世遺構の存在が知られており、柱穴群が数箇所で確認されている。

最後に近世以降の遺構としては調査区東側に位置する溝跡SD01がある。

（大渕淳志・小川和博）

第５図　山川古墳群（第３次調査）遺構配置図

第５節　遺構と遺物

（１）旧石器時代・縄文時代の遺構と遺物

１．土坑

縄文時代の土坑は17基検出しているが、そのうち４基は形態的な観点から陥穴と考えられ、これ以外の土坑と区別した。いずれも出土遺物に乏しい。

ａ）陥穴

１号土坑（ＳＫ０１）（第６図　PL.3）

調査区北東側のＯ－36区、12号墳西溝の北側、標高は26.73mに位置する。形状は長軸205cm、短軸35cmの長楕円形をなし、深さ39cmを測る。底面は細長く平坦で、壁はほぼ垂直気味に立ち上がる溝状陥穴である。主軸方向はＮ－２°－Ｗを指す。覆土は５層に分層でき、レンズ状を呈する自然堆積層である。遺物は検出できなかったため、時期が確定できないが、縄文時代の覆土である。

４号土坑（ＳＫ０４）（第６図　PL.4）

調査区の中央東側のＲ－45区、16号墳北溝の西端、標高は27.07mに位置する。形状は長軸189cm、短軸105cmの長方形をなし、深さ69cmを測る。底面は平坦で、付帯施設として逆茂木状ピットが５本穿ってある。Ｐ１・３・４・５は長軸に沿ってほぼ一直線に並列する。壁面は外傾して立ち上がる。主軸方向はＮ－70°－Ｅを指す。覆土は４層に分層でき、平行堆積をなす自然堆積層である。遺物は検出できなかったため、時期が確定できないが、縄文時代の覆土である。

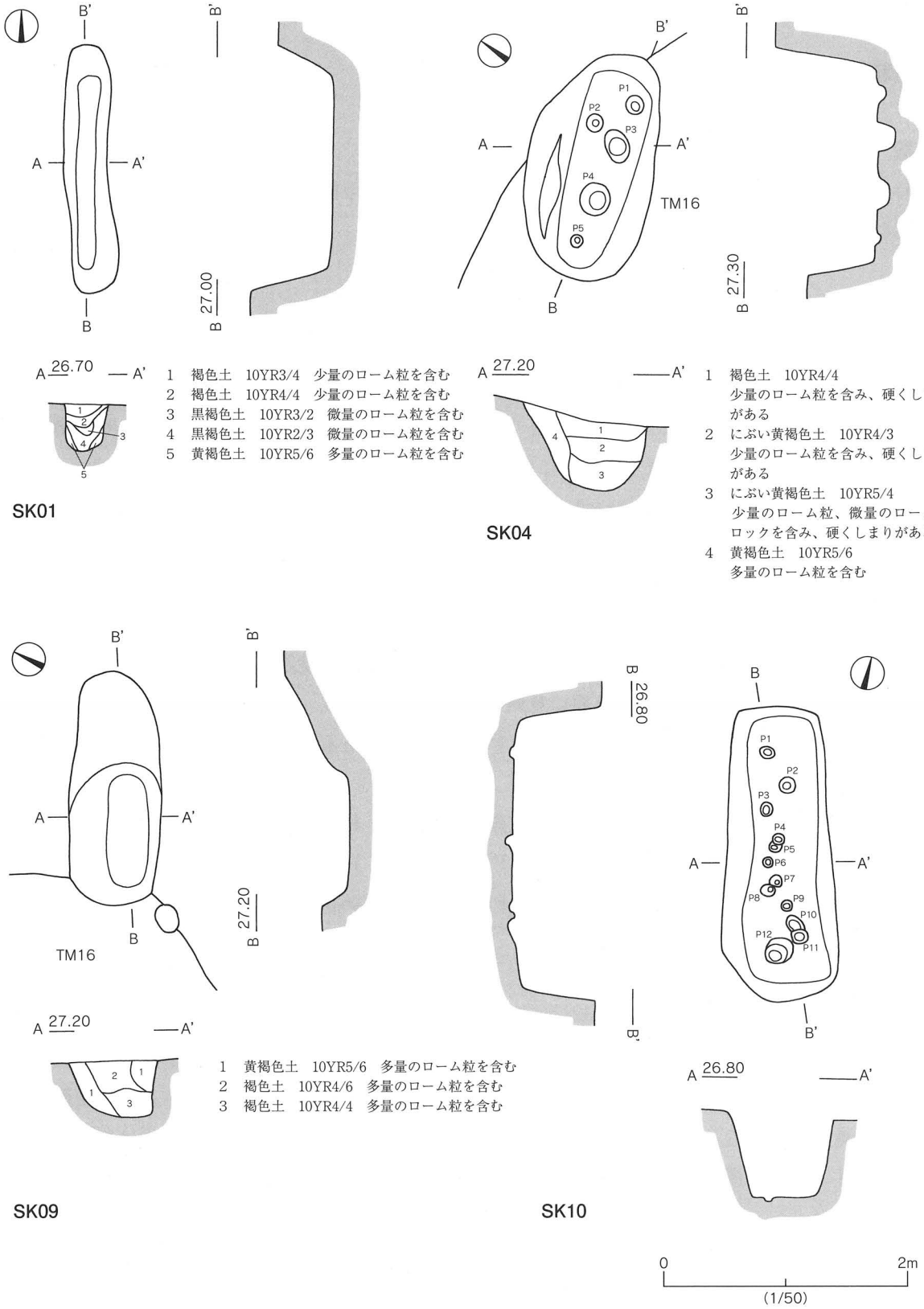
番号	形状	長径cm	短径cm	深さcm	番号	形状	長径cm	短径cm	深さcm
Ｐ１	円形	15.0	14.0	6.0	Ｐ２	円形	14.0	13.0	4.8
Ｐ３	楕円形	27.0	20.0	13.0	Ｐ４	円形	26.0	25.0	11.0
Ｐ５	円形	10.0	10.0	4.4					

９号土坑（ＳＫ０９）（第６図　PL.4）

調査区の南東側のＶ－48区、16号墳北溝外周に接し、標高は26.97mに位置する。形状は長軸190cm、短軸75cmの長楕円形をなし、深さ43cmを測る。なお、東側が緩傾斜して本体に向かって落ち込む。底面は平坦で、壁面はやや垂直気味に立ち上がる。付帯施設はない。主軸方向はＮ－61°－Ｅを指す。覆土は３層に分層され、平行堆積を呈する自然堆積層である。遺物は検出できなかったため、時期が確定できないが、縄文時代の覆土である。

10号土坑（ＳＫ１０）（第６図　PL.4）

調査区の南東側のＵ－48・49区、16号墳の北東角内周側、標高は26.63mに位置する。形状は長軸242cm、短軸87cmの長方形を呈し、深さ76cmを測る。底面は平坦で、付帯施設として逆茂木状ピットが12本穿ってある。壁面はほぼ垂直気味に立ち上がる。主軸方向はＮ－16°－Ｗを指す。覆土は黒褐色土の単一層の自然堆積層である。遺物は検出できなかったため、時期が確定できないが、縄文時代の覆土である。



第6図　1・4・9・10号土坑実測図

番号	形状	長径cm	短径cm	深さcm	番号	形状	長径cm	短径cm	深さcm
Ｐ１	楕円形	11.0	9.0	3.0	Ｐ２	円形	13.0	12.0	3.0
Ｐ３	円形	11.0	10.0	8.0	Ｐ４	円形	10.0	9.0	7.0
Ｐ５	楕円形	11.0	(8.0)	7.0	Ｐ６	円形	8.0	7.0	2.0
Ｐ７	円形	10.0	9.0	7.0	Ｐ８	楕円形	11.0	9.0	4.0
Ｐ９	円形	9.0	9.0	2.0	Ｐ10	楕円形	(13.0)	13.0	4.0
Ｐ11	円形	14.0	11.0	11.0	Ｐ12	円形	24.0	21.0	5.0

ｂ）土坑

２号土坑（ＳＫ０２）（第７図　PL.3）

調査区東側のＵ－43・44、Ｖ－43・44区、中世の溝跡SD05に切られ、北側が未調査区域に延び、標高は26.91mに位置する。形状は長軸（152）cm、短軸111cmの不正楕円形をなし、深さは南側で61cmを測る。底面は起伏がみられ、壁面は外傾して立ち上がる。主軸方向はＮ－28°－Ｅを指す。覆土は４層に分層でき、レンズ状堆積である。遺物は検出できなかったため、時期が確定できないが、縄文時代の覆土である。

５号土坑（ＳＫ０５）（第７図）

調査区東側のＶ－43区、北側が未調査区域に広がっており、標高は27.10mに位置する。形状は長軸164cm、短軸（69）cmの円形を呈し、深さ14cmを測る。底面は平坦で、西壁際にピットが１本穿ってある。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は３層に分層でき、平行堆積の自然堆積層である。遺物は検出できなかったため、時期が確定できないが、縄文時代の覆土である。

番号	形状	長径cm	短径cm	深さcm
Ｐ１	円形	30.0	27.0	23.0

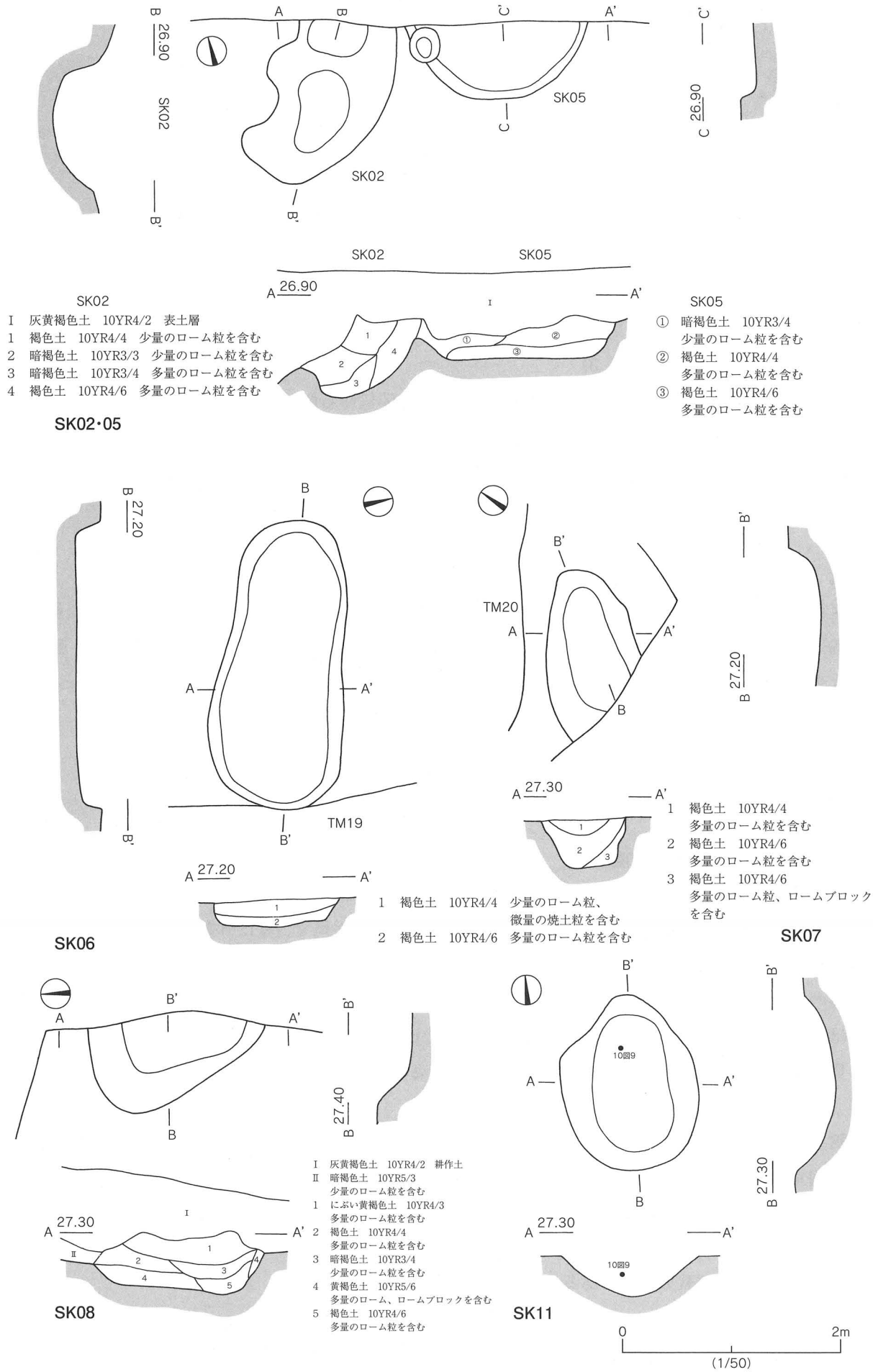
６号土坑（ＳＫ０６）（第７・10図）

調査区東側のＸ－45、Ｙ－45区、19号墳の西溝外周に接しており、標高は27.03mに位置する。形状は長軸266cm、短軸109cmの長楕円形を呈し、深さ25cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。主軸方向はＮ－78°－Ｗを指す。覆土は２層に分層でき、平行堆積の自然堆積層である。出土遺物から早期後半・茅山式期の所産と推定される。

遺物は縄文早期後半・条痕文系土器の小破片が１点覆土から出土している。第10図１は胴部破片で内外面に浅い貝殻条痕文が施文されている。茅山下層式と推定される。

７号土坑（ＳＫ０７）（第７図　PL.4）

調査区南東端のＺ－50区、20号墳の外周南西側に接し、標高27.11mに位置する。形状は長軸（129）cm、短軸82cmの楕円形を呈し、深さ38cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。主軸方向はＮ－38°－Ｅを指す。覆土は３層に分層でき、レンズ状の自然堆積層である。遺物は検出できなかったため、時期が確定できないが、縄文時代の覆土である。



第7図　2・5・6・7・8・11号土坑実測図

８号土坑（ＳＫ０８）（第７・10図）

調査区東端の２Ａ－44区、19号墳下、標高27.18mに位置する。東側が未調査区域に広がっている。形状は長軸139cm、短軸（83）cmの楕円形を呈するものと推定され、深さ31cmを測る。底面はやや起伏を有し、壁は外傾して立ち上がる。主軸方向はＮ－5°－Ｗを指す。覆土は５層に分層でき、レンズ状の自然堆積層である。出土遺物から前期中葉・黒浜式期の所産と推定される。

遺物として縄文土器片が覆土中から出土している。第10図２・３は同一個体で、大形の深鉢土器口縁部破片である。平縁で、太めの無節Ｒを横位回転施文している。４は単節ＲＬ縄文施文。５は条痕文系土器である。内外面に貝殻条痕文を施文している。いずれも胎土に多量の繊維を含む。２～４は黒浜式、５は茅山下層式。

11号土坑（ＳＫ１１）（第７・10図　PL.4）

調査区南側のＱ－52・53、Ｒ－52・53区、21号墳丘内、標高27.05mに位置する。形状は長軸160cm、短軸125cmの楕円形を呈し、深さ36cmを測る。底面は丸みをもち、壁は緩傾斜して立ち上がる。主軸方向はＮ－0°－Ｗを指す。覆土は黒褐色土層の単一層からなる自然堆積層である。出土遺物から前期後半・諸磯式期の所産と推定される。

遺物として縄文土器片が覆土中から出土している。第10図６は単節ＲＬを地文に半截竹管状工具による斜行する平行沈線文を施文する。７・８は深鉢の胴部破片。いずれも単節ＬＲ縄文を施文する。６～８は胎土に石英・チャート・長石粒を含み、諸磯式であろう。第10図９は凝灰質砂岩製の多孔石である。大きさは長さ10.884cm、幅15.906cm、厚さ6.747m、重さ1601.5ｇの台形を呈した素材を利用しており、やや平坦な表面に径2cm、深さ1cm前後の凹部を7ヶ所穿っており、裏面には明瞭ではないが、小凹部が２ヶ所認められる。

12号土坑（ＳＫ１２）（第８図　PL.4）

調査区南側のＮ－51・52区、22号墳丘内、標高26.79mに位置する。形状は長軸95cm、短軸80cmの円形を呈し、深さ36cmを測る。底面は丸みをもつ鍋底状で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は４層に分層され、レンズ状の自然堆積層である。遺物は検出できなかったため、時期が確定できないが、縄文時代の覆土である。

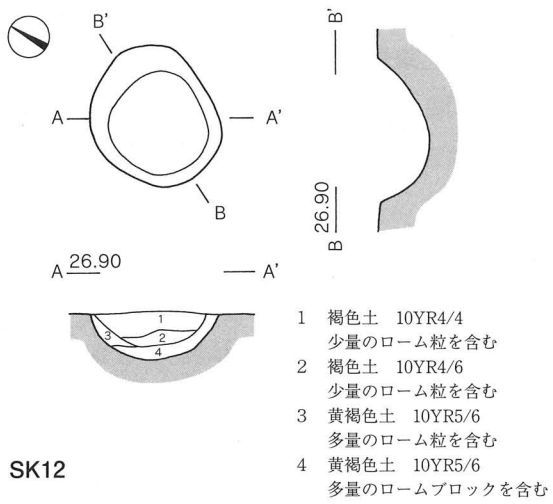
13号土坑（ＳＫ１３）（第８図　PL.4）

調査区南側のＮ－50区、22号墳丘内、標高26.76mに位置する。形状は長軸103cm、短軸96cmの不整円形を呈し、深さ44cmを測る。底面は丸みをもち鍋底状で、壁は南側が垂直気味に、他面は外傾して立ち上がる。覆土は３層に分層され、レンズ状の自然堆積層である。遺物は検出できなかったため、時期が確定できないが、縄文時代の覆土である。

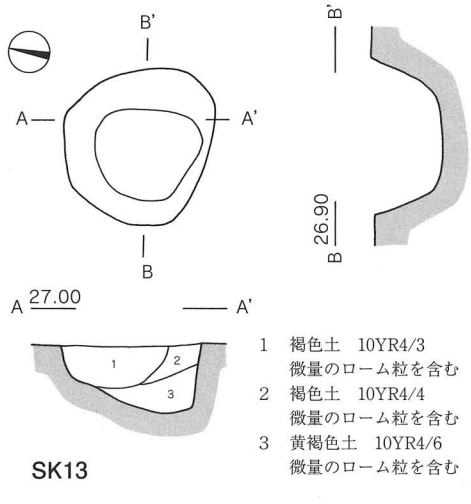
14号土坑（ＳＫ１４）（第８・10図　PL.5）

調査区中央北西側のＩ－38，Ｊ－38区、５号柱穴群内、標高27.00mに位置する。形状は長軸337cm、短軸132cmの楕円形を呈し、深さ83cmを測る。底面はやや起伏があり、壁は外傾して立ち上がる。付帯施設としてピットが３本穿ってある。主軸方向はＮ－35°－Ｗを指す。覆土は８層に分層され、レンズ状の自然堆積である。出土遺物から前期中葉・黒浜式期の所産と推定される。

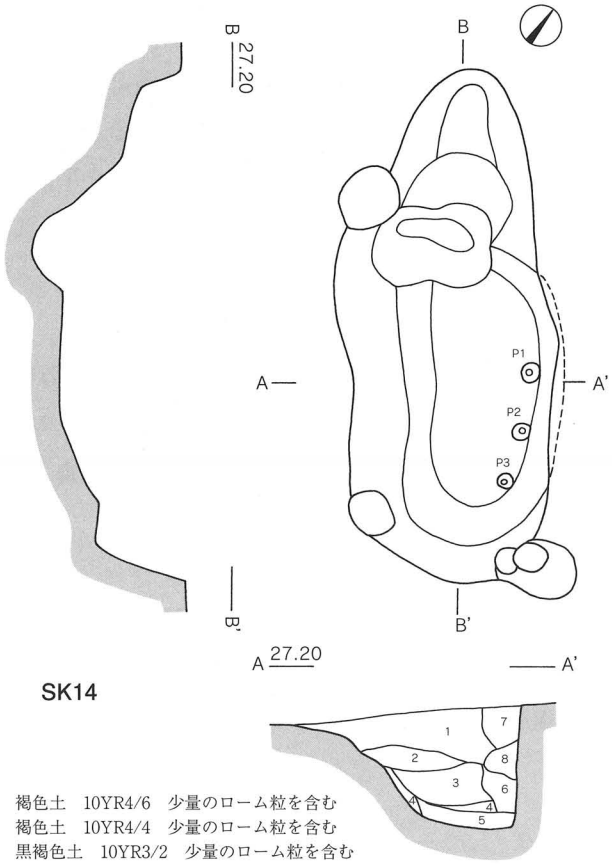
番号	形状	長径cm	短径cm	深さcm	番号	形状	長径cm	短径cm	深さcm
Ｐ１	円形	13.0	12.0	4.0	Ｐ２	円形	11.0	11.0	6.0



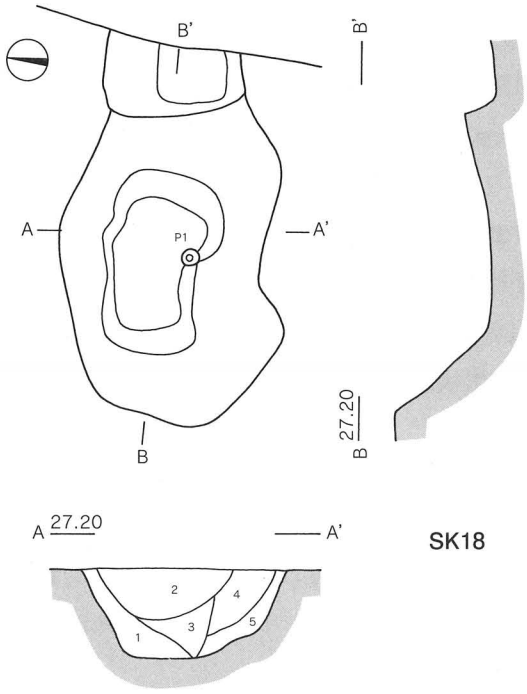
1　褐色土　10YR4/4
　少量のローム粒を含む
2　褐色土　10YR4/6
　少量のローム粒を含む
3　黄褐色土　10YR5/6
　多量のローム粒を含む
4　黄褐色土　10YR5/6
　多量のロームブロックを含む



1　褐色土　10YR4/3
　微量のローム粒を含む
2　褐色土　10YR4/4
　微量のローム粒を含む
3　黄褐色土　10YR4/6
　微量のローム粒を含む



1　褐色土　10YR4/6　少量のローム粒を含む
2　褐色土　10YR4/4　少量のローム粒を含む
3　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒を含む
4　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒、ロームブロックを含む
5　暗褐色土　10YR3/3　多量のローム粒を含む
6　暗褐色土　10YR3/4　少量のローム粒、ロームブロックを含む
7　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒を含む
8　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒、少量のロームブロックを含む



1　黄褐色土　10YR5/6　多量のローム粒、ロームブロックを含む
2　暗褐色土　10YR3/4　少量のローム粒、ロームブロックを含む
3　暗褐色土　10YR3/3　少量のローム粒を含む
4　褐色土　10YR4/4　多量のローム粒、ロームブロックを含む
5　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒、ロームブロックを含む

0　2m
(1/50)

第8図　12・13・14・18号土坑実測図

番号	形状	長径cm	短径cm	深さcm
Ｐ３	円形	11.0	9.0	8.0

遺物として縄文土器片が覆土中から出土している。第10図10～12は同一個体である。深鉢の胴部破片で、単節ＬＲ縄文による羽状縄文を施文する。13は小形の深鉢底部破片。半截竹管状工具による平行沈線で波状文や曲線文を周回させ、ヘラ状工具により幾何学文状に施文する。いずれも胎土に多量の繊維を含む。14は土器片錘である。やや小形の隅丸方形を呈し、打割り後、周囲を研磨している。中期・加曽利Ｅ式期。大きさは長軸3.196cm、短軸2.944cm、厚さ1.468cmで、重さは14.96ｇを測る。

18号土坑（ＳＫ１８）（第８図　PL.5）

調査区北側のＭ－34、Ｎ－34区、５号柱穴群内、標高26.95mに位置する。形状は長軸（246）cm、短軸133cmの楕円形を呈し、深さ60cmを測る。底面はやや起伏をもち、壁は緩傾斜気味に外傾して立ち上がる。付帯施設としてピットが１本南壁際に穿ってある。主軸方向はＮ－90°－Ｗを指す。覆土は５層に分層され、レンズ状の自然堆積である。遺物は検出できなかったため、時期が確定できないが、縄文時代の覆土である。

番号	形状	長径cm	短径cm	深さcm
Ｐ１	円形	10.0	104.0	6.0

19号土坑（ＳＫ１９）（第９図　PL.5）

調査区中央北側のＫ－37・38区、５号柱穴群内、標高26.99mに位置する。形状は長軸238cm、短軸166cmで不正楕円形を呈し、深さ80cmを測る。底面は丸みを持ち、壁は外傾して立ち上がる。主軸方向はＮ－86°－Ｗを指す。覆土は８層に分層され、レンズ状の自然堆積である。遺物は検出できなかったため、時期が確定できないが、縄文時代の覆土である。

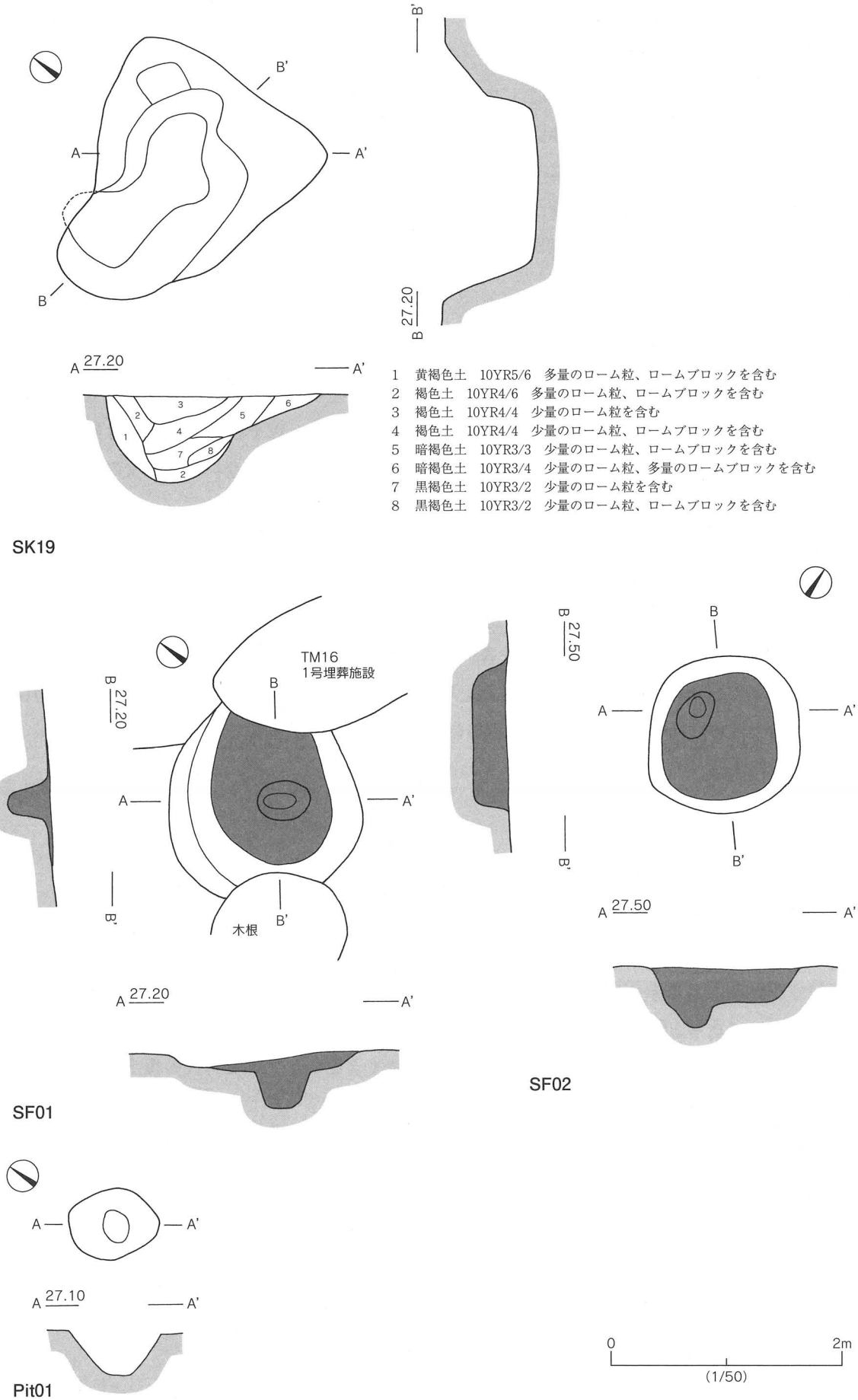
２．屋外炉跡

１号屋外炉跡（ＳＦ０１）（第９図　PL.5）

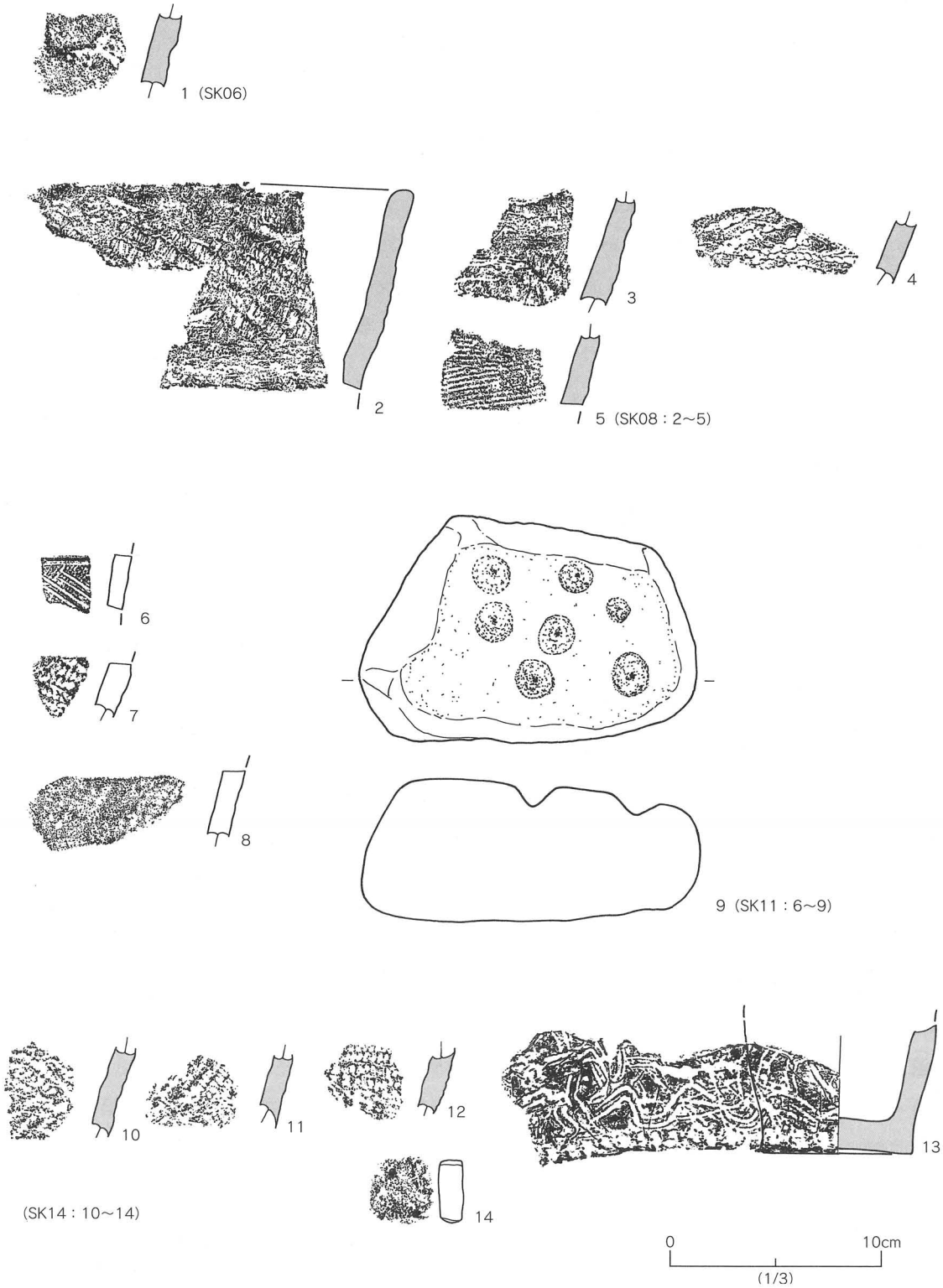
調査区中央東側のＲ－46区、16号墳周溝北角、標高27.00mに位置する。北側は16号墳１号埋葬施設に、南側は木根によって破壊されている。現存する形状は長軸105cm、短軸99cmで楕円形を呈し、深さ34cmを測る。底面は平坦で、火熱による赤化現象が著しい。またほぼ中央に20×27cm、深さ20.5cmの楕円形ピットを付帯する。壁は外傾して立ち上がり、火熱による硬化が認められる。覆土は焼土粒を含む黒褐色土の単一層で自然堆積である。遺物は検出できなかったため、時期が確定できないが、縄文時代の覆土である。

２号屋外炉跡（ＳＦ０２）（第９図　PL.5）

調査区南東端のＳ－52区、標高26.55mに位置する。形状は長軸82cm、短軸79cmで隅丸方形を呈し、深さ46cmを測る。底面は起伏を持ち、火熱による赤化現象が著しい。壁は外傾して立ち上がり、わずかに火熱による硬化が認められる。覆土は焼土粒子を含む暗褐色土の単一層の自然堆積である。遺物は検出できなかったため、時期が確定できないが、縄文時代の覆土である。



第９図　19号土坑、１・２号屋外炉跡、１号柱穴状遺構実測図



第10図　6・8・11・14号土坑出土遺物

3．柱穴状遺構

1号柱穴状遺構（Ｐｉｔ０１）（第９図）

調査区南側Ｍ－48区の標高26.88mに位置する。形状は長軸0.78m、短軸0.60mの南北に長い楕円形を呈し、

主軸方位はN－30°－Wを指し、深さは48.5cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は上層および中層は黒褐色、下層は暗褐色土で覆われており、人為的な堆積状況を呈する。遺物は検出できなかったため、時期が確定できないが、縄文時代の覆土である。

4．遺構外出土遺物（第11～15図）

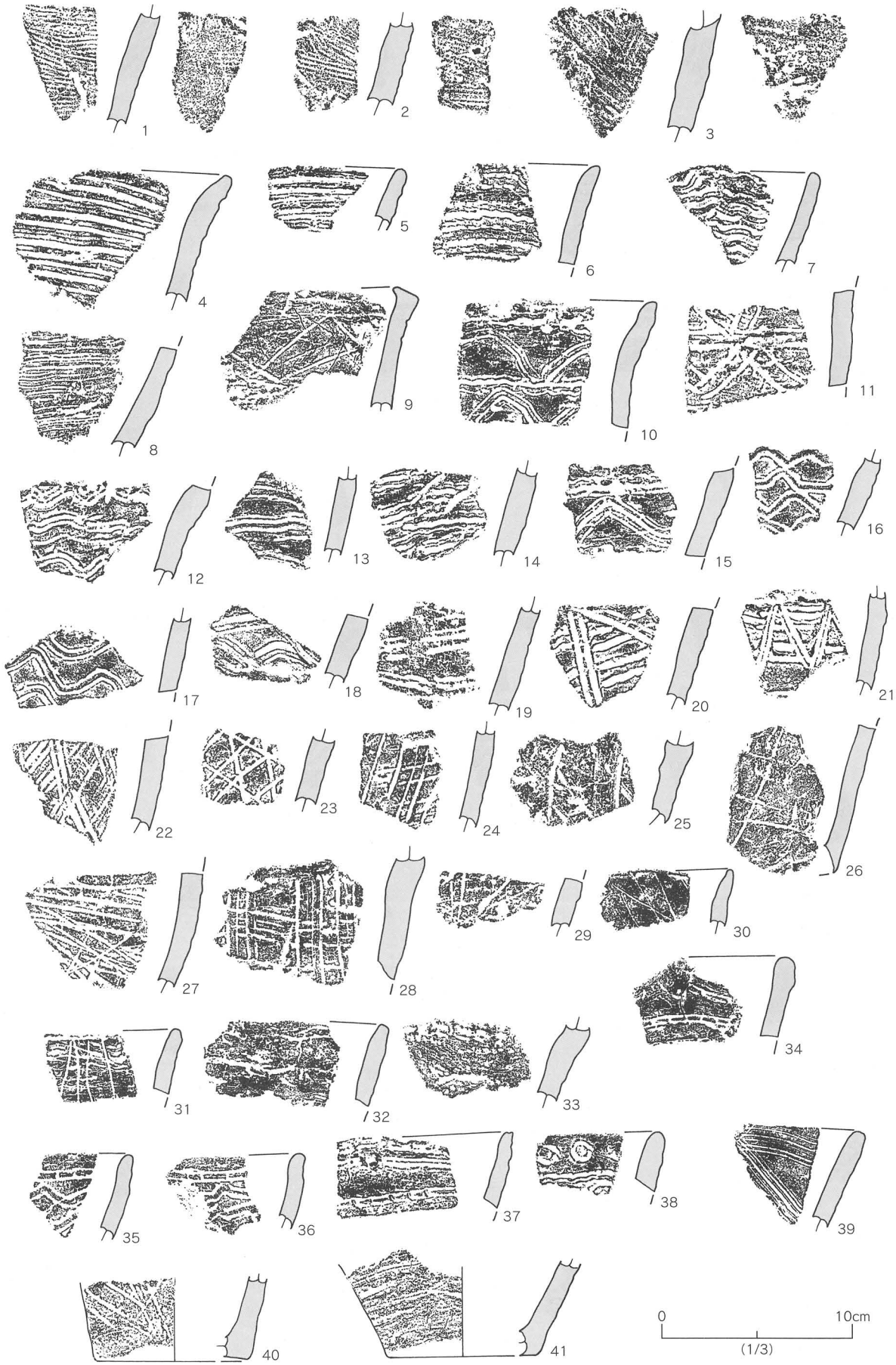
縄文時代の遺構以外から出土した遺物を一括する。特に調査区東側に集中しており、縄文時代の包含層を確認した。しかし、薄い表土層直下であることから縄文土器でも前期と中期・後期が混入しており、明確な縄文文化層を検出できなかった。また、古墳の周溝内からも多量の縄文土器とともに、石器や土器片錘が出土している。なお、石器のうち、明らかに旧石器時代の所産と考えられるナイフ形石器は調査区南側で検出されたものである。

a）縄文土器（第11～14図）

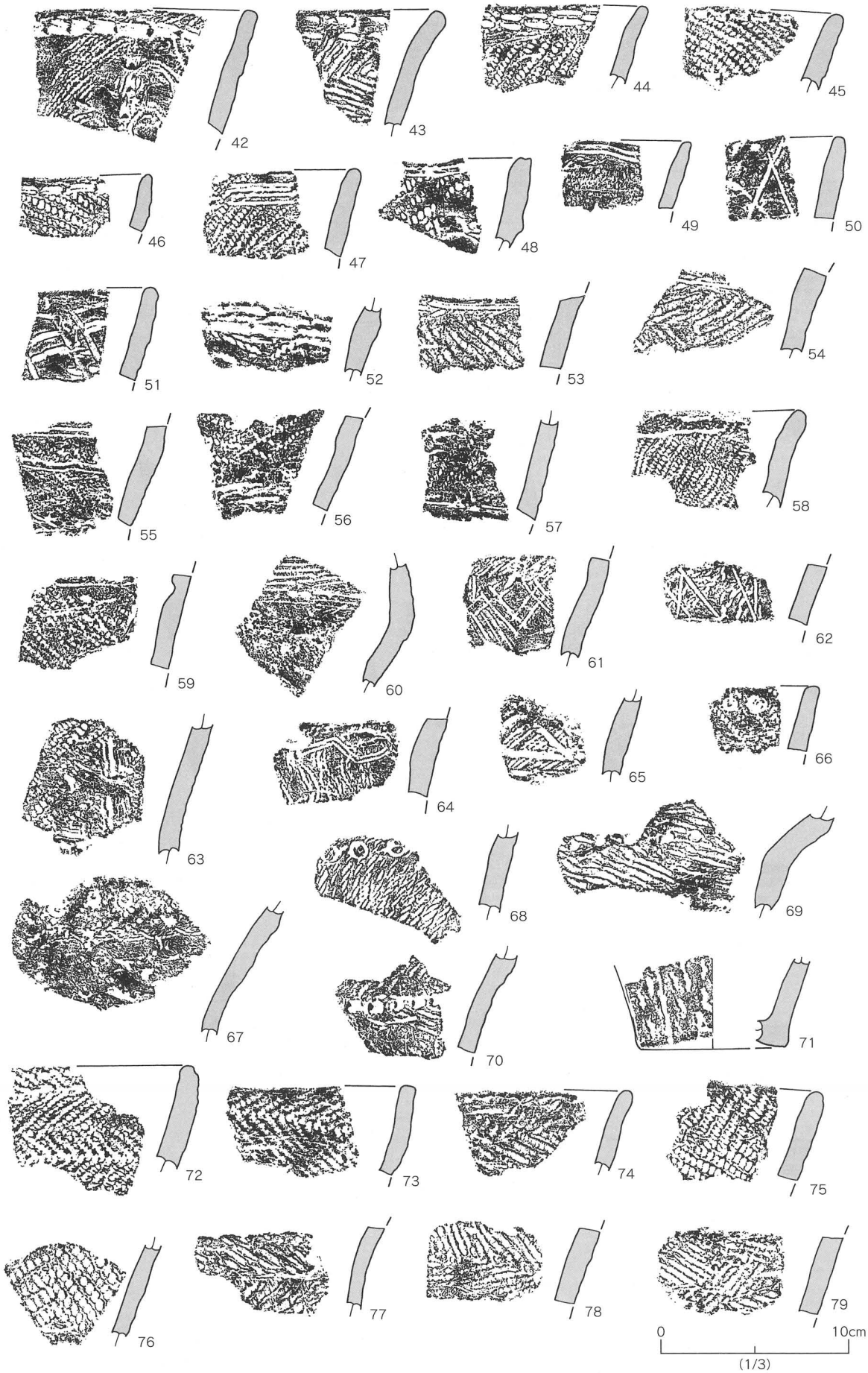
縄文土器は早期後半から後期中葉にいたるまで確認されているが、特に前期中葉・黒浜式土器がまとまって出土している。

第11図１～３は早期後半・条痕文系土器である。貝殻条痕文が表裏面に施されている。胎土に繊維を多く含む。茅山下層式であろう。第11図４～41、第12図42～79、第13図80～110は前期中葉・黒浜式に比定される土器を一括した。いずれも胎土に多量の繊維を含有している。第11図４～19は無文地に半截竹管状工具による平行沈線を横位施文する一群である。４・５は口縁部破片で、平行直線文を施す。６・７は口縁部破片で、横位の平行波状沈線文を施す。また、同じように胴部破片であるが、12～14も平行波状沈線文を横走させる。８は櫛歯状工具による平行直線文を横位に施文する。９は口辺部が短く内湾する深鉢。沈線による幾何学文が施されている。10は口縁部破片で、口縁部がわずかに外反する。平行沈線による直線文と波長の長い波状文を施文する。このやや波長の長い波状文は16～18でも同様に施されている。19は半截竹管による押し引き文。20・21は平行沈線文に山形文を施文する。22～25は格子目文。26～31も沈線文、平行沈線文による不規則な格子目文を施す。33は押し引き文。34～37は平行沈線文間に爪形文を施文し、同じ施文具による波状文を横走させる。38は口縁部破片で、円形刺突文と波状文を施文する。39は櫛歯状工具による幾何学文。40・41は底部破片。40は沈線による幾何学文。41は波状文を施文する。第12図42～70は縄文地文に平行沈線文、沈線文を施文する。42～46は口辺部に沿って半截竹管工具による押し引き文を施す。47・48はやはり口辺部に沿って平行沈線文を周回させる。同じように53～57は胴部破片であるが、平行沈線文を横走させる。50・51は沈線による格子目文を施す。同じように胴部破片である61・62も格子目文を施文する。52は波状文を横走させる。63は半截竹管による間欠状文を垂下させる。63・64はモチーフを描出する。66～70は円形刺突文を施文する。71は底部付近の破片。半截竹管の先端を幅狭に分割したヘラ状工具による縦位の刺突文。72～79、第13図80～105は縄文施文。72～81は羽状縄文。104は付加条縄文。105は網目状撚糸文。106・107は貝殻復縁文を施文する。108～110は深鉢の底部破片。いずれも上底状を呈している。111は土器片錘である。羽状縄文施文の深鉢胴部破片を利用している。ほぼ長方形に打割され、周囲の研磨は施されていない。

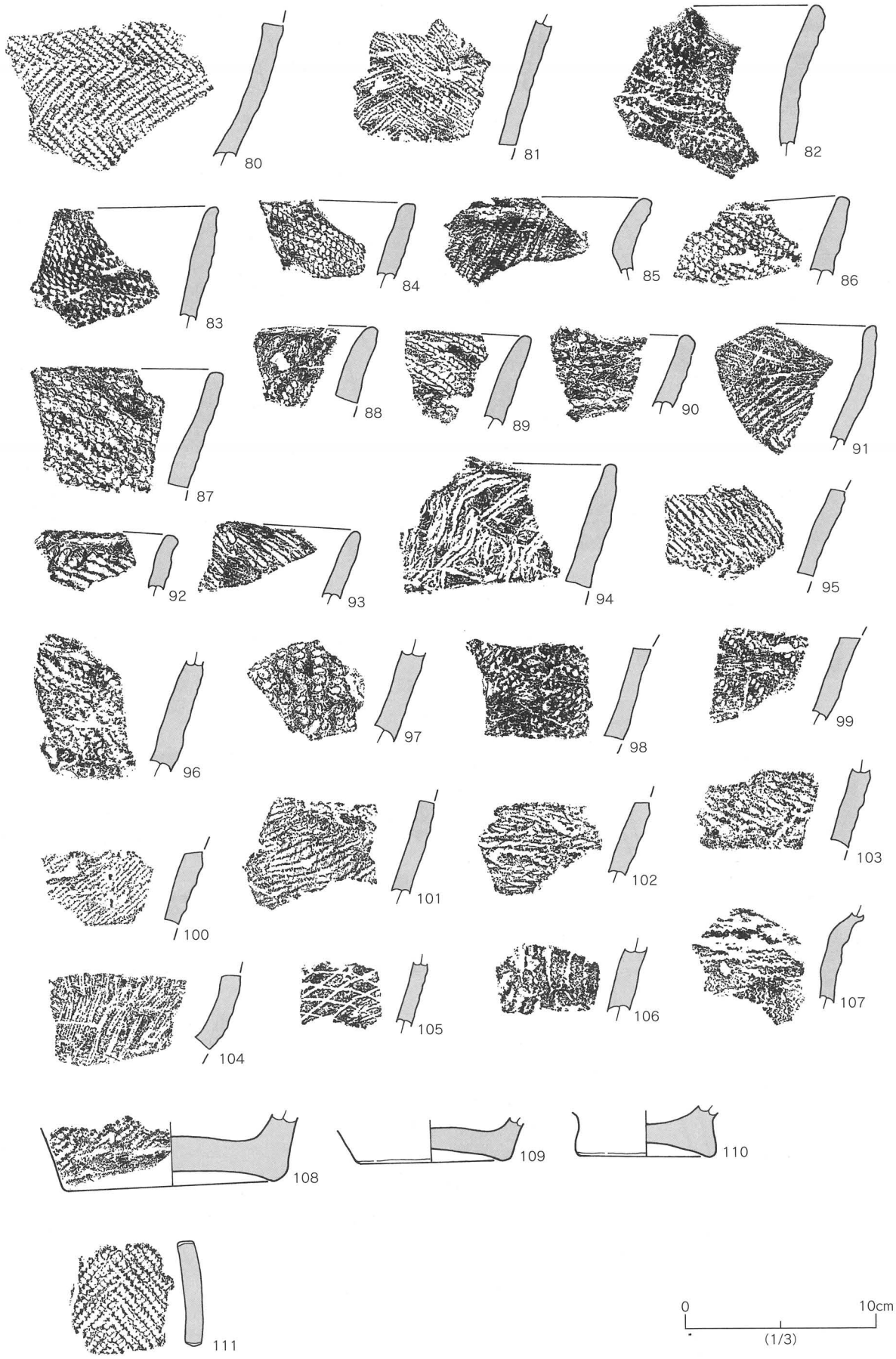
第14図112～117は中期後半・加曽利Ｅ式を一括する。112はキャリパー形の深鉢、口縁部破片である。隆帯による横位区画文。113は胴部破片。磨消沈線による懸垂文が垂下する。116は断面三角形隆起線文を区画文に口辺部を無文帯とする。中期末葉もしくは後期・称名寺式期。118～126は堀之内式を一括する。118は口縁部を無文帯とし、刺突文が施された隆帯が区画文となる。119はボタン状の円形浮文が雑に貼り付けら



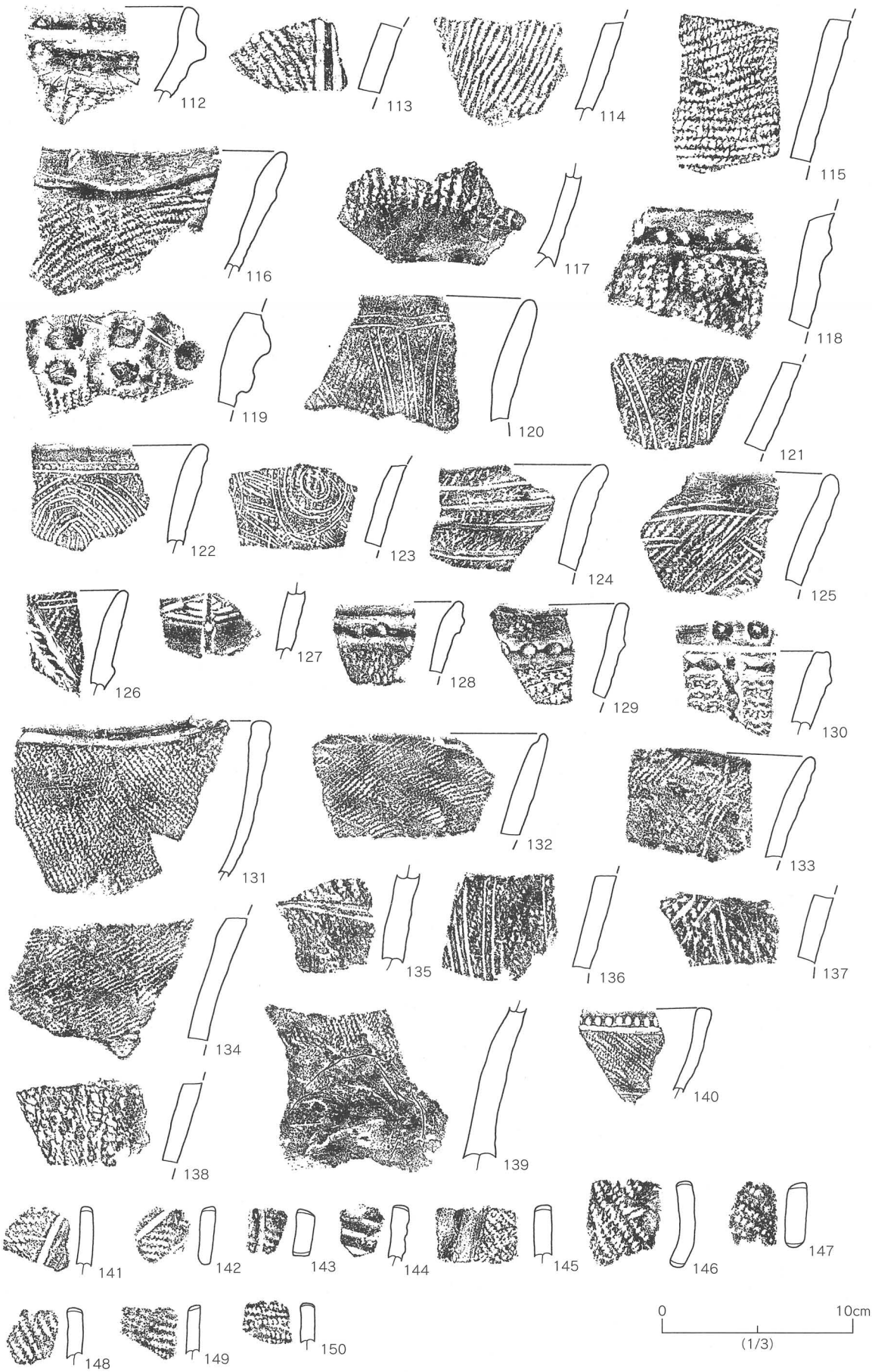
第11図　遺構外出土遺物（1）



第12図　遺構外出土遺物（2）



第13図　遺構外出土遺物（3）



第14図　遺構外出土遺物（4）

れている。120～135は縄文地文に平行沈線文によるモチーフが描出されている。堀之内１式。126は口辺部に沿って平行沈線文が周回し、口辺部から刻目を有する隆帯が区画文として垂下する。堀之内２式。127～140は後期中葉・加曽利Ｂ式を一括する。128～130は紐線文が貼り付けられた粗製土器である。128・129は比較的細身の紐帯で口辺部を空けている。131は口辺部に平行して沈線文が周回し、内面にも沈線が巡る。140は口辺部の沈線区画内に刻目が施され、やはり沈線区画による磨消帯を有する。

第14図141～150は土器片錘である。磨消沈線文や微隆起線文が施こされた中期・加曽利Ｅ式期が主体となる。出土地点については一定せず、いずれも古墳の周溝内から検出されたものである。計測については下記のとおりである。

表３．土器片錘計測表

番号	出土地点	図版番号	計測値（mm）（g）				部位	加工状態	形態	切込等の状態	時期	備考
			長さ	幅	厚さ	重量						
1	SK14	第10図－14	3.196	2.944	1.468	14.96	胴部	研磨＋打割調整	隅丸方形	長軸に一対	中期・加曽利Ｅ	完形
2	TM16	第13図－111	5.577	5.693	0.830	32.14	胴部	打割調整	長方形	長軸に一対	前期・黒浜	完形
3	TM22	第14図－141	3.434	3.587	0.818	11.30	胴部	打割調整	楕円形	長軸に一対	中期・加曽利Ｅ２	1/2欠損
4	表採	第14図－142	3.152	2.811	0.877	8.32	胴部	研磨＋打割調整	楕円形	長軸に一対	中期・加曽利Ｅ２	一部欠損
5	TM16	第14図－143	2.835	2.029	1.439	9.74	胴部	打割調整	長方形	長軸に一対	中期・加曽利Ｅ１	完形
6	TM16	第14図－144	(2.806)	2.295	0.969	(7.08)	胴部	研磨＋打割調整	楕円形	長軸に一対	中期・加曽利Ｅ１	一部欠損
7	TM22	第14図－145	(2.823)	4.965	1.558	(27.38)	胴部	打割調整	長方形	長軸に一対	中期・加曽利Ｅ３	欠損
8	TM28	第14図－146	4.429	3.757	1.021	20.80	口縁部	研磨＋打割調整	台形	長軸に一対	中期・加曽利Ｅ２	完形
9	TM22	第14図－147	3.453	3.248	1.156	15.08	胴部	研磨＋打割調整	楕円形	長軸に一対	中期・加曽利Ｅ	一部欠損
10	TM28	第14図－148	(2.977)	2.843	0.918	(7.62)	胴部	研磨＋打割調整	楕円形	長軸に一対	中期・加曽利Ｅ	一部欠損
11	TM28	第14図－149	(2.808)	3.160	0.796	(8.40)	胴部	打割調整	長方形	長軸に一対	中期・加曽利Ｅ	1/2欠損
12	TM22	第14図－150	(2.508)	2.588	0.861	(6.64)	胴部	打割調整	長方形	長軸に一対	中期・加曽利Ｅ	1/2欠損

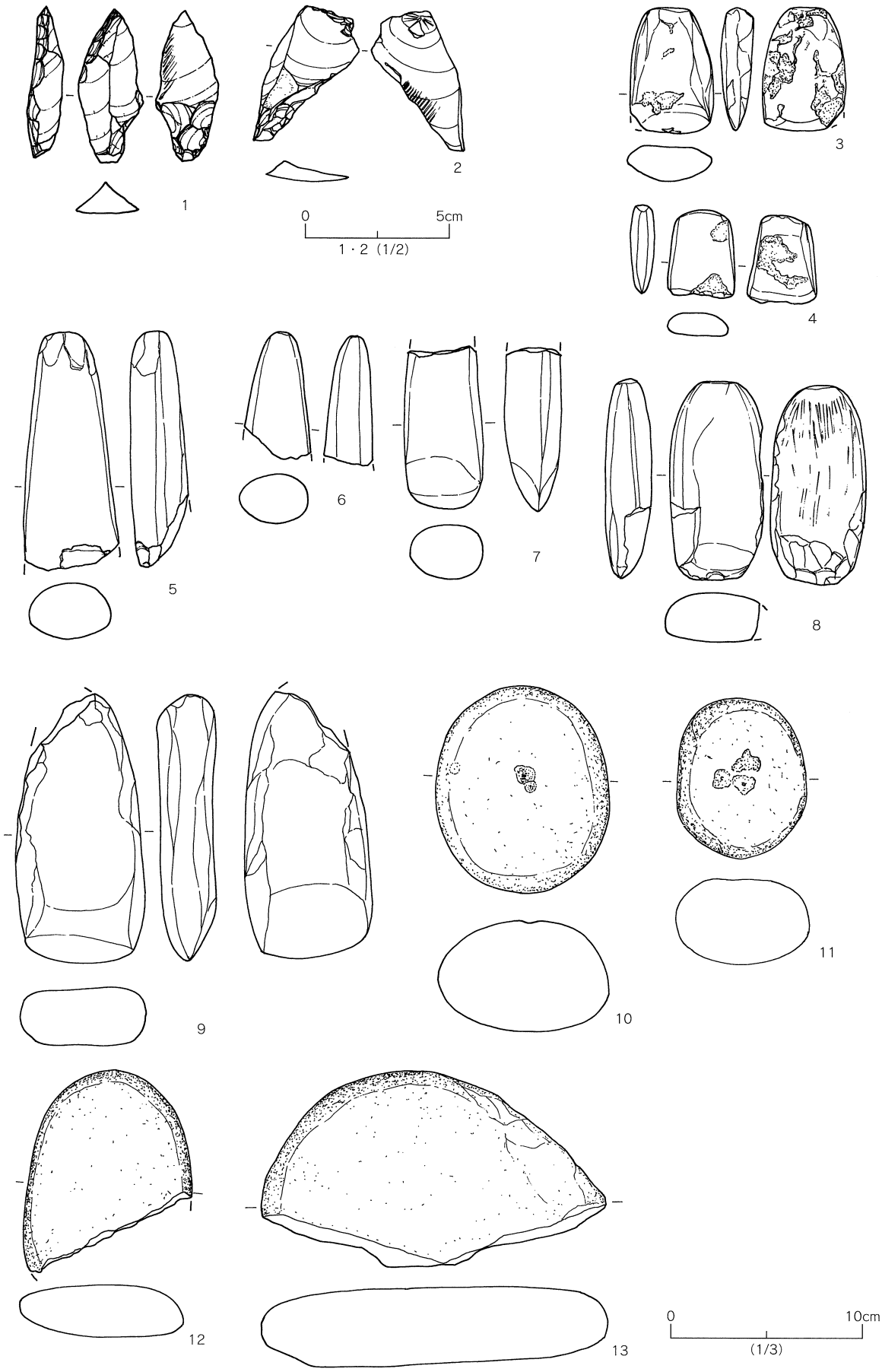
b）石器（第15図）

本遺跡から出土した石器として、旧石器時代のナイフ形石器、剥片の出土が確認されている。また縄文時代の石器も検出されている。縄文時代に属するものとして、磨製石斧、磨石類、台石がある。

第15図１は安山岩製のナイフ形石器である。長さ5.289cm、幅2.249cm、厚さ1.086cm、重さ11.16ｇを測り、完存品である。縦長剥片を素材としている。左側縁に急斜度剥離による調整加工が施され、基部裏面にはやや雑な調整加工がみられる。２は頁岩製の剥片。縦長剥片で加工痕は認められない。３～９は縄文時代の磨製石斧である。３・４はいずれも小形で刃毀れがみられるものの、完存品としてよいであろう。３は表裏面とも研磨調整されているが、裏面においては自然礫面を残存させ、決して丁寧な仕上がりを示していない。また基部は敲打痕を残す。４も表裏面とも研磨調整され、表面は丸みをもつのに対し、裏面は平坦で断面蒲鉾状を呈する。表裏面ともに自然礫面を残している。５・６は刃部面を欠損し、基部側のみである。断面楕円形を呈し、全体的に丁寧な作りである。７は刃部側が残存しており、断面楕円形を呈し、やはり研磨調整は丁寧である。８は自然礫面を多く残し、側縁部、基部そして刃部は調整による丁寧な研磨が施されているが、全体的に自然礫面をそのまま生かして石斧としたようである。９は撥形の扁平石斧である。基部を欠損するものの、全体の形状は把握可能である。研磨は刃部のみに集中し、表裏面および両側面は顕著ではない。10～12は磨石である。いずれも楕円形の河原石を利用している。使用痕は明瞭ではない。13は台石である。扁平の河原石を作業面として用いている。なお、出土地点はいずれも古墳の周溝内であり、確実な時期決定はできないが、磨製石斧については縄文時代前期が中心となるほか、その他の石器は前期から中期とやや幅のある比定しかできない。

表４．石器計測表

番号	出土地点	図版番号	器　種	計　測　値（cm）（ｇ）				石　質	備　考
				長さ	幅	厚さ	重量		
1	TM20	第15図－１	ナイフ形	5.289	2.249	1.086	11.16	安山岩	旧石器・完形
2	TM20	第15図－２	剥片	5.405	2.573	0.777	8.68	頁岩	旧石器・剥片
3	TM22	第15図－３	磨製石斧	6.483	4.336	1.70	83.0	緑色凝灰岩	完形
4	TM22	第15図－４	磨製石斧	4.598	3.423	1.066	31.08	角閃石岩	完形
5	TM16	第15図－５	磨製石斧	(12.521)	5.029	2.950	(278.0)	緑泥片岩	刃部欠損
6	TM28	第15図－６	磨製石斧	(6.781)	3.392	2.619	(83.5)	緑色凝灰岩	刃部欠損
7	TM16	第15図－７	磨製石斧	8.337	4.024	2.774	172.5	緑色凝灰岩	基部欠損
8	TM28	第15図－８	磨製石斧	10.465	4.708	2.385	224.5	安山岩	一部欠損
9	TM22	第15図－９	磨製石斧	13.910	6.686	2.858	486.0	凝灰角礫石	基部欠損
10	SD06	第15図－10	磨石	10.891	9.04	5.876	882.5	安山岩	完形
11	TM16	第15図－11	磨石	8.648	6.941	4.242	372.0	石英	完形
12	TM16	第15図－12	磨石	(10.762)	8.545	2.787	(329.0)	砂岩	欠損
13	TM19	第15図－13	台石	(10.163)	27.790	4.014	(1073.5)	花崗斑岩	欠損



第15図　遺構外出土遺物（5）

(2)弥生時代の遺構と遺物

1．竪穴住居跡

1号住居跡（ＳＩ０１）(第16・17図　PL.6)

遺構　調査区東側のＴ－43・44、Ｕ－43・44区に位置する。中世の溝跡SD02・03によって広く削平されているため、遺存状態はやや不良である。確認された平面形は隅丸長方形を呈するが、北壁、南壁とも外側に丸みを帯びて張り出しており、小判形に近い形態を呈している。規模は、主軸長6.36m、幅軸長5.00m、壁高は6.6cm～40.5cmを測る。主軸方向はＮ－41°－Ｗである。床面は直床で、ほぼ平坦であるが、全体的に軟質であり、部分的にブロック状の硬化面が認められた。炉跡は住居中央南寄りで検出された。住居跡の形状と同様、長軸を南北軸にもち、59×69cmの楕円形の地床炉で、深さ10.5cmを測る。中央付近に焼土を薄く堆積する。柱穴は７本検出されたが、主柱穴は４本構成をもたず、Ｐ１～Ｐ３の３本柱と判断された。炉跡の周囲にみられる柱穴は本跡に伴うものか判断しかねるが､住居西角に集中する３本は支柱穴であろう。なお、壁溝は検出できなかった。

番号	形状	長径cm	短径cm	深さcm	番号	形状	長径cm	短径cm	深さcm
Ｐ１	楕円形	34.0	23.0	30.0	Ｐ２	円形	60.0	49.0	39.0
Ｐ３	楕円形	48.0	39.0	49.0	Ｐ４	不正円形	69.0	41.0	18.0
Ｐ５	楕円形	47.0	29.0	17.0	Ｐ６	円形	30.0	26.0	16.0
Ｐ７	円形	20.0	19.0	22.0					

遺物　遺物は西壁寄りに土製紡錘車が床面から15cm浮いて出土したほか、甕形土器の小破片が覆土中から検出された。

第17図1～11は甕形土器を一括する。１は口縁部破片。口縁部外面に粘土帯を貼付たもので、付加条縄文を地文に、口唇部に押捺を施し、さらに段下端にもヘラ状工具による刻目がなされている。頸部にはスリット手法による山形文がみられる。２は頸部破片、平行沈線による格子目文をもつ。３～10は付加条縄文施文の胴部破片。11は底部破片。基部に付加条縄文を施文し、底部に木葉痕を残置させる。12は土製紡錘車である。中央穿孔部で中膨らみを呈する滑車状の紡錘車。器表面は比較的丁寧なナデ整形が施されている。大きさは径4.977cm、厚さ1.277cm、軸孔径0.679cm、重さ39.14ｇを測る。

所見　出土した土器から後期のものと考えられる。

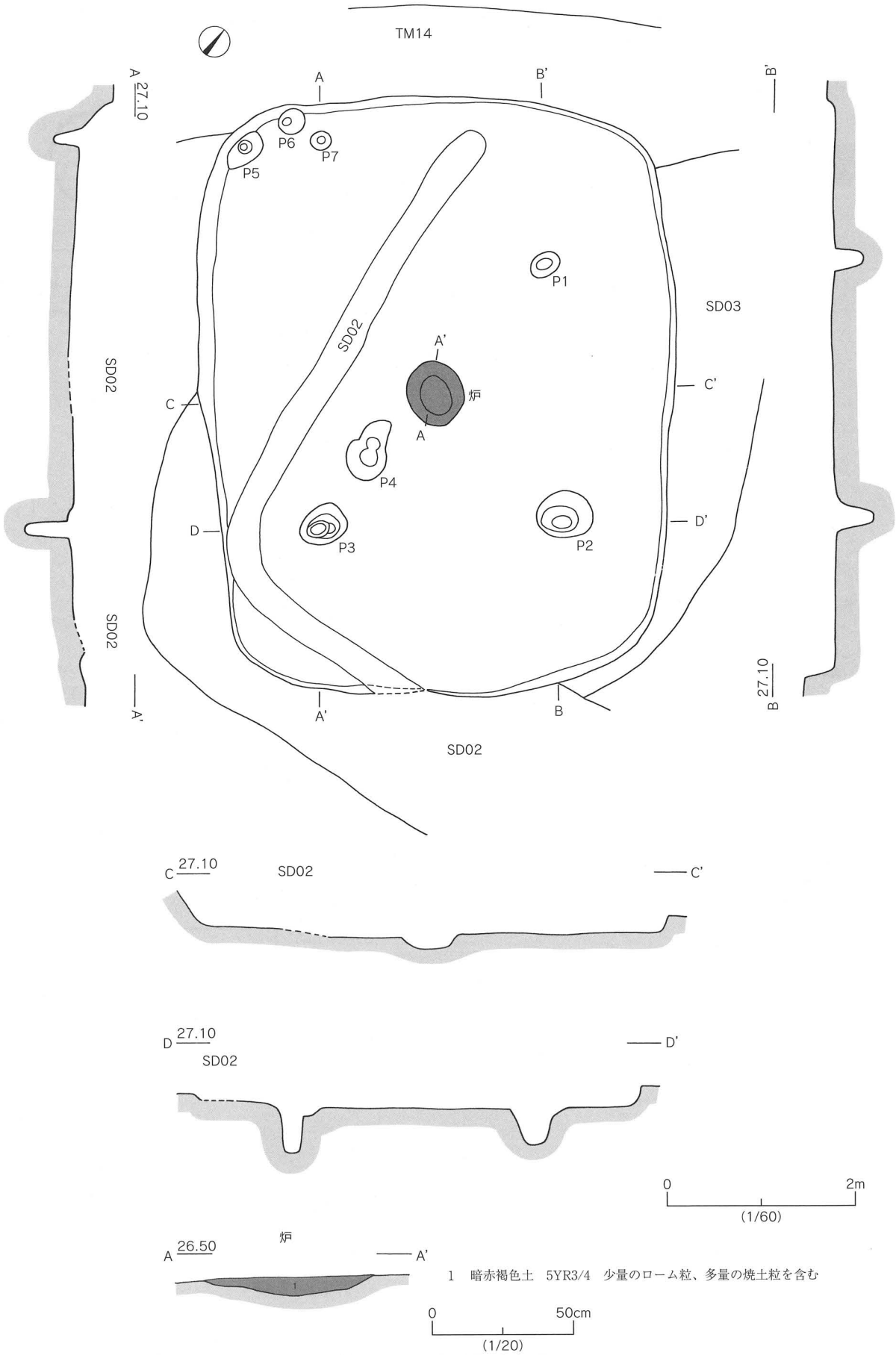
2号住居跡（ＳＩ０２）(第18図　PL.6)

遺構　調査区中央西側のＩ－44・45、Ｊ－45区に位置する。24号墳によって西側の大半が削平されているため遺存状態は不良である。確認された平面形は東側のみであるが、東壁面から推測すると楕円形を呈するものと思われる。確認された規模は、主軸長（2.58）ｍ、幅軸長（4.23）ｍ、壁高は11.5cmを測る。主軸方向はＮ－27°－Ｗである。床面は直床で、ほぼ平坦であるが、全体的に軟質であり、部分的にブロック状の硬化面が認められた。柱穴は２本検出されている。なお、壁溝は検出できなかった。

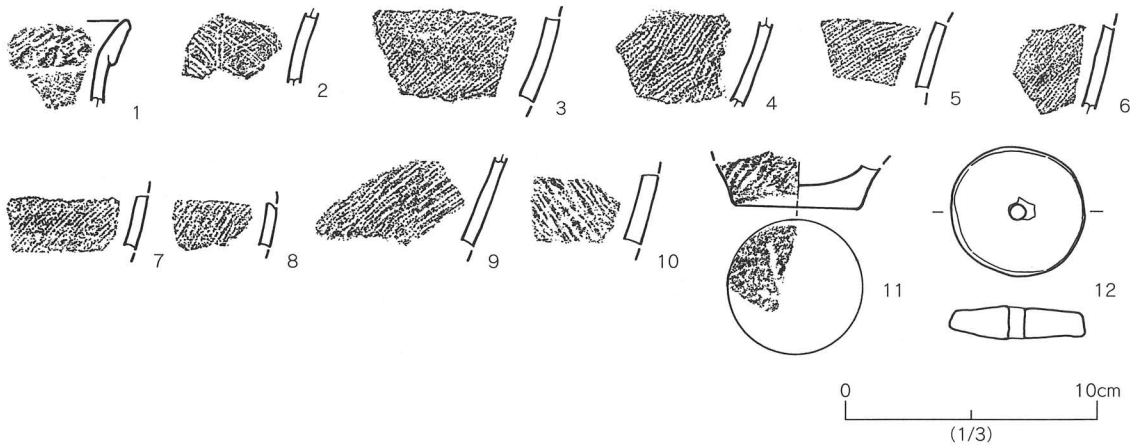
番号	形状	長径cm	短径cm	深さcm	番号	形状	長径cm	短径cm	深さcm
Ｐ１	円形	38.0	37.0	10.0	Ｐ２	楕円形	38.0	24.0	14.0

遺物　遺物は確認できなかった。

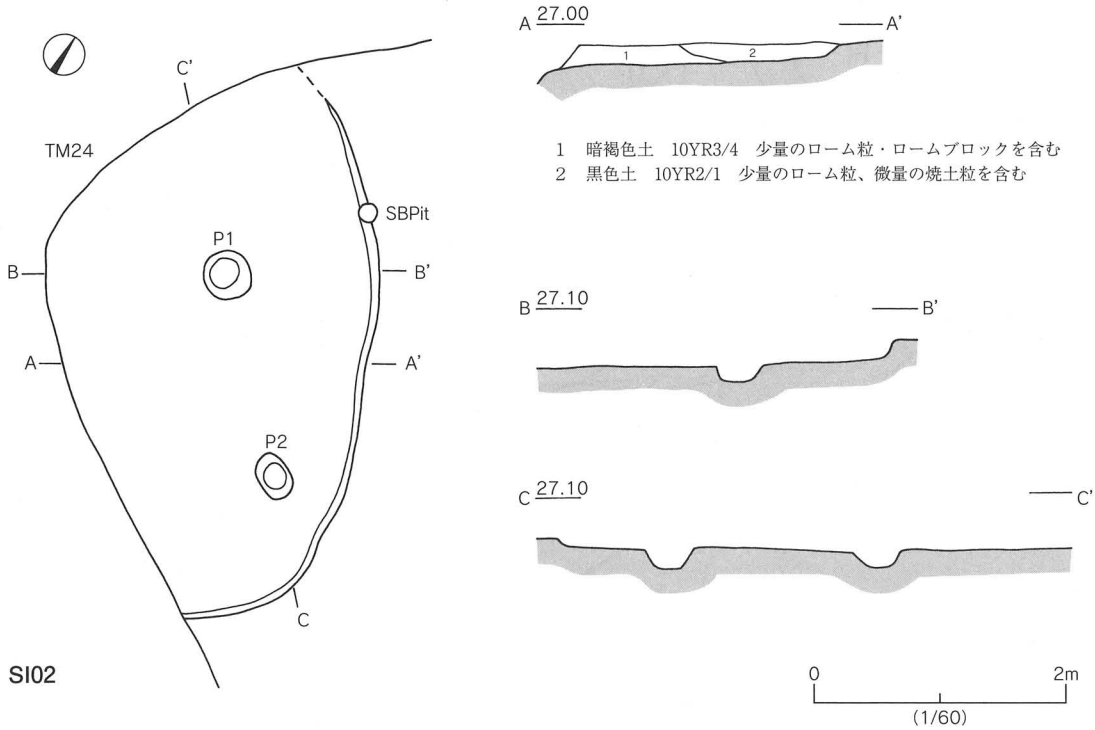
所見　時期を特定する遺物は出土いていないが、１号住居跡と同様な時期であろうか。



第16図　1号住居跡実測図



第17図　1号住居跡出土遺物



第18図　2号住居跡実測図

(3)古墳時代の遺構と遺物

1．古墳

今回の調査では方墳が19基と大多数を占め、群在する様相を呈している。これらのほかに円墳が２基と帆立貝式前方後円墳１基が確認されている。その多くが古墳時代前期のものである。

７号墳（ＴＭ０７）（第19・20・28図　PL.7・22）

遺構　調査区北西隅のＢ－31・32・35、Ｃ－31・32・33・34・35区に位置する。第一次調査（1995年）により西側約半分が調査され、既に７号墳として報告されたものである。今回反対の東側未調査部分が調査対象となったものの、農道による未確認部分が残され全貌の把握はできなかった。しかし、東溝が明らかにできたことにより規模が明確となった。なお、立木や後世の撹乱等により結果として約１／２が調査不可能となっている。したがって調査は東側周溝の一部となったが、前回の調査結果から判断して周溝は全周しているものと推定される。また、先に西側が「緩やかなＬ字状の溝」と判断された周溝は、今回も同様な状況を呈することから形状は隅の丸い方形としてよいであろう。確認された規模は、第１次調査との計測を合わせ内周東西長11.4m、同南北長10.7m、外周東西長15.0m、同南北長15.3mを測る。主軸方向はＮ－30°－Ｗである。主体部は今回も確認できなかった。

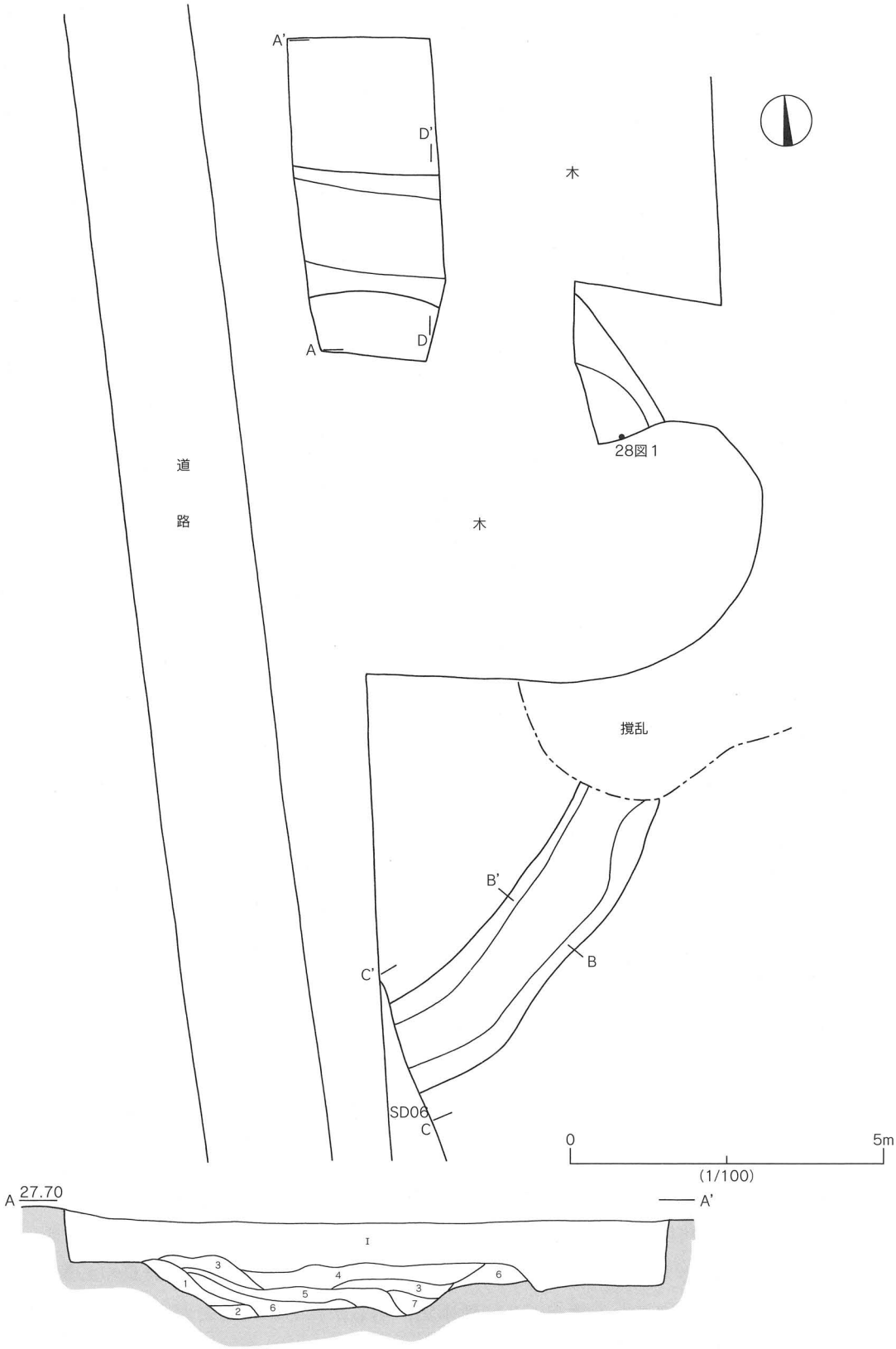
周溝　確認された平面形は方形で、全体的には方墳と判断できる。断面形は緩傾斜をもつ逆台形を呈し、規模は上端幅1.48m、下端幅1.03m、深さ25cmを測る。溝底はほぼ平坦である。周溝内施設の有無は不明であるが、南東寄りの覆土は７層に分層され、黒褐色土の平行堆積で自然堆積層である。

遺物　完形の土師器・坏（第28図１）が１点東側外周寄りから出土した。口径14.8cmの丸底で体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。内外面とも赤彩が施されている。口縁部の一部が欠損しているが、人為的な破砕行為によるものではない。

所見　前回の調査状況や今回の調査から墳形は方墳であると考えられる。以下に述べる古墳時代前期の方墳とは異なり、隅が丸い特徴をもつ。なお、前回の調査で周溝内から滑石製臼玉が集中して出土していたが、今回は確認できなかった。構築時期は出土遺物から古墳時代中期（５世紀後半頃）と考えられる。

８号墳（ＴＭ０８）（第21～25・28図　PL.7・8・22）

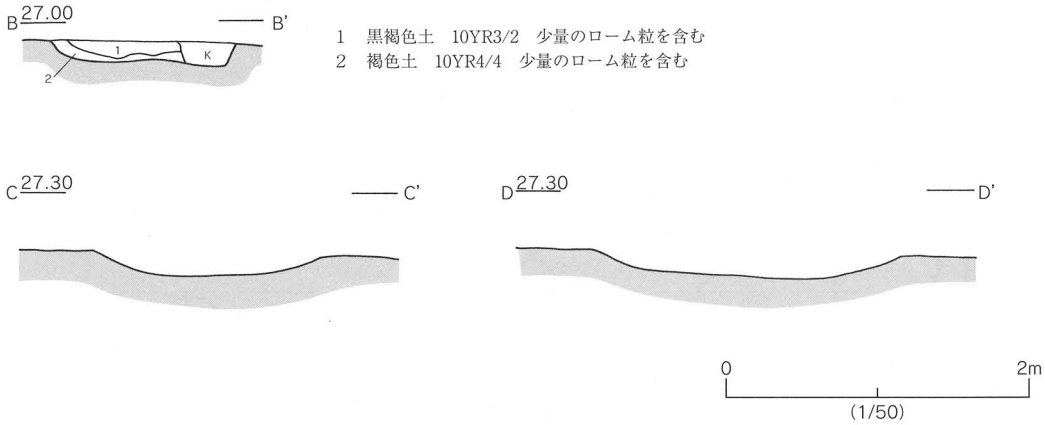
遺構　調査区北東隅のＯ－33・34・35、Ｐ－33・34・35・36、Ｑ－34・35・36・37、Ｒ－34・35・36、Ｓ－40、Ｔ－40区に位置する。本墳は第二次調査（2003年）により北側約半分が検出され、既に８号墳（TM08）として報告したものである。今回の調査で反対の南側未調査部分の一部を調査でき、全貌の把握はできなかったものの、南溝および南角の存在が明らかにできたことにより規模が明確となった。しかし、結果として南東部分である全体の約１／４の未調査部分を残すこととなり、今後より詳細な調査の必要性が感じられた。それは、前回と今回の二度にわたる調査ごとに新事実が明らかにされたことから、未調査部分に関しても当然周溝内埋葬施設等の存在が想定されるからである。また、本調査最終日に幸いにも当該墳の東西軸をほぼ中央に走る農道下を調査することができたが、主体部にかかわる遺構などは確認されていない。そして、今回の調査で注目すべきは墳丘下から周溝にかかる土層断面調査によって、前回明瞭ではなかった「墳丘」の一部と考えられる土層や、その存在を示唆する流れ込みと考えられる土層が周溝内で確認できたことである。また、前回の調査結果から推定して周溝は全周しているものと判断される。まず平面形は各角が丸みをもち、



I　灰黄褐色土　10YR4/2　表土層
1　褐色土　10YR4/4　多量のローム粒、ロームブロックを含む
2　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒、ロームブロックを含む
3　黒褐色土　10YR2/3　少量のローム粒を含む
4　黒褐色土　10YR2/2　微量のローム粒を含む
5　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒、ロームブロックを含む
6　黒褐色土　10YR2/3　少量のローム粒、ロームブロックを含む
7　黒褐色土　10YR2/2　多量のローム粒、少量のロームブロックを含む

0　2m
(1/50)

第19図　７号墳実測図（１）



第20図　７号墳実測図（２）

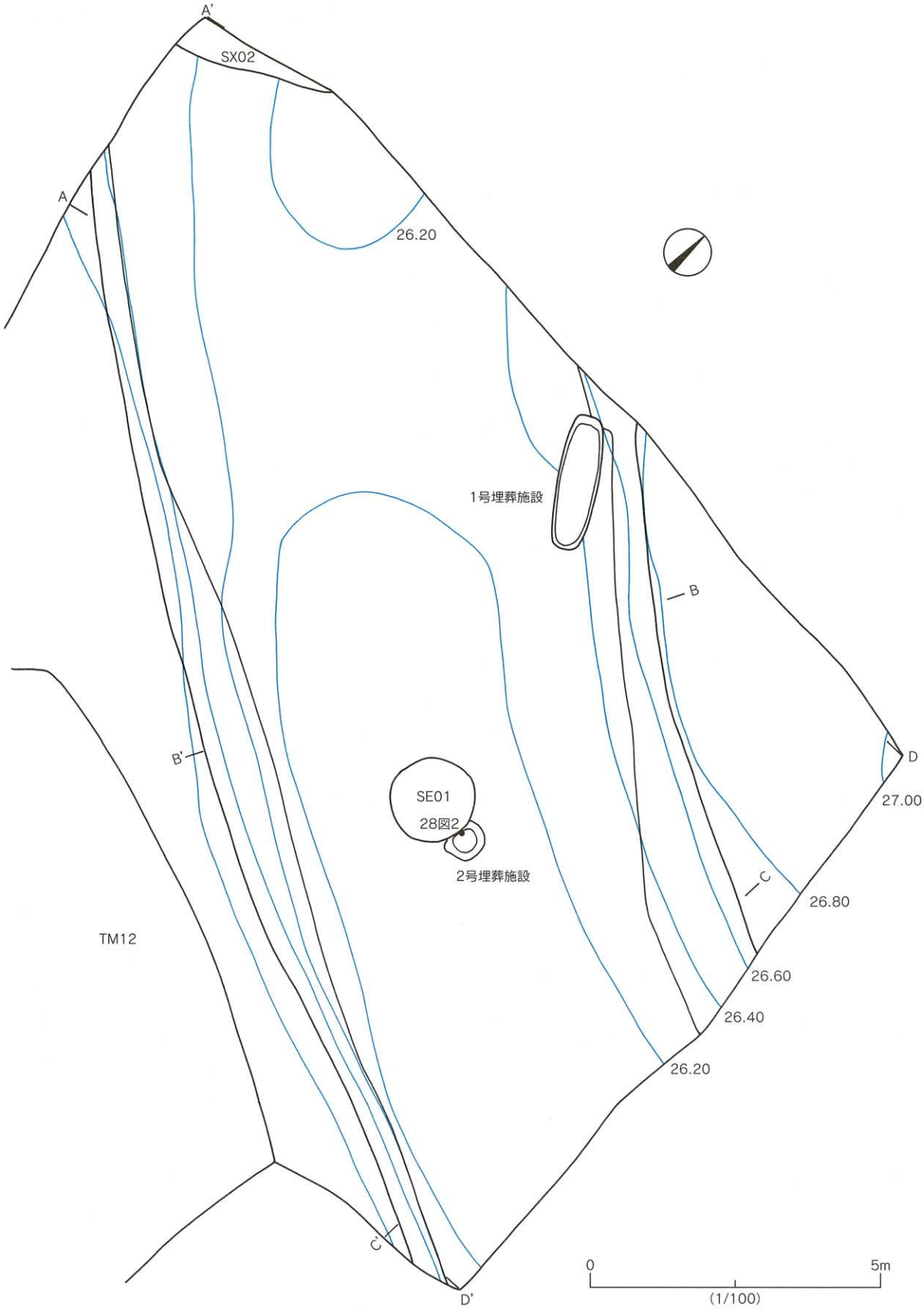
南角が極端に突出しており、台形に近い隅丸方形を呈する。確認された規模は、第二次調査時との計測から内周南北長21.14m、同東西長20.30m、外周東西長（36.20）m、同南北長34.80mを測る。また、主軸方向はＮ－32°－Ｗである。周溝内に竪穴状の埋葬施設が検出され、さらに周溝中央部に中世の井戸跡SE01が検出された。しかも、この井戸跡SE01に接するように2号埋葬施設が確認され、また、西溝中央の周溝内に１号埋葬施設が検出されたが、封土下には主体部は確認できなかった。

南溝　西角は農道により未調査であるが、おそらく西溝より丸みを帯びて外周、内周ともほぼ直線的に並行して移行する。なお、南東側は未調査のため不明である。断面形は既調査の北溝と同様に壁面が緩傾斜の幅広Ｕ字状を呈し、規模は中央部上端幅8.30m、下端幅6.35m、深さ165cmを測る。周溝内施設として内周北寄りに１号埋葬施設が、中央部で２号埋葬施設が検出された。調査区中央の覆土は６層に分層され、黒褐色土を基調とするレンズ堆積の自然堆積層である。

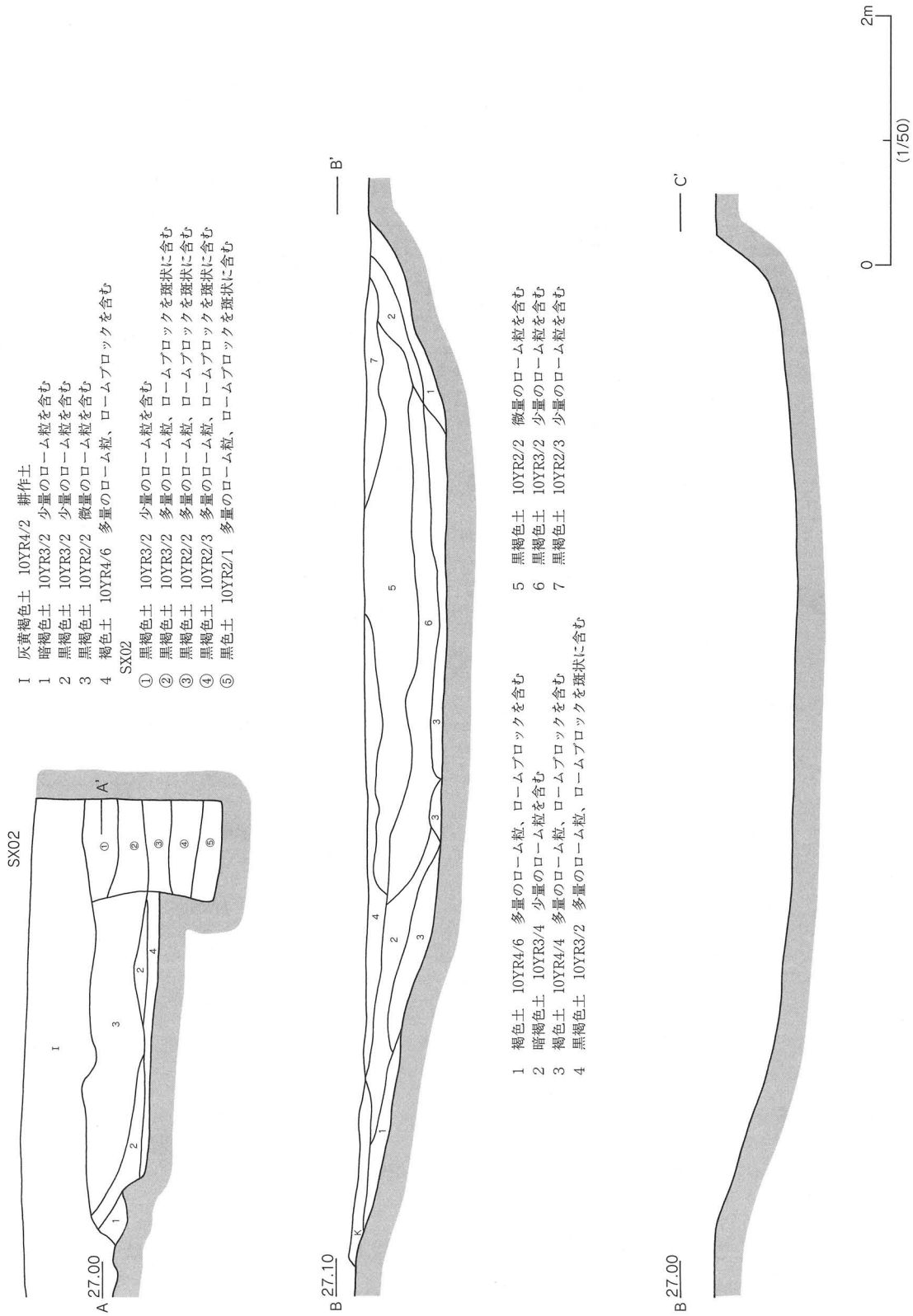
１号埋葬施設　南溝北側、内周に沿って長方形土坑が検出された。遺物の出土はないものの、規模および形状から判断して周溝内埋葬施設と考えた。南北軸が主軸で、主軸方向はＮ－９°－Ｅである。南北長は上場256cm、下場113cm、東西長は上場65cm、下場55cm、深さ32.9cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁面は緩く外傾して立ち上がる。覆土は３層に分層され、人為的堆積と推定される。

２号埋葬施設　南溝底中央部に位置する。ちょうど中世の井戸跡の東側に接して検出されもので、南北長は65cm、東西長は59cm、深さ溝底から54cmを測る円形土坑である。この土坑のやや東寄り底面に口縁部を下に、逆位にした壷形土器が埋納されていた。覆土は単一層で、多量のローム粒子を含む褐色土である。１号井戸跡の覆土排除時に、その壁面で壷形土器の発見により確認できたものである。遺構覆土の状況が同所のローム層と似ており、もし、この土器が埋設されているという認識が無ければ調査に至らなかったかも知れない。全体的にやや締りの欠けることから人為的に埋め戻されたと推定される。この壷形土器の出土状況から、この施設は土器棺と考えられる。

農道部分の調査状況　今回の調査の最終日に、第２次調査区との境界の農道部分において、本古墳墳丘下の主体部の存否を確認するため、重機を用いて確認調査を行った。道路部分の中で長さ18m・幅約２mの調査区の表土排除を行った。調査区の東側から表土排除を始めると、東端から西へ12m付近までは、北側に撹乱部が広がり、南側には農道と平行する浅い溝が確認された。この溝については、覆土の状況などから現代のものと考えられ、撹乱部分についても同様な時期のものと想定される。調査区の西側では面的にローム層が確認されたが、本古墳の主体部を構成する遺構は確認されなかった。そして、現地調査時には思いもしなかっ

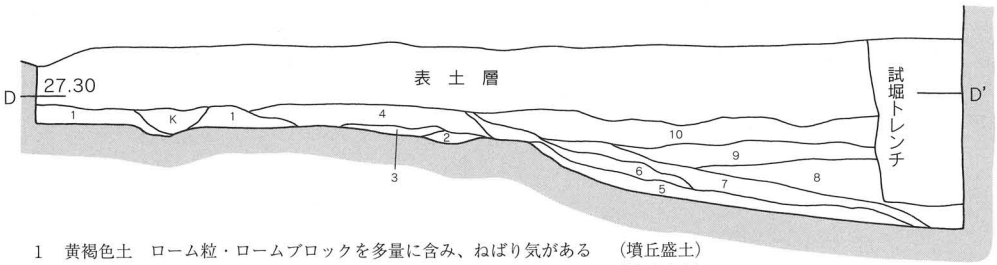


第21図　８号墳実測図（１）



第22図　8号墳実測図(2)

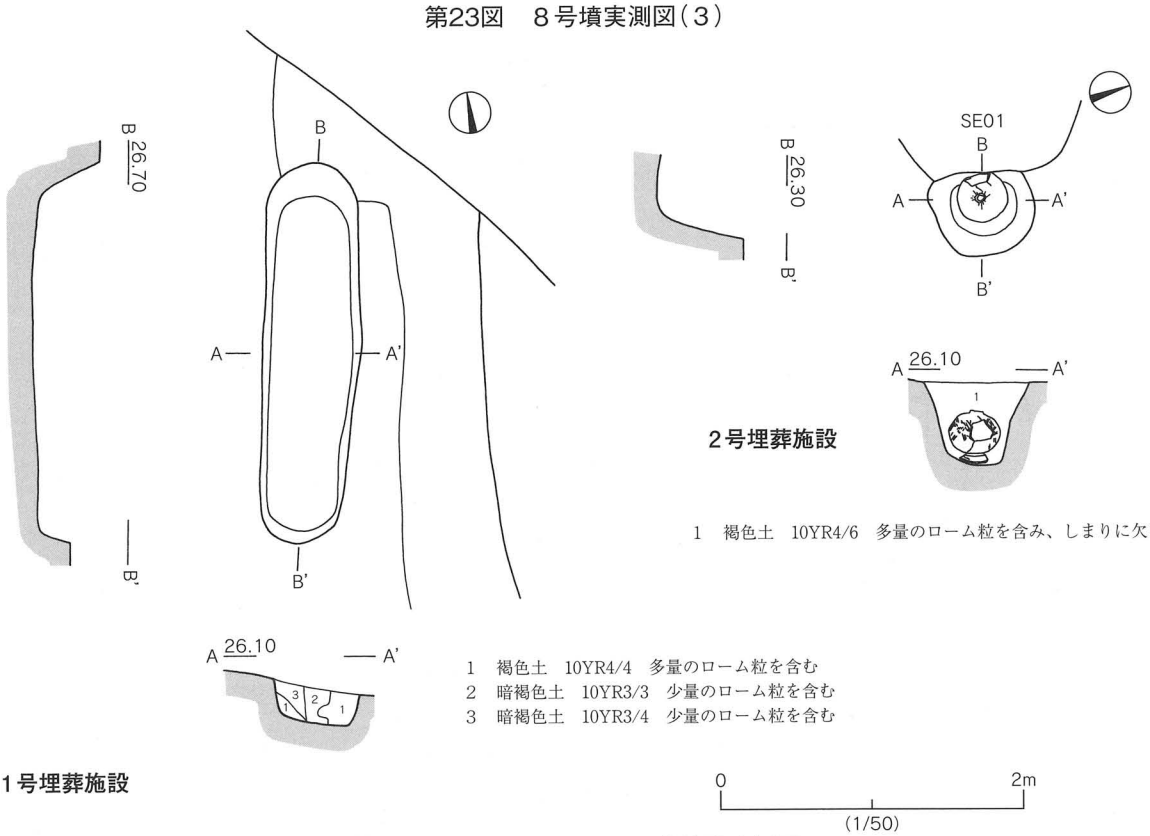
たことであるが、この調査区図面を過去の本古墳に関わる図面と合成してみると、調査区東側の撹乱部と溝の間にかろうじて確認できたローム面が、想定される周溝ラインに食い込む可能性が考えられた。この状況



1　黄褐色土　ローム粒・ロームブロックを多量に含み、ねばり気がある　（墳丘盛土）
2　黄褐色土　ロームブロックと褐色土　（墳丘盛土）
3　明褐色土　褐色土をベースにローム粒を多量に含む　（墳丘盛土）
4　褐色土　ローム粒をまばらに含み、比較的しまりがある　（墳丘盛土）
5　黄褐色土　ローム粒・ロームブロックを多量に含む　（墳丘構築時の堆積）
6　明褐色土　ローム粒を多量に含み、ロームブロックを含む　（墳丘崩落土）
7　褐色土　ローム粒を多量に含む　（墳丘崩落土）
8　暗褐色土　ローム粒をまばらに含み、ねばり気がある　（周溝内堆積）
9　褐色土　ローム粒をまばらに含み、8層よりやや明るい　（周溝内堆積）
10　褐色土　ローム粒をわずかに含み、9層よりしまりがある　（周溝内堆積）

0　5m
(1/100)

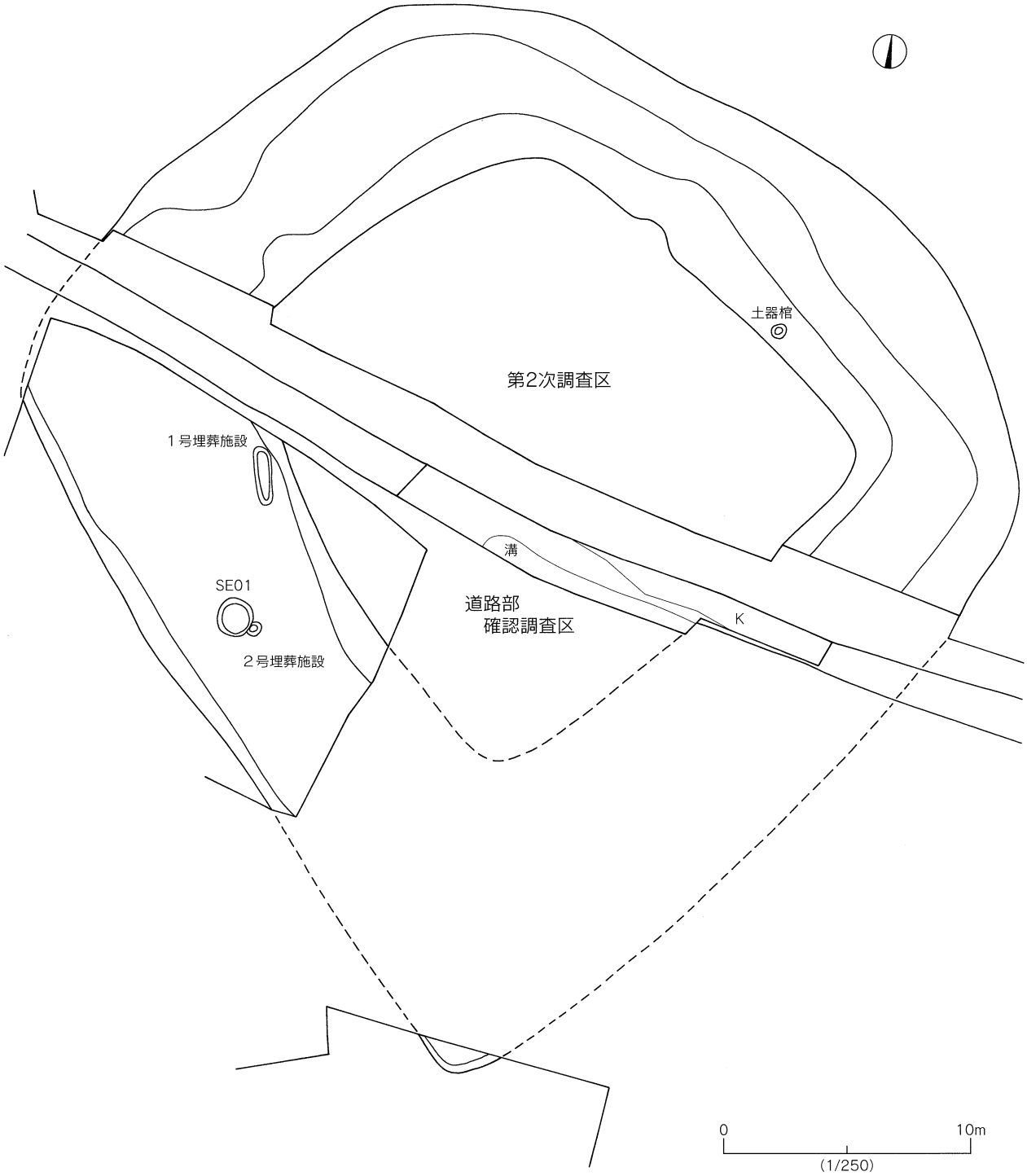
第23図　8号墳実測図（3）



第24図　8号墳1・2号埋葬施設実測図

は、今まで方形としてきた本古墳の墳形に影響を及ぼすものといえるが、現状ではその状況の検証が行えないため、問題点の指摘にとどめ今後の調査の課題としたい。

遺物　第28図2は土器棺として周溝溝底に掘削された2号埋葬施設内に埋納されていたもので、複合口縁をもつ壷形土器である。口径20.8cm、器高33.0cmを測る大形品で、胴部は上下に押し潰された扁平球形を呈し、底部は平底である。口唇部に棒状工具による押捺が巡り、口縁段下部には縦位のハケ目が残る。頸部は斜行するヘラケズリによりハケ目調整を擦り消しているが、下半部はハケ目をそのまま残し、基部は粗いヘラナデで調整している。胴部中央に16×17cmの楕円形状の焼成後打欠行為を行っている。なお、そのほかは小破



第25図　8号墳全測図（第2次調査分含む）

片のため図示していないが、土師器破片2点が周溝内から出土している。

また、発掘調査最終日に本古墳周溝内に確認された1号井戸跡について重機を用いて掘削しところ、井戸跡覆土内から土師器破片が数点した。この破片と、第28図2の壷形土器との接合関係を調べたが、接合はしなかった。

所見　本古墳は東側に未調査部分が広がりその形態を断定し得ないが、現状で把握できた形態的特徴や出土遺物などから古墳時代前期（4世紀代）の方墳と考えられる。

１２号墳（ＴＭ１２）（第26～28図　PL.22）

遺構　調査区北側のＮ―36・37・38・39、Ｏ－36・37・38・39・40、Ｐ－36・37・38・39・40、Ｑ－37・38・39区に位置する。西側が農道および立木で、また東角も立木により未調査区域となっている。また南溝東寄りには竪穴状遺構SX01が切り、さらに南側の東溝から南溝にかけて近世以降の溝跡SD01が東西に走り、周溝の一部を切っている。したがって、西角、東角が不明瞭にもかかわらず、全体の形状は比較的よく把握できる。まず北溝側は８号墳の南溝と並走し、東溝側は14号墳に隣接している。周溝は西角と東角が不明であるが、北角と南角は遺存しており、特に問題となる南溝が確認できたことは幸いであった。つまり南角の深度がわずかに10cmと浅く、東溝と南溝は明らかに途切れており、南角はわずかな掘り込みがあるとはいえ陸橋状とみることが可能である。平面形は東西溝が長い長方形を呈する。規模は、内周東西長10.02m、同南北長8.96m、外周東西長15.12m、同南北長13.63mを測る。主軸方向はＮ－43°－Ｗである。主体部は確認できなかった。

西溝　南側の約１／３が未調査区域に延びている。北溝より丸みを帯びて移行し、中央付近で深度が深くなる。断面形は溝底がほぼ平坦で、壁面は丸みをもち外傾しているが、内周側は緩く、外周側は急傾して立ち上がる。規模は上端幅3.14m、下端幅1.21m、深さ64cmを測る。覆土は７層に分層され、レンズ状の自然堆積層である。

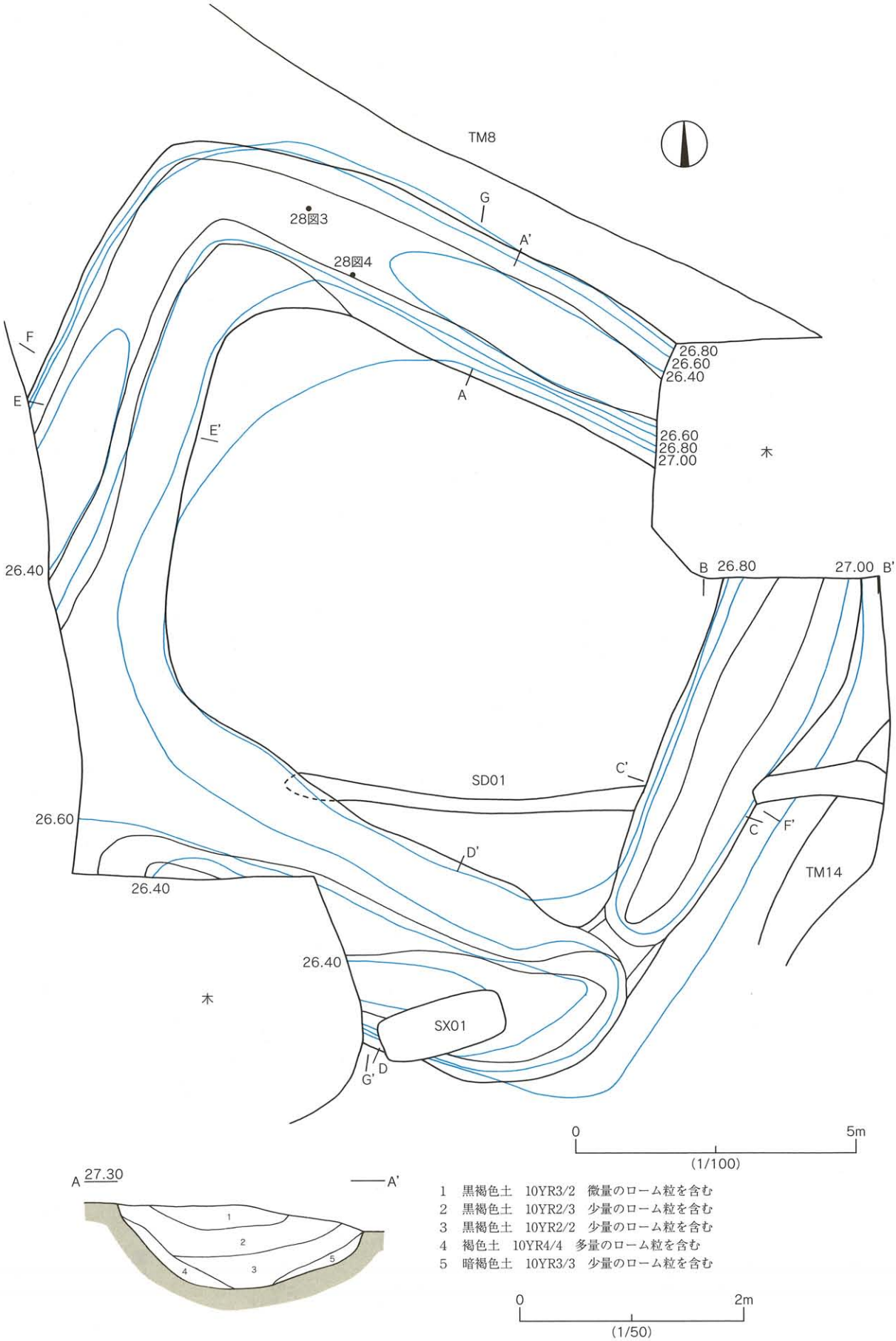
北溝　東側が立木により未調査部分を残すが西溝より丸みを帯びて移行し、中央付近の溝底が深くなる。断面形は溝底がやや丸みをもつＵ字状を呈し、規模は中央付近の上端幅2.36m、下端幅1.31m、深さ72cmを測る。覆土は４層に分層され、下層に黒褐色土、上層に暗褐色土の平行堆積で自然堆積層である。なお、西寄り溝底から第28図３の高坏の脚部と同図４の甕形土器が出土している。

東溝　北側は立木により未調査となり、南側上面に近世溝が走っている。また南溝からの移行はなく、南角部で浅い掘り込みによって途切れ、陸橋状となっている。全体的に溝底は平坦で、断面形溝底が丸みをもつＵ字状を呈する。規模は中央部の上端幅2.43m、下端幅1.08m、深さ43cmを測る。覆土は3層に分層されている。暗褐色土を基調とするレンズ状の自然堆積層である。

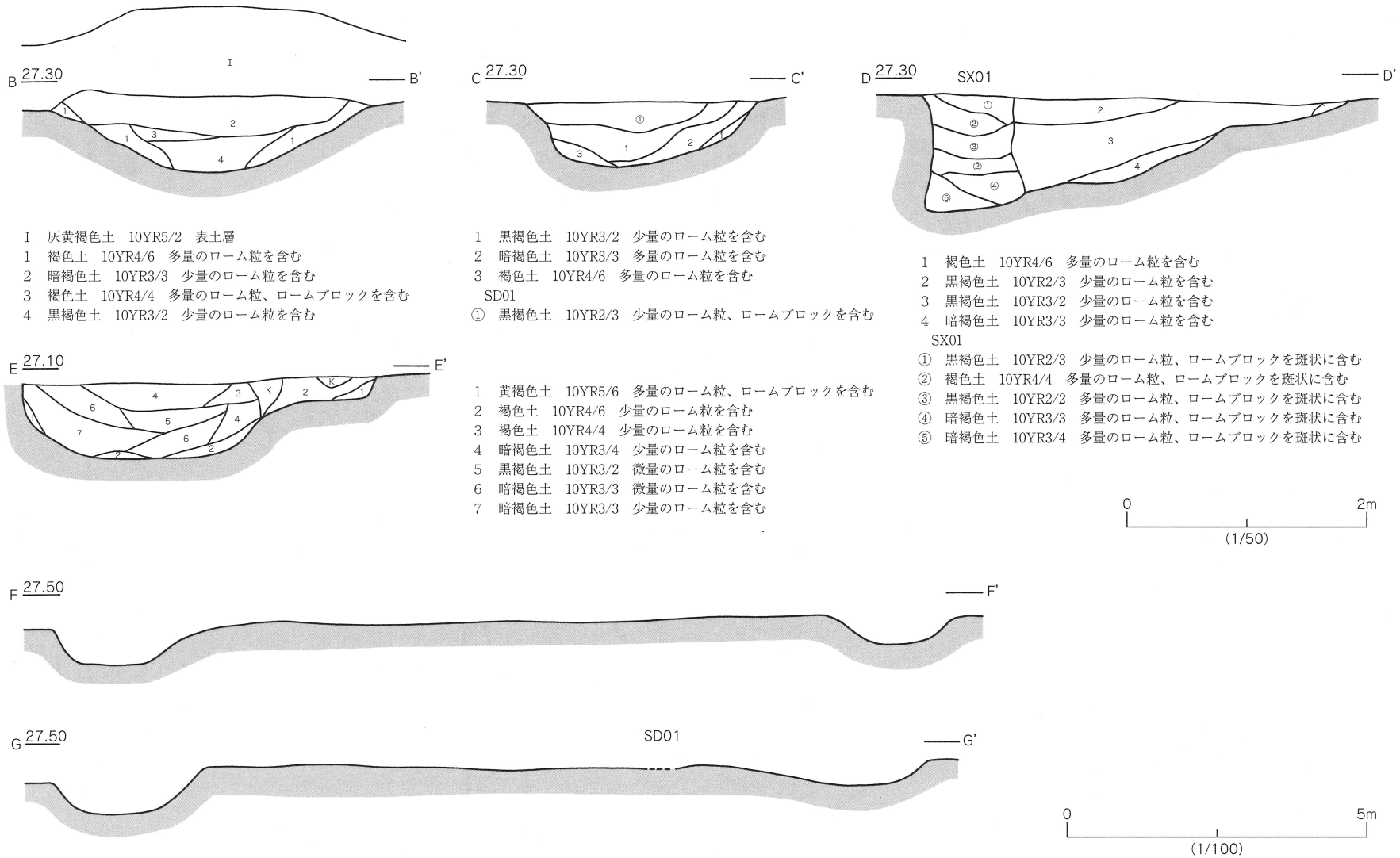
南溝　西側が立木と農道により未調査部分があり、東側には竪穴状遺構SX01が切っている。東溝より浅い掘り込みによって途切れ、陸橋状となっている。また、西溝からは丸みを帯びて移行する。断面形は溝底がやや丸みをもつＵ字状を呈し、規模は残存している東寄り部上端幅3.63m、下端幅1.83m、深さ38cmを測り、西溝と同様。壁面は丸みをもち外傾しているが、内周側は緩く、外周側は急傾して立ち上がる。覆土は５層に分層され、レンズ状の自然堆積層である。

遺物　第28図３は高坏の脚部破片である。大きく開く脚部中央に透孔がみられるが、孔数は不明である。同図４は甕形土器である。口縁部と胴下半部は接合しないが、同じ箇所で出土しており、同一個体と判断した。これらは明らかに器体の部分的な打欠行為とは異なる、器体全体の破砕行為と見なすことができる。器形はほぼ球形に近く、口縁部はくの字状に外反する。口縁部、胴部ともにハケ目調整が施され、ヘラナデによって部分的にハケ目痕を消失させている。

所見　本古墳は出土遺物や形態的特徴などから、古墳時代前期（４世紀代）の方墳と考えられる。



第26図　12号墳実測図（1）



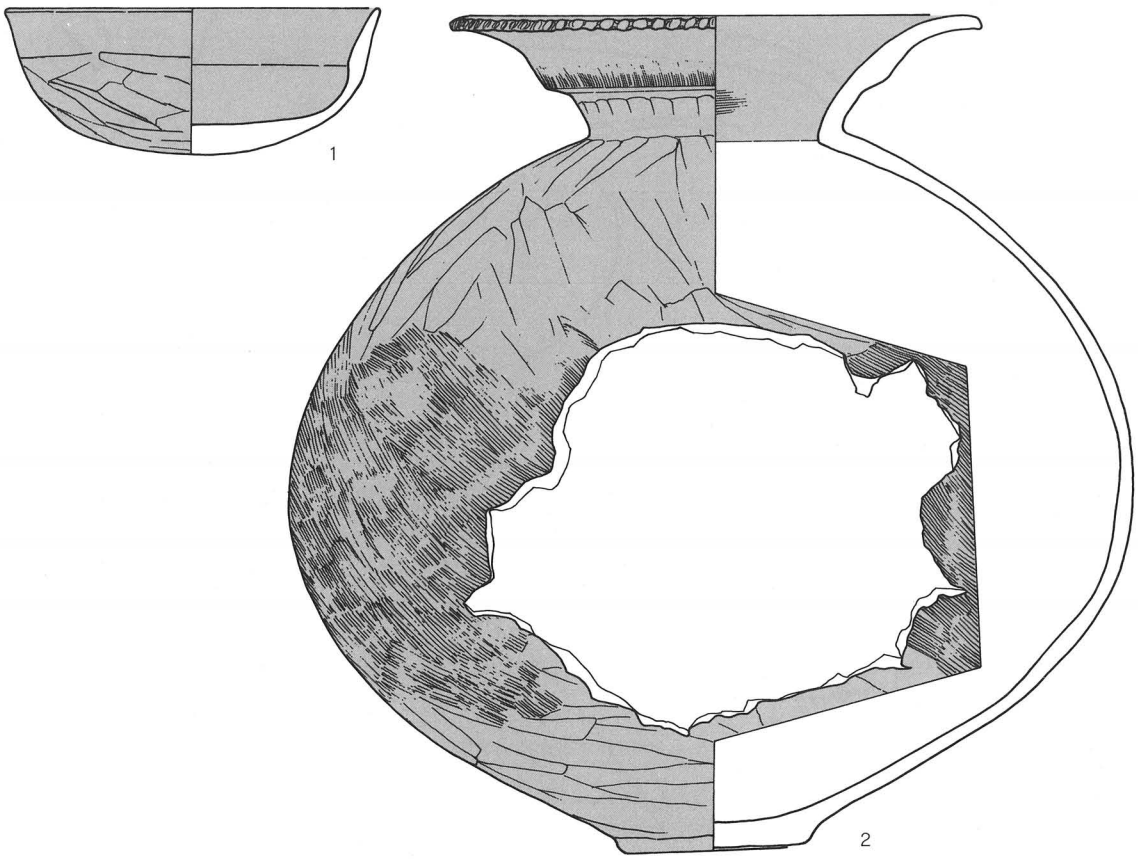
I　灰黄褐色土　10YR5/2　表土層
1　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒を含む
2　暗褐色土　10YR3/3　少量のローム粒を含む
3　褐色土　10YR4/4　多量のローム粒、ロームブロックを含む
4　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒を含む

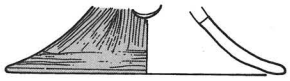
1　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒を含む
2　暗褐色土　10YR3/3　多量のローム粒を含む
3　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒を含む
SD01
①　黒褐色土　10YR2/3　少量のローム粒、ロームブロックを含む

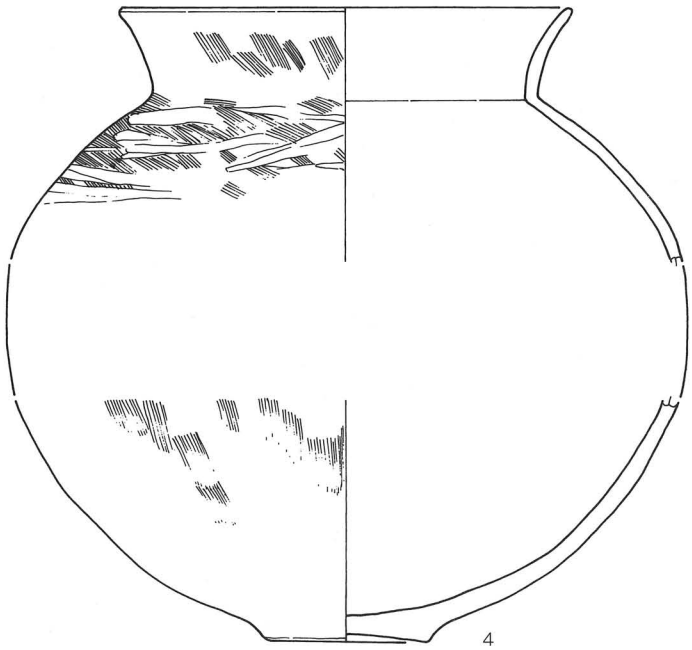
1　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒を含む
2　黒褐色土　10YR2/3　少量のローム粒を含む
3　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒を含む
4　暗褐色土　10YR3/3　少量のローム粒を含む
SX01
①　黒褐色土　10YR2/3　少量のローム粒、ロームブロックを斑状に含む
②　褐色土　10YR4/4　多量のローム粒、ロームブロックを斑状に含む
③　黒褐色土　10YR2/2　多量のローム粒、ロームブロックを斑状に含む
④　暗褐色土　10YR3/3　多量のローム粒、ロームブロックを斑状に含む
⑤　暗褐色土　10YR3/4　多量のローム粒、ロームブロックを斑状に含む

1　黄褐色土　10YR5/6　多量のローム粒、ロームブロックを含む
2　褐色土　10YR4/6　少量のローム粒を含む
3　褐色土　10YR4/4　少量のローム粒を含む
4　暗褐色土　10YR3/4　少量のローム粒を含む
5　黒褐色土　10YR3/2　微量のローム粒を含む
6　暗褐色土　10YR3/3　微量のローム粒を含む
7　暗褐色土　10YR3/3　少量のローム粒を含む

第27図　12号墳実測図（2）



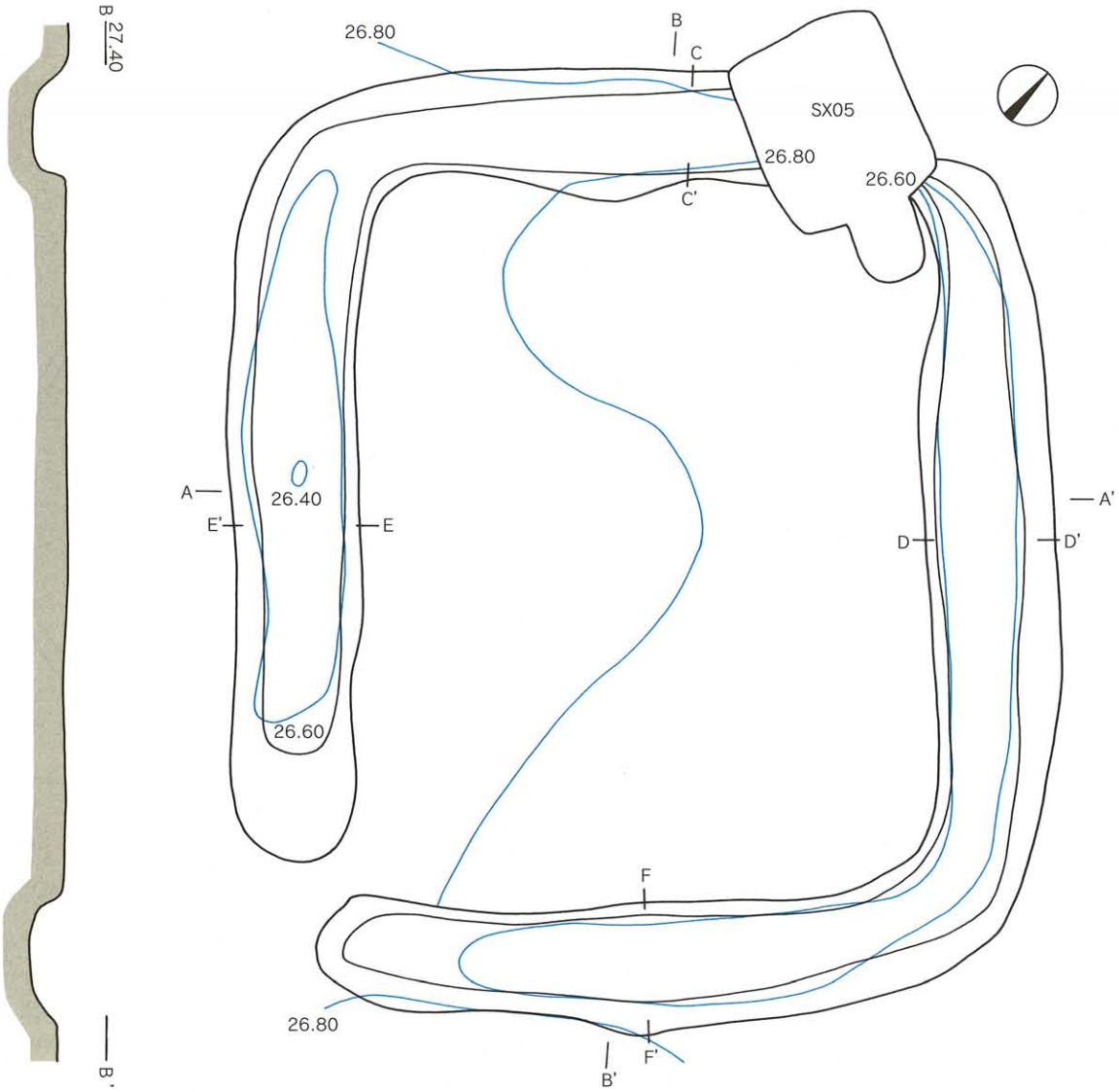


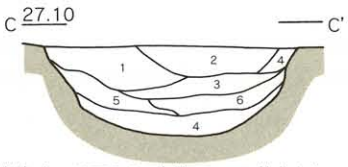


1；7号墳
2；8号墳
3・4；12号墳

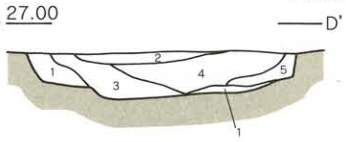
0　10cm
(1/3)

第28図　7・8・12号墳出土遺物

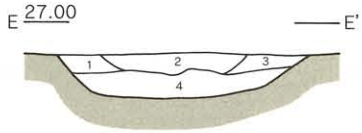




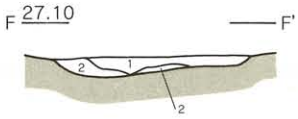
1　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒を含む
2　暗褐色土　10YR3/3　多量のローム粒を含む
3　褐色土　10YR4/4　多量のローム粒を含む
4　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒、ロームブロックを含む
5　暗褐色土　10YR3/3　少量のローム粒を含む
6　黒褐色土　10YR3/1　少量のローム粒を含む



1　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒、ロームブロックを含む
2　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒を含む
3　黒褐色土　10YR2/3　少量のローム粒を含む
4　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒、ロームブロックを含む
5　暗褐色土　10YR3/4　少量のローム粒、ロームブロックを含む



1　褐色土　10YR4/4　多量のローム粒、少量のロームブロックを含む
2　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒、ロームブロックを含む
3　暗褐色土　10YR3/4　少量のローム粒、ロームブロックを含む
4　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒、ロームブロックを含む



1　暗褐色土　10YR3/3　少量のローム粒、ロームブロックを含む
2　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒、ロームブロックを含む

0　2m
(1/50)

第29図　13号墳実測図

１３号墳（ＴＭ１３）（第29図　PL.8）

遺構　調査区北西側のＥ－38・39、Ｆ－37・38・39・40、Ｇ－37・38・39・40、Ｈ－37・38・39・40、Ｉ－38・39区に位置する。西溝は18号墳の東溝と並走し、南溝は28号墳の北溝と並走し、東溝は25号墳の西溝と並走する。また、北角には中世の竪穴状遺構SX05に切られ、墳東側半分は5号柱穴群が重複している。周溝は南角で途切れ、この部分が陸橋となる。平面形は北西－南東方向を長くとる長方形を呈する。規模は、内周東西長9.52m、同南北長7.65m、外周東西長13.18m、同南北長11.15mを測る。主軸方向はＮ－64°－Ｗである。主体部は検出されていない。

南溝　西溝より丸みを帯びて移行し、南角に向けて次第に浅くなり、陸橋に至る。断面形は底面がほぼ平坦となる逆台形を呈し、規模は上端幅1.72m、下端幅1.15m、深さはほぼ中央部で40cmを測る。覆土は４層に分層され、最下層の褐色土は平行堆積で自然堆積層である。

西溝　北角に中世の竪穴状遺構SX05が切っている。北溝より丸みをもって移行する。断面形は底面が丸みをもつＵ字状を呈し、規模は中央付近の上端幅1.81m、下端幅1.09m、深さ39cmを測る。覆土は６層に分層され、最下層の褐色土は平行堆積で自然堆積層である。

北溝　陸橋を有する東溝より丸みを帯びて移行する。断面形は底面がほぼ平坦な逆台形を呈している。規模は中央部の上端幅1.76m、下端幅1.10m、深さ26cmを測る。覆土は５層に分層され、レンズ状堆積の自然堆積層である。

東溝　北溝より丸みを帯びて移行し、南角に向けて次第に浅くなり、陸橋となる。断面形は底面がほぼ平坦となる逆台形を呈し、規模は中央部上端幅1.82m、下端幅1.12m、深さ37cmを測る。覆土は２層に分層され、レンズ状堆積の自然堆積層である。

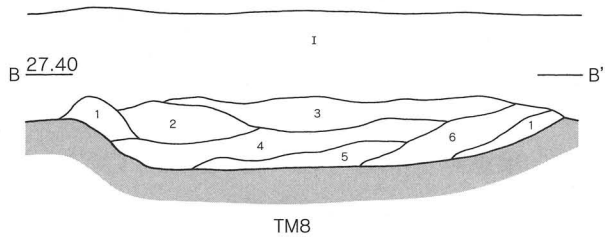
遺物　図示していないが、土師器の小破片（２cm大）が出土している。器形その他は不明である。

所見　本古墳はそのあり方や形態的特徴などから、古墳時代前期（４世紀代）の方墳と考えられる。

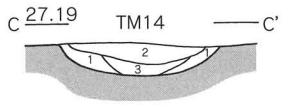
１４号墳（ＴＭ１４）（第30～34図　PL.9）

遺構　調査区東側のＰ－40・41・42、Ｑ－39・40・41・42・43・44、Ｒ－39・40・41・42・43・44、Ｓ－35・36・37・38・39、Ｔ－35・36・37・38・39、Ｕ－35・36・37・38区に位置する。周溝のみ確認でき、盛土は残存していない。なお、東側では中世の溝跡SD02・03に切られ、また北側では８号墳と17号墳を切って構築している。当古墳の状況から判断して周溝は本来全周していたものと推定されるが、北側約１／４は消失している。しかも残存している周溝からみて平面形は正円形ではなく、南側に位置する主体部側が突出する卵形で、さらに内周にわずかな括れ部が見られることから、帆立貝式前方後円墳であろう。確認される規模は、内周南北長18.50m、同東西長15.30m、外周南北長20.20m、同東西長16.50mを測る。主体部は墳丘下南寄りで確認された。また検出された周溝も一定幅ではなく、北東側では上幅は1.30～2.20m、深さは34cmを測り、対峙する北西側では上幅は1.65m、深さは23cmを測る。南側は幅狭く、上幅は0.88m、深さは24cmを測る。全体的に溝底は丸みを帯び、断面形はＵ字状を呈する。覆土はレンズ状の自然堆積である。

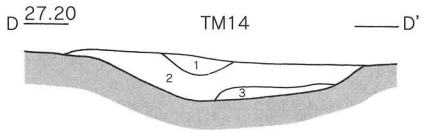
内部主体部（箱式石棺）　墳丘下の埋葬施設として主体部が古墳南側に位置する。箱式石棺が土坑内に埋設されているが、すでに蓋石、側壁石等は遺存しておらず、床石のみ３枚が残存するだけである。まず、土坑の掘り方平面形は四隅に若干丸みがある長方形で、その規模は長軸2.83m、短軸2.12m、深さ27cmを測る。主軸方位は古墳主軸に対し直交して構築されており、Ｎ－82°－Ｗを指す。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦であるが、石棺の埋設部が溝状に掘り込まれている。台座は掘り込み底面より低くなっている。



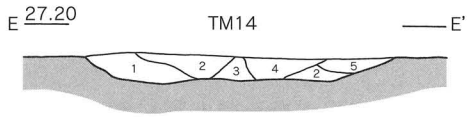
Ⅰ　灰黄褐色土　10YR4/2　表土層
1　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒を含む
2　褐色土　10YR4/4　少量のローム粒を含む
3　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒を含む
4　黒褐色土　10YR2/3　少量のローム粒、ロームブロックを含む
5　黄褐色土　10YR5/6　多量のローム粒、ロームブロックを含む
6　暗褐色土　10YR3/3　少量のローム粒を含む



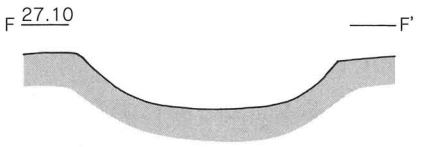
1　褐色土　10YR4/6　多量ローム粒を含む
2　黒褐色土　10YR2/3　少量のローム粒を含む
3　褐色土　10YR4/4　多量のローム粒を含む

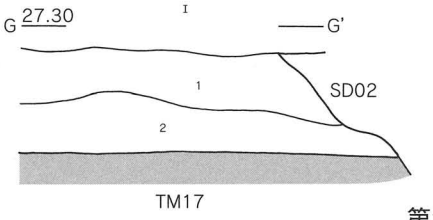


1　褐色土　10YR4/6　微量のローム粒を含む
2　褐色土　10YR4/4　少量のローム粒を含む
3　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒を含む

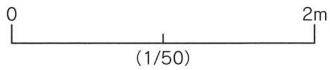


1　黄褐色土　10YR5/6　多量のローム粒を含む
2　褐色土　10YR4/4　少量のローム粒、ロームブロックを含む
3　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒、ロームブロックを含む
4　暗褐色土　10YR3/4　少量のローム粒、ロームブロックを含む
5　暗褐色土　10YR3/3　少量のローム粒を含む

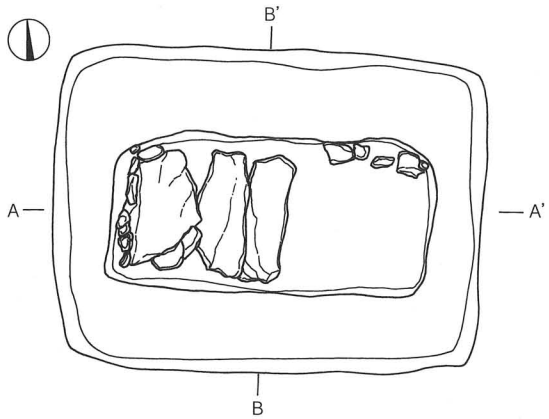


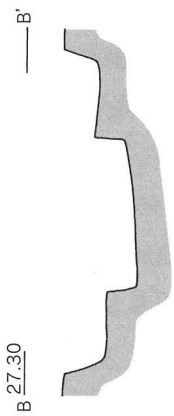


Ⅰ　灰黄褐色土　10YR5/2　表土層
1　黒褐色土　10YR2/3　微量のローム粒を含む
2　暗褐色土　10YR3/4　少量のローム粒を含む

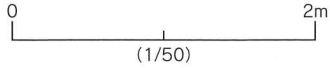


第30図　8・14・17号墳実測図(1)

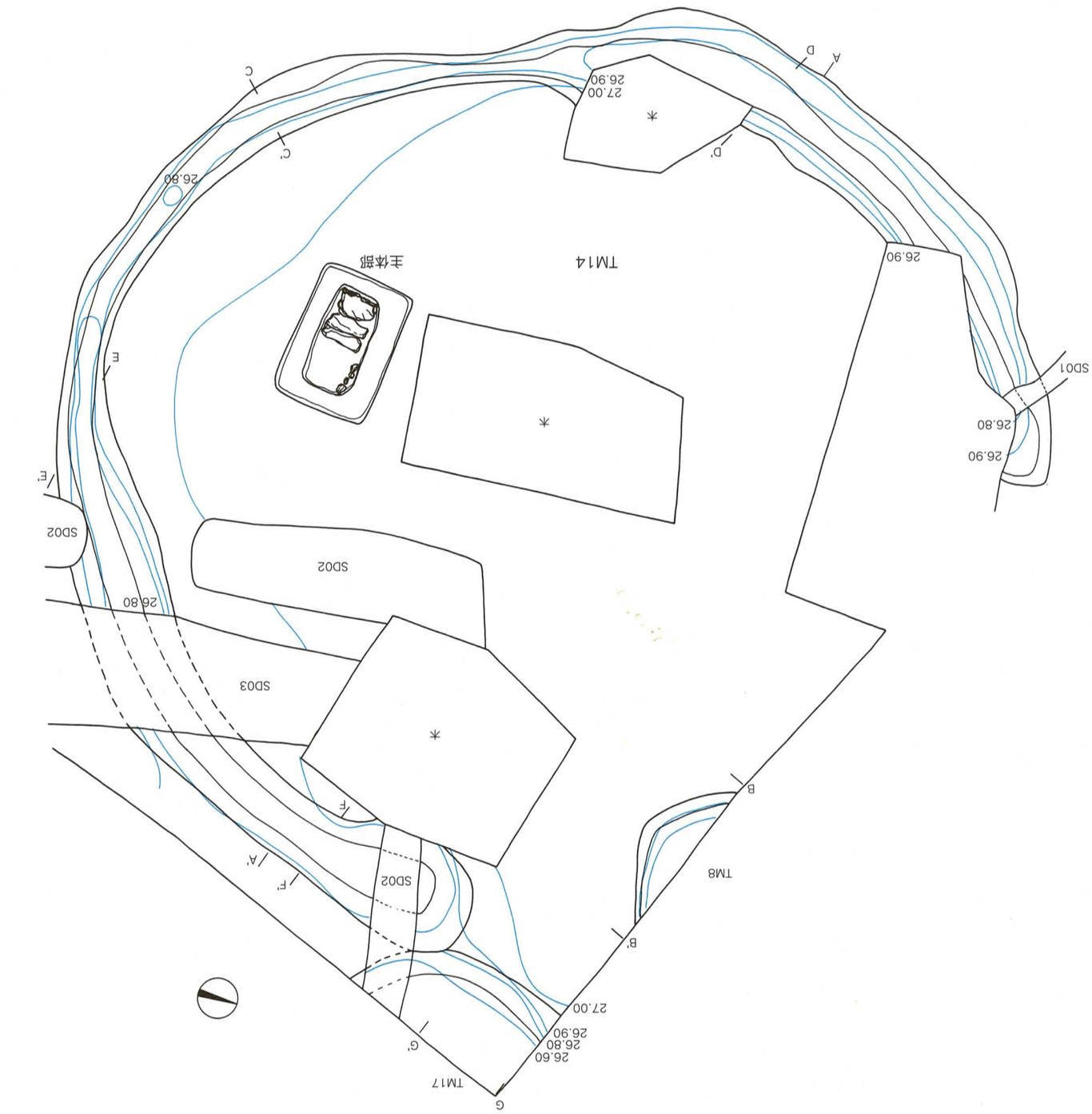




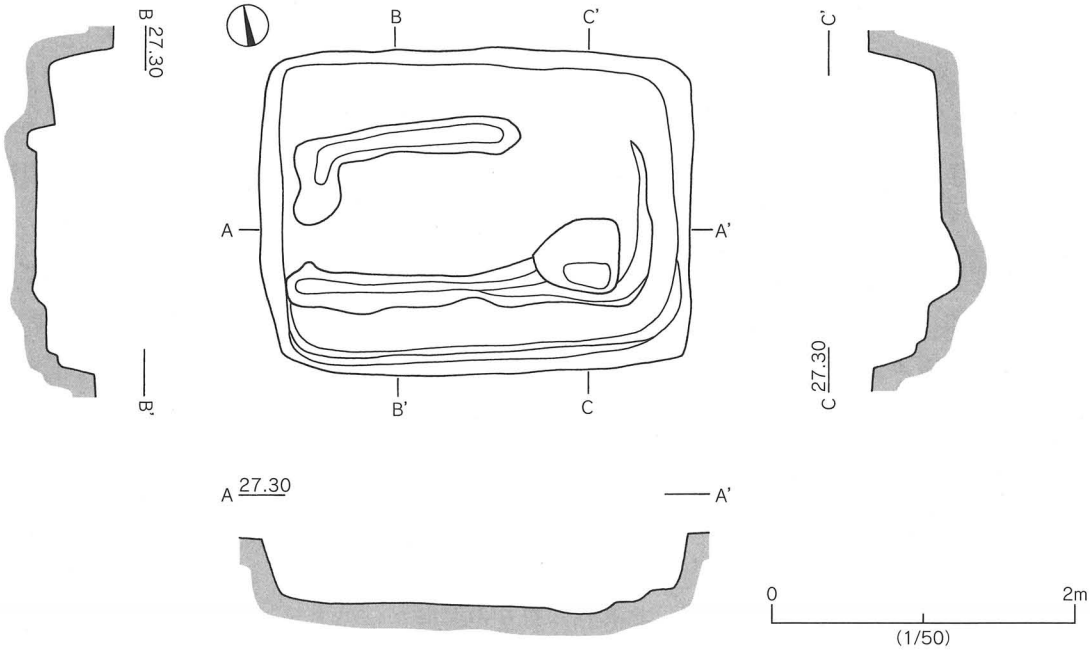
1　褐色土　10YR4/6
多量のローム粒、少量の粘土粒を含む
2　褐色土　10YR4/4
多量のローム粒、少量の粘土粒、凝灰質泥岩粒を含む
3　暗褐色土　10YR3/4
少量のローム粒、少量の粘土粒、凝灰質泥岩粒を含む
4　褐色土　10YR4/4
少量のローム粒、少量の粘土粒を含む
5　黄褐色土　10YR5/6
多量のローム粒、ロームブロック、少量の粘土粒を含む
6　にぶい黄褐色土　10YR4/3
少量のローム粒、ロームブロック、多量の粘土粒を含む
7　褐色土　7.5YR4/3
少量のローム粒、ロームブロック、少量の粘土粒を含む
8　褐色土　7.5YR4/4
少量のローム粒、少量の凝灰質泥岩ブロックを含む
9　にぶい黄褐色土　10YR5/4
少量のローム粒、ロームブロック、少量の粘土粒、少量の凝灰質泥岩を含む
10　にぶい黄褐色土　10YR6/4　多量のローム粒、ロームブロック、少量の凝灰質泥岩を含む
11　暗褐色土　7.5YR3/3
少量のローム粒、ロームブロック、微量の凝灰質泥岩を含む



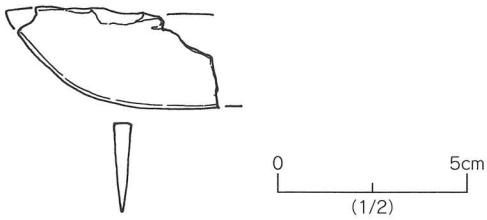
第31図　14号墳主体部実測図(1)



第32図　8・14・17号墳実測図(2)



第33図　14号墳主体部実測図（２）



第34図　14号墳主体部出土遺物

その規模は長軸2.11m、短軸1.00m、深さ10～20cmを掘り込み、ここを石棺の埋設部としている。しかし、残存している床石は西側半分のみで３枚ある。床石は雲母片岩の板石を使用しており、大きさは横幅が25～40cmと差がみられるが、長さは80cm前後と一定している。さらに北東端部には打割した屑板石を詰めて充填し裏込としている。また、側壁石の目地あるいは押えとみられる白色粘土が石棺掘り方外側に散在していた。

遺物　石棺内から第34図の直刀の破片が、石棺材に癒着して出土していた。銹化が著しく、正確な計測は不可能である。しかし、表面の銹部分をクリーニングしてみると、刃先の部分であることが判明した。計測可能な範囲でみてみると、長5.25cm、刃幅2.48cm、背厚0.43cmを測る。なお、周溝内から図示していないが、須恵器破片が２点、土師器破片４点が出土している。

所見　本古墳は箱式石棺による主体部の存在や形態的特徴などから、古墳時代後期（６世紀～７世紀代）の帆立貝式前方後円墳と考えられる。なお、同古墳群第２次調査で確認された３号墳は、本古墳に類似した墳形や主体部をもつ。

１５号墳（ＴＭ１５）（第35・39図　PL.10・22）

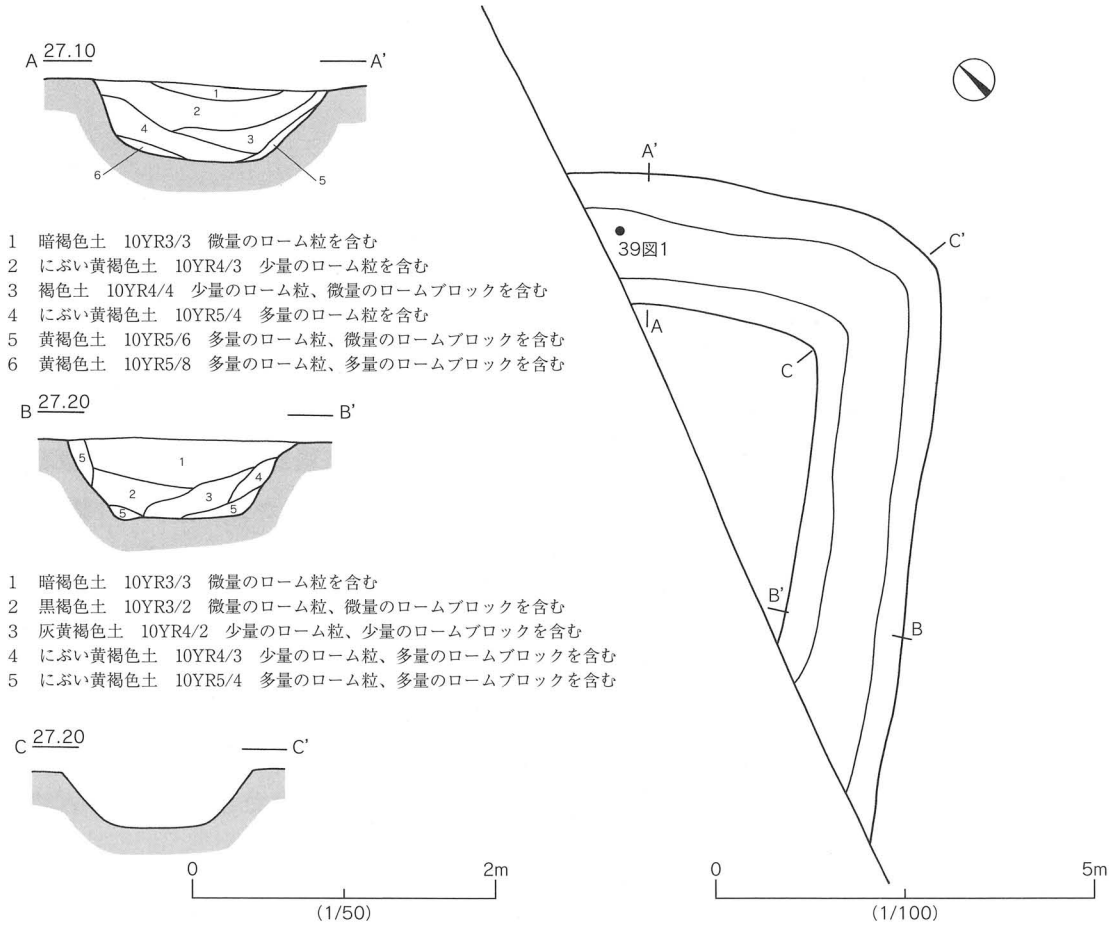
遺構　調査区中央のＰ－44・45・46、Ｑ－43・44・45区に位置する。西側の半分以上が未調査区域に広がっており、東溝と北溝の一部のみ検出できた。北溝は14号墳に隣接し、東溝は16号墳西溝と並走する。したがって、周溝の全周は確認できない。しかし、平面形は北東角の状況から判断して方形を呈するものと推定される。全体の規模は不明であるが、調査された内周南北長（4.10）m、同東西長（2.50）m、外周南北長（5.93）m、同東西長（4.10）mを測る。主軸方向はＮ－44°－Ｅである。主体部は確認できなかった。

北溝　西側が未調査区域に延びている。また、東溝より丸みを帯びて移行する。断面形は溝底がやや丸みをもつものの、壁面は直線的に外傾し逆台形を呈する。規模は上端幅1.73m、下端幅0.79m、深さ58cmを測る。覆土は６層に分層され、レンズ状の自然堆積層である。なお、ほぼ中央外周寄りの溝底で底部から胴部にかけて打欠された第39図１の壷形土器が出土している。

東溝　南側が未調査区域に延びている。北溝から丸みを帯びて移行する。南側がわずかに深くなっているものの、溝底はほぼ平坦である。断面形は逆台形を呈し、規模は中央付近の上端幅1.47m、下端幅0.76m、深さ60.5cmを測る。覆土は５層に分層され、レンズ状の自然堆積層である。

遺物　第39図１は土師器の壷形土器で、北溝外周寄りの溝底から出土し、底部全部と胴部下半部約半分を大きく打欠している。器形は上下に押し潰した球形で、最大径が胴中位より下位に位置する。口縁部は外反気味に大きく外方へ立ち上がる。口縁部は縦位のハケ目調整の後、口辺部のみヨコナデ。胴部もハケ目調整の後、横位の比較的粗いヘラケズリを施す。外面および口縁部内面に赤彩が施されている。

所見　本古墳は出土遺物や形態的特徴などから、古墳時代前期（４世紀代）の方墳と考えられる。



第35図　15号墳実測図

１６号墳（ＴＭ１６）（第36～40図　PL.10・11・22・23）

遺構　調査区南東側のＯ―48・49、Ｐ－46・47・48・49・50、Ｑ－45・46・47・48・49・50・51、Ｒ－45・46・47・48・49・50・51・52、Ｓ－45・46・47・48・49・50・51・52、Ｔ－46・47・48・49・50・51・52、Ｕ－47・48・49・50、Ｖ－48・49区に位置する。北東側で中世の溝跡SD06が斜めに横切っている。西溝は15号墳の東溝と並走し、南溝は21・22号墳の北溝と並走し、東溝の一部は未調査区域に広がっている。平面形は東西軸が長い長方形を呈する。規模は、内周東西長15.75m、同南北長13.50m、外周東西長23.50m、同南北長23.40mを測る。主軸方向はＮ－48°－Ｗである。なお、北溝および南溝における周溝内埋葬施設が２基確認されているが、古墳内の主体部は検出されていない。

南溝　西溝および東溝より丸みを帯びて移行する。外周はほぼ中央部が外側に大きく張り出し、内周は直線的に延びている。西方部分に溝に並行する長方形の2号埋葬施設が構築されている。溝底は中央部が深く西角と東角に向かって深度を浅くする。また、断面形は底面がほぼ平坦で、壁面は直線的に外傾して立ち上がる逆台形を呈する。規模は上端幅5.0m、下端幅2.45m、深さ118cmを測る。覆土は６層に分層され、レンズ状の自然堆積層である。先の周溝内埋葬施設の周辺に小型甕形土器、高坏形土器、壷形土器３個体が遺棄されていた。まず、埋葬施設の東側に接して第39図２の埦形土器と第40図１の壷形土器が溝底から44cm浮いた覆土中から出土した。埦形土器はほぼ完存品である。また、これらの南東側に接して第40図２の壷形土器が底溝上から出土した。そして、南側から第40図３の壷形土器がやはり溝底に接して出土している。さらに、西端から第39図３の高坏形土器が溝底から８cm浮いて出土している。

西溝　ほぼ中央に中世の溝跡SD06が斜めに横切っている。北溝および南溝より丸みを帯びて移行する。外周は外側へわずかに膨らみ、内周はほぼ直線的に延びている。溝底は全体的にほぼ平坦であるが、わずかに中央部が深くなっている。また、断面形は底面がほぼ平坦で、壁面は直線的に外傾して立ち上がる逆台形を呈する。規模は上端幅4.10m、下端幅2.50m、深さ47cmを測る。覆土は６層に分層され、レンズ状の自然堆積層である。なお、南側溝底から直口の壷形土器２個体と甕形土器が並列して出土していた。ほぼ溝底に接するよう検出されたもので、北から第39図６の直口壷、同図７の甕、同図５の直口壷の順で一列に並んでおり、しかも出土レベルも±３cmと比高差は殆んどなく、明らかに同時遺棄されたものであろう。

北溝　ほぼ中央を中世の溝跡SD06が斜めに横切っている。西溝および東溝より丸みを帯びて移行する。外周は外側へわずかに脹らみ、内周はほぼ直線的に延びている。溝底は中央部が深く西角と東角に向かって深度を浅くする。また、断面形は底面がほぼ平坦で、壁面は直線的に外傾して立ち上がる逆台形を呈する。規模は上端幅5.12m、下端幅2.25m、深さ60cmを測る。覆土は４層に分層され、レンズ状の自然堆積層である。なお、内周西角付近に周溝と並行する長方形の１号埋葬施設が構築されている。

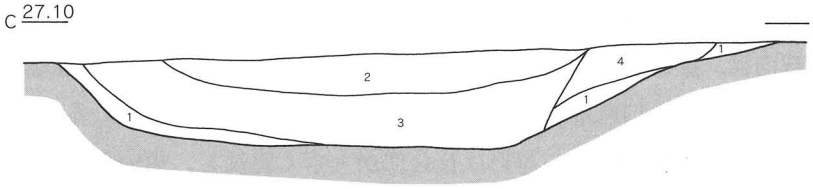
東溝　中央南側の一部が未調査区域に広がっている。北溝および南溝より丸みを帯びて移行する。溝底は南寄りがわずかに深くなっている。また、断面形は底面がほぼ平坦で、壁面は直線的に外傾して立ち上がる逆台形を呈する。規模は上端幅4.05m、下端幅2.10m、深さ57cmを測る。覆土は５層に分層され、レンズ状の自然堆積層である。なお、南側覆土中から第39図４の小型の鉢形土器が出土している。溝底から44cm浮いて検出された。

１号埋葬施設　北溝の西端、内周に沿って長楕円形土坑が検出された。遺物の出土はないものの、規模および形状から判断して周溝内埋葬施設と考えた。東西軸が主軸で、主軸方向はＮ－72°－Ｗである。東西長は上場208cm、下場194cm、南北長は上場71cm、下場47cm、深さ35cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁面は緩く外傾して立ち上がる。覆土は２層に分層され、人為的堆積と推定される。付帯施設はなかった。

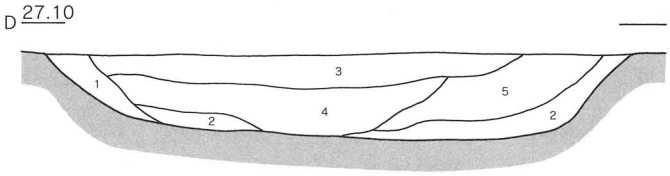
２号埋葬施設　南溝西側の内周寄り、底面から長方形土坑が検出された。周溝上部からみると深さのある深い土坑といえる。また、土坑周囲には壷形土器３個体をはじめ、小型甕形土器と高坏形土器がまとまって出土している。規模および形状から判断して周溝内埋葬施設とし、２号埋葬施設と命名した。東西軸が主軸で、主軸方向はＮ－50°－Ｗである。東西長は上場217cm、下場197cm、南北長は上場57cm、下場40cm、深さ73.4cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁面の下位部においては垂直気味に立ち上がり、上位部では外傾して開く。覆土は人為的堆積と推定される。やはり付帯施設は確認できなかった。

遺物　第39図２の埦形土器は南溝第２埋葬施設の東端覆土中から出土したもので、同じレベルで第40図１の壷形土器が検出されている。まず埦形土器はほぼ完存しており、胴部中位にわずかな欠損部が認められるが、打欠行為によるものではないと判断した。丸底の底部から胴部は上下に押し潰したような球形を呈し、口縁部は外傾して立ち上がる。口縁部外面はヨコナデ、胴部から底部にかけてヘラナデに近いヘラミガキ。内面は丁寧なヘラミガキ。第39図３の高坏形土器は第２埋葬施設の西端で出土したもので、坏部の下半部に穿孔行為が見られ、また脚部裾にも破砕行為が認められる。まず、坏部下半部では４cm×4.5cmのほぼ円形に外側から穿孔されている。また、脚部裾の約２／３周縁を打欠いている。器形は坏部底部から体部が開き、口縁部との境に弱い稜を持ち、口縁部は外傾気味に立ち上がる。脚部は坏部に比して小さくハの字状に開く。透孔は脚部上位に３個穿ってある。外面と坏部内面はヘラミガキ。脚内面はシボリ目を残し、ヘラナデされている。外面および坏内面は赤彩が施されている。同図４は小型の鉢形土器である。東溝の南側覆土中から出土し、口縁部の１／７が欠損している。器形は、平底の底部からほぼ直線的に外傾して立ち上がる。外面ヘラナデの後、ヨコナデ。内面ヨコナデ。下半部はヘラナデされている。内外面とも部分的に赤彩が認められ、底部を除く内外面全体に赤彩が施されていたと考えられる。同図５～７は西溝南端の溝底出検出されたもので、５・６は直口の壷形土器である。まず、５は底部を剥ぎ取るように欠落していた。口頸部の立ち上がりが高く、ほぼ直線的に外傾している。胴部は上下を押し潰したような扁球形を呈し、最大径が中位より高い位置にある。外面は縦位のハケ目調整の後、丁寧なヘラミガキが施され、ハケ目痕を消失させているが、薄く部分的に残存している。部分的に赤彩が残されていることから、本来は外面全面と口頸部内面にも施されていたものと推定される。同図６も直口の壷形土器で、ほぼ完存品である。５よりもひと回り大きい。口縁部の一部のみが欠損し、他部位は完存している。器形は、口頸部の立ち上がりが高く、ほぼ直線的に外傾して口縁端部に至る。胴部は上下を押し潰したような扁球形を呈し、最大径が中位にあり、下半部はつぼまるように底部へ移行する。底部は小さく上げ底である。外面および内面口頸部は丁寧なヘラミガキ、内面体部ヘラナデ。外面全面と口頸部内面に赤彩が施されている。同図７は甕形土器である。口縁部の一部と底部１／４から基部にかけて欠損部分がみられるが、口縁端部の残存が一部あることから、破砕行為は底部穿孔のみであろう。４cm×４cmの菱形状の穿孔である。器形は最大径が胴中位よりも高い位置にあり、胴下半部が急につぼまる球形を呈する。底部は平底である。口縁部はくの字状に外反する。外面全面ハケ目調整。口縁部内面ハケ目。体部は横位のヘラナデがなされる。内面の胴部中央付近に赤色顔料の付着した痕跡が残る。この痕跡は赤彩というより、同顔料の貯蔵時に付いたものか。第40図１の壷形土器は第２埋葬施設の南東端で出土した。底部と周縁基部が欠損し、さらに胴部上半部にも打欠行為が認められる。底部は12cm×14cmの不正形と比較的大きく破砕され、底部は完全に欠損していた。また、胴上半部は５cm×９cmの楕円形状に穿孔されている。器形は複合口縁で、複合帯は2.0cm前後、口唇部は角張り、頸部は短い。胴部最大径は下位に位置する。上下から押し潰したような扁球形を呈し、下半部はつぼまり底部に移行する。外面複合帯はヨコナデ、頸部は縦位のハケ目。胴部はハケ目調整の後、比較的粗いヘラナデ。口縁部内面、頸部ともにヘラ

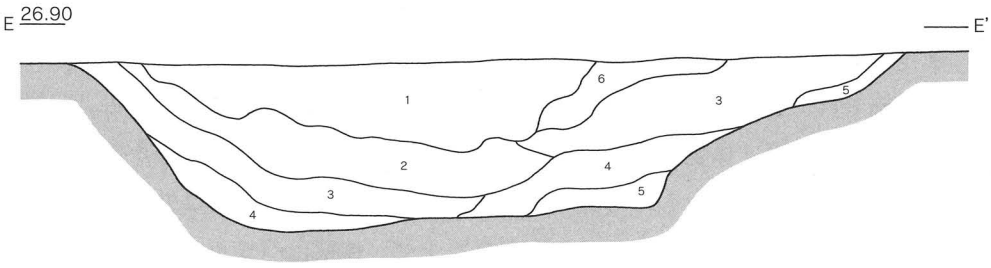
第36図　16号墳実測図（1）



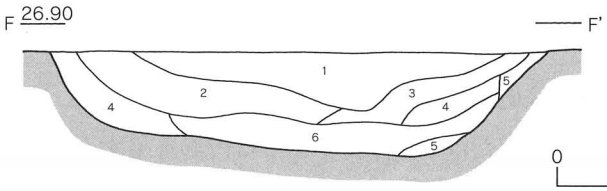
1　褐色土　10YR4/6
　多量のローム粒、ロームブロックを含む
2　黒褐色土　10YR2/3　微量のローム粒を含む
3　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒を含む
4　暗褐色土　10YR3/3
　少量のローム粒、ロームブロックを含む



1　黄褐色土　10YR5/6　多量のローム粒、ロームブロックを含む
2　褐色土　10YR4/4　多量のローム粒を含む
3　黒褐色土　10YR2/2　微量のローム粒を含む
4　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒を含む
5　暗褐色土　10YR3/3　少量のローム粒を含む



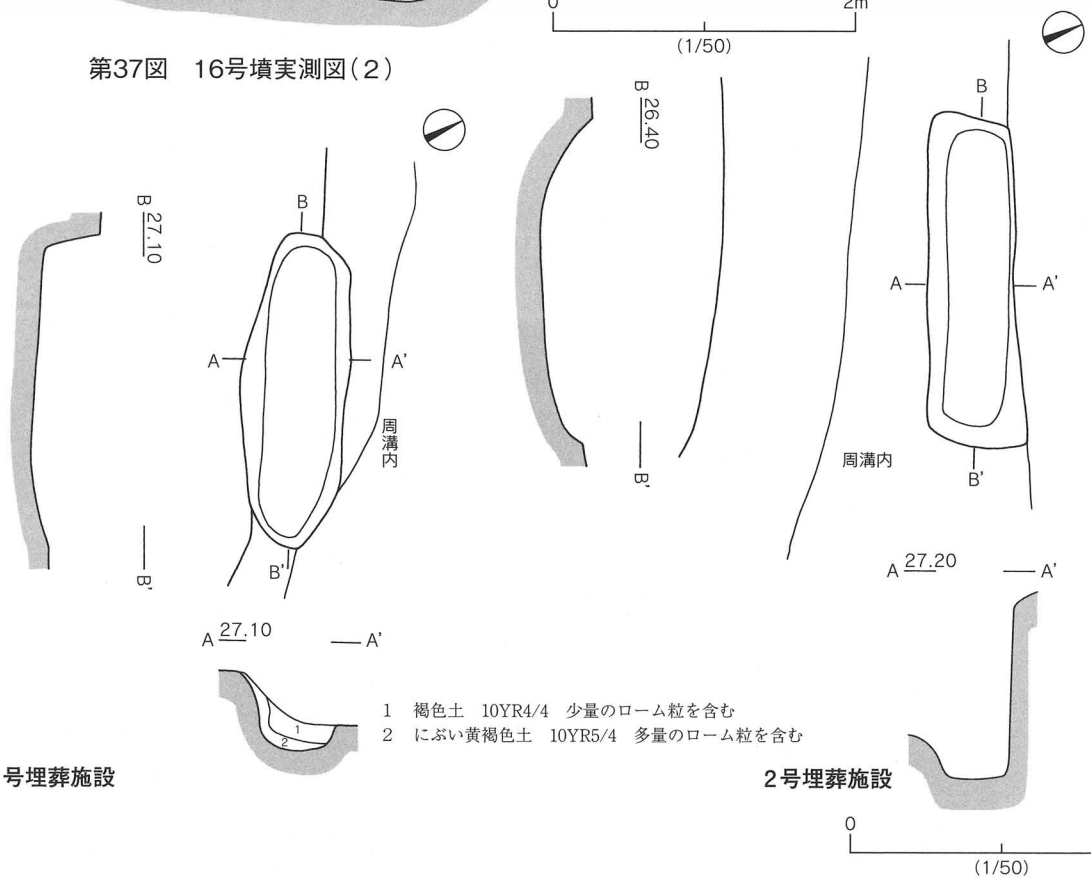
1　黒褐色土　10YR2/2　少量のローム粒を含む
2　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒を含む
3　暗褐色土　10YR3/3　少量のローム粒を含む
4　褐色土　10YR4/4　多量のローム粒を含む
5　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒を含む
6　黒褐色土　10YR2/3　少量のローム粒を含む



1　褐色土　10YR4/4　少量のローム粒を含む
2　暗褐色土　7.5YR3/3　微量のローム粒を含む
3　暗褐色土　10YR3/4　少量のローム粒を含む
4　褐色土　7.5YR4/4　微量のローム粒を含む
5　にぶい黄褐色土　10YR5/6　微量のローム粒を含む
6　褐色土　7.5YR4/3　微量のローム粒を含む

0　2m
(1/50)

第37図　16号墳実測図(2)



1　褐色土　10YR4/4　少量のローム粒を含む
2　にぶい黄褐色土　10YR5/4　多量のローム粒を含む

1号埋葬施設

2号埋葬施設

0　2m
(1/50)

第38図　16号墳1・2号埋葬施設実測図

ミガキ。体部はヘラナデ。外面と口縁部内面、頸部に赤彩が施されている。同図２も南溝第２埋葬施設南西脇で出土したもので、複合口縁の壷形土器である。口縁部の周縁を約１／６を残し打欠きされている。他部位の破砕行為はみられず、口縁周縁の打欠行為のみである。器形は複合部が大きく外反し、短い頸部は僅かに外傾する。胴部は上下を押し潰した扁球形で、底部は下方へ突出する。外面はハケ目調整のみ。内面は口縁部がヨコナデ。頸部ハケ目。体部はヘラナデ。胴部外面にわずかな赤彩が認められるが、本来全面に施されていたものかは不明である。同図３も西溝第２埋葬施設南西脇で出土したもので、やはり複合口縁の壷形土器である。口縁部の約１／４と胴下半部に２ヶ所の欠損部分が認められ、胴下半部の図示した６cm×８cmの楕円形状の欠損部と口縁部が破砕行為によるものと推定した。器形はやや大形の壷で、口径17.4cm、器高31.0cmを測る。器形は、口縁部が複合帯で2.0cm前後と狭く、頸部は比較的長い。胴部最大径は下位に位置する。上下から押し潰した扁球形を呈し、下半部はつぼまり底部に移行する。底面はわずかに上げ底気味である。外面は全面ハケ目調整が施され、胴部のみがヘラミガキによってハケ目痕を消失させている。口縁部内面はハケ目調整。体部はヘラナデ。同図４は甕形土器である。大きく破損しており、口縁部から胴部中位まで３～７cm角の11片の破片を図上復元実測したものである。ほぼ球形の胴部から口縁部は外反して立ち上がる。外面口縁部ヨコナデ。胴部縦位のハケ目調整。口縁部内面ヨコナデ。体部はヘラナデ。口辺部に黒色のスス状の付着が見られる。

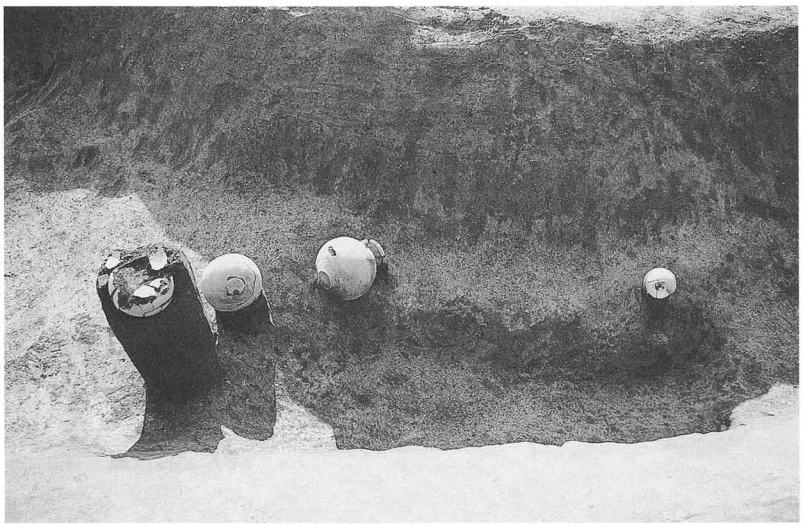
所見　本古墳は出土遺物や形態的特徴などから、古墳時代前期（４世紀代）の方墳と考えられる。

１７号墳（ＴＭ１７）（第30・32図）

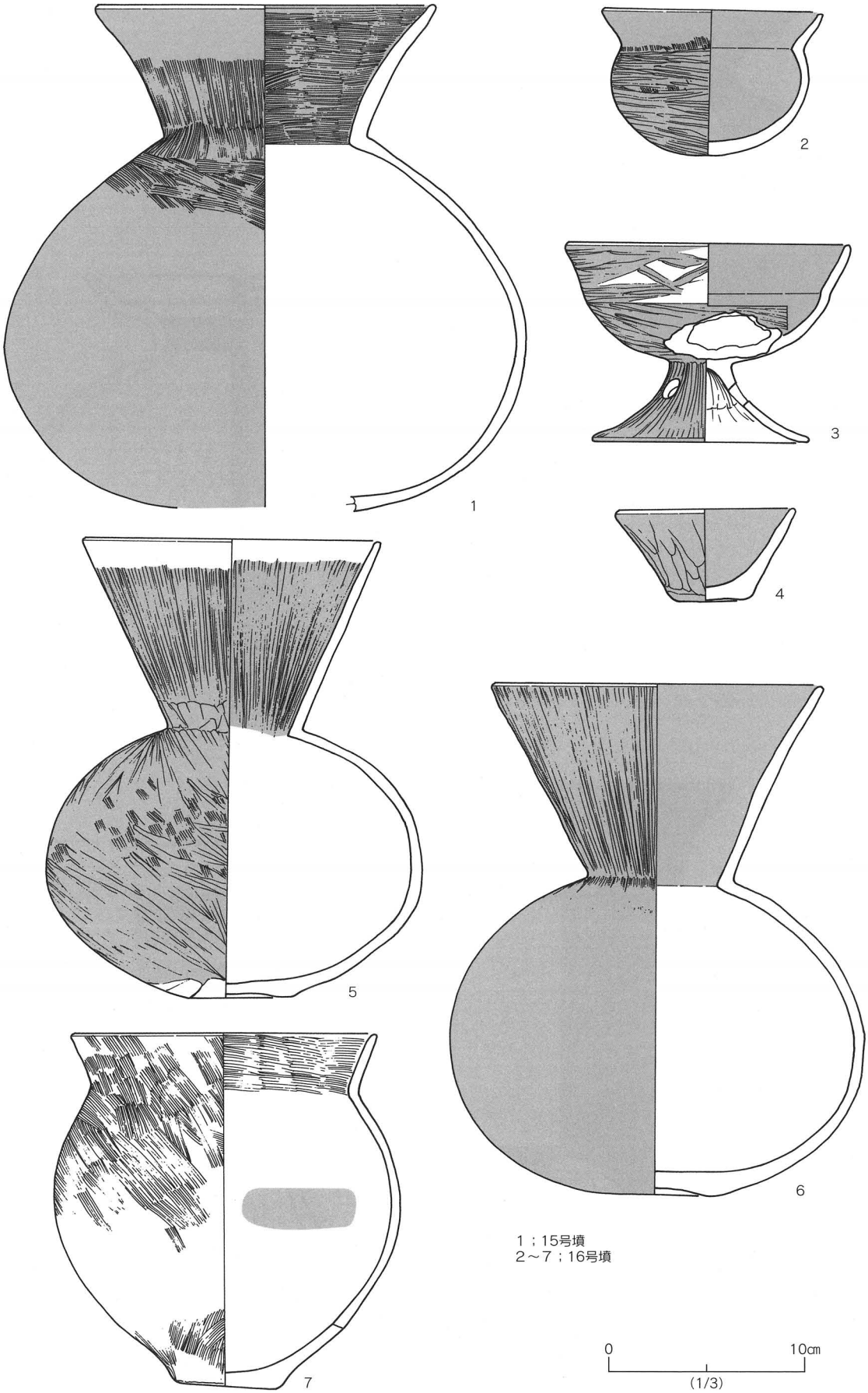
遺構　調査区北東側のＵ―40・41区に位置する。西側で14号墳と重複し、本墳が古期である。なお、東側の大半が未調査区域に広がっている。検出部は周溝のほんの一部だけである。平面形は円形を呈するものと推定される。規模は、南北長（3.70）m、同東西長（2.70）mを測る。周溝は大半が未調査区域に広がっており、全周するものかは不明である。溝底は丸みを帯び、断面形はＵ字状を呈する。覆土はレンズ状の自然堆積である。主体部は検出されていない。

遺物　遺物は出土していない。

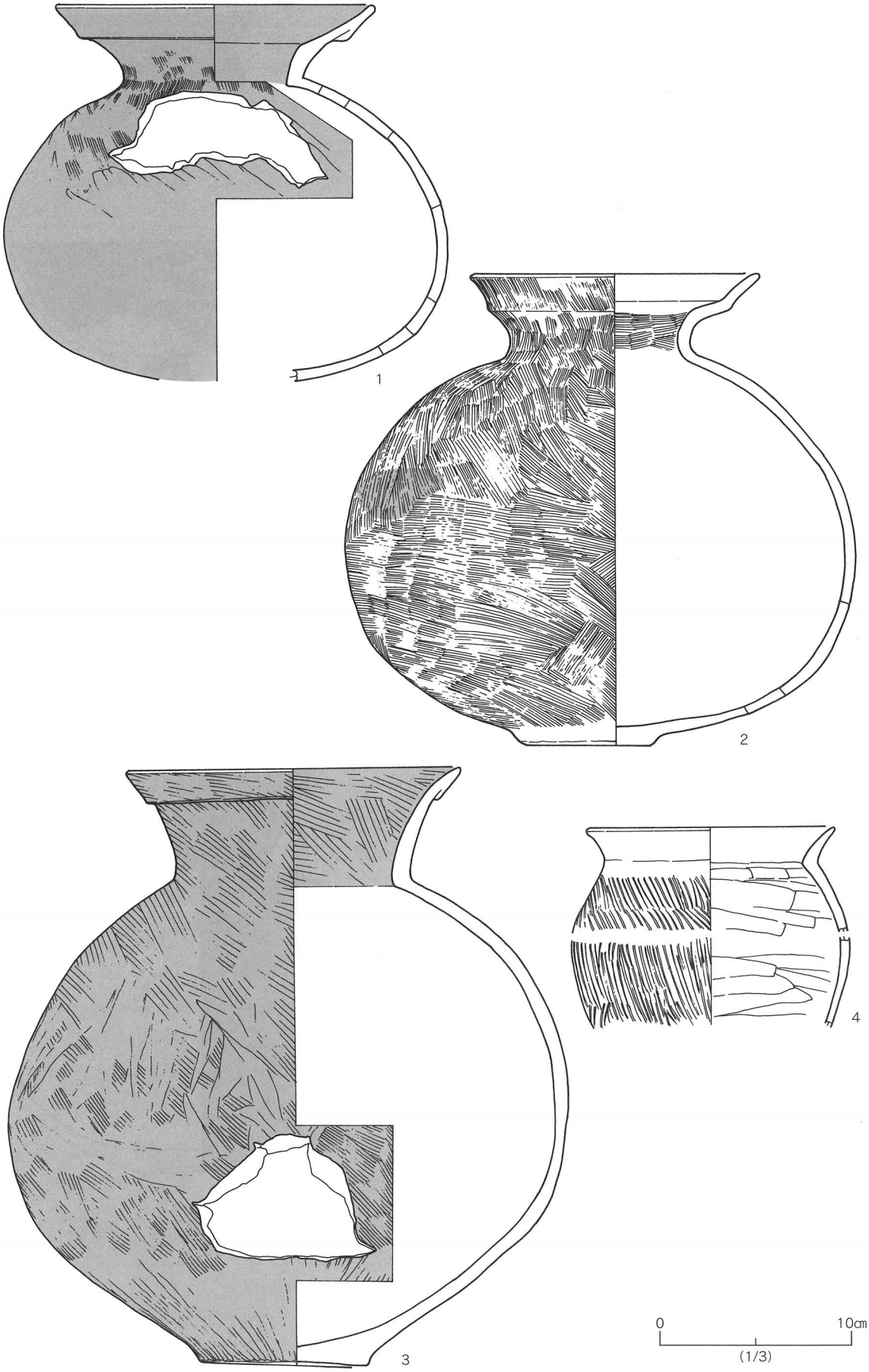
所見　本古墳は形態的特徴や重複関係から、古墳時代前期（４世紀代）以降で後期（６世紀～７世紀代）より古いものと考えられ、円形を意識した古墳と考えられる。



16号墳遺物出土状況



第39図　15・16(1)号墳出土遺物



第40図　16号墳出土遺物（2）

１８号墳（ＴＭ１８）（第41～43・58図　PL.12・23）

遺構　調査区北西端のＡ－39、Ｂ－36・37・38・39、Ｃ－36・37・38・39・40、Ｄ－36・37・38・39、Ｅ－37・38区に位置する。西角が未調査区域に広がり、西側には中世の溝跡SD06が南北に走り、北側でも溝跡SD07が東西に走っている。したがって、東溝を除く北・西・南溝の一部が切られている。なお、東溝は13号墳の西溝と並走する。周溝は南西角が不明であるが、全周するものと推定される。また平面形は南北に長い長方形を呈する。規模は内周南北長10.35m、同東西長8.97m、外周南北長13.82m、同東西長12.81mを測る。主軸方向はＮ－45°－Ｅである。なお、北溝内に周溝内埋葬施設が１基確認されているが、主体部は確認できなかった。

西溝　南側約１／３が未調査区域に延びている。また、北側で中世の溝跡SD06が南北に走っている。形状は北溝より丸みを帯びて移行し、外周は外側に膨らみ、内周はほぼ直線的に掘削されている。断面形は溝底がやや丸みをもつものの、壁面は直線的に外傾し逆台形を呈する。規模は上端幅1.82m、下端幅1.27m、深さ31cmを測る。覆土はレンズ状の自然堆積層である。なお、北寄り溝底から第58図１の土師器の小型甕形土器と同図３壷形土器が接近して出土している。

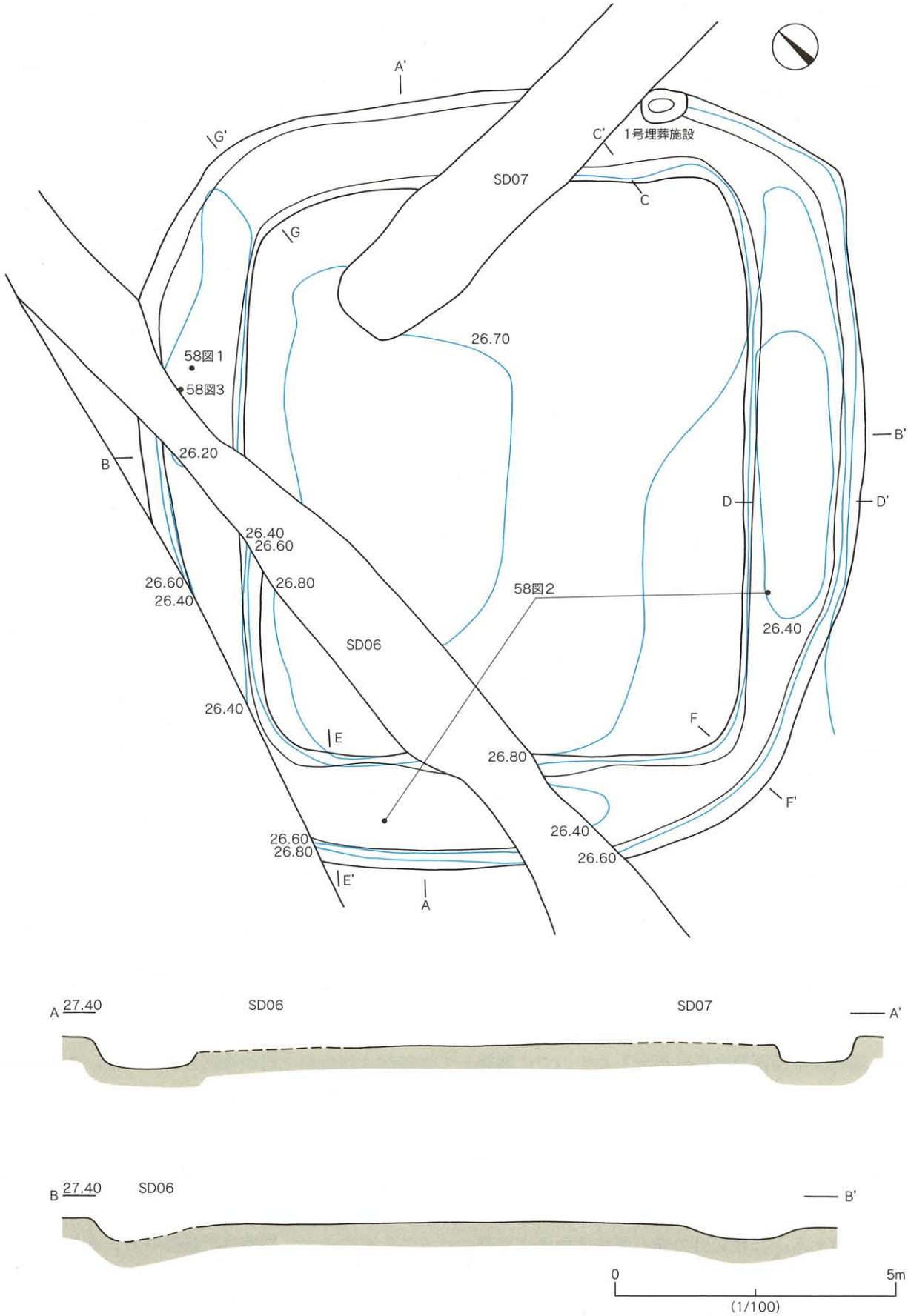
北溝　ほぼ中央を中世の溝跡SD07によって切られている。西溝および東溝から丸みを帯びて移行する。外周と内周はほぼ並行して延びている。溝底は平坦で、断面形は逆台形を呈し、規模は中央付近の上端幅1.50m、下端幅1.12m、深さ31.0cmを測る。覆土はレンズ状の自然堆積層である。また北東側、外周に沿って周溝内に１号埋葬施設が設けられている。

東溝　北溝および南溝から丸みを帯びて移行する。外周は外側に脹らみ、内周はほぼ直線的に延びている。溝底はほぼ平坦で、断面形は逆台形を呈し、規模は中央付近の上端幅1.50m、下端幅1.12m、深さ31.0cmを測る。覆土は３層に分層され、レンズ状の自然堆積層である。なお、南寄り溝覆土から第58図２の甕形土器の胴部破片約１／５が出土している。この土器は南溝覆土から出土した破片と接合し、出土部位は全く同じである。

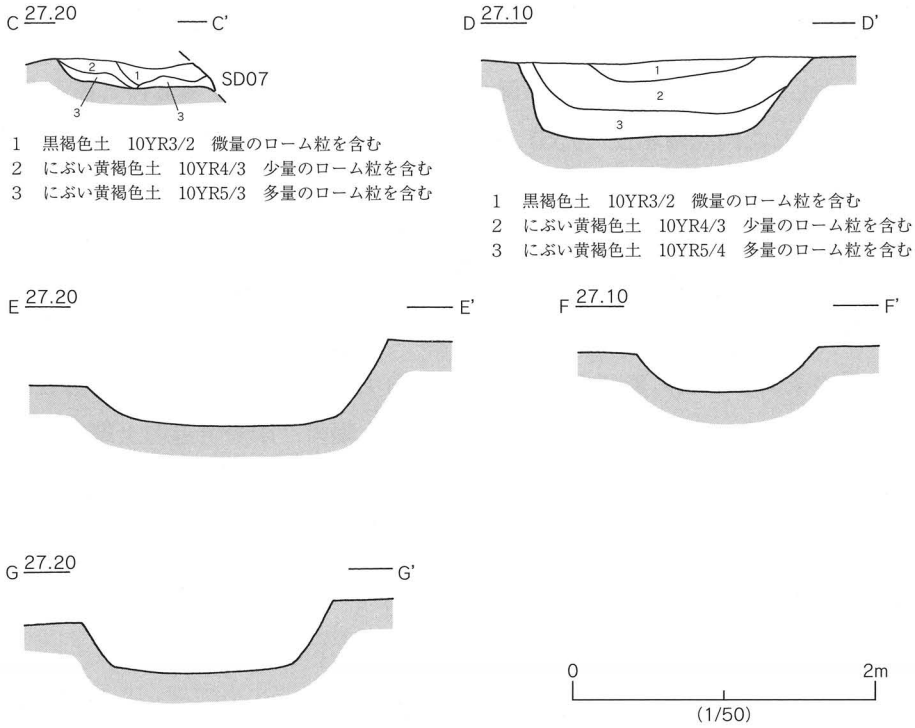
南溝　ほぼ中央に中世の溝跡SD06によって切られ、西側が未調査区域に延びている。東溝から丸みを帯びて移行する。外周はやや外側に脹らみ、内周はほぼ直線的に延びている。溝底はほぼ平坦で、断面形は逆台形を呈し、規模は中央付近の上端幅2.07m、下端幅1.30m、深さ50.5cmを測る。覆土はレンズ状の自然堆積層である。なお、西寄り溝底から第58図２の甕形土器の胴部破片約１／５が出土している。この土器は東溝底から出土した破片と接合し、出土部位は全く同じである。

１号埋葬施設　北溝内東寄りに楕円形土坑が検出された。遺物の出土はないものの、規模および形状から判断して周溝内埋葬施設と考えた。東西軸が主軸で、主軸方向はＮ－45°－Ｗである。東西長は上場99cm、下場56cm、南北長は上場41cm、下場27cm、深さ22.8cmを測る楕円形で、底面はほぼ平坦。壁面は緩く外傾する。

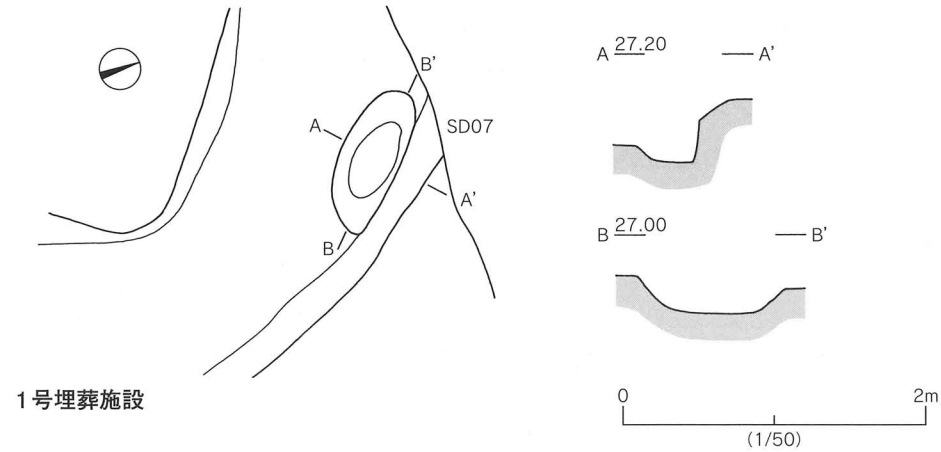
遺物　第58図１は西溝底から出土したもので、隣接して第58図３の壷形土器が検出されている。この甕形土器はほぼ完存しており、口辺部の一部が欠損している。器形は最大径を胴部中位に有し、上下に押し潰したような球形で、口縁部はくの字状に外反する。口縁部外面はハケ目調整の後、ヨコナデ。頸部はハケ目調整を残し、体部は横位のヘラケズリがされる。内面もハケ目調整とヨコナデが施される。第58図２も甕形土器の胴部破片。東溝と南溝で出土したものが接合したもので、２点ともほぼ同じ大きさの部位で全体の１／５程の破片である。これ以外の同一個体は他地点で見つけることができず、周溝外で破砕され、それぞれ東溝と南溝に廃棄されたものであろう。また、それぞれ溝底から約20cm浮いた覆土中から出土していることから、周溝の埋没過程で時期を同くして廃棄されたと考えられる。器形は胴長の胴部から口縁部は垂直気味に立ち上がる。３は口縁部と胴部上半部の半分を欠損した壷形土器で、明らかな破砕行為が認められる。同図１の



第41図　18号墳実測図(1)



第42図　18号墳実測図（2）



第43図　18号墳１号埋葬施設実測図

甕形土器に接して溝底から出土している。最大径が胴部下位にあり、内湾気味に立ち上がる。外面に赤彩が施されている。

所見　本古墳は出土遺物や形態的特徴などから、古墳時代前期（４世紀代）の方墳と考えられる。

１９号墳（ＴＭ１９）（第44図　PL.12）

遺構　調査区東端のＹ－44・45・46・47、Ｚ－44・45・46・47、２Ａ－44・45・46区に位置する。南端で20号墳を切って構築している。また、北側および東側の半分以上が未調査区域に広がっており、西溝と南溝の一部のみ検出できた。さらに、南側には中世の溝跡SD06が東西方向に走っている。したがって周溝の全周は確認できない。しかし、平面形は南西角の状況から判断して方形を呈するものと推定される。全体の規模は不明であるが、調査された内周南北長（9.55）m、同東西長6.46m、外周南北長（13.32）m、同東西長（9.18）mを測る。主軸方向はＮ－２°－Ｅである。主体部は確認できなかった。

西溝　北側約半分が未調査区域に延びている。また、南溝より丸みを帯びて移行する。断面形は溝底がやや丸みをもつものの、壁面は直線的に外傾し逆台形を呈する。規模は上端幅2.72m、下端幅1.91m、深さ59.8cmを測る。覆土は５層に分層され、レンズ状の自然堆積層である。

南溝　東側半部以上が未調査区域に延びている。西溝から丸みを帯びて移行する。溝底はやや丸みを帯び、壁面は直線的に外傾して立ち上がり、断面逆台形を呈する。規模は中央付近の上端幅3.62m、下端幅2.40m、深さ58.5cmを測る。覆土は７層に分層され、レンズ状の自然堆積層である。

遺物　遺物は検出できなかった。

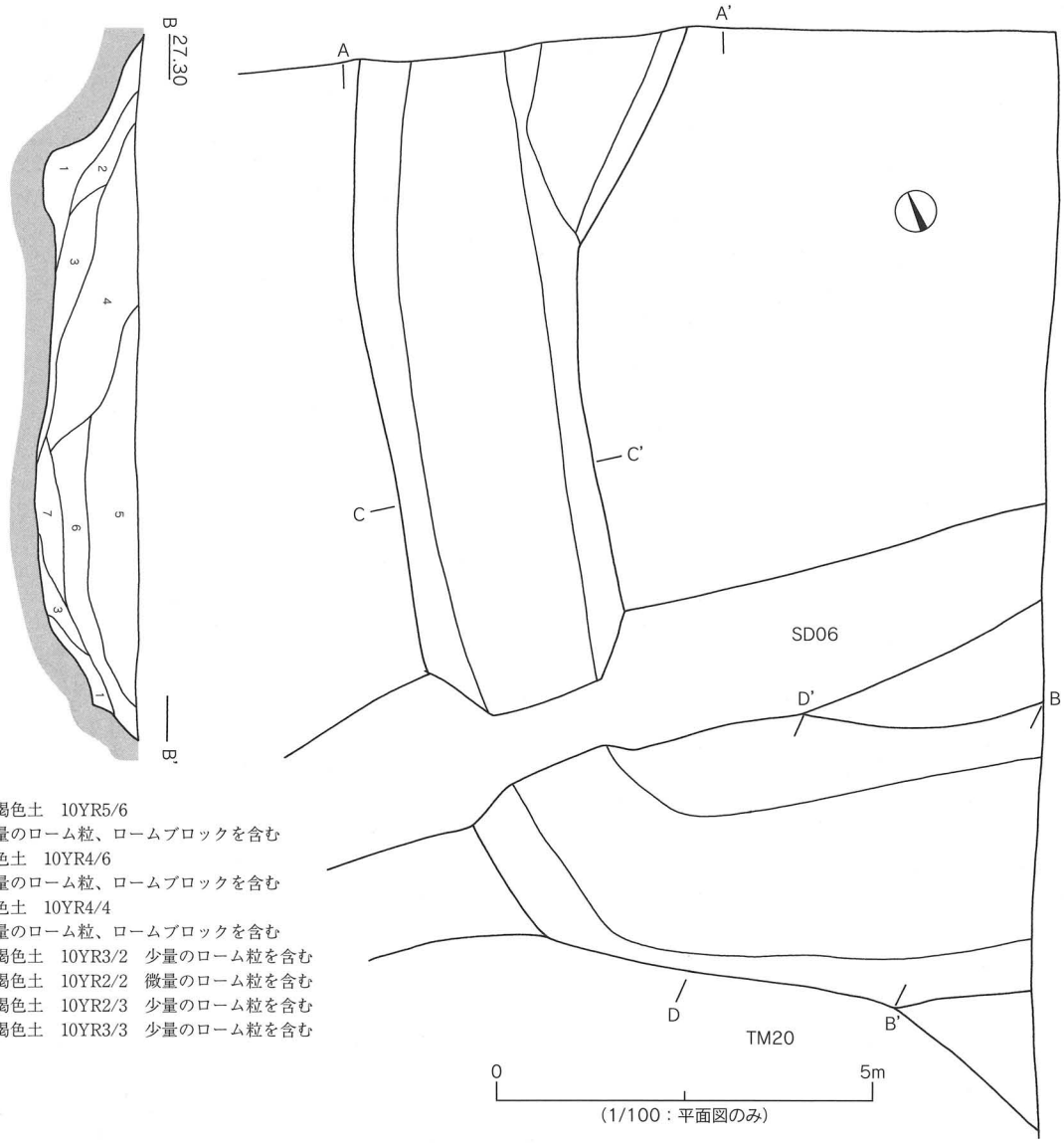
所見　本古墳は形態的特徴から古墳時代前期（４世紀代）以降の方墳と考えられる。

２０号墳（ＴＭ２０）（第45・46・58図　PL.13）

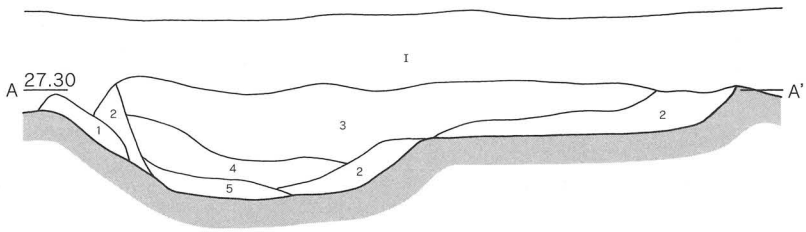
遺構　調査区南東端のＷ－47・48・49・50、Ｘ－47・48・49・50、Ｙ—47・48・49・50、Ｚ－47・48・49・50区位置する。東側および南側の一部が未調査区域に広がっている。平面形は円形を呈し、北側で19号墳に切られている。規模は、内周南北長9.68m、同東西長10.11m、外周南北長15.29m、同東西長15.89mを測る。周溝は全周し、上幅は2.08～3.16m、下幅0.64～1.22m、深さは22～84cmを測る。溝底は丸みを帯び、断面形はＵ字状を呈する。覆土はレンズ状の自然堆積である。主体部は確認されなかった。

遺物　溝覆土中から壷形土器の底部が出土している。第58図４は底部破片。底径4.0cmを測り、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデで調整されている。その他、小破片のため図示していないが、壷形土器の頸部破片が出土している。外面はハケ目調整の後ヘラナデされ、内面は横位のヘラナデ調整されている。内外面に赤彩が施されている。

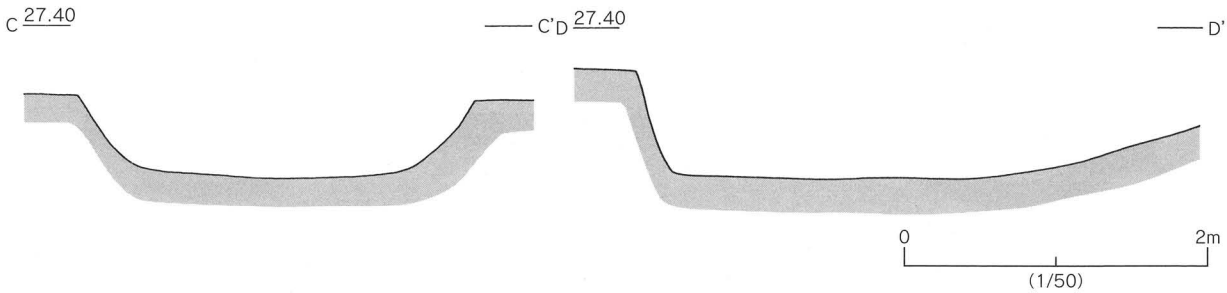
所見　本古墳は出土遺物から古墳時代前期（４世紀代）の円墳と考えられる。



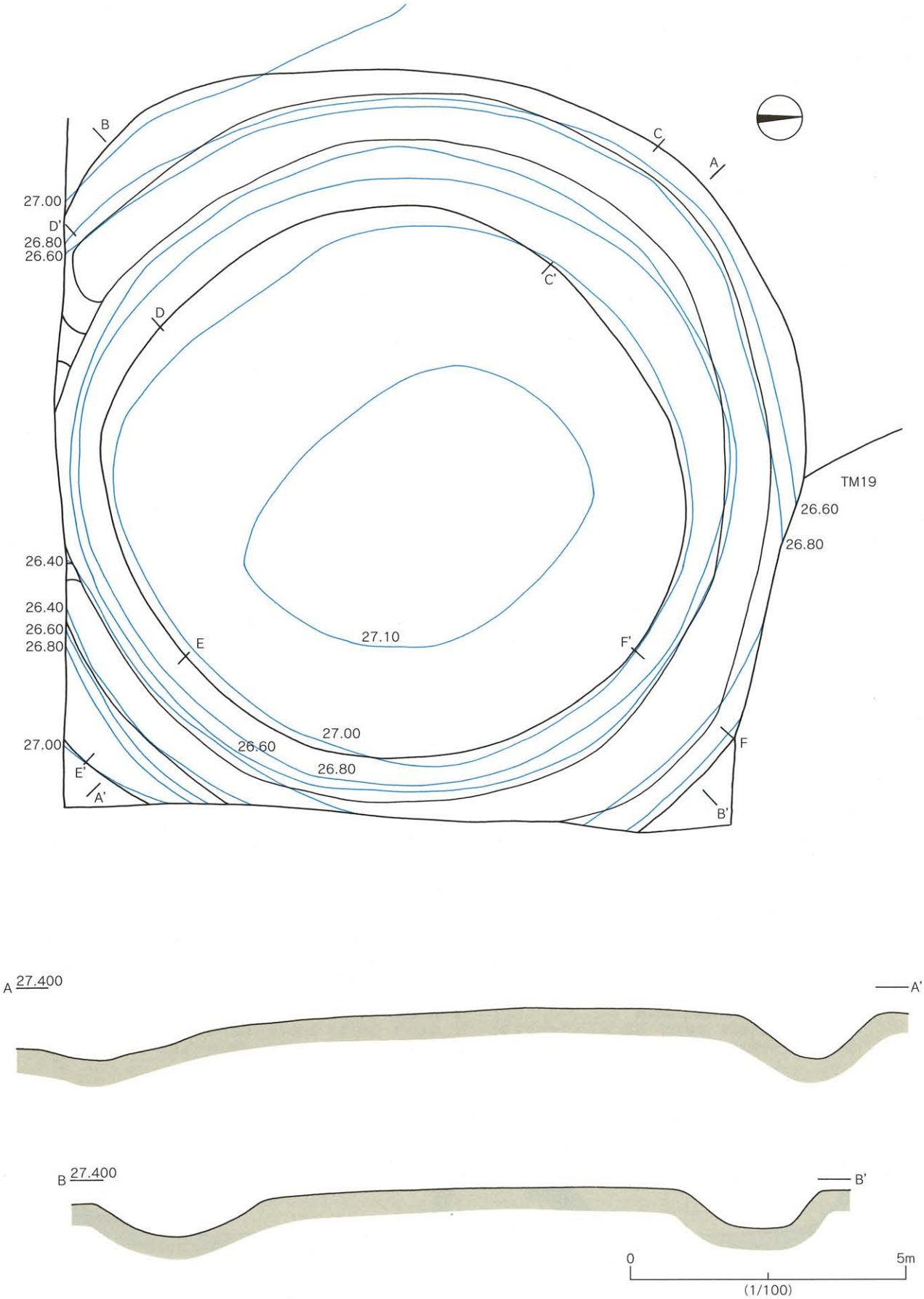
1　黄褐色土　10YR5/6
　多量のローム粒、ロームブロックを含む
2　褐色土　10YR4/6
　少量のローム粒、ロームブロックを含む
3　褐色土　10YR4/4
　少量のローム粒、ロームブロックを含む
4　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒を含む
5　黒褐色土　10YR2/2　微量のローム粒を含む
6　黒褐色土　10YR2/3　少量のローム粒を含む
7　暗褐色土　10YR3/3　少量のローム粒を含む



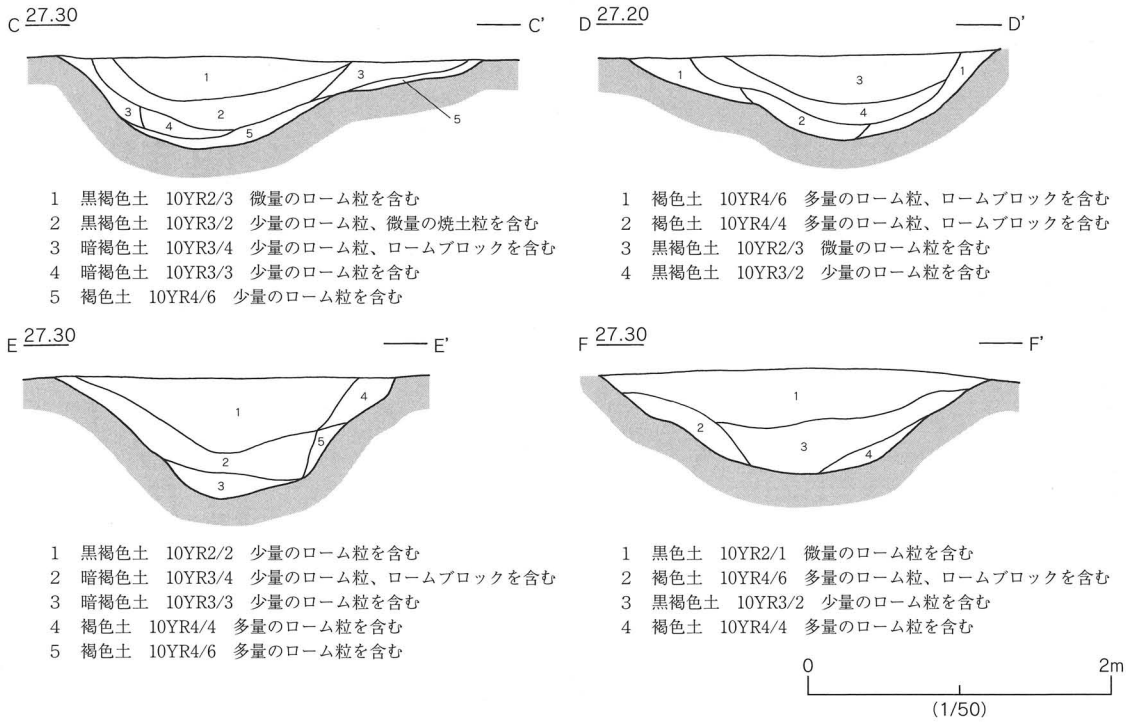
I　にぶい黄褐色土　10YR4/3　表土層
1　黄褐色土　10YR5/6　多量のローム粒、ロームブロックを含む
2　褐色土　10YR4/4　多量のローム粒、ロームブロックを含む
3　黒褐色土　10YR2/3　少量のローム粒を含む
4　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒、ロームブロックを含む
5　暗褐色土　10YR3/4　少量のローム粒、ロームブロックを含む



第44図　19号墳実測図



第45図　20号墳実測図（1）



第46図　20号墳実測図（2）

２１号墳（ＴＭ２１）（第47・48・58図　PL.13・24）

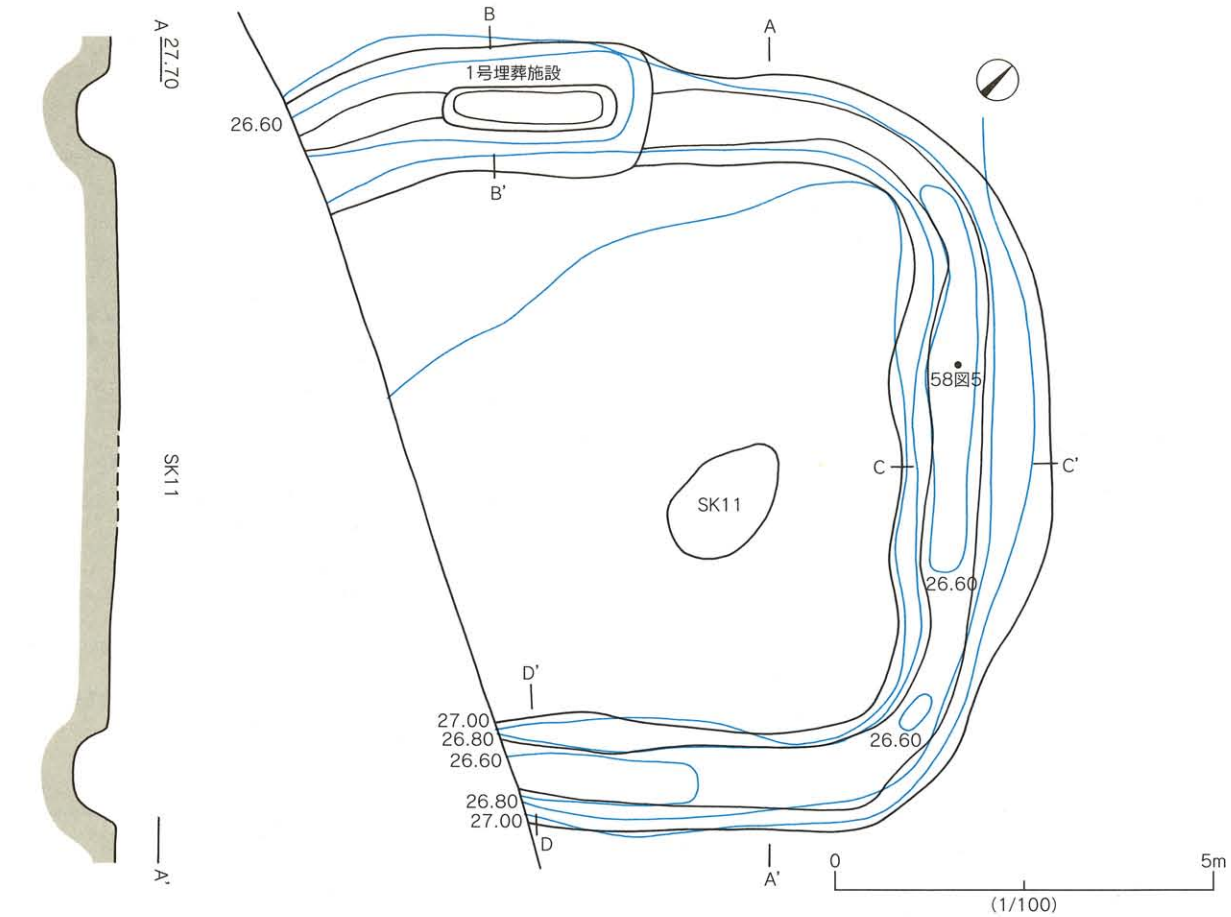
遺構　調査区南端のＰ－52・53、Ｑ－51・52・53・54、Ｒ－52・53・54区に位置する。西溝は22号墳の東溝と並走し、北溝は16号墳の南溝と並走する。また南溝は未調査区域に広がっているため検出できなかった。平面形はほぼ方形を呈するものと推定される。主軸方位を南北とすると、検出された規模は、内周南北長（7.53）m、同東西長7.40m、外周南北長（8.94）m、同東西長10.41mを測る。主軸方向はＮ－37°－Ｅである。主体部は検出されていない。

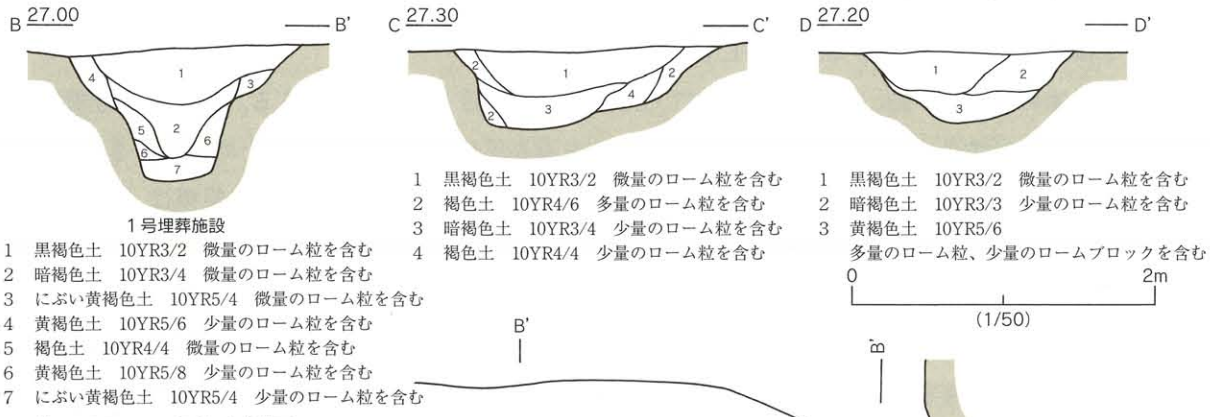
西溝　南側の一部が未調査区域に延びている。北溝より丸みを帯びて移行し、ほぼ中央に周溝内埋葬施設が構築されており、外周が埋葬施設部分において外側に突出している。内周はほぼ直線的に延びている。断面形は溝底がやや丸みをもつＵ字状を呈する。壁面は外周側が緩傾斜し、内周側は急傾して立ち上がる。規模は埋葬施設北側で上端幅1.19m、下端幅0.72m、深さ40cmを測る。覆土はレンズ状の自然堆積層である。

北溝　西溝および東溝より丸みを帯びて移行する。外周はほぼ中央部で外側に大きく張り出し、内周はほぼ直線的に延びている。断面形は溝底が丸みをもつＵ字状を呈し、壁面も緩傾斜して立ち上がる。規模は上端幅1.93m、下端幅0.65m、深さ45cmを測る。覆土は４層に分層され、下層はレンズ状の自然堆積層である。

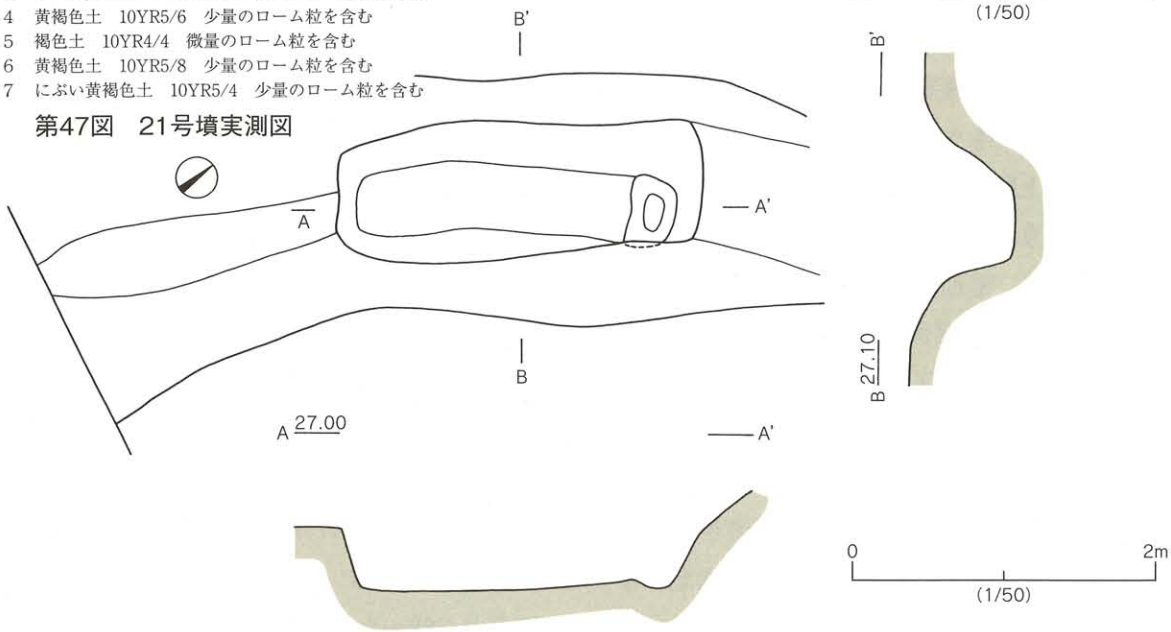
東溝　南側約半分が未調査区域に延びている。また、北溝より丸みを帯びて移行する。外周および内周は並走する。断面形は溝底が丸みをもつＵ字状を呈する。規模は上端幅1.55m、下端幅0.70m、深さ45cmを測る。覆土は３層に分層され、平行堆積による自然堆積層である。

１号埋葬施設　西溝中央に長方形土坑が検出された。遺物の出土はないものの、規模および形状から判断して周溝内埋葬施設と考えた。周溝と並行し、南北軸が主軸で、主軸方向はＮ－41°－Ｅである。南北長の上場293cm、下場180cm、東西長の上場88cm、下場43cm、深さ確認面から88cmを測る。底面はほぼ平坦で、北端





第47図 21号墳実測図



第48図 21号墳1号埋葬施設実測図

に29×42cm、深さ4.6cmの長方形ピットを付帯する。壁面はほぼ垂直気味に立ち上がる。覆土は７層に分層されているが、底面上に堆積しているにぶい黄褐色土は水平堆積を呈し、人為的堆積と推定される。

遺物　第58図５は北溝中央西寄りの覆土中から出土した坩形土器である。溝底面から22cm浮いて検出されたもので、口縁部の約１／４が欠損していた。口縁部打欠行為の結果と推定される。器形は口径9.5cm、器高6.5cmを測り、口縁部は内湾気味に外傾して立ち上がり、体部は算盤玉状を呈し、底部は凹状を呈する。そのほかに小破片（５cm以下）のため図示していないが、甕もしくは壷形土器の破片が出土している。

所見　本古墳は出土遺物や形態的特徴などから、古墳時代前期（４世紀代）の方墳と考えられる。

２２号墳（ＴＭ２２）（第49・50・58図　PL.14・24）

遺構　調査区南端のＫ－50・51・52、Ｌ－49・50・51・52、Ｍ－48・49・50・51・52・53、Ｎ－49・50・51・52・53、Ｏ－49・50・51・52・53、Ｐ－50区に位置する。東溝は21号墳の西溝と並走し、北溝の一部は16号墳の南溝と並走する。また、南溝の約１／３は未調査区域に広がっている。平面形はほぼ方形を呈するものと推定されるが、南溝中央に陸橋状の高位面がみられ、あたかも「前方後方墳」様の形状を呈する。検出できた規模は、東西方向に主軸を有し、内周東西長12.13m、同南北長10.23m、外周東西長17.64m、同南北長（16.32）mを測る。主軸方向はＮ－54°－Ｗである。主体部は検出されていない。

西溝　北溝および南溝より丸みを帯びて移行する。外周および内周とも並行して延びており、断面形は溝底がほぼ平坦で、壁面がやや丸みをもつ逆台形を呈する。規模は上端幅2.77m、下端幅2.12m、中央部の深さ30cmを測るが、南側にかけて徐々に深くなり、南西角では76cmを測り、その比高差は46cmである。覆土は３層に分層され、レンズ状の自然堆積層である。

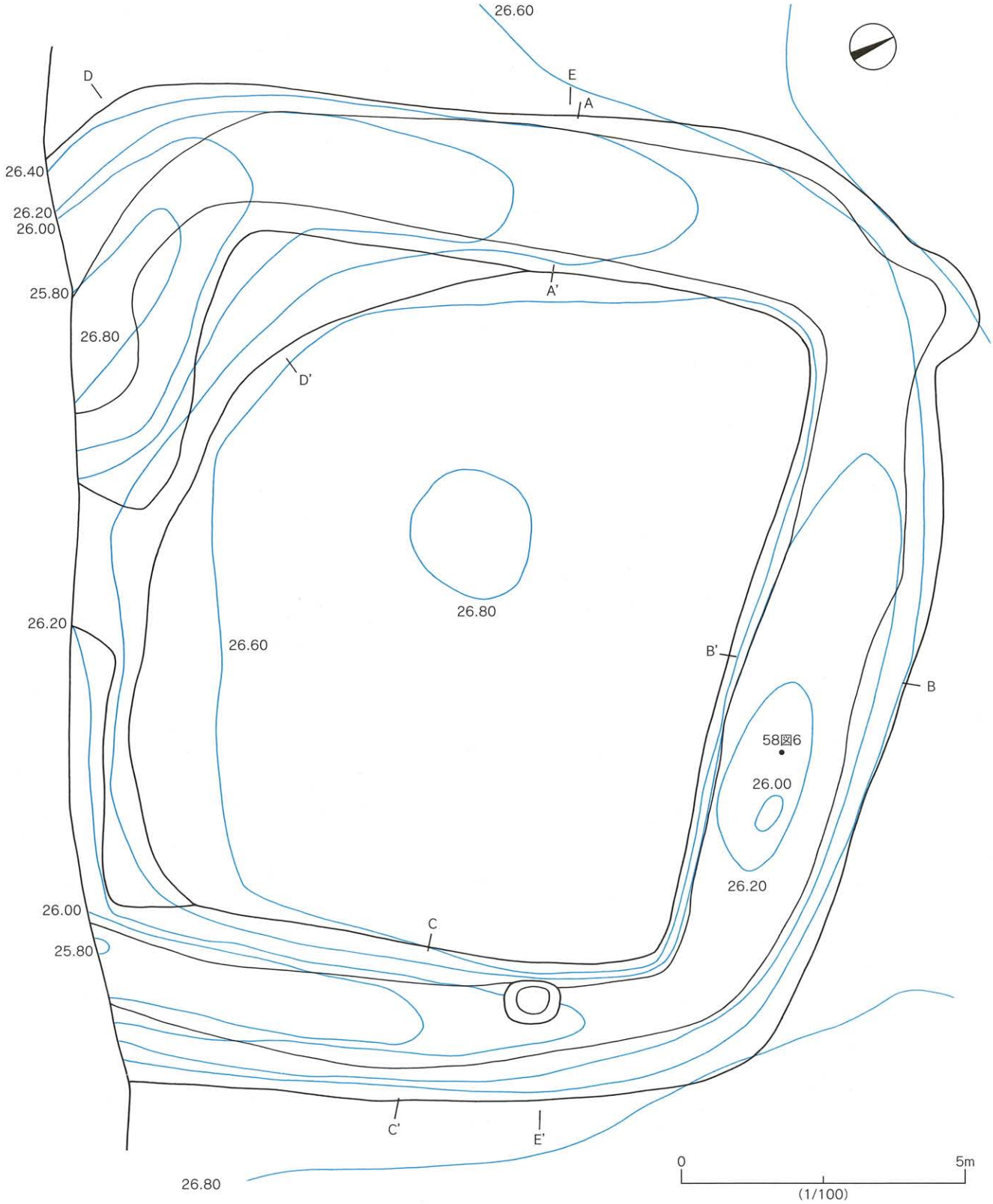
北溝　西溝および東溝より丸みを帯びて移行する。外周および内周とも並行して延びており、断面形は溝底がほぼ平坦で、壁面は直線的に外傾する逆台形を呈する。なお、北溝中央やや東寄りが深くなっている。規模は上端幅3.15m、下端幅2.00m、深さ70cmを測る。覆土は６層に分層され、レンズ状の自然堆積層である。なお、ほぼ中央覆土から口縁部と体部の半分を欠損している第58図６の壷形土器が出土している。溝底から15cm浮いて検出された。

東溝　南側の一部が未調査区域に延びている。また、北溝より丸みを帯びて移行する。外周および内周とも並行して延びており、断面形は溝底がほぼ平坦で、壁面は直線的に外傾する逆台形を呈する。規模は上端幅2.67m、下端幅1.53m、深さ67.5cmを測る。なお、北側に72×98cm、深さ12cmの楕円形ピットが穿ってある。覆土は７層に分層され、レンズ状の自然堆積層である。

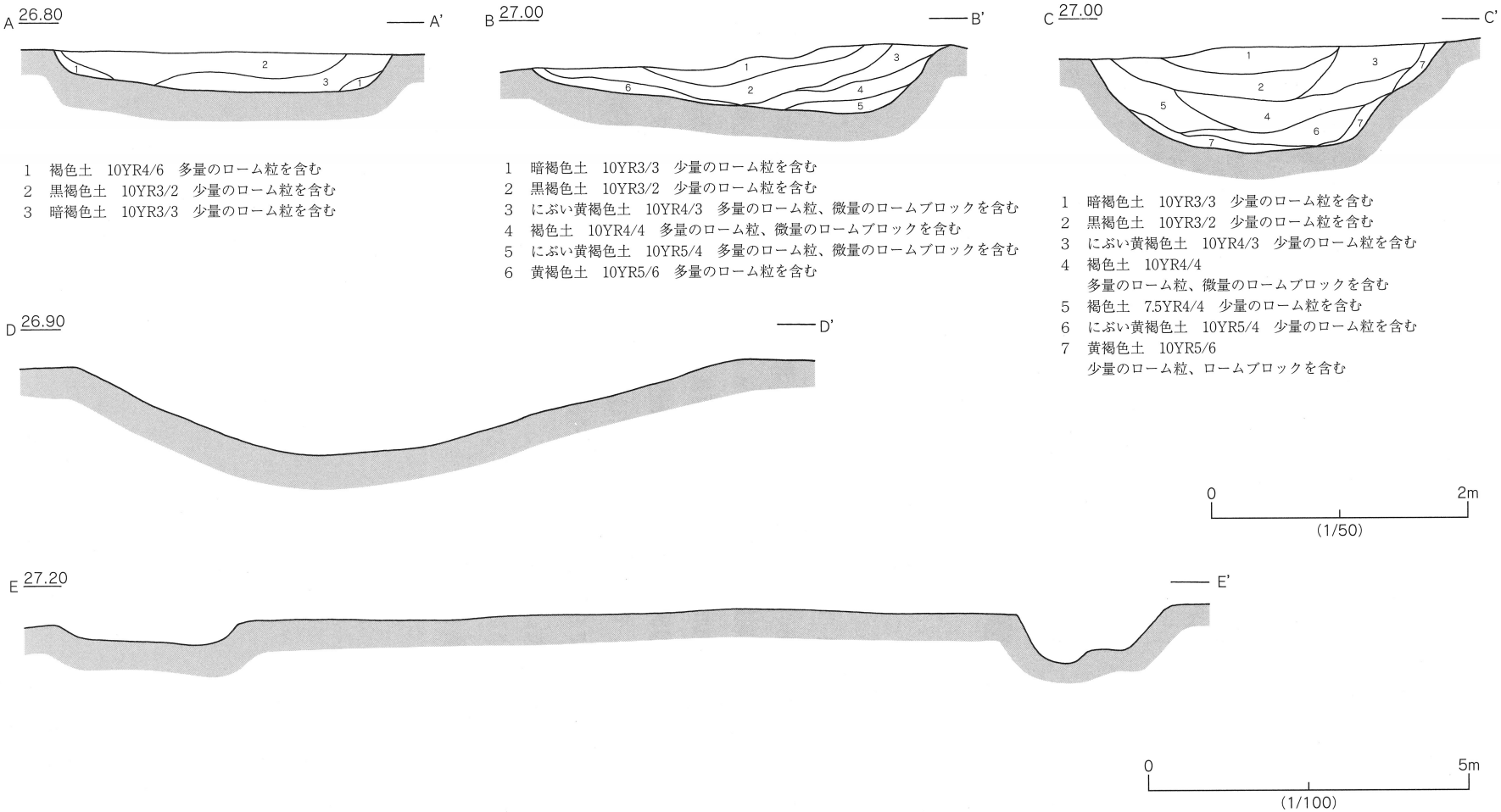
南溝　南側約半分が未調査区域に広がっている。また、西溝より丸みを帯びて移行する。なお、ほぼ中央部に陸橋状の高位面がみられ、西側と東側が途切れており、あたかも前方後方墳を彷彿させるが明確ではない。断面形は溝底がやや丸みをもつものの、壁面は直線的に外傾し逆台形を呈する。検出された規模は上端幅1.30m、下端幅1.16m、深さ97cmを測る。覆土はレンズ状の自然堆積層である。

遺物　第58図６は北溝ほぼ中央覆土から口縁部と体部の半分を欠損している壷形土器で、溝底から15cm浮いて出土している。残存している底部を含む体部の状態は大きな割れ目が観察できず、破砕されたものを遺棄したと推定される。器形は上下に押し潰した球形を呈し、底部はやや上げ底気味である。内外面とも丁寧なヘラミガキが施される。外面は大きく黒く焼けている。外面は赤彩されている。

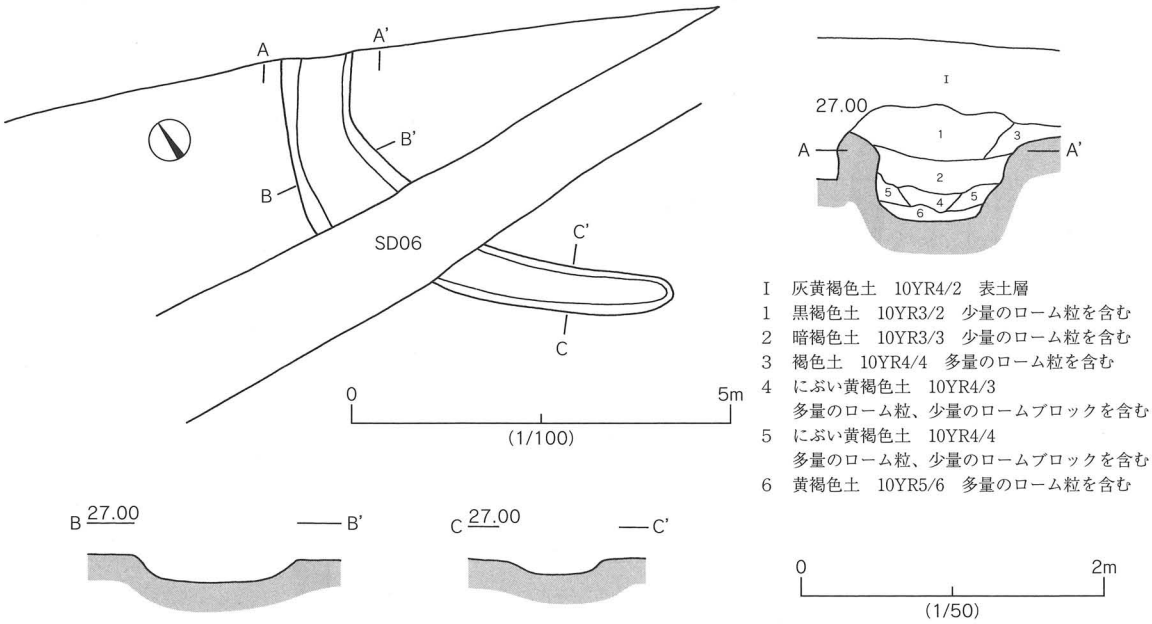
所見　本古墳は出土遺物や形態的特徴などから、古墳時代前期（４世紀代）の方墳と考えられる。



第49図　22号墳実測図（1）



第50図 22号墳実測図(2)



第51図　23号墳実測図

２３号墳（ＴＭ２３）（第51図　PL.14）

遺構　調査区南側のＭ－47・48、Ｎ－48区に位置する。北側の大半が未調査区域に広がっている。周溝のほとんどが削平されており、その形態は隅の丸い方形と言えるだろうか。検出された規模は、内周南北長（3.36）m、同東西長（4.43）m、外周南北長（3.85）m、同東西長（5.35）mを測る。主軸方向はＮ－58°－Ｗである。主体部は確認されなかった。周溝は約１／４周のみ確認されている。上端幅は0.50～1.33m、下端幅は0.28～0.95m、深さは1～15cmを測る。溝底は平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がり、断面形は箱状を呈する。覆土は未調査区境界の土層観察で６層に分層され、平行堆積する自然堆積層である。

遺物　遺物は検出できなかった。

所見　本古墳は削平によってその遺存状況が悪いが、そのあり方や形態的特徴などから、古墳時代前期（４世紀代）の方形を意識した古墳と考えられる。

２４号墳（ＴＭ２４）（第52・53・58図　PL.15・24）

遺構　調査区中央西寄りのＨ－44・45、Ｉ－42・43・44・45・46、Ｊ－42・43・44・45・46、Ｋ－42・43・44・45区に位置する。北溝は25号墳の南溝と重複し、25号墳によって切られている。また、南西角において弥生時代の住居跡SI02を切っている。なお、西溝は28号墳の東溝と並走し、南溝は30号墳の北溝と並走する。また、東溝は未調査区域に広がっている。確認された平面形はほぼ方形を呈するものと推定される。規模は、内周東西長（10.80）m、同南北長10.51m、外周東西長（15.70）m、同南北長15.32mを測る。主軸方向はＮ－39°－Ｗである。主体部は検出されていない。

西溝　北溝および南溝より丸みを帯びて移行する。外周は北側でやや外側に脹らみ、内周はほぼ直線的に延びている。断面形は溝底がほぼ平坦で、壁面は直線的に外傾する逆台形を呈する。規模は上端幅2.72m、下端幅1.78m、深さ80cmを測る。覆土は５層に分層され、レンズ状の自然堆積層である。なお、南側の西角付近の覆土中、第58図７の高坏形土器が溝底から13cm浮いて検出され、脚部裾の周縁をきれいに打欠きしている。

北溝　北側で25号墳と重複している。断面観察によると25号墳に切られている。したがって、本溝が古期となる。なお、東側約半分が未調査区域へ広がり、西溝より丸みを帯びて移行し、外周、内周ともに並行して延びている。断面形は溝底がやや丸みをもつものの、壁面は直線的に外傾する逆台形を呈する。規模は上端幅2.30m、下端幅0.90m、深さ70cmを測る。覆土は６層に分層され、レンズ状の自然堆積層である。

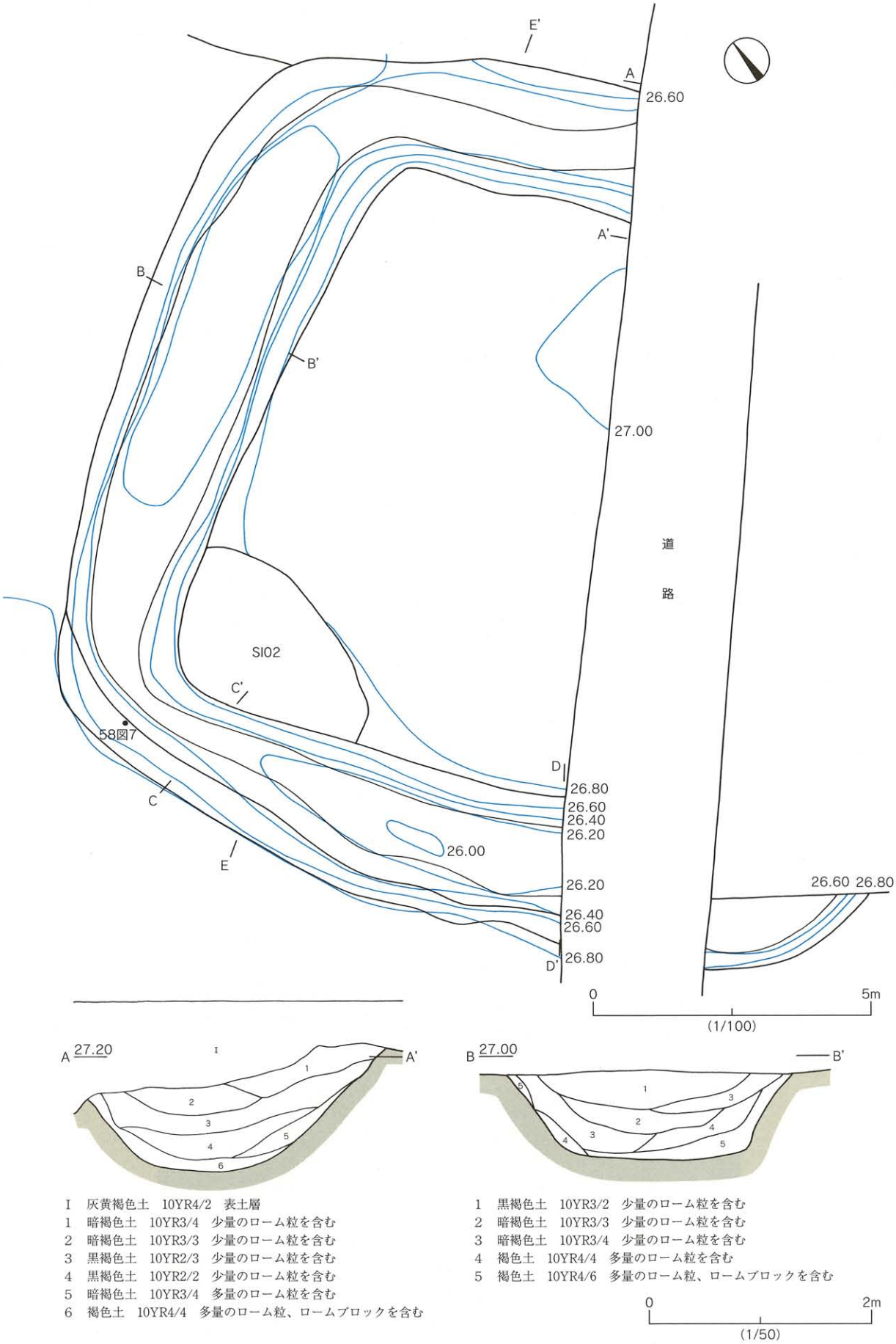
東溝　南東角のみ検出され、すべて未調査区域に延びているため、形状・規模は不明である。

南溝　東側寄りが未調査区域となっているが、南東角が検出された。なお、西溝より丸みを帯びて移行する。外周は外側に脹らみ、内周はほぼ直線的に延びている。断面形は溝底が丸みをもつＵ字状を呈し、壁面は外周が緩傾斜で、内周が急傾して立ち上がる。規模は上端幅2.41m、下端幅0.95m、深さ76cmを測る。覆土は９層に分層され、レンズ状の自然堆積層である。

遺物　第58図７の高坏形土器は西溝南側、ちょうど西角の覆土中から検出されたもので、脚部裾の周縁をきれいに打ち欠いていた。器形は坏部が内湾気味に立ち上がり、脚部はハの字状に開く。透孔が脚部上位部に３個、中位に３個の二段にわたり穿っている。外面は全体に丁寧なヘラミガキ、坏部内面はヨコナデとヘラナデ。脚部内面はヘラケズリによって仕上げられている。外面と坏部内面に赤彩が施されている。

所見　本古墳は出土遺物や形態的特徴などから、古墳時代前期（４世紀代）の方墳と考えられる。

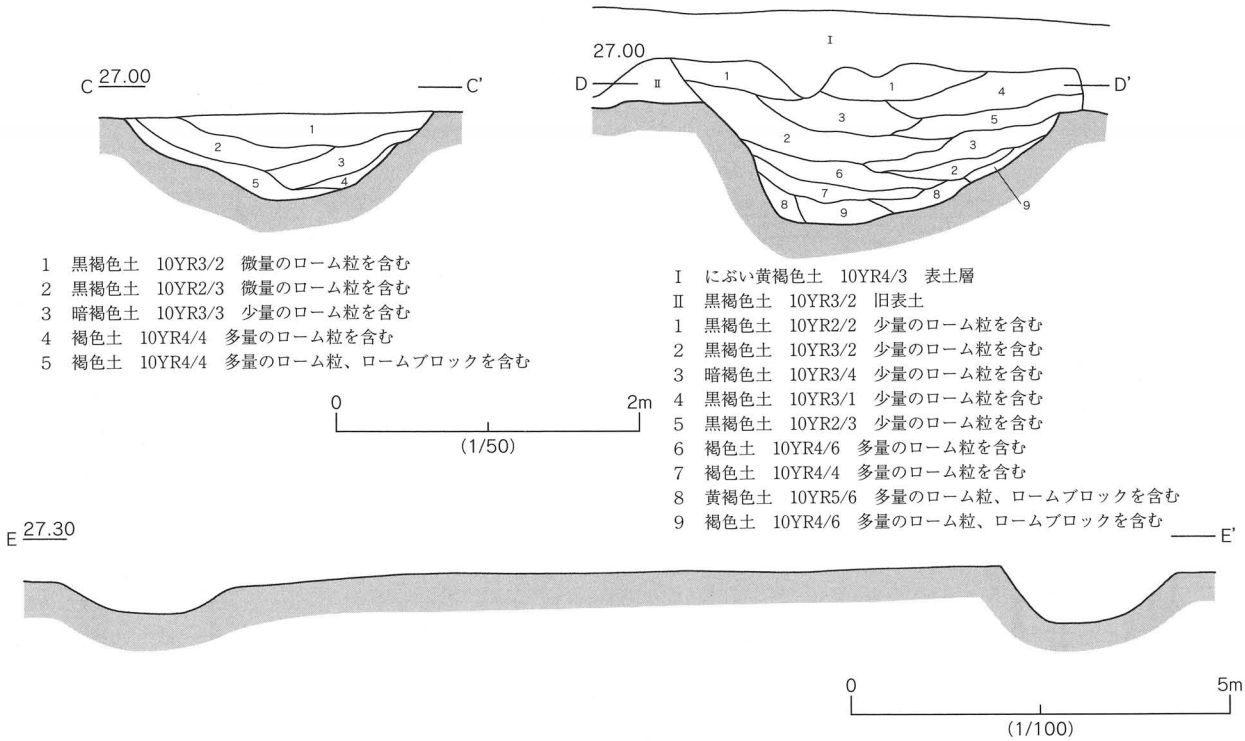
24号墳遺物出土状況



I　灰黄褐色土　10YR4/2　表土層
1　暗褐色土　10YR3/4　少量のローム粒を含む
2　暗褐色土　10YR3/3　少量のローム粒を含む
3　黒褐色土　10YR2/3　少量のローム粒を含む
4　黒褐色土　10YR2/2　少量のローム粒を含む
5　暗褐色土　10YR3/4　多量のローム粒を含む
6　褐色土　10YR4/4　多量のローム粒、ロームブロックを含む

1　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒を含む
2　暗褐色土　10YR3/3　少量のローム粒を含む
3　暗褐色土　10YR3/4　少量のローム粒を含む
4　褐色土　10YR4/4　多量のローム粒を含む
5　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒、ロームブロックを含む

第52図　24号墳実測図（1）



第53図　24号墳実測図（2）

２５号墳（ＴＭ２５）（第54・55図　PL.15）

遺構　調査区中央のＩ－39・40・41・42、Ｊ－38・39・40・41・42、Ｋ－38・39・40・41・42・43、Ｌ－39・40・41・42区に位置する。南溝は24号墳の北溝と重複しており、24号墳を切って構築しており、本墳が新期である。また、西溝は13号墳の東溝と並走し、東溝の大半は農道のため未調査となっている。東溝が不明とはいえ、平面形はほぼ方形を呈するものと推定される。規模は、内周東西長10.51m、同南北長9.07m、外周東西長（12.45）m、同南北長14.68mを測る。主軸方向はＮ－47°－Ｗである。主体部は検出されていない。

南溝　南角の一部は未調査区域にかかり、東側は24号墳と重複している。また西溝および東溝より丸みを帯びて移行する。外周と内周はほぼ並行し直線的に延びている。溝底は西側寄りがやや深く西角と南角に向かって深度を浅くする。また断面形は底面がほぼ平坦で、壁面は直線的に外傾して立ち上がるロート状を呈する。規模は上端幅3.12m、下端幅1.40m、深さ63cmを測る。覆土は６層に分層され、レンズ状の自然堆積層である。

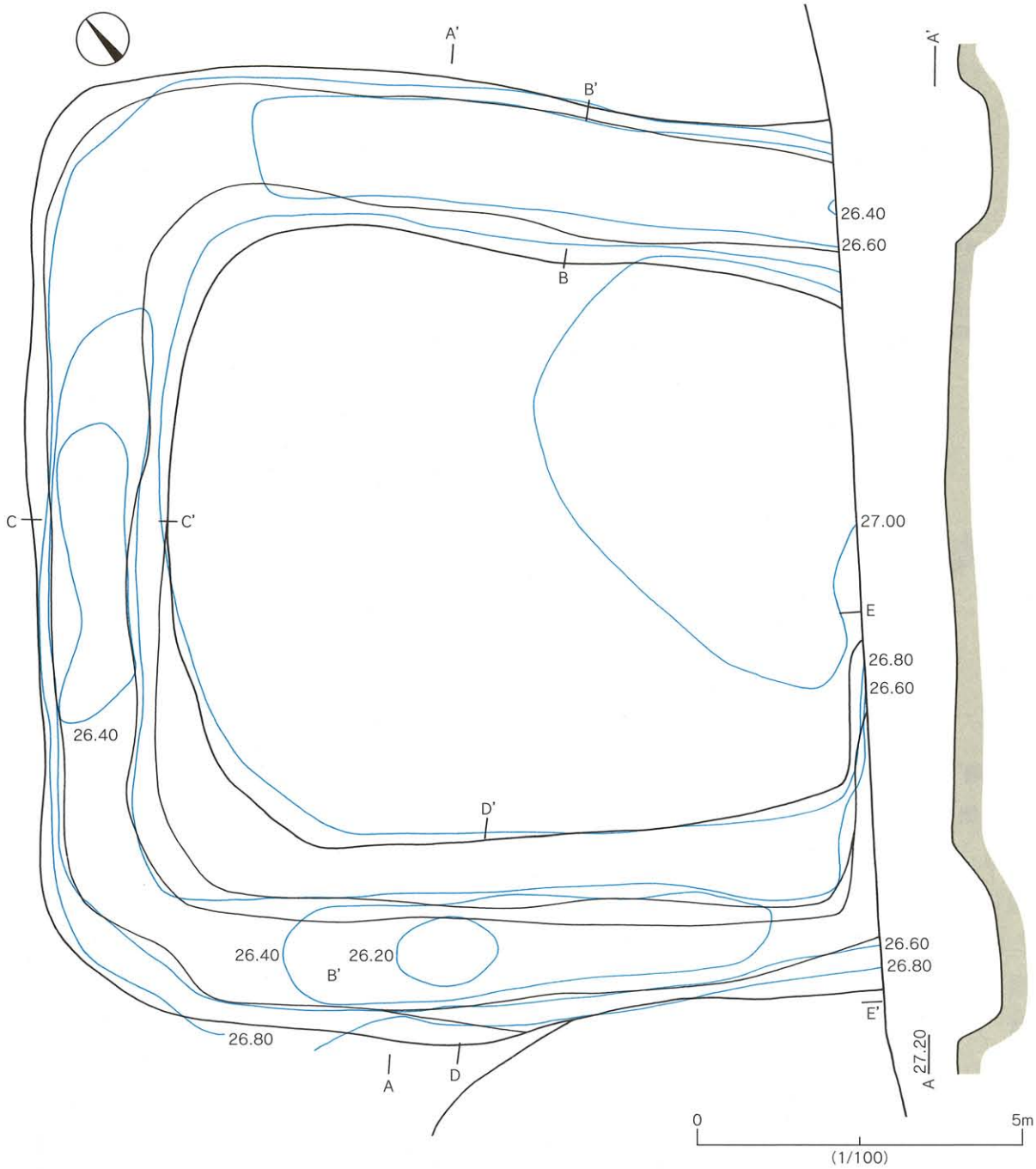
西溝　南溝および北溝より丸みを帯びて移行する。外周と内周は並行しほぼ直線的に延びている。溝底は全体的にほぼ平坦であるが、わずかに中央部が深くなっている。また断面形は底面がほぼ平坦で、壁面は直線的に外傾して立ち上がる逆台形を呈する。規模は上端幅2.16m、下端幅1.28m、深さ59cmを測る。覆土は６層に分層され、レンズ状の自然堆積層である。

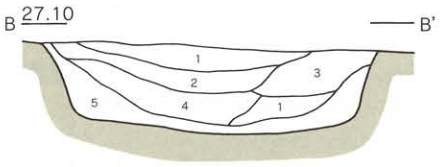
北溝　西溝より丸みを帯びて移行する。外周と内周は並行しほぼ直線的に延びている。また、断面形は底面がほぼ平坦で、壁面は直線的に外傾して立ち上がる逆台形を呈する。規模は上端幅2.50m、下端幅1.67m、深さ48cmを測る。覆土は５層に分層され、レンズ状の自然堆積層である。

東溝　南角の一部が検出されているのみである。

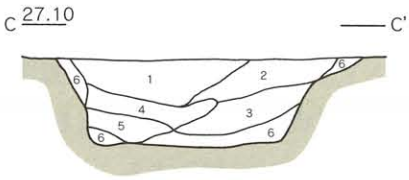
遺物　図示できなかったが、坩形土器、壷形土器の小破片（いずれも5cm角）が出土している。

所見　本古墳は出土遺物や形態的特徴などから、古墳時代前期（４世紀代）の方墳と考えられる。





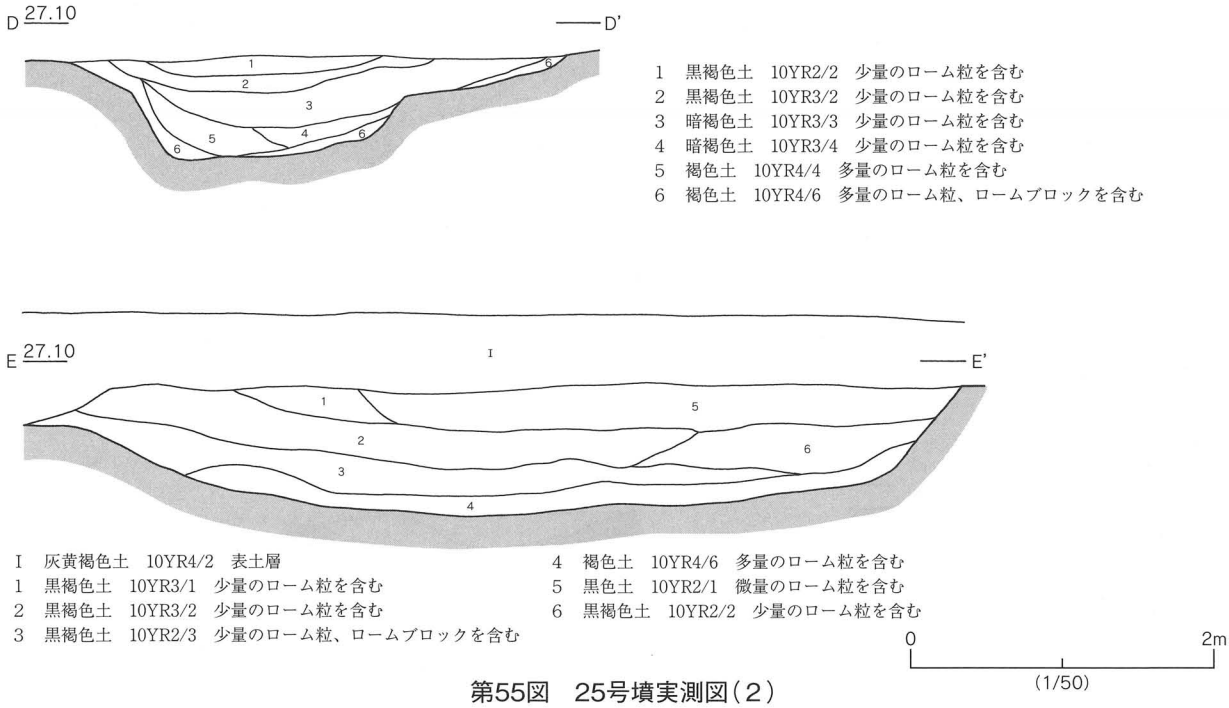
1　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒を含む
2　黒褐色土　10YR2/2　少量のローム粒を含む
3　黒褐色土　10YR2/3　少量のローム粒を含む
4　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒を、ロームブロックを含む
5　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒、ロームブロックを含む



1　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒を含む
2　暗褐色土　10YR3/3　少量のローム粒を含む
3　黒褐色土　10YR2/3　少量のローム粒を含む
4　暗褐色土　10YR3/4　少量のローム粒を含む
5　黒褐色土　10YR2/3　少量のローム粒、ロームブロックを含む
6　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒、ロームブロックを含む

0　2m
(1/50)

第54図　25号墳実測図（1）



第55図　25号墳実測図（2）

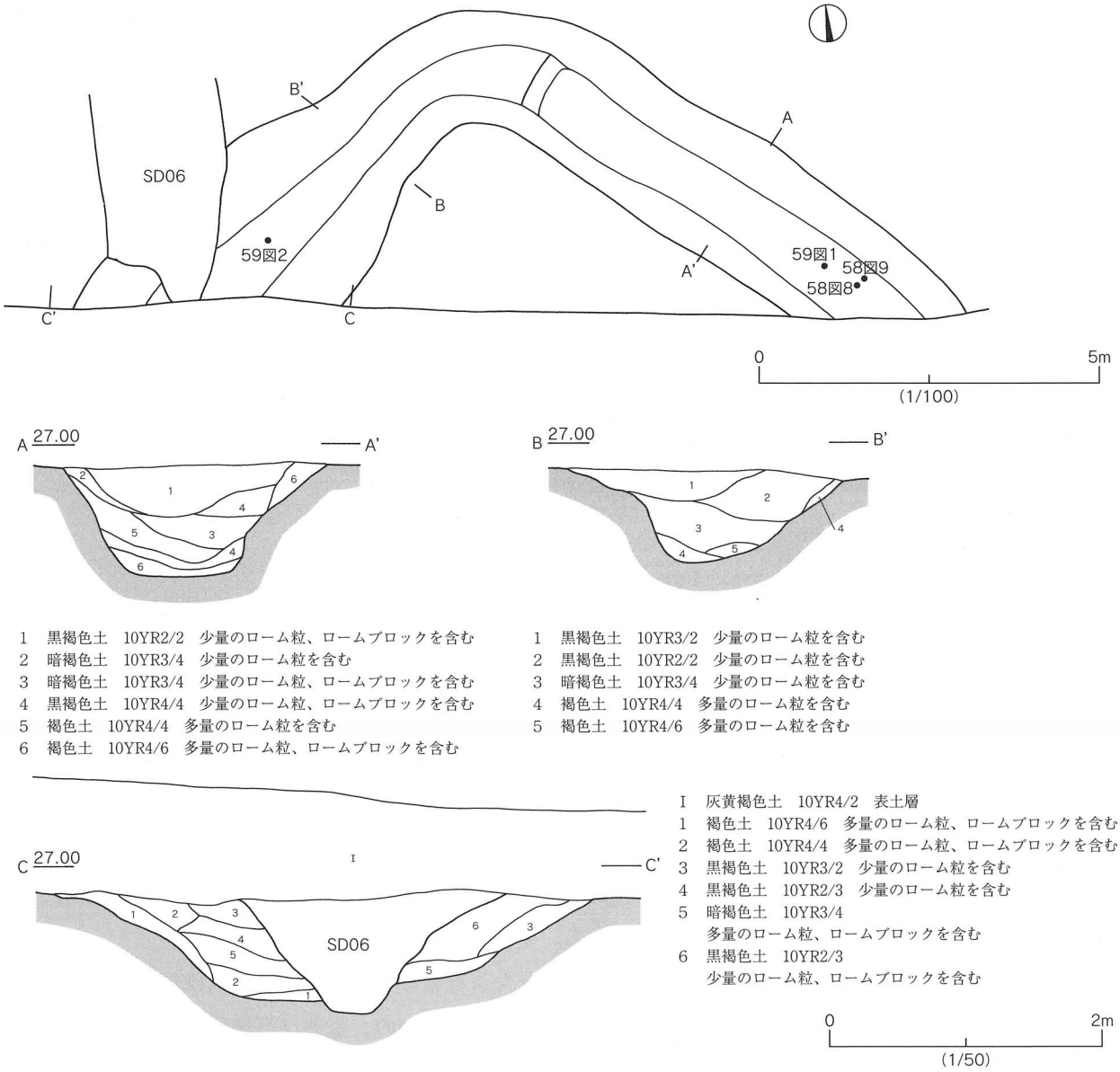
２６号墳（ＴＭ２６）（第56・58・59図　PL.15・24）

遺構　調査区南西端のＣ－45・46、Ｄ－45・46、Ｅ－45・46、Ｆ－46区に位置する。西溝は27号墳の東溝と並走し、北溝は28号墳の南溝と並走するものの、南側の大半が未調査区域に広がっている。したがって東溝と北溝の一部が調査されたに過ぎない。確認された西溝と北溝の一部から平面形はほぼ方形を呈するものと推定される。検出された規模は、内周南北長（3.50）m、同東西長（5.50）m、外周南北長（7.50）m、同東西長（10.0）mを測る。主軸方向はＮ－53°－Ｗである。主体部は検出されていない。

西溝　南側半分が未調査区域に延びている。なお北溝より丸みを帯びて移行する。外周は外側に大きく膨らみ、内周は直線的に延びている。断面形は溝底がやや丸みをもつものの、壁面は直線的に外傾する逆台形を呈する。規模は上端幅2.19m、下端幅0.60m、深さ87cmを測る。覆土はレンズ状の自然堆積層である。なお、ほぼ中央溝底から第59図２の壷形土器が胴部下半部を欠損して出土している。また口縁部の一部も破損しているが、これは破砕行為によるものではないと推定される。その他図示していないが、壷形土器の胴部破片が２点溝底面から出土している。

北溝　東側の一部が未調査区域に延びている。なお、西溝より丸みを帯びて移行する。外周および内周はほぼ並行して延びている。溝底はほぼ中央が深く、北西角、北東角に向かって浅くなる。また、断面形は溝底がやや丸みをもつものの、壁面は直線的に外傾する逆台形を呈する。規模は上端幅1.92m、下端幅0.71m、深さ80cmを測る。覆土はレンズ状の自然堆積層である。なお、ここから器台形土器２点（第58図８・９）と壷形土器１点（第59図１）が出土している。器台形土器は溝底から２点並列して検出された。また、これらから僅か50cm西側で壷形土器が溝底から41cm浮いた覆土中から検出された。

遺物　第58図８・９の器台形土器は北溝の東寄り、溝底から並列して出土したものである。同図８は脚部裾をわずかに欠損するだけで、ほぼ完存品である。脚部裾に２ヶ所の欠損部がみられるが、その欠損部も大きくはなく、破砕行為によるものではないであろう。また、同図９は受け部の１／３にあたる2.5cm×9.0cm範囲と脚裾部の一部が欠損している。大きく破損している受け部は、状況から判断して打欠行為によるものと



第56図　26号墳実測図

判断した。いずれも受け部は浅く、口辺部に角張った断面形を示し、稜線がみられる。脚部は中空で、ほぼ中央に円形を呈した上下貫通孔が穿たれている。脚部下半部に透孔が３個で、外面は全面ヘラミガキが施されているが、同図８は僅かにハケ目調整痕が残る。受け部はヘラミガキで、脚部内面はハケ目調整。なお、同図８と９は上下貫通孔の違いが見られる。特に同図９は受け部と脚部の貫通孔の大きさが大きく異なり、受け部と脚部の接合の際、貫通孔の整形を行わずそのままにした結果であろう。第59図１の壷形土器は北溝覆土中、溝底から浮いた状態で検出された。胴部下半部と底部に穿孔行為が行われており、口縁部周縁の欠損部も打欠されたものと判断している。胴部の中位より下位に最大径を有し、しかも低い部位に弱い稜を持ち、以下急につぼまって底部に移行する。口縁部は大きく外反する。口縁部内外面ともヨコナデ、胴部外面はハケ目調整の後比較的粗いヘラナデ。同図２の壷形土器は胴部下半部を欠如しており、口縁部も僅かに欠損が認められる。周辺には壷形土器の胴部破片が出土しているが、同一個体ではなく接合できなかった。明らかに胴下半部は打欠行為による欠損とみられる。器形は球形の胴部に口縁部は大きく外反する。口縁部外

面ハケ目調整の後、ヨコナデ。胴部もハケ目調整の後、比較的粗いヘラミガキが施される。

所見　本古墳は出土遺物や形態的特徴などから、古墳時代前期（４世紀代）の方墳と考えられる。

２７号墳（ＴＭ２７）（第57・59図　PL.16・24・25）

遺構　調査区南西側のＢ－44・45、Ｃ－44・45、Ｄ－44・45区に位置する。北西角から南東角にかけて中世の溝跡SD06が走っている。重複関係はないものの、小規模な古墳である。周溝は全周する。平面形は北東角および南西角が隅丸で、かつ南溝外周が丸みをもつ方形となり、規模は内周南北長4.83m、同東西長4.73m、外周南北長6.27m、同東西長6.09mを測る。主軸方向はＮ－41°－Ｅである。主体部は確認されていない。

西溝　北側が溝跡SD06によって切られている。北側から南西角にかけて徐々に幅狭くなるものの、外周と内周はほぼ並行する。断面形は逆台形を呈し、規模は上端幅1.09m、下端幅0.48m、深さ23.5～39cmを測る。溝底は南西角から徐々に比高を高くしている。覆土は４層に分層されている。自然堆積層である。周溝内施設はないものと推定される。

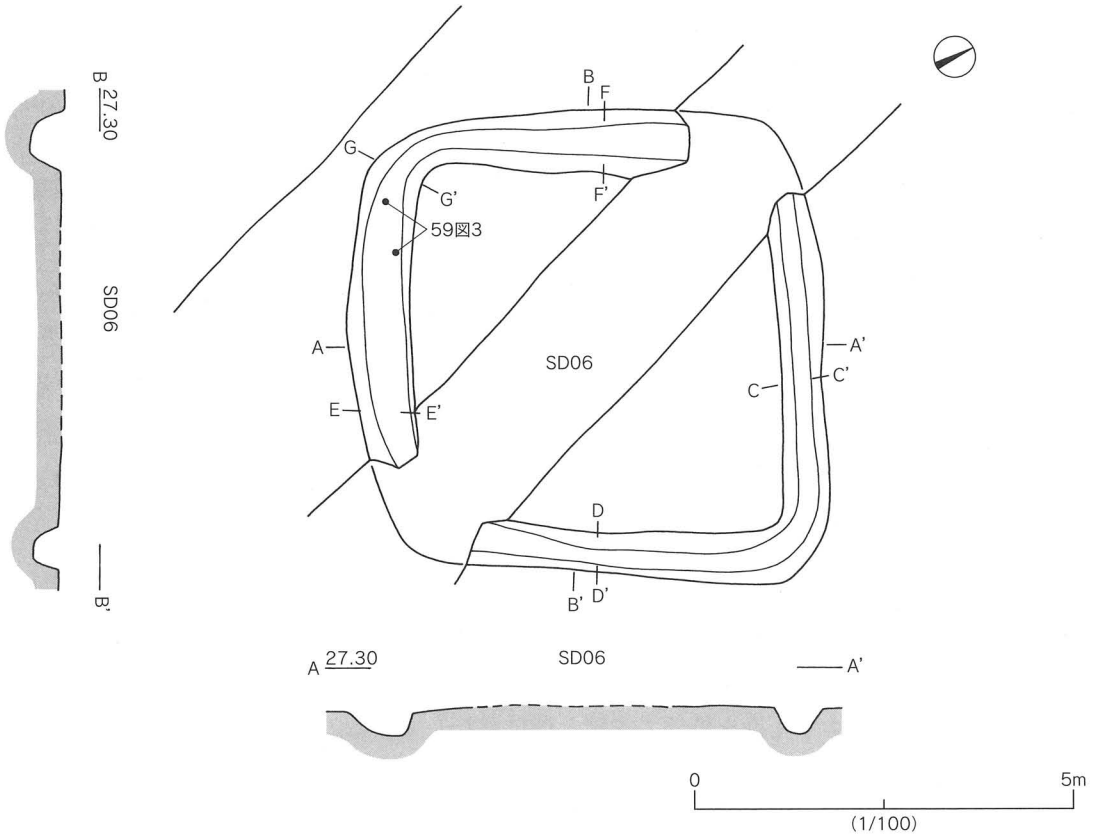
北溝　北西角が溝跡SD06によって切られている。外周および内周はほぼ並行する。断面形は逆台形を呈し、規模は中央付近の上端幅0.60m、下端幅0.24m、深さ32～35.5cmを測る。また北東寄りには浅い凹みがみられる。覆土は３層に分層されている。自然堆積層である。周溝内施設はないものと推定される。

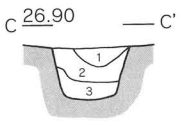
東溝　北東端では北溝より丸みを帯びて内周と伴に並行している。断面形は箱形を呈している。規模は中央部の上端幅0.55m、下端幅0.43m、深さ28～35.5cmを測る。覆土は３層に分層されている。自然堆積層である。周溝内施設はないものと推定される。

南溝　南東角から丸みを帯びて移行する。断面形は逆台形を呈し、規模は中央部上端幅0.82m、下端幅0.56m、深さ22～28cmを測る。周溝内施設の有無は不明である。覆土は３層に分層されている。自然堆積層である。周溝内施設はないものと推定される。なお、ここから第59図３の壷形土器が出土している。西寄りの溝底で、75cm離れた２地点から同一個体の壷破片が検出された。ちょうど口縁部を含む胴部上半部と胴下半部の２点である。局部的な打欠行為は行われていないが、これも破砕行為の一形態であろう。

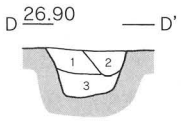
遺物　第59図３は、直口縁の壷形土器である。ちょうど胴部中央で二分割されて遺棄したものと推定される。ほぼ完存品で、胴部中央に欠損がみられるが、打欠行為によるものではない。器形はほぼ球形の胴部をもち、下半部はややくびれて底部へ移行する。口径は小さく13.4cmを測るのみである。口縁部はわずかに内湾するものの、直線的に外傾して立ち上がる。口縁部外面はハケ目調整の後、口辺部のみヨコナデ。胴部上半部はハケ目調整、基部はヘラミガキが施される。底部は平底で、木葉痕が残置される。

所見　本古墳は出土遺物や形態的特徴などから、古墳時代前期（４世紀代）の方墳と考えられる。

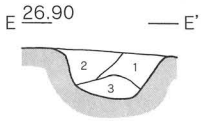




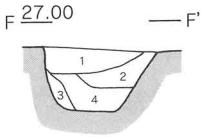
1　暗褐色土　10YR3/4　少量のローム粒を含む
2　黒褐色土　10YR2/3　少量のローム粒を含む
3　褐色土　10YR4/6
　多量のローム粒、ロームブロックを含む



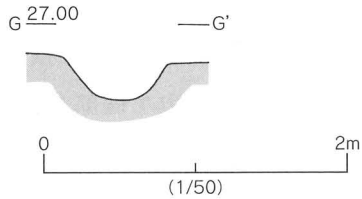
1　暗褐色土　10YR3/4　少量のローム粒を含む
2　黒褐色土　10YR2/3　少量のローム粒を含む
3　褐色土　10YR4/6
　多量のローム粒、ロームブロックを含む



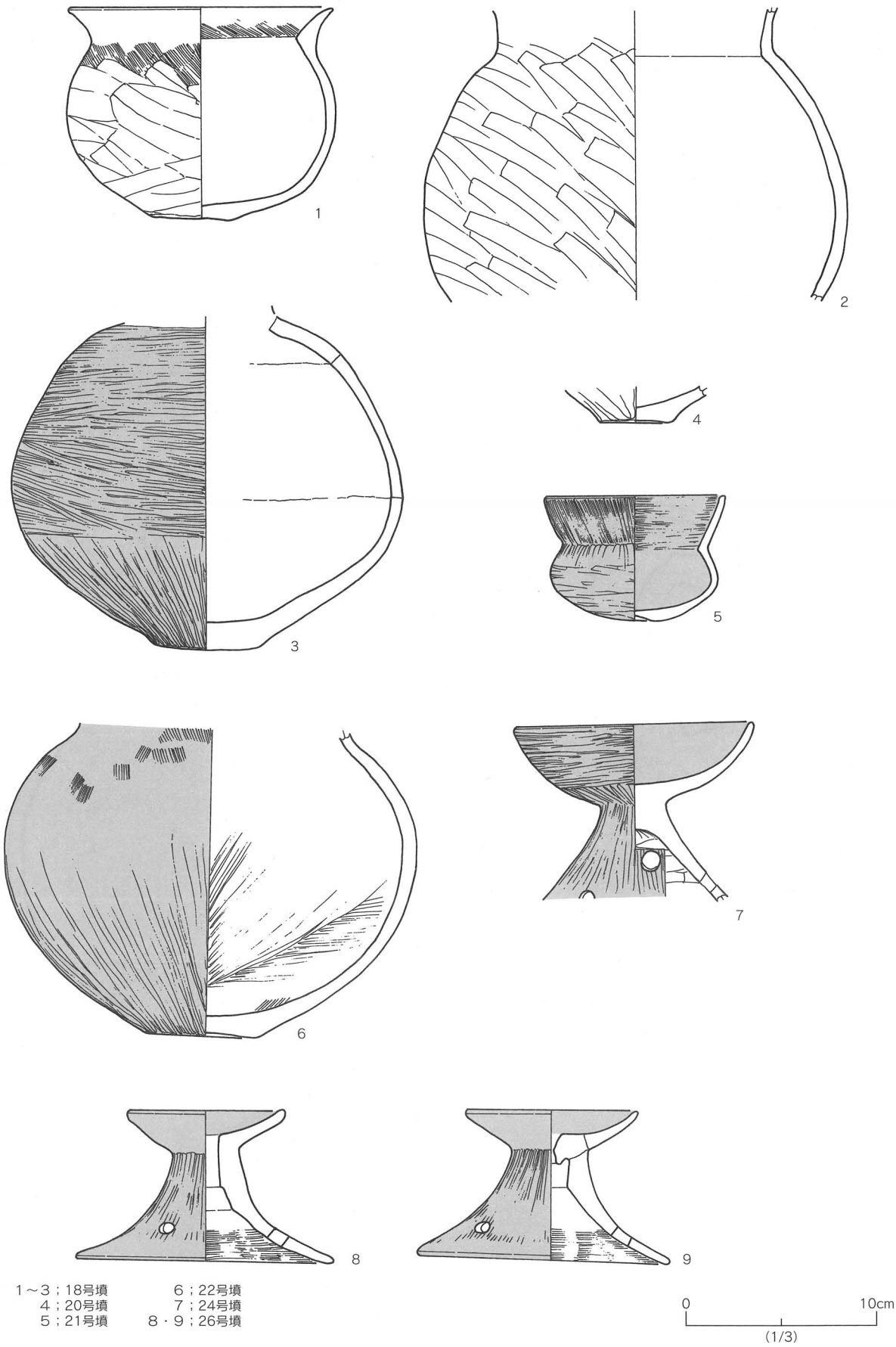
1　暗褐色土　10YR3/4　少量のローム粒を含む
2　黒褐色土　10YR2/3　少量のローム粒を含む
3　褐色土　10YR4/6
　多量のローム粒、ロームブロックを含む



1　黒褐色土　10YR3/1
　少量のローム粒、ロームブロックを含む
2　暗褐色土　10YR3/4　少量のローム粒を含む
3　褐色土　10YR4/6
　少量のローム粒、ロームブロックを含む
4　黒褐色土　10YR3/2
　少量のローム粒、ロームブロックを含む

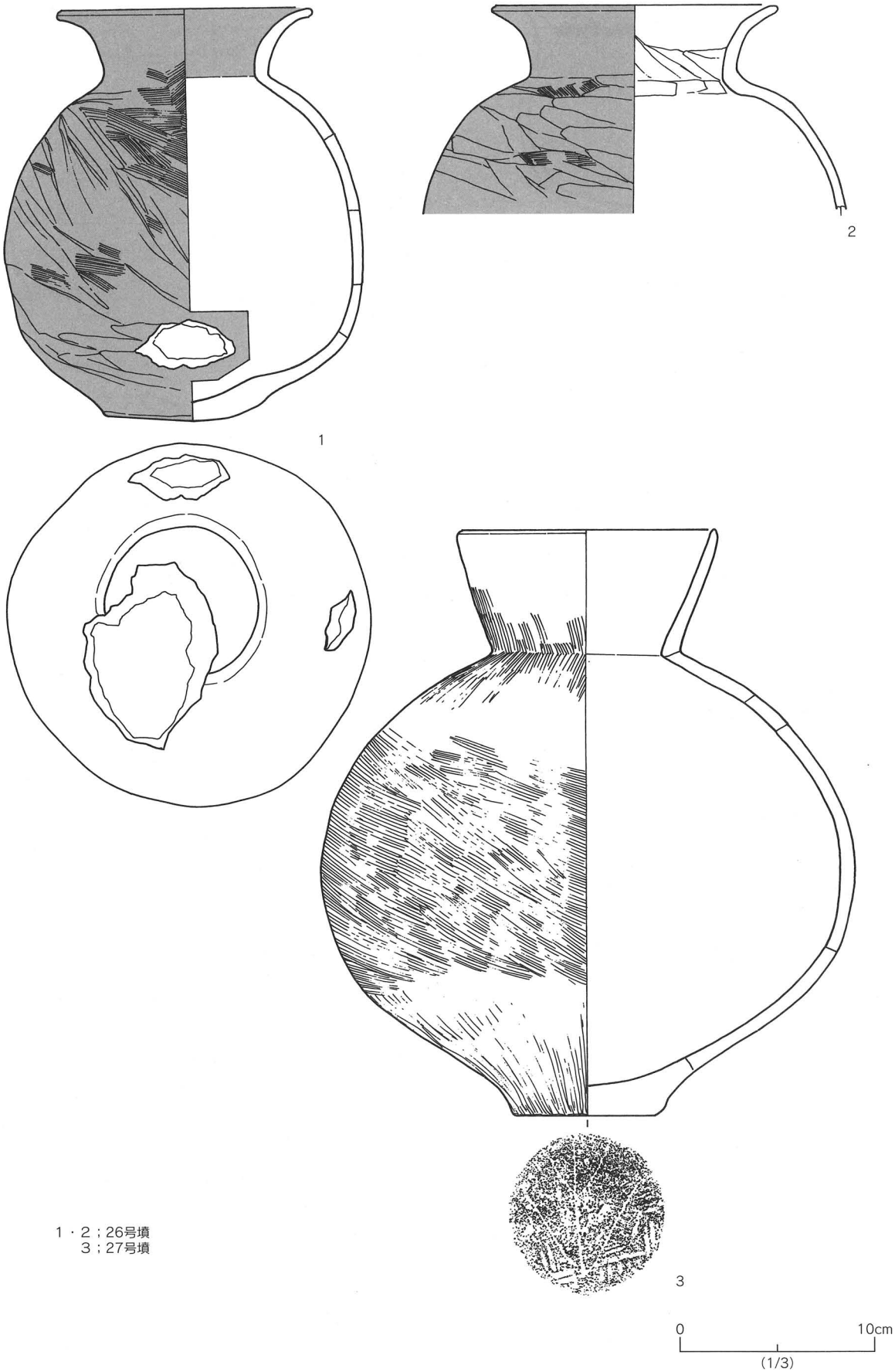


第57図　27号墳実測図



1～3；18号墳　　6；22号墳
4；20号墳　　7；24号墳
5；21号墳　　8・9；26号墳

第58図　18・20・21・22・24・26(1)号墳出土遺物



第59図　26(2)・27号墳出土遺物

２８号墳（ＴＭ２８）（第60～62図　PL.16・25）

遺構　調査区南西側のＣ－42・43・44、Ｄ－40・41・42・43・44、Ｅ－40・41・42・43・44・45、Ｆ－40・41・42・43・44・45、Ｇ－40・41・42・43・44・45、Ｈ－41・42・43・44・45、Ｉ－42・43区に位置する。重複関係はなく、完掘できた。周溝は全周し、平面形は東西軸がやや長く、各角が丸みをもつ隅丸長方形を呈する。規模は内周東西長13.34m、同南北長11.75m、外周東西長19.72m、同南北長18.28mを測る。主軸方向はＮ－58°－Ｗである。主体部は確認されなかった。

西溝　外周はやや丸みを帯びて移行し、内周は直線的に並行する。断面形は緩傾斜の逆台形を呈し、規模は上端幅3.15m、下端幅1.82m、深さ42～54cmを測る。溝底はほぼ平坦である。覆土は６層に分層されている。自然堆積層である。周溝内施設はない。なお、ここから第62図２の器台形土器が出土している。中央北寄りの覆土中で、溝底から24cm浮いた状態で検出された。

北溝　西側に比して東側がやや幅広となっている。内周、外周ともに直線的に移行する。断面形は逆台形を呈するが、溝底中央に長軸5.20m、短軸1.90m、深さ12cmの長方形の一段深くなる落ち込みが確認できたが、立ち上がりが緩傾斜のため周溝内施設として判断できなかった。なお、周溝の規模は中央付近の上端幅3.55m、下端幅2.55m、深さ33～60cmを測る。覆土は６層に分層されている。自然堆積層である。なお、ここから坩形土器と壷形土器２点が出土している。第62図１の坩形土器はほぼ中央の深み地点で溝底からわずか11cm浮いて検出された。また、東端の北東角外周傾斜部に壷形土器２点が検出された。第62図３は口縁部を欠損している。溝底から21cm浮いた覆土中で検出された。同図４は３とほぼ同一レベル上で、東へ50cm離れた地点から胴部破片が、さらに20cm離れて底部が検出された。いずれも破片を図上復元実測したものである。

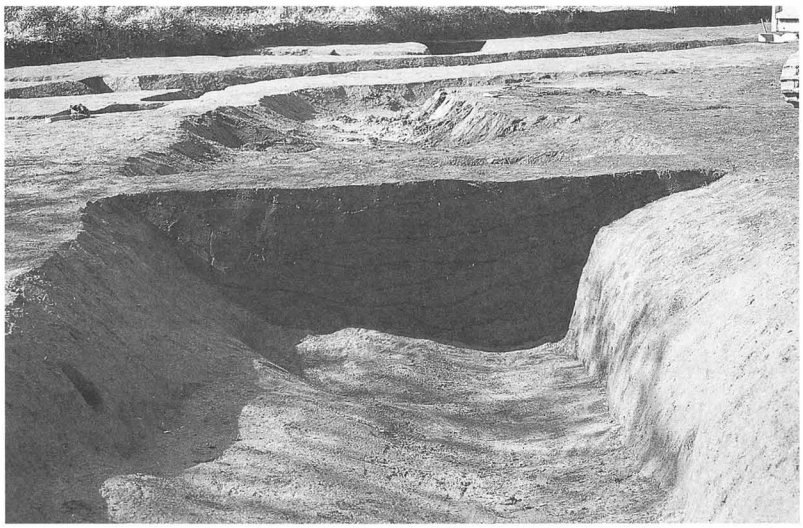
東溝　外周は東側に丸みをもち、内周は直線的に移行する。断面形は逆台形を呈し、溝底は北側がやや低くなり緩傾斜となる。規模は中央部の上端幅3.38m、下端幅2.34m、深さ48～69cmを測る。覆土は７層に分層されている。自然堆積層である。周溝内施設はない。また北側寄りの覆土中から第62図５の甕形土器が出土している。溝底から20cm浮いた覆土中で検出されたもので、底部を含む胴下半部のみ検出された。

南溝　内周、外周ともほぼ直線的で並行して移行する。断面形は逆台形を呈し、溝底はほぼ中央に緩傾斜をもつ低位部がある。しかし、形状から周溝内施設として判断できなかった。断面形は逆台形を呈し、規模は中央部上端幅2.85m、下端幅2.02m、深さ48～54cmを測る。覆土は7層に分層されている。自然堆積層である。

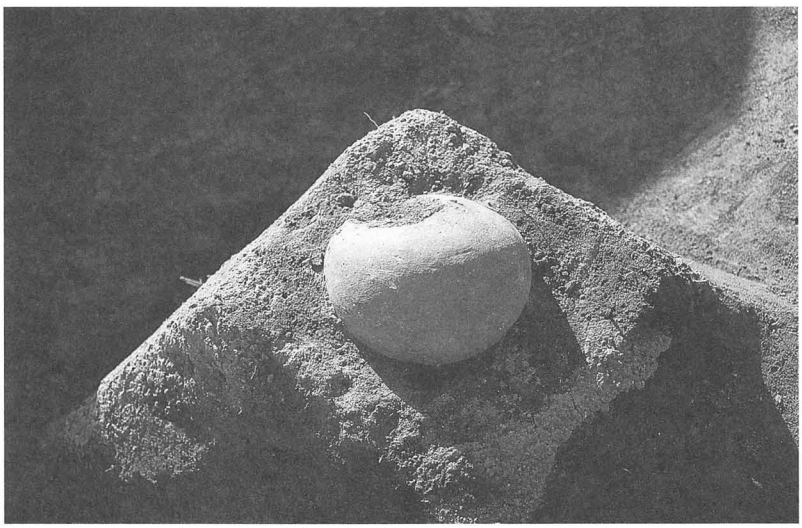
遺物　第62図１は北溝中央で検出された坩形土器である。最大径が胴中位より下方に持ち、下半部が括れて底部に移行する。口縁部はやや内湾気味に直行して立ち上がる。底部は5.5cm×7.5cmの楕円形状に穿孔され、底部穿孔例の好例である。外面は丁寧なヘラミガキが行われ、底部を含めて全面赤彩が施されている。内面口縁部も縦位のヘラミガキ、体部はヘラナデで仕上げられている。口辺部内面にも赤彩がみられる。同図２は西溝覆土中から検出された器台形土器である。脚部裾にわずかな欠損部が認められるが、破砕行為によるものではないと判断した。器形は受け部が埦状を呈し深く、外面下部に明瞭な稜を有する。脚部はハの字状に開き、透孔が３個穿ってある。外面および受け部内面は丁寧なヘラミガキ。脚部内面はハケ目調整である。同図３は北東角の覆土中から検出された壷形土器で、口縁部を接合部からすべて欠損している。口縁部は明らかに破砕行為による結果であるが、胴部の２ヶ所の欠損部については人為的な行為が認められない。器形はほぼ球形を呈する胴部と、下方へ突出した底部からなる。外面はミガキに近いヘラナデによって仕上げられている。同図４は胴部上部と底部のみで復元実測した壷形土器である。３とほぼ同地点で検出されたものであるが、廃棄行為としては破片のみであり、３の壷形土器の廃棄行為とは全く異なるといえよう。器形は

胴部が球形を呈し、底部は上げ底気味である。同図５は東溝覆土中で出土した甕形土器である。胴下半部のみ残存していた。器形はやや胴長で、小さな底部に至る。外面は全面ハケ目調整。内面はヘラナデによって仕上げられている。

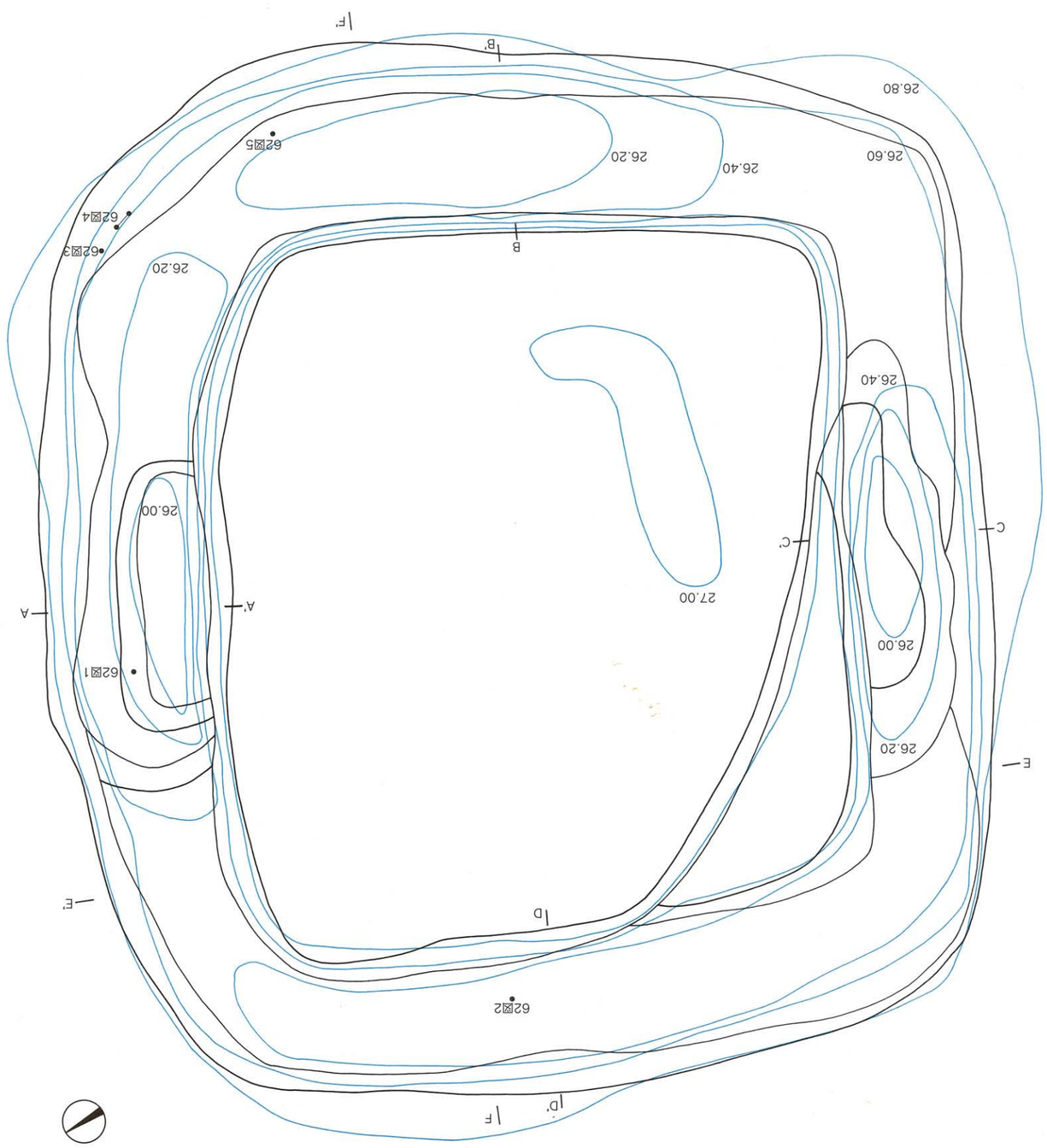
所見　本古墳は出土遺物や形態的特徴などから、古墳時代前期（４世紀代）の方墳と考えられる。



28号墳周溝土層堆積状況

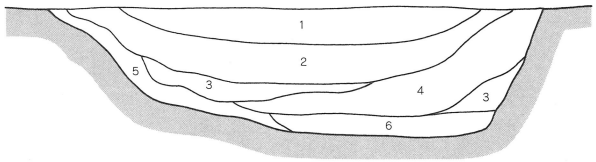


28号墳遺物出土状況



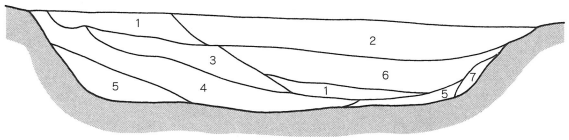
第60図　28号墳実測図（1）

A 27.10 —— A'



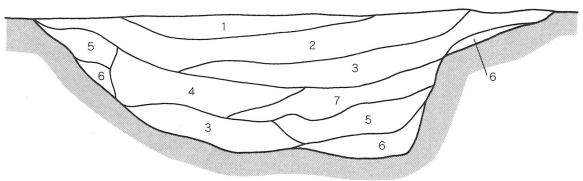
1　黒褐色土　10YR2/3　少量のローム粒を含む
2　黒褐色土　10YR2/2　少量のローム粒を含む
3　黒色土　10YR2/1
　少量のローム粒、ロームブロックを含む
4　暗褐色土　10YR3/4　多量のローム粒を含む
5　褐色土　10YR4/6
　多量のローム粒、ロームブロックを含む
6　褐色土　10YR4/4
　多量のローム粒、ロームブロックを含む

B 27.00 —— B'



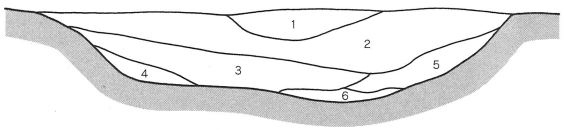
1　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒を含む
2　黒褐色土　10YR2/3　少量のローム粒を含む
3　暗褐色土　10YR3/4　少量のローム粒を含む
4　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒を含む
5　褐色土　10YR4/4　多量のローム粒を含む
6　黒褐色土　10YR3/2　微量のローム粒を含む
7　褐色土　10YR4/6
　多量のローム粒、ロームブロックを含む

C 27.10 —— C'



1　黒褐色土　10YR2/2　少量のローム粒を含む
2　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒を含む
3　黒褐色土　10YR2/3　少量のローム粒を含む
4　黒褐色土　10YR2/2　少量のローム粒を含む
5　黒褐色土　10YR3/2
　少量のローム粒、ロームブロックを含む
6　褐色土　10YR4/4
　多量のローム粒、ロームブロックを含む
7　暗褐色土　10YR3/4　多量のローム粒を含む

D 27.10 —— D'

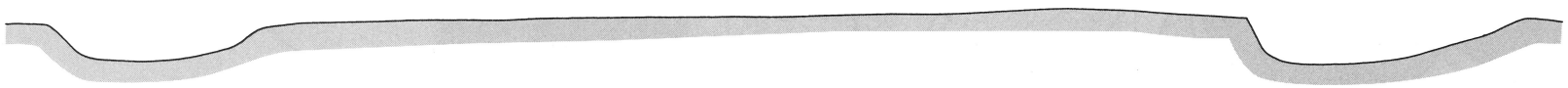


1　黒褐色土　10YR2/3　少量のローム粒を含む
2　黒褐色土　10YR2/2　少量のローム粒を含む
3　暗褐色土　10YR3/3　少量のローム粒を含む
4　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒を含む
5　暗褐色土　10YR3/4　多量のローム粒を含む
6　褐色土　10YR4/4　多量のローム粒を含む

0　2m
(1/50)

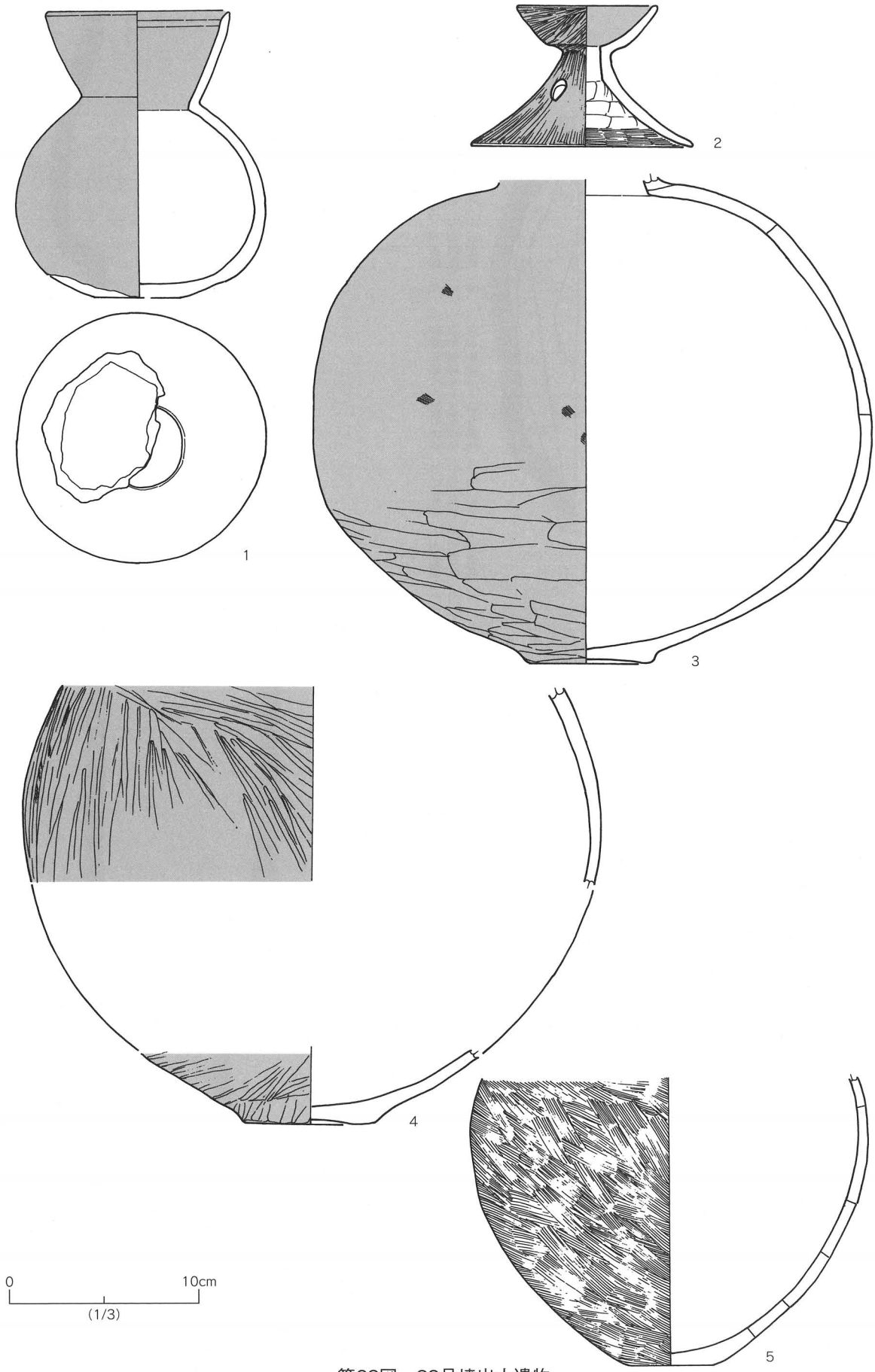
E 27.20 —— E'

F 27.20 —— F'



0　5m
(1/100)

第61図　28号墳実測図(2)



第62図　28号墳出土遺物

２９号墳（ＴＭ２９）（第63・64図　PL.16・17）

遺構　調査区南端のＧ－47・48・49、Ｈ－46・47・48・49、Ｉ－46・47・48・49・50、Ｊ－47・48・49、Ｋ－47・48区に位置する。南側の約半分は未調査区域に延びている。また東側も農道による未調査区域となり、さらに北溝は30号墳の南溝と並走し、30号墳外周に切られている。新旧関係は本墳が古期で、30号墳が新期である。平面形は内外周ともに並行し、方形を呈するものと推定される。検出された規模は、内周南北長（3.91m）、同東西長9.38m、外周南北長（5.15m）、同東西長9.37mを測る。主軸方向はＮ－65°－Ｗである。主体部は確認されなかった。

西溝　南側半分が未調査区域に延びている。また、北西角が30号墳と重複するものの、内外周ともほぼ並行している。断面形は上幅と下幅の差が少なく、深さのある箱薬研形を呈している。上端幅1.45m、下端幅0.92m、深さ84cmを測る。溝底はほぼ中央部（調査区では南端）で15.5cmの比高を有して一段深くなっており、これが周溝内施設であるかどうかは不明である。南端寄りの覆土は４層に分層され、自然堆積層である。

北溝　北側外周で30号墳により切られているものの、30号墳よりも一段深く掘削されており、新旧関係は明瞭である。溝底はほぼ完存していた。断面形はやはり箱薬研形を呈し、規模は中央付近の上端幅1.39m、下端幅0.52m、深さ95cmを測る。中央部の覆土は30号墳との重複で２層に分層され、自然堆積層である。

東溝　北溝より丸みを帯びて移行する。断面形は箱薬研形を呈し、規模は中央部の上端幅1.52m、下端幅0.76m、深さ74～78.5cmを測る。覆土は11層に分層されている。自然堆積層である。

南溝　未調査区域のため不明。

遺物　中世の土師質土器の皿の小破片が覆土から出土したが、小破片のため図化していない。古墳時代の遺物は検出できなかった。

所見　周溝の断面形態が他のものと異なり、覆土内にローム粒が多量に含まれる土層が特徴的である。本古墳はそのあり方や形態的特徴などから、古墳時代前期（４世紀代）の方墳と考えられる。

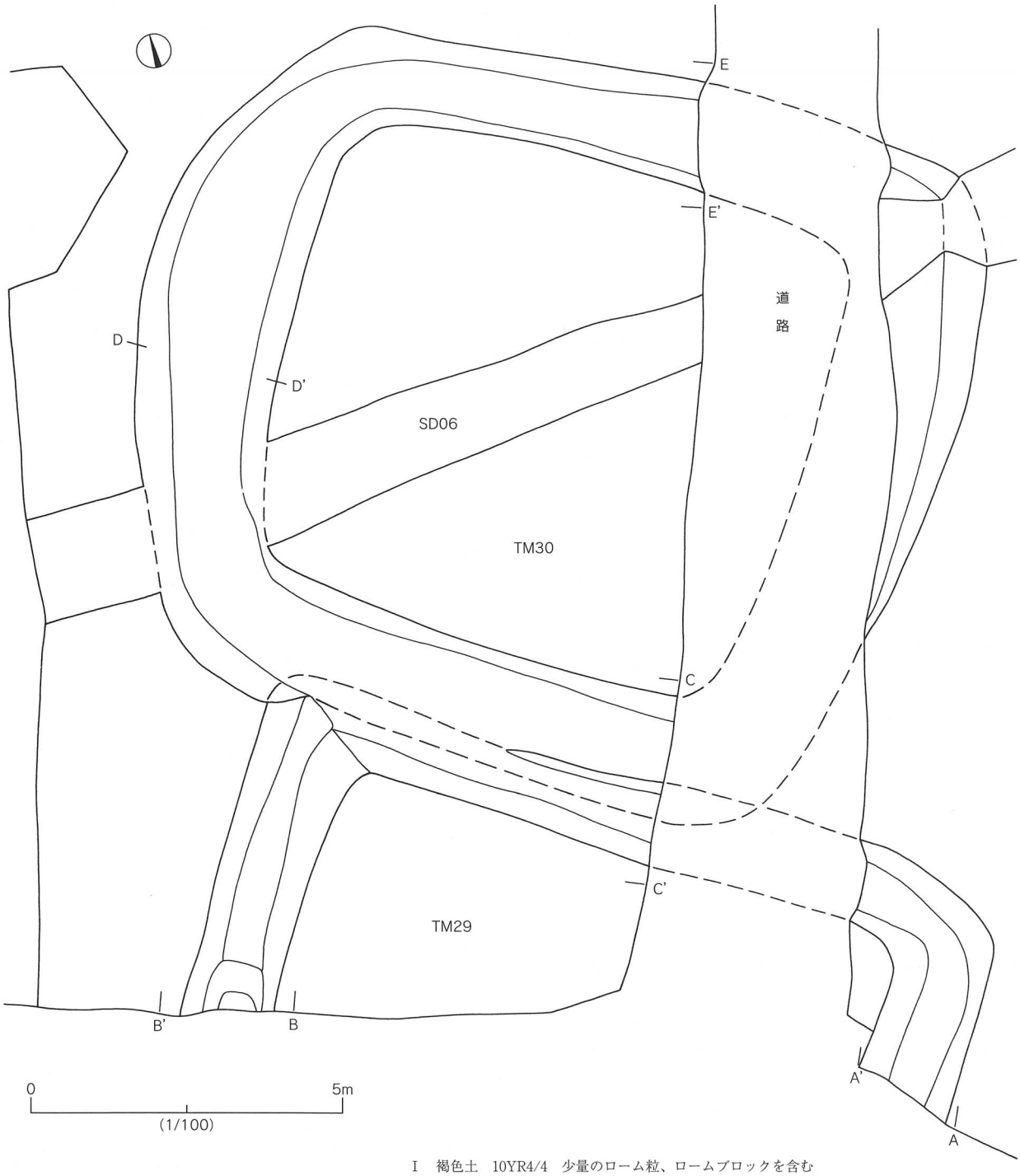
３０号墳（ＴＭ３０）（第63・64図　PL.16・17）

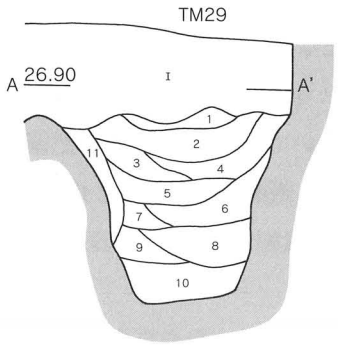
遺構　調査区南側のＧ－49・50、Ｈ－49・50、Ｉ－49・50、Ｊ－50・51区に位置する。東側は農道による未調査区域となり、北東角から南西角にかけて中世の溝跡SD06が貫通し上面部が消失し、さらに南溝は29号墳の北溝と重複している。新旧関係は本墳が新期で、29号墳が古期である。周溝は全周し、平面形は西溝外側が若干突出しているものの、内周は各角が丸みをもつ隅丸方形を呈する。規模は、内周東西長（6.70）m、同幅軸長（7.93m）、外周東西長13.08m、同南北長（11.35）mを測る。主軸方向はＮ－32°－Ｅである。主体部は確認されなかった。

西溝　外周が西側に突出し、丸みを帯びているものの、内周は南北軸に並行している。断面形は逆台形を呈し、規模は上端幅2.35m、下端幅1.59m、深さ46～47cmを測る。溝底はほぼ平坦で、急傾斜して立ち上がる。覆土は４層に分層されている。自然堆積層である。周溝内施設はない。

北溝　東側の一部が農道により未調査となっているものの、形状については比較的明瞭に把握できた。外周、内周ともに直線的に並行している。なお、東溝の形状は不明であるが、西溝、南溝の幅と比較すると狭くなっている。断面形は逆台形を呈し、規模は中央付近の上端幅1.64m、下端幅1.13m、深さ60～129cmを測る。覆土は８層に分層されている。自然堆積層である。周溝内施設はない。

東溝　農道により内周の形状が不明である。また遺存している外周についてはやや東側に丸みを帯びている。断面形は逆台形を呈している。規模および覆土については不明である。

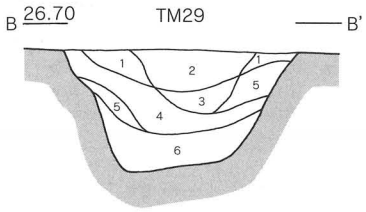




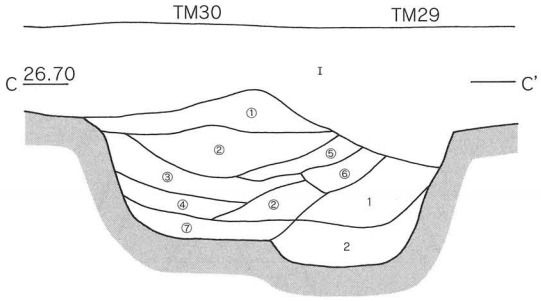
I　褐色土　10YR4/4　少量のローム粒、ロームブロックを含む
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3　微量のローム粒、少量のロームブロックを含む
2　黒褐色土　10YR3/2　微量のローム粒を含む
3　灰黄褐色土　10YR4/2　微量のローム粒を含む
4　にぶい黄褐色土　10YR5/3　多量のローム粒を含む
5　にぶい黄褐色土　10YR5/4　少量のローム粒、ロームブロックを含む
6　にぶい黄褐色土　10YR6/4　多量のローム粒を含む
7　褐色土　10YR4/4　多量のローム粒を含む
8　にぶい黄褐色土　10YR5/3　多量のローム粒を含む
9　灰黄褐色土　10YR5/2　多量のローム粒を含む
10　黄褐色土　10YR5/6　多量のローム粒、ロームブロックを含む
11　にぶい黄褐色土　10YR4/3　多量のローム粒を含む

0　2m
(1/50)

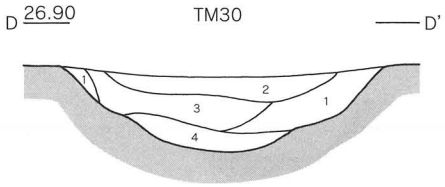
第63図　29・30号墳実測図（1）



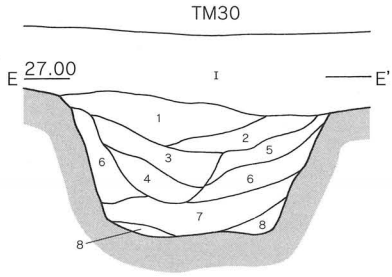
1　暗褐色土　10YR3/4　少量のローム粒を含む
2　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒を含む
3　黒褐色土　10YR2/3　少量のローム粒を含む
4　褐色土　10YR4/4　多量のローム粒を含む
5　褐色土　10YR4/4　多量のローム粒、ロームブロックを含む
6　暗褐色土　10YR3/4　多量のローム粒を含む



Ⅰ　灰黄褐色土　10YR4/2　表土層
TM29
1　褐色土　10YR4/4　多量のローム粒を含む
2　暗褐色土　10YR3/4　多量のローム粒を含む
TM30
①　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒を含む
②　黒褐色土　10YR3/1　微量のローム粒を含む
③　暗褐色土　10YR3/4　多量のローム粒を含む
④　褐色土　10YR4/4　多量のローム粒を含む
⑤　暗褐色土　10YR3/3　少量のローム粒を含む
⑥　暗褐色土　10YR3/4　少量のローム粒を含む
⑦　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒、ロームブロックを含む



1　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒を含む
2　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒を含む
3　暗褐色土　10YR3/3　少量のローム粒を
4　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒、ロームブロックを含む



Ⅰ　にぶい黄褐色土　10YR4/3　表土層
1　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒を含む
2　黒褐色土　10YR2/3　少量のローム粒を含む
3　暗褐色土　10YR3/3　少量のローム粒を含む
4　暗褐色土　10YR3/4　少量のローム粒を含む
5　褐色土　10YR4/4　少量のローム粒を含む
6　褐色土　10YR4/4　多量のローム粒を含む
7　暗褐色土　10YR3/4　多量のローム粒を含む
8　暗褐色土　10YR3/3　多量のローム粒を含む

0　2m
(1/50)

第64図　29・30号墳実測図(2)

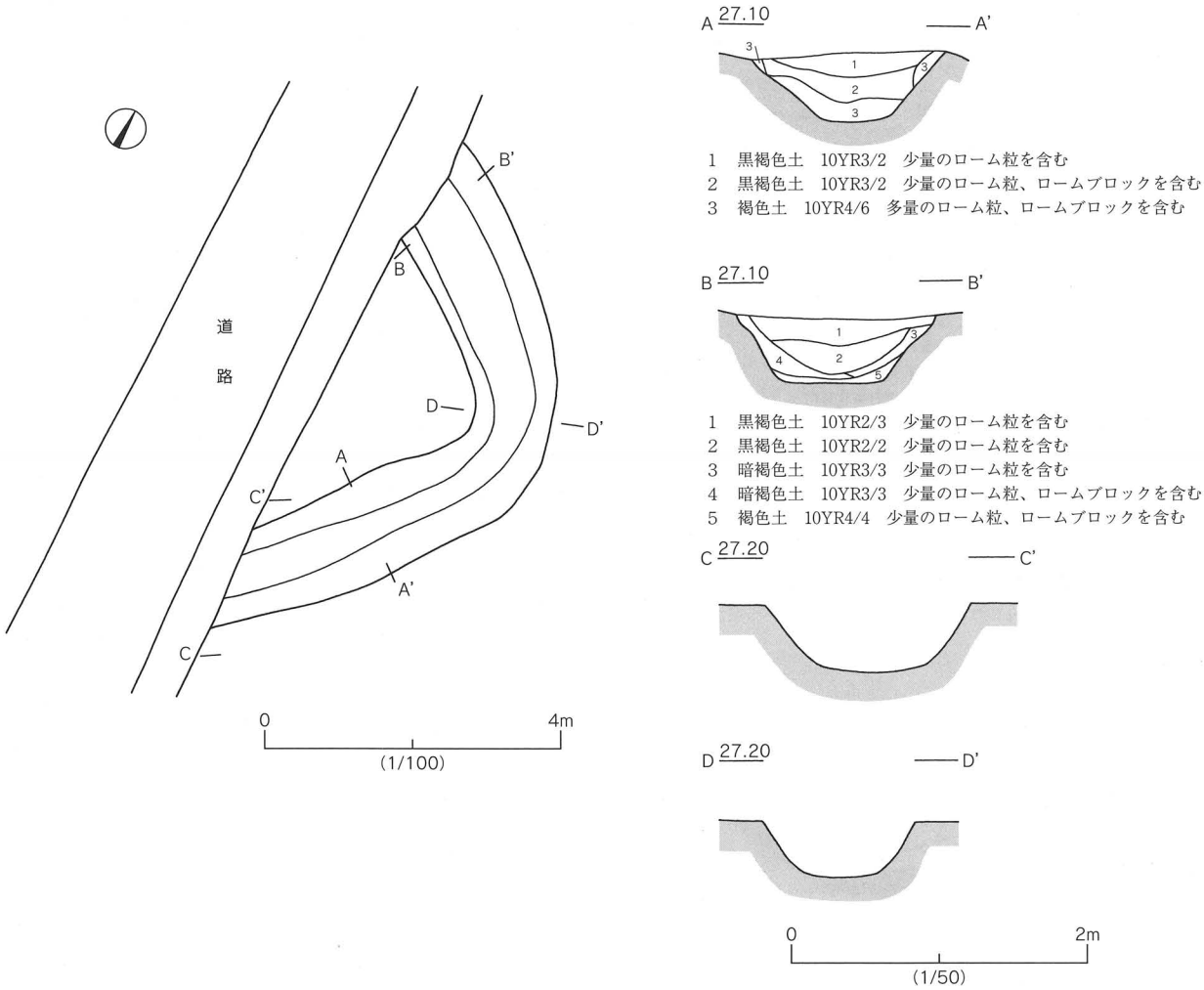
南溝　外周は29号墳と重複し、わずかに南西角のみ確認できるが、内周は明瞭である。断面形は逆台形を呈し、遺存している南西角付近の規模は上端幅2.15m、下端幅1.23m、深さ79～85cmを測る。南東角寄りの覆土は7層に分層されている。自然堆積層である。周溝内施設はない。

遺物　覆土から中世の土師質土器の土鍋底部破片（第83図26）が出土しているが、本古墳に関する遺物は出土していない。

所見　本古墳はそのあり方や形態的特徴などから、古墳時代前期（4世紀代）の方墳と考えられる。

31号墳（TM31・旧2号方形周溝墓）（第65図　PL.17）

遺構　調査区西端のA－42・43、B－42・43区に位置する。第一次調査(1995年)により西側一部が調査され、既に2号方形周溝墓として報告されたものであるが、今回の調査で反対の東側未調査部分を調査でき、ここ



第65図　31号墳実測図

に改めて31号墳と命名し直した。なお、調査は東側が検出されたものの、当該墳の南北ほぼ中央に走る農道により未調査で、最終的には完掘することができなかった。したがって、調査は東角を中心に北側と東側周溝の一部であるが、前回の調査結果から判断して周溝は全周しているものと推定される。まず、平面形は北東角が丸みをもつ隅丸方形である。確認された規模は、第一次調査時との計測から内周南北長6.0m、同東西長5.6m、外周南北長8.40m、同東西長7.85mを測る。また、主軸方向はN－20°－Eである。主体部は確認されなかった。

北溝　西側の大半は未調査区域に延びている。外周と内周はほぼ直線的で平行して移行し、溝底は中央部がやや低くなるものの、平坦である。断面形は逆台形を呈し、規模は中央付近の上端幅1.41m、下端幅0.72m、深さ36cmを測る。覆土は５層に分層されている。自然堆積層である。周溝内施設は確認できなかった。

東溝　南側の大半が未調査区域に延びている。外周と内周はほぼ並行して移行する。断面形は逆台形を呈し、規模は中央部の上端幅1.35m、下端幅0.38m、深さ36～44cmを測る。覆土は３層に分層されている。周溝内施設の有無は不明である。

遺物　以前の調査同様に今回も遺物は検出できなかった。

所見　本古墳はそのあり方や形態的特徴などから、古墳時代前期（４世紀代）の方墳と考えられる。

２．竪穴状遺構

これらの竪穴状遺構としたものは、古墳の周溝と同様な色調の覆土を持ち、古墳の周溝内埋葬施設と類似した形態のものもみられ、土壙墓の可能性も考えられるものである。遺構内からの遺物の出土はあまり見られないが、このうちの1基からは古墳時代前期の土器が出土している。

１号竪穴状遺構（ＳＸ０１）（第66図　PL.18）

調査区中央北側のＮ－40、Ｏ－40区、標高26.67mに位置する。規模は長軸2.36m、短軸0.94m、深さ1.0mを測り、主軸方向はＮ－82°－Ｗを指し、形状は長方形を呈する。底面は平坦で、下段の規模は長軸2.17m、短軸0.78m、中央の深さ42cmで、壁面はほぼ直線的に立ち上がる。覆土は５層からなる。上層および中層は黒褐色土と褐色土。下層は暗褐色土で覆われており、平行堆積を示し、人為的な堆積状況を呈する。埋葬施設と関連づけられるような遺物は出土していない。

２号竪穴状遺構（ＳＸ０２）（第66図）

調査区北端のＰ－33区、標高26.32mに位置する。８号墳周溝北端で、北側は未調査区域に延びている。したがって、検出される規模は長軸（2.60）m、短軸（0.53）m、深さ1.12mを測り、長方形を呈するものと推定される。また、８号墳周溝底面での規模は長軸（2.55）m、短軸（0.40）m、深さ23cm。主軸方向は不明であるが、検出された面を長軸とするとＮ－50°－Ｅを指す。底面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がる。覆土は５層からなり、上層および中層は黒褐色土。下層は黒色土で覆われており、水平堆積の人為的な堆積状況を呈する。なお、埋葬施設と関連づけられるような遺物は出土していない。

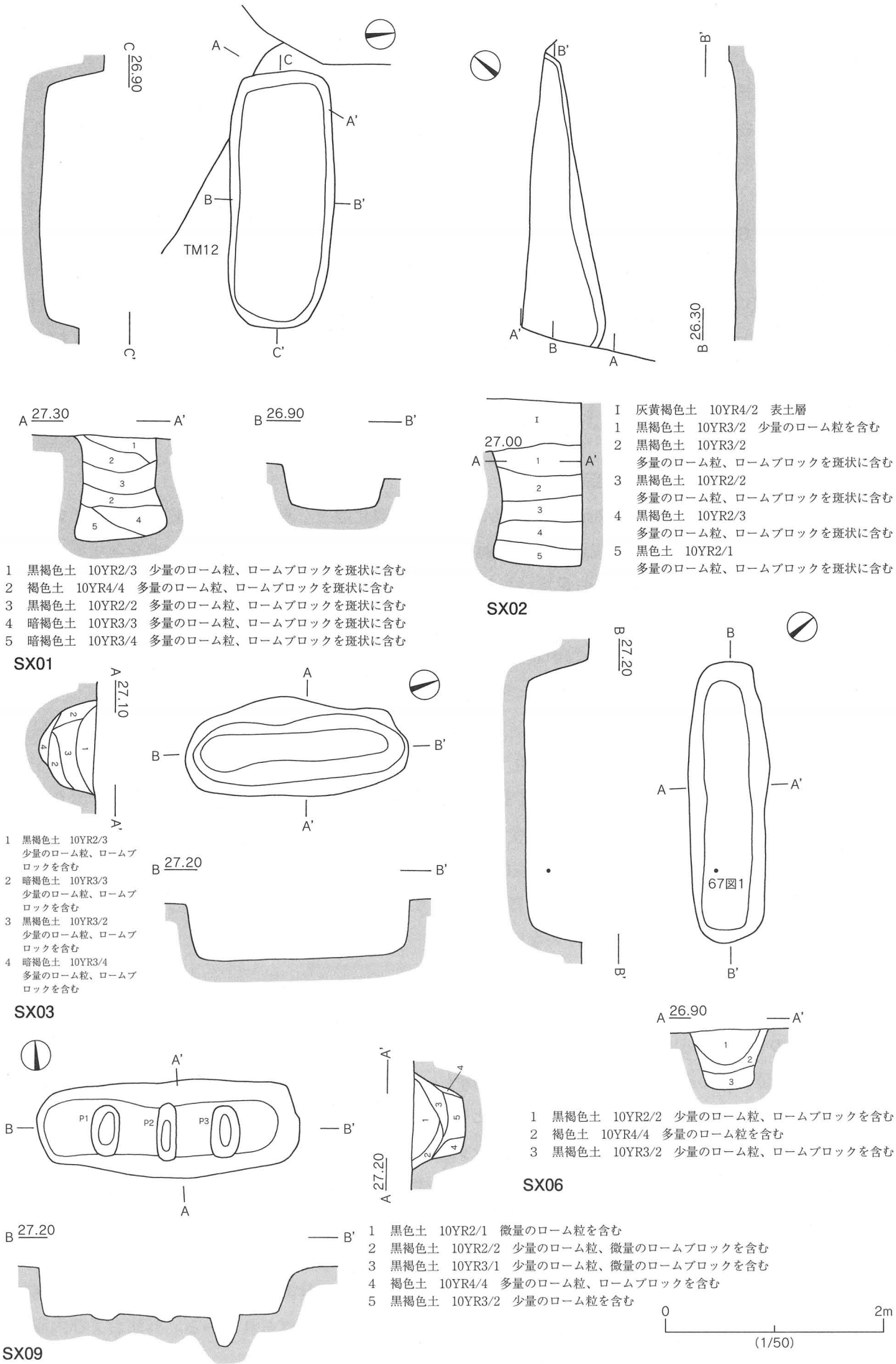
３号竪穴状遺構（ＳＸ０３）（第66図　PL.18）

調査区東側のＷ－45区、標高26.93mに位置する。規模は長軸2.05m、短軸0.90m、深さ55cmを測り、主軸方向をＮ－9°－Ｅを指し、形状は楕円形を呈する。また、底面は二段に掘り込まれており、下段の規模は長1.71m、短軸0.25m、中央の深さ25cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は４層からなる。上層および中層は黒褐色。下層は暗褐色土で覆われており、人為的な堆積状況を呈する。しかし、埋葬施設と関連づけられるような遺物は出土していない。

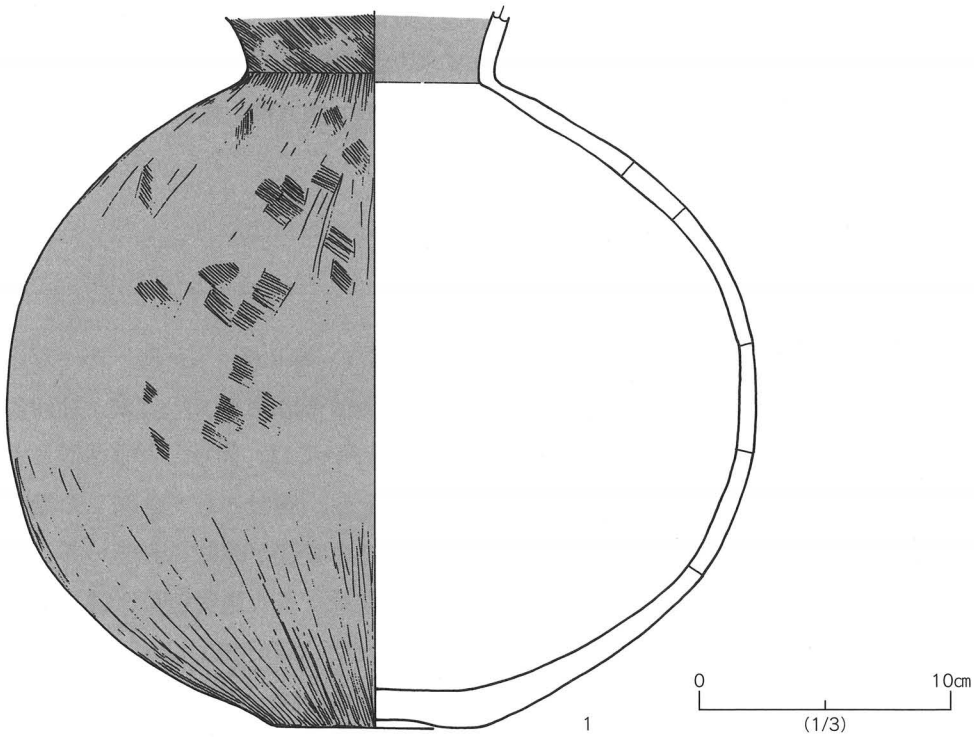
６号竪穴状遺構（ＳＸ０６）（第66・67図　PL.18・25）

調査区西側のＣ－40・41区、標高26.93mに位置する。規模は長軸2.60m、短軸0.69m、深さ53cmを測り、溝状の長方形を呈する。主軸方向はＮ－56°－Ｗを指す。底面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がる。覆土は３層からなり、上層および中層は黒褐色土と褐色土。下層は黒褐色土で覆われており、人為的な堆積状況を呈する。埋葬施設中央やや東寄りに口縁部を欠損した壷形土器が埋納されていた。

遺物　第67図１は底面から10cm浮いた状態で検出された壷形土器である。頸部周縁をわずかに残存するものの、口縁部はほぼ欠損している。器形は胴部が上下を押し潰したような扁球形を呈し、胴部最大径が中位より下方に位置する。頸部はやや垂直気味に立ち上がり、口縁部へ移行するものと推定される。底部は輪状の高まりを呈し上げ底気味である。外面頸部はハケ目調整。胴部はハケ目調整の後、ヘラミガキ。下半部は縦位のヘラミガキ。内面頸部はヘラミガキ、体部はヘラナデによって仕上げられている。外面および内面頸部は赤彩が施されている。



第66図 1・2・3・6・9号竪穴状遺構実測図



第67図　６号竪穴状遺構出土遺物

９号竪穴状遺構（ＳＸ０９）（第66図　PL.18）

調査区北側のＬ－35、Ｍ－35区、標高26.97mで、掘立柱建物跡SB01の東側に位置する。規模は長軸2.31m、短軸0.89m、深さ48.0cmを測る楕円形で、主軸方向はＮ－86°－Ｗを指す。また、底面には縄抜き取り施設として短軸方向に並行した溝状の掘り込みが３条掘削されている。したがって、底面は起伏にとみ、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がる。縄抜き取り溝の規模は下記のとおりである。

番号	形状	長径cm	短径cm	深さcm	番号	形状	長径cm	短径cm	深さcm
Ｐ１	楕円形	45.0	25.0	7.0	Ｐ２	楕円形	53.0	17.0	5.0
Ｐ３	楕円形	48.0	27.0	10.0					

覆土は５層に分層されるが、上層および中層は黒色土および黒褐色土。下層は壁際が褐色土、底面は黒褐色土で覆われており、人為的な堆積状況を呈する。しかし、埋葬施設と関連づけられるような遺物は出土していない。

(4)中世・近世の遺構と遺物

中世・近世の遺構の中心は、以前の調査でも部分的に確認されてきた溝跡SD06によって区画された中世の方形館跡を構成する遺構群と考えられる。今回の調査では、掘立柱建物跡、柱穴群、井戸跡、竪穴状遺構、そして溝跡などが検出されいる。

1．掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（ＳＢ０１）（第68・70～72・82図　PL.19・20・26）

今回確実に掘立柱建物跡として確認できたのは、調査区北側中央、Ｉ－35・36・37、Ｊ－35・36・37、Ｋ－35・36・37区に位置する本遺構の１棟のみである。周辺にも多数の柱穴群が検出されているが、柱列としては十分に把握できていないため、５号柱穴群としてまとめた。これらについては、図示した平面図とすべての柱穴の深さを提示してあるので、今後の検討資料としておきたい。なお、SB01として認識した建物跡の中央西側には礎石を伴う柱穴が検出され、少なくとも最低２棟の建物跡の重複が確認されている。しかし、現状では柱列が整わず、記述のみとする。まず、ここでSB01として認識できた建物跡は、柱穴番号Ｐ232・234・236・238・244・246・253・255・263・266・268・270・272・277・280・292・302・306・311・319・325・330・335・340・397・399・401・403・404・407・426・429・430・431・443・444・447・448・551・559の40本柱であり、これら柱配置が総柱を基本とする掘立柱建物跡である。構造は桁行５間、梁行４間、東西に庇が付く、桁行方向をＮ－87°－Ｗとする東西棟である。規模は桁行長9.52m、庇を含めた総長12.0m、梁行総長8.20mを測る。柱間寸法は桁行1.5～2.1m、梁行1.56～2.32mを有する。柱穴の形状は円形を基本とし、上端径42～65cm、深さ2.0～53.5cmを計測する。検出された柱穴底面のすべてに柱当り痕である硬化面が確認された。また西梁行の西側90cm前後離れて５本（Ｐ320・321・322・342・347）の柱列が確認されている。柱間はやや不規則であるが、本建物跡に関連する柱穴列と推定される。

なお、本跡南西側に礎石を伴う柱穴（Ｐ286）が検出されている。本遺構の柱配置と若干のズレがみられたものの、柱列が整わず掘立柱建物跡としての認識ができなかった。推定ではＰ286、Ｐ298、Ｐ465および北側のＰ290の４本が南北列で配置された３間であるが、東西方向には連がらず、１列のみである。

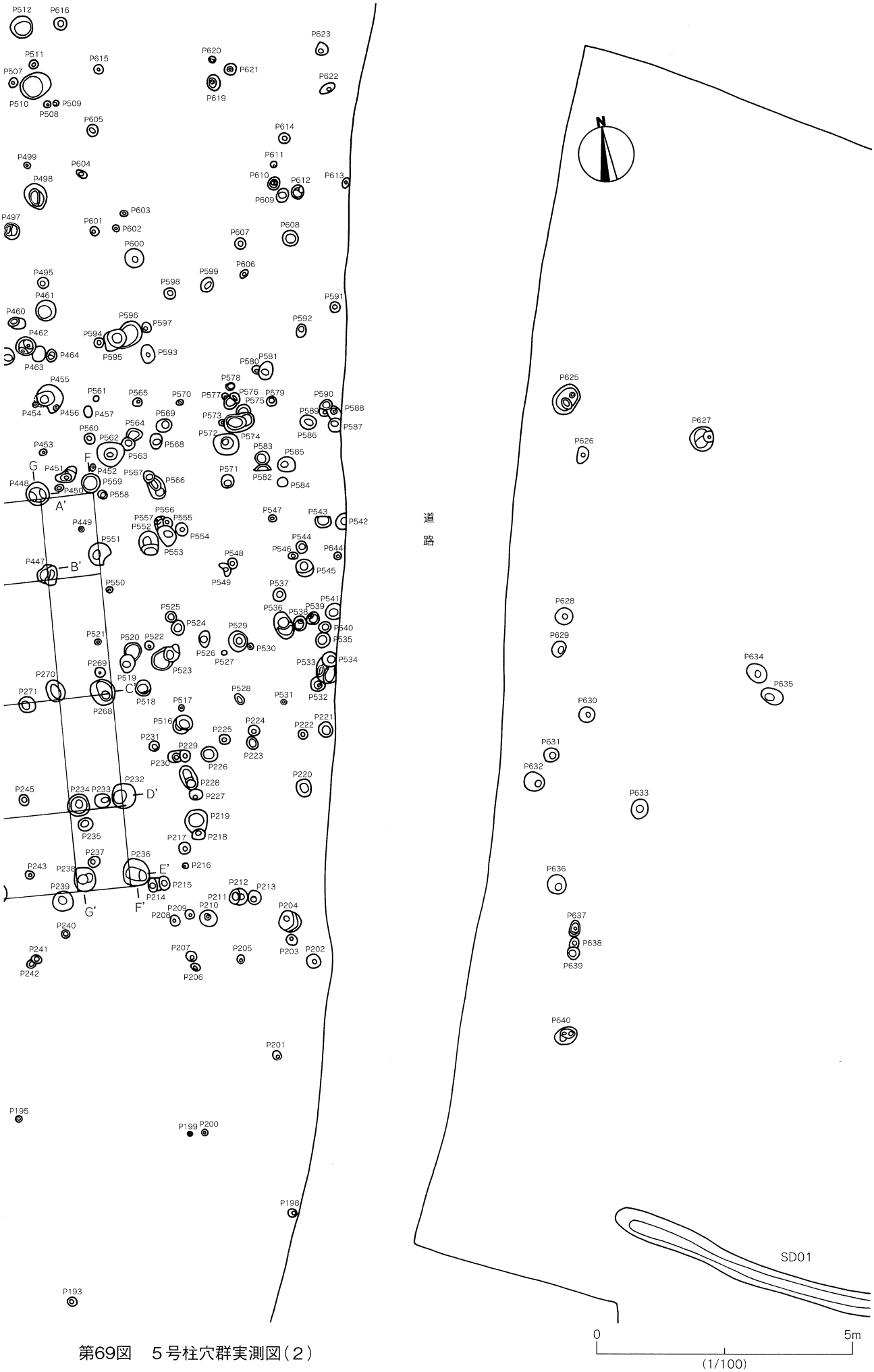
遺物　面積に比べると遺物量は少ないが、それでも土師質土器の皿４点と常滑産陶器の甕類破片が５点、さらに砥石が１点出土している。第82図５～８は土師質土器の皿である。非ロクロ成形によるもので、外面口縁部はヨコナデ、体部はナデ。内面はヨコナデによって仕上げられている。13世紀から14世紀の中世前期に比定されている。９～13は常滑産陶器の甕類の破片である。9・10・13は甕の肩部付近の破片で、9・10はスタンプ文が施されている。12・13は胴部下半部の破片である。14は凝灰岩製の砥石である。

所見　本遺構は出土遺物から13世紀から14世紀の中世前期の建物跡と考えられる。

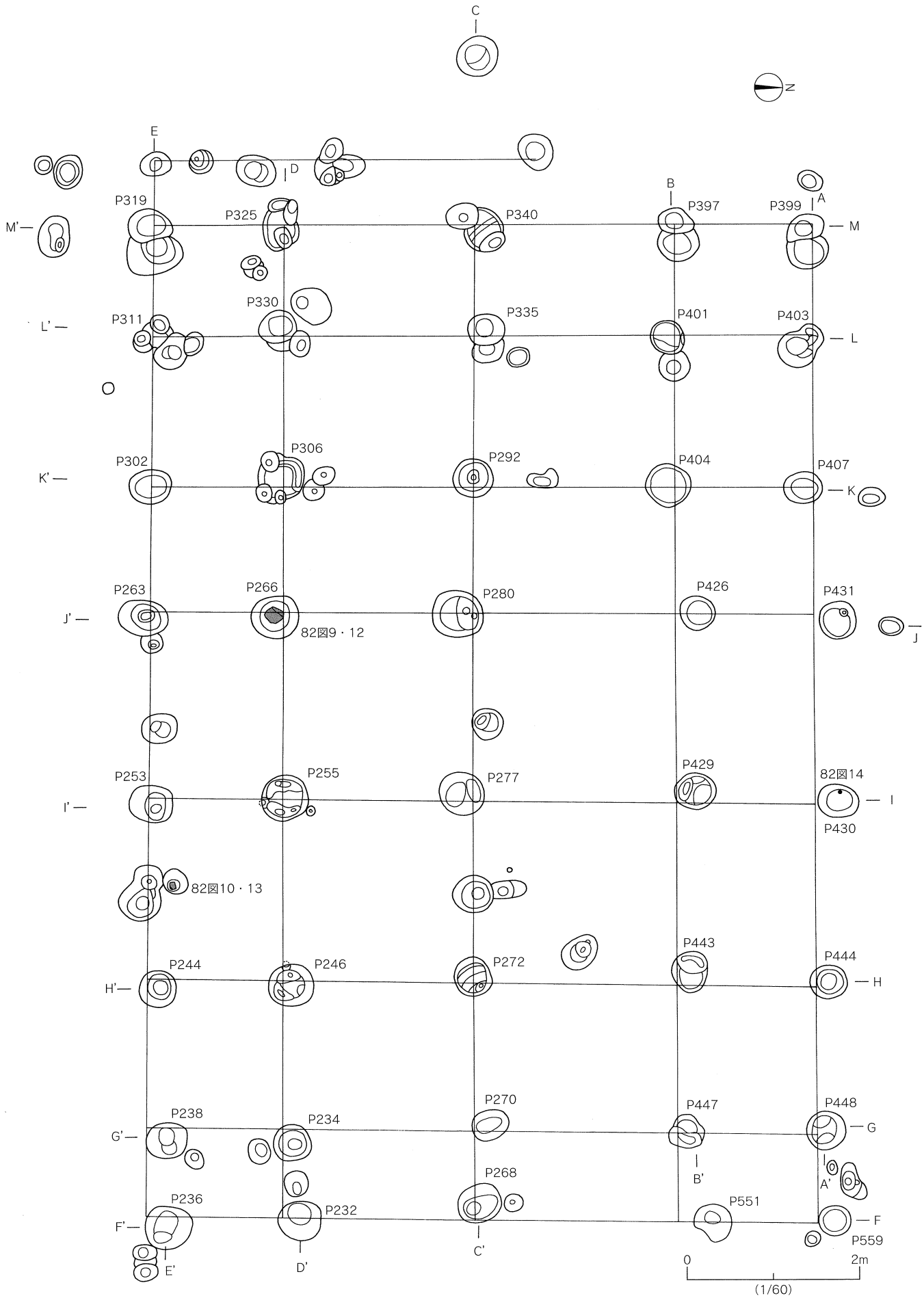
2．柱穴群

本調査区域で少なくとも５ヶ所に及ぶ柱穴跡が集中している地点が確認された。当初これら５ヶ所すべて掘立柱建物跡として認識し、それぞれ建物跡を表示する記号「ＳＢ」遺構番号で記載していたものを整理段階においてさまざまな建物跡パターンの図上操作の試みを行った。その結果、柵列跡のように一列に並ぶものの、掘立柱建物跡SB01以外の建物構造としての「柱配置」が整わないことが判明した。そのため、机上の思い込みによる無理な柱配列を行わず、検出された柱穴跡すべてを図化し、さらに深度を明示し、データのみを提示することによって、解釈の相違による混乱を避けた。これらの柱穴群に関しては、およそ１号掘

第68図　1号掘立柱建物跡、5号柱穴群実測図（1）



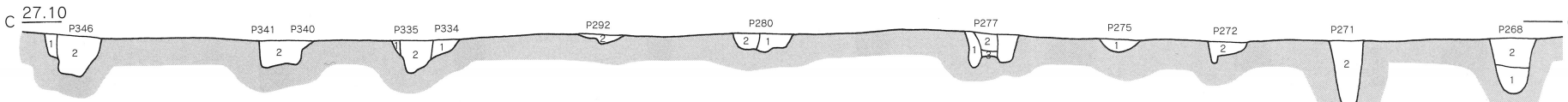
第69図　５号柱穴群実測図（２）



第70図　1号掘立柱建物跡実測図（2）

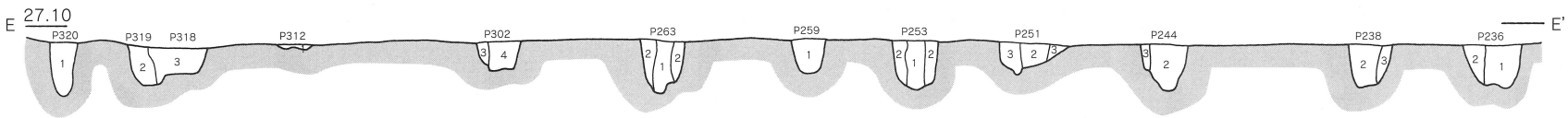
A－A'
1　褐色土　10YR4/6
　多量のローム粒、ロームブロックを含む
2　黒褐色土　10YR3/2
　多量のローム粒、ロームブロックを含む
3　黒褐色土　10YR3/4
　多量のローム粒、ロームブロックを斑状に含む
4　黒褐色土　10YR2/2
　多量のローム粒、ロームブロックを斑状に含む
5　黒褐色土　10YR2/2
　少量のローム粒、ロームブロック、凝炭質泥岩粒を含む

B－B'
1　黒褐色土　10YR3/2
　多量のローム粒、ロームブロックを含む
2　暗褐色土　10YR3/4
　多量のローム粒、ロームブロックを斑状に含む
3　黒褐色土　10YR2/2
　多量のローム粒、ロームブロックを含む



C－C'
1　黒褐色土　10YR3/2　多量のローム粒、ロームブロックを斑状に含む
2　黒褐色土　10YR2/2　多量のローム粒、ロームブロックを斑状に含む
3　暗褐色土　10YR3/4　多量のローム粒、ロームブロックを斑状に含み、しまりがある

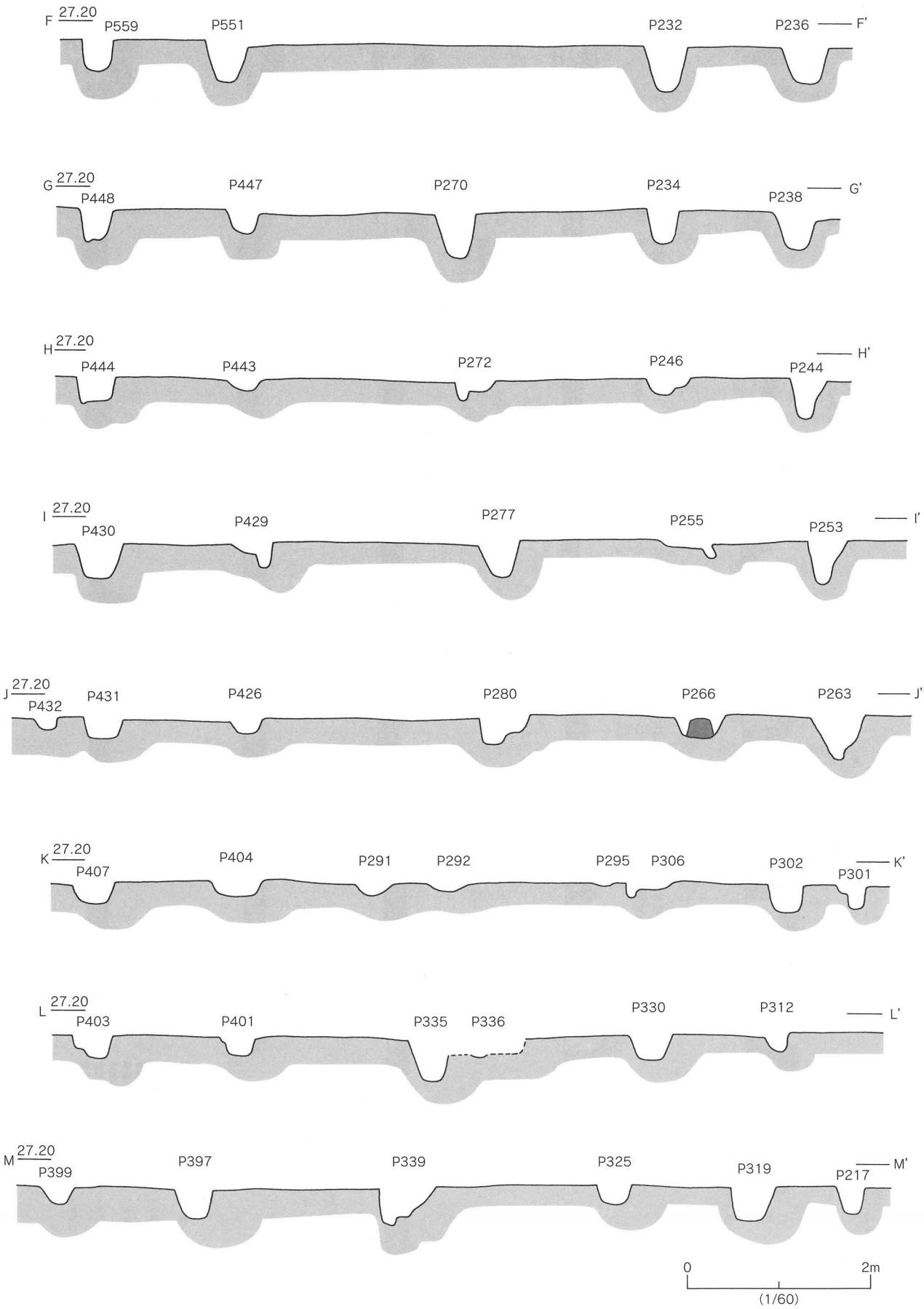
D－D'
1　黒褐色土　10YR3/2　多量のローム粒、ロームブロックを斑状に含む
2　黒褐色土　10YR3/2　多量のローム粒を含む
3　黒褐色土　10YR2/2　多量のローム粒を含む
4　黒褐色土　10YR3/2　多量のローム粒、ロームブロックを斑状に含み、しまりがある
5　黄褐色土　10YR5/6　多量のローム粒、ロームブロックを含む



E－E'
1　黒褐色土　10YR2/2　少量のローム粒、ロームブロックを斑状に含む
2　黒褐色土　10YR3/2　多量のローム粒、ロームブロックを斑状に含む
3　褐色土　10YR4/4　多量のローム粒、ロームブロックを斑状に含む
4　暗褐色土　10YR3/3　多量のローム粒、ロームブロックを斑状に含む

0　2m
(1/60)

第71図　1号掘立柱建物跡実測図(3)



第72図　1号掘立柱建物跡実測図(4)

立柱建物跡と同様な時期のものと考えられる。

１号柱穴群（第73・82図　PL.19・26）

調査区南東端のＵ－48・49、Ｖ－47・48・49・50、Ｗ－46・47・49・50、Ｘ－48・49・50、Ｙ－49・50区の標高26.97mに位置する。ここは中世の溝跡ＳＤ06 の南外側に当る。柱穴群の範囲は東西18.7m、南北12.8mの楕円形状に広がりをみせ、検出数は87本で構成されている。しかし、その分布状況は一定ではなく、16号墳周溝東溝と20号墳周溝西側に挟まれた地点に密集区域がみられる。この密集区域を中心にその外側は明らかに密度が薄くなり、柱穴群としての関連性も低くなっている。本群における柱穴の形状は円形を基本に、楕円形も含まれている。径は10.0～53cmで、平均すると径26.79cmとなり、また深さは3.1～45.8cmを測り、その平均は19.46cmである。柱穴内の覆土はほぼ黒褐色土で覆われており、自然堆積状況を示している。また、底面には柱当り痕が認められるものが多い。Ｐ55から銭貨「開元通寶」（第82図１）が出土している。

２号柱穴群（第74図）

調査区南西端のＤ－4、Ｅ－43・45、Ｆ－45・46、Ｇ－45・46、Ｈ－44・45・46、Ｉ－45・46区、標高26.82mに位置する。ここは中世の溝跡SD06の南西角内側に当る。柱穴群の範囲は東西21.3m、南北13.8mの楕円形状に広がりをみせ、検出数は70本で構成されている。やはり分布密度はやはり一定ではなく、24号墳周溝南西角と28号墳周溝東側および30号墳周溝北西角に挟まれた地点に集中区域がみられる。この集中区域を中心にその西外側は密度が薄くなり、柱穴群としての関連性も低くなっている。本群における柱穴の形状は円形を基本にわずかであるが楕円形も含まれている。径の大きさは12～35cmで、その平均は20.54cmである。また深さは2.5～41.1cmを測り、その平均は15.12cmである。柱穴内の覆土はほぼ黒褐色土で覆われており、自然堆積状況を示している。また底面には柱当り痕が認められるものが多く、遺物は出土しなかった。

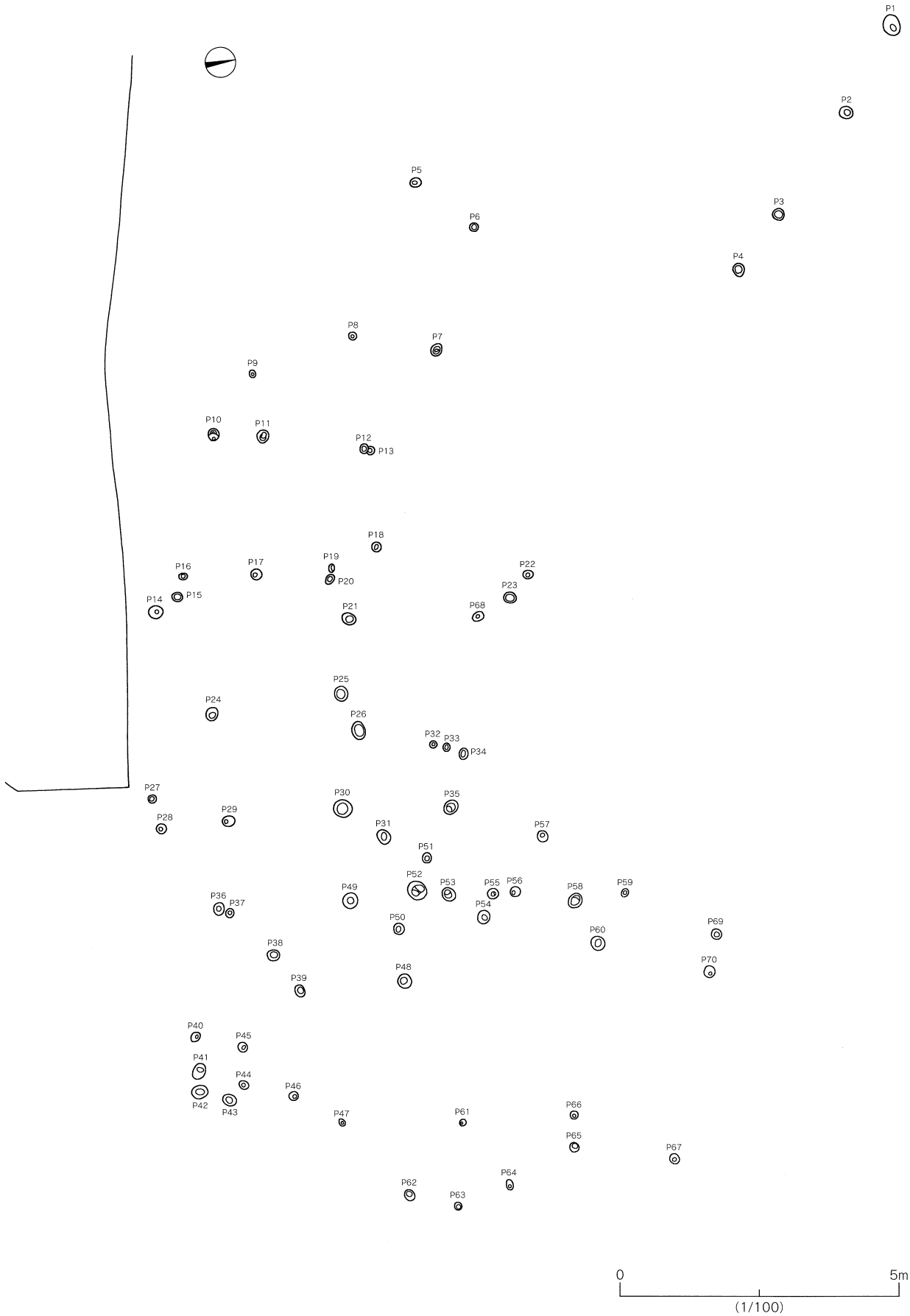
３号柱穴群（第75図）

調査区南側のＵ－48・49・50、Ｐ－49・50区の標高26.67mに位置する。ここは中世の溝跡SD06の南外側に当る。柱穴群の範囲は東西4.5m、南北11.8mの楕円形の広がりをみせているものの、検出数は17本で、その分布密度は非常に薄い。ここは16号墳周溝南西角と22号墳周溝北側に挟まれた地点で、16号墳の周溝内にも柱穴がみられるが、全体的なまとまりとしての柱穴群の関連性は低く、性格は不明である。本群における柱穴の形状は円形を基本にわずかであるが楕円形も含まれている。径の大きさは16.0～36.0cmで、その平均は33.35cmである。また深さは4.8～34.9cmを測り、その平均は19.58cmである。柱穴内の覆土はほぼ黒褐色土で覆われており、自然堆積状況を示している。また底面には柱当り痕が認められるものが多く、遺物は出土しなかった。

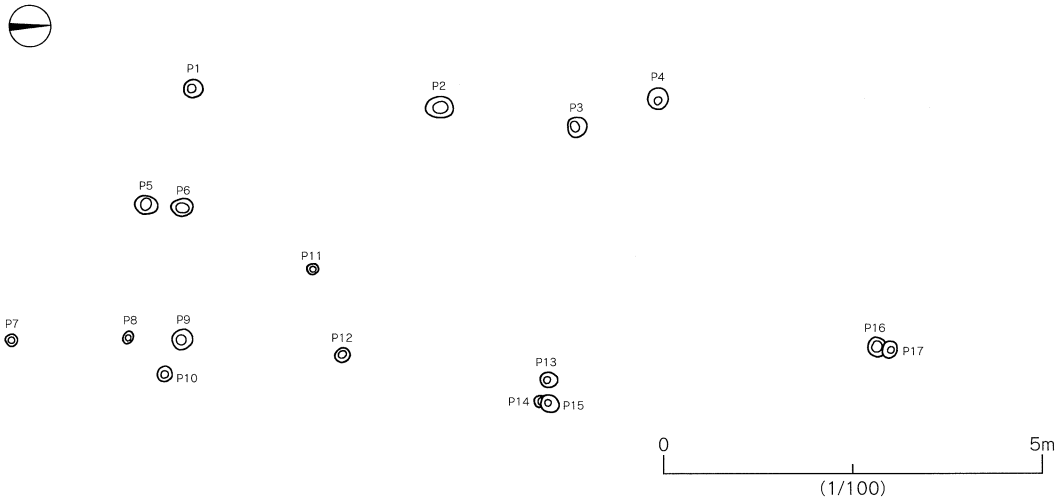
４号柱穴群（第76図）

調査区南側のＰ－42、Ｑ－42、Ｒ－43，44区、標高27.05mに位置する。ここは中世の溝跡SD06の南内側に当る。柱穴の分布範囲は東西11.7m、南北12.0mで、検出数は19本と分布密度は非常に薄い。ここは14号墳墳丘下および周溝西側の地点で、14号墳の周溝内にも柱穴がみられるが、全体的なまとまりとしての柱穴群の関連性は低く、性格は不明である。本群における柱穴の形状は円形を基本にわずかであるが楕円形も含まれている。径の大きさは16.0～40.0cmを測り、その平均は23.42cmである。また深さは2.5～28.8cmを測り、

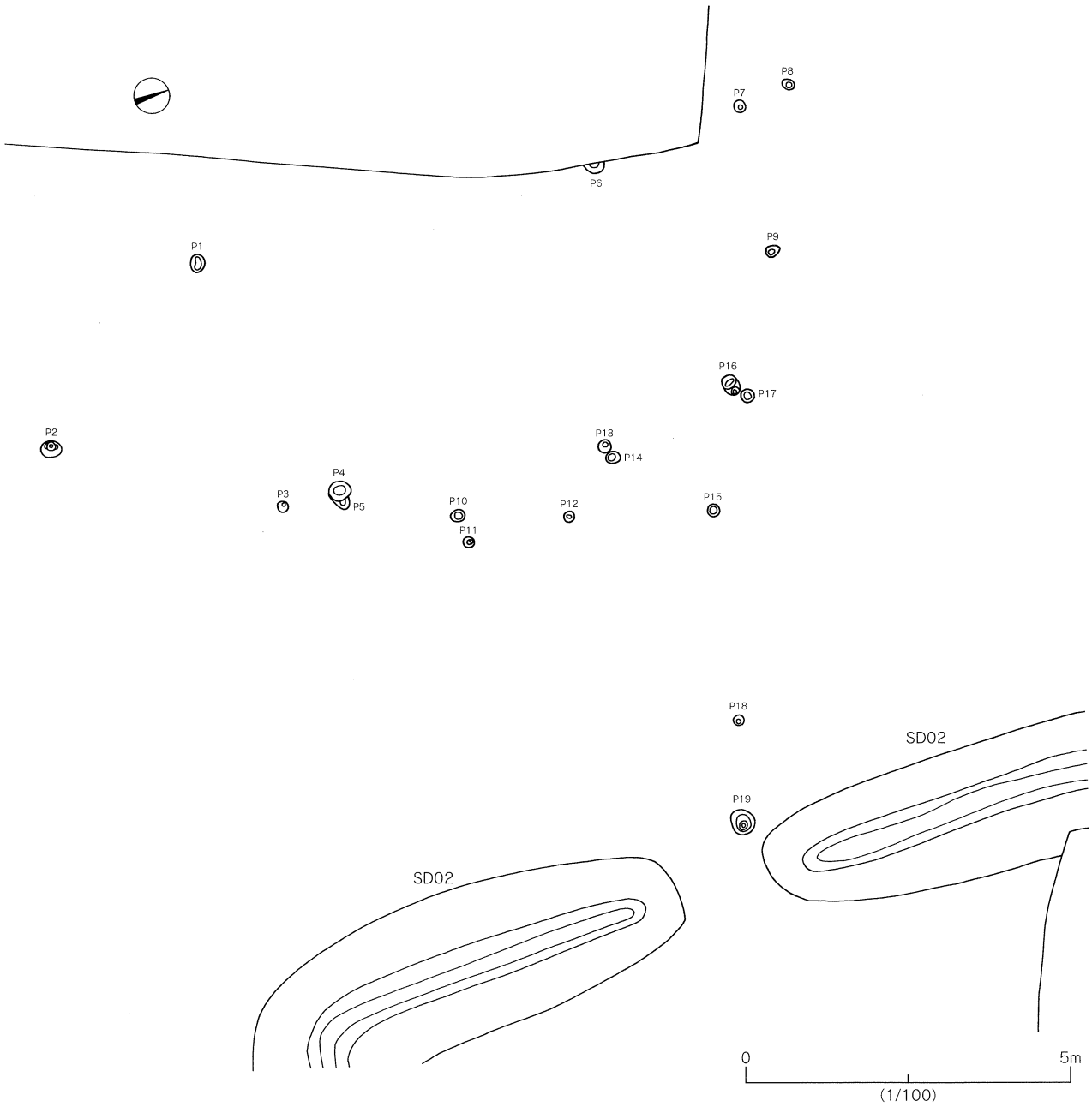
第73図　1号柱穴群実測図



第74図　２号柱穴群実測図



第75図　３号柱穴群実測図



第76図　４号柱穴群実測図

その平均は12.66cmである。柱穴内の覆土はほぼ黒褐色土で覆われており、自然堆積状況を示している。また底面には柱当り痕が認められるものが多く、遺物は出土しなかった。

５号柱穴群（第68・69・82図　PL.19・20・26）

調査区北側中央のＧ－36～40、Ｈ－34～41、Ｉ－32～42、Ｊ－32～39・41、Ｋ－32～38、Ｌ－32～39、Ｍ－32～38、Ｎ－33～38、Ｏ－34～37、Ｐ－36区、標高26.98mに位置する。ここは中世の溝跡SD06内側の南西側に当り、掘立柱建物跡SB01を中心にした柱穴群である。検出された柱穴の範囲は東西33m、南北42mのやや南北に長い楕円形状に広がりをみせ、検出数は建物跡SB01を含め642本で構成されており、全体的に密度の高い柱穴群である。しかもその分布状況は一定ではないものの、建物跡であり、柵列跡であり明らかに建物として認識できるものも多く含まれている。しかし、図上操作において建物跡SB01以外には建物構造としての「柱配置」が明瞭に整わないこと、さらに見方によってはいかようにも操作が可能であることから、今回は敢えて無理な柱配列を行わず、検出された柱跡すべてを図化し、さらに深度を明示し、データのみを提示することによって、解釈の相違による混乱を避けた。なお、柱穴集中個所は建物跡SB01を中心に、北側と南西側にまとまっている。しかも全体的に密度の薄くなることがないことから、大なり小なり建物跡の存在は完全に否定できない。本群における柱穴の形状は円形を基本にわずかであるが楕円形も含まれている。径は12.5～45.0cm、深さ1.0～79.4cmを測り、柱穴内の覆土はほぼ黒褐色土で覆われており、自然堆積状況を示している。また底面には柱当り痕が認められるものが多い。Ｐ513から銭貨「皇宋通寶」（真書）（第82図2）とＰ20から銭貨「熙寧元寶」（篆書）（第82図３）が出土している。

３．竪穴状遺構

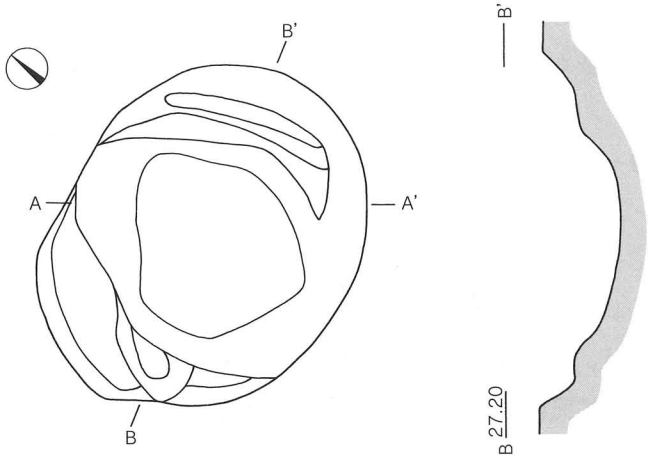
本遺構は、現地調査の段階で竪穴状遺構（SX）として取り扱ったものである。その中には古墳時代のものも含まれていたが、それらは先に掲載した。この項目で扱う竪穴状遺構の中には、いわゆる方形竪穴遺構などと呼ばれるものが含まれている。

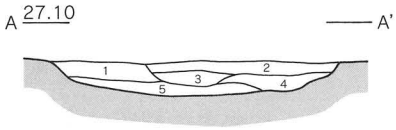
４号竪穴状遺構（ＳＸ０４）（第77図　PL.18）

調査区西側のＦ－42、Ｇ－42区、標高26.99mに位置し、28号墳墳丘下で検出された。規模は長軸2.44m、短軸1.91m、中央の深さ52cm、楕円形を呈する竪穴状遺構である。底面は東西両側に階段状のテラスを設け、二段に掘り込まれており、下段の規模は長軸1.26m、短軸1.12mである。主軸方向はＮ－78°－Ｅを指す。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は５層からなる。上層および中層は黒褐色土と褐色土。下層は暗褐色土で覆われており、人為的な堆積状況を呈する。遺物は出土していない。

５号竪穴状遺構（ＳＸ０５）（第77図　PL.18）

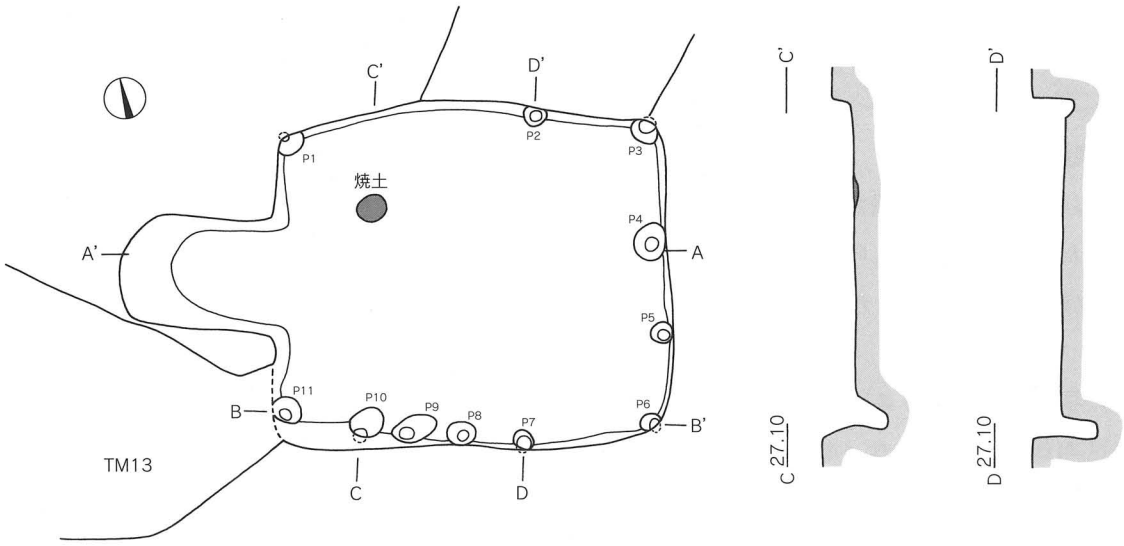
調査区北西側のＦ－37・38、Ｇ－37・38区、標高26.94mで、13号墳の北西角に位置する竪穴状遺構である。規模は長軸2.65m、短軸2.28m、深さ24cmの長方形を呈し、さらに西辺中央に出入口と思われる長軸1.01m、短軸0.72m、深さ21cmの長方形突出部を有する。主軸方向はＮ－79°－Ｗを指す。また、出入口部の入り口は緩やかな勾配をもつのに対し、主体部の壁面はほぼ垂直気味に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、中央付近に部分的であるが、硬化面が確認できる。また主体部の四隅と壁際に柱穴が穿ってある。南壁際には４本、対峙する北壁際には１本、さらに東壁際は２本検出され、合計で11本である。南壁際に対し、北壁際の１本

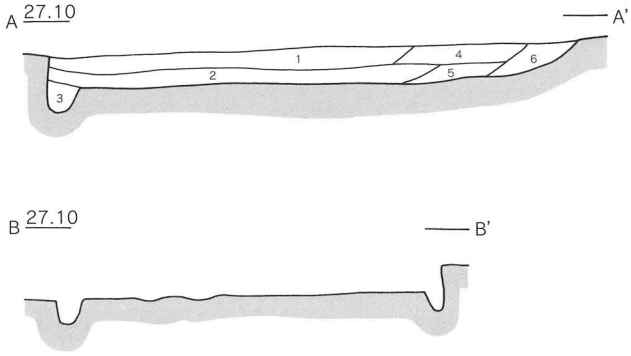




1　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒を斑状に含む
2　黒褐色土　10YR3/1　少量のローム粒、ロームブロックを含む
3　褐色土　10YR4/4　少量のローム粒、ロームブロックを含む
4　褐色土　10YR4/4　多量のローム粒、ロームブロックを含む
5　黒褐色土　10YR2/2　少量のローム粒を含む

SX04





1　黒褐色土　10YR2/3
　多量のローム粒、ロームブロックを斑状に含む
2　黒褐色土　10YR2/2
　少量のローム粒、ロームブロックを斑状に含み、少量の炭化粒・灰を含む
3　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒を含む
4　褐色土　10YR4/4
　多量のローム粒、ロームブロックを含む
5　黒褐色土　10YR3/2　多量のローム粒を含む
6　黒褐色土　10YR2/2　少量のローム粒を含む

0　2m
(1/50)

SX05

第77図　4・5号竪穴状遺構実測図

は余りにもバランスが悪いが各角部の４本が基本となることから問題はないであろう。検出された柱穴は下記のとおりである。

番号	形状	長径cm	短径cm	深さcm	番号	形状	長径cm	短径cm	深さcm
Ｐ１	楕円形	28.0	12.0	30.0	Ｐ２	円形	15.0	12.0	12.0
Ｐ３	楕円形	20.0	14.0	25.0	Ｐ４	円形	24.0	21.0	28.0
Ｐ５	円形	15.0	13.0	26.0	Ｐ６	円形	13.0	11.0	21.0
Ｐ７	円形	13.0	10.0	33.0	Ｐ８	円形	19.0	15.0	17.0
Ｐ９	楕円形	31.0	17.0	27.0	Ｐ10	楕円形	18.0	22.0	31.0
Ｐ11	円形	19.0	15.0	16.0					

覆土は６層に分層され、出入口部がレンズ状堆積に対し、主体部は並行堆積を示している。覆土の大半を覆っている黒褐色土は埋め戻しの人為的堆積であり、出入口部は自然堆積層である。遺物は出土していないが、形状から判断して中世に比定される。

７号竪穴状遺構（ＳＸ０７）（第78図　PL.18）

調査区北西側のＧ－32・33区、標高27.11mに位置する。規模は長軸3.80m、短軸2.20m、深さ48.0cmの長方形を呈する竪穴状遺構である。主軸方向はＮ－９°－Ｅを指す。底面は平坦で、全体的に床面は軟弱である。壁は外傾して立ち上がる。

覆土は２層からなる平行堆積である。上層はにぶい黄褐色土、下層は褐色土で覆われており、人為的な堆積状況を呈する。遺物は出土していない。

８号竪穴状遺構（ＳＸ０８）（第78・83図　PL.18）

調査区北端のＨ－31・32、Ｉ－31・32区、標高26.90mに位置する。規模は長軸3.23m、短軸1.70m、深さ37.0cmを測る長方形を呈する。主軸方向はＮ－75°－Ｗを指す。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は４層からなり、上層は黒褐色土およびにぶい黄褐色土。下層は褐色土と黒褐色土で覆われており、人為的な堆積状況を呈する。遺物として、小破片であるが、土師質土器の皿が１点出土している。

遺物　第83図17は、土師質土器の皿の口縁部小破片である。推定口径11.8cmを測り、手捏ねによる成形で、内外面口縁部はヨコナデが施されている。胎土に石英・長石粒を含み、色調は浅黄橙色を呈する。

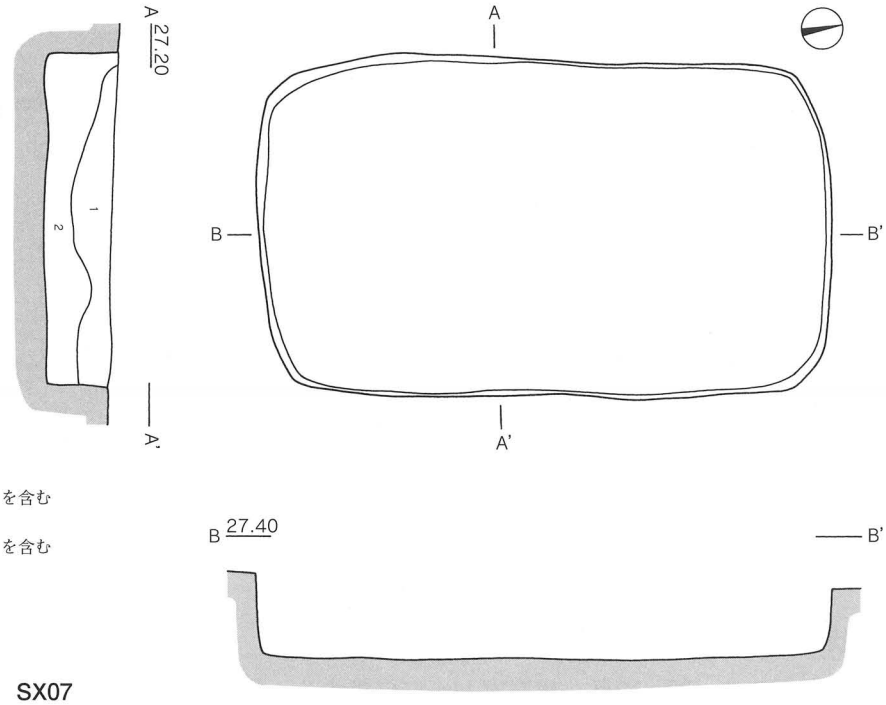
所見　本遺構は出土遺物から中世のものと考えられる。

４．溝跡

本遺跡の第２次調査エリアや神明遺跡第１・３・４次調査エリアにおいて検出し、既に遺構名が付されている中世の方形館跡を構成する堀（註１）とも考えられてきた６号溝跡（SD06）以外にも溝状の遺構が新たに５条確認されている。しかも直線的ないわゆる境溝以外にも方形を意識した区画溝も含まれる。

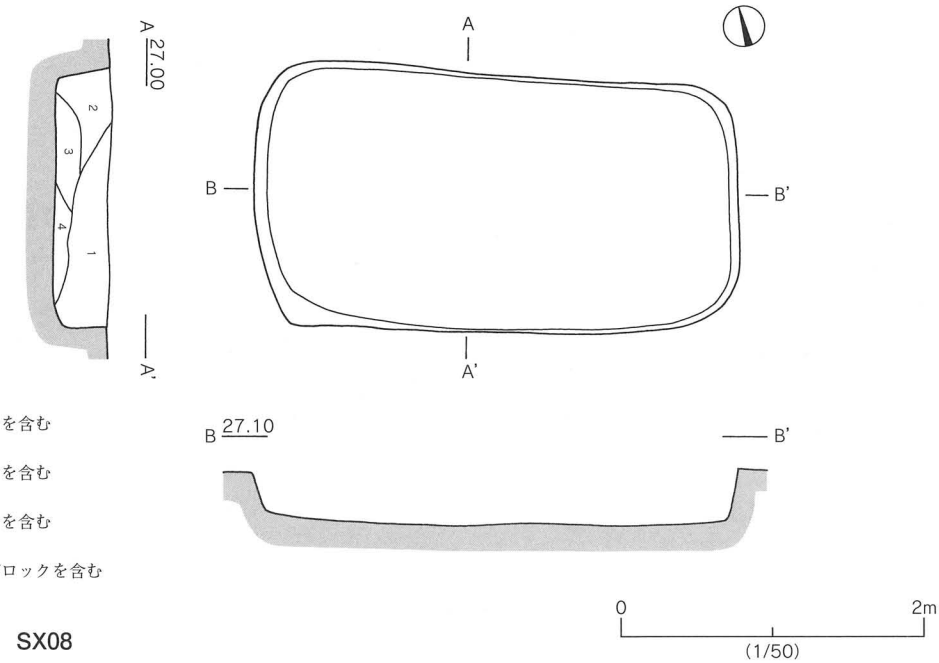
１号溝跡（ＳＤ０１）（第５図）

調査区北東側のＯ－39、Ｐ－39、Ｑ－39・40区、標高27.06mに位置し、12号墳の南側を切って構築されている。方位をＮ－62°－Ｗにとり、東西方向にほぼ直線的に走る溝で、検出された全長は10.78m、溝の幅27～68cm、深さ8～24cmを測り、断面形は底面が丸みをもつＵ字状で、壁面は緩傾斜して立ち上がる。溝底



1　にぶい黄褐色土　10YR4/3
　多量のローム粒、ロームブロックを含む
2　褐色土　10YR4/6
　多量のローム粒、ロームブロックを含む

SX07



1　黒褐色土　10YR3/2
　多量のローム粒、ロームブロックを含む
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3
　多量のローム粒、ロームブロックを含む
3　褐色土　10YR4/4
　多量のローム粒、ロームブロックを含む
4　黒褐色土　10YR2/3
　多量のローム粒、少量のロームブロックを含む

SX08

第78図　7・8号竪穴状遺構実測図

の比高差はない。覆土は黒褐色土の単一層の自然堆積である。遺物は検出できなかったが、覆土の状況から判断して、近世以降の畑地の境溝と推定される。

所見　近世以降のものと考えられる。

２号溝跡（ＳＤ０２）（第79・82図　PL.26）

調査区西端のＳ－41・42・43・44、Ｔ－41・43・44・45、Ｕ－41・44・45、Ｖ－44、Ｗ－43・44、Ｘ－44区、標高26.91～27.05mに位置する方形区画溝である。本跡は少なくとも３基が重複しており、溝跡SD03、05を切って構築している。また、東側が未調査区域に延びている。形状は溝のみで、西溝側が狭く、南北溝側が広い長方形を呈するものと推定される。また西溝側中央に溝の途切れがみられ、この部分が陸橋状となる。この陸橋状の部分を主軸とすると主軸方向はＮ－80°－Ｅを指す。規模は、南北軸15.32m。検出された東西軸は18.60ｍを測り、西側陸橋部の幅1.38ｍである。また、溝断面形は漏斗状を呈し、壁はやや内湾気味に立ち上がる。溝の幅は上幅230～255cm、中段幅38～51cm、溝底幅18～30cm、深さ65cmを測り、溝底は狭くなり平坦である。覆土は４層に分層され、レンズ状堆積を示す自然堆積層であるが、底面に灰白色粘土粒子の混入が部分的にみられた。なお、南溝西寄り溝底から土師質土器の皿（第79図２、第82図20）が出土した。

遺物　覆土中から土師質土器の皿６点と常滑産陶器の甕類破片２点が出土した。第82図19～24は土師質土器の皿で、19～21は非ロクロ成形によるもので、外面口縁部はヨコナデ、体部はナデ。内面はヨコナデによって仕上げられている。13世紀から14世紀の中世前期に比定されている。なお、21は口唇部にタールの付着がみられ、灯明皿として使用されたものである。また22～24はロクロ成形によるもので、底部回転糸切り痕を残している。23・24は中世前期の13世紀から14世紀に比定される。25・26は常滑産陶器の甕類の破片である。25は甕の肩部付近の破片。26は胴部下半部の破片である。

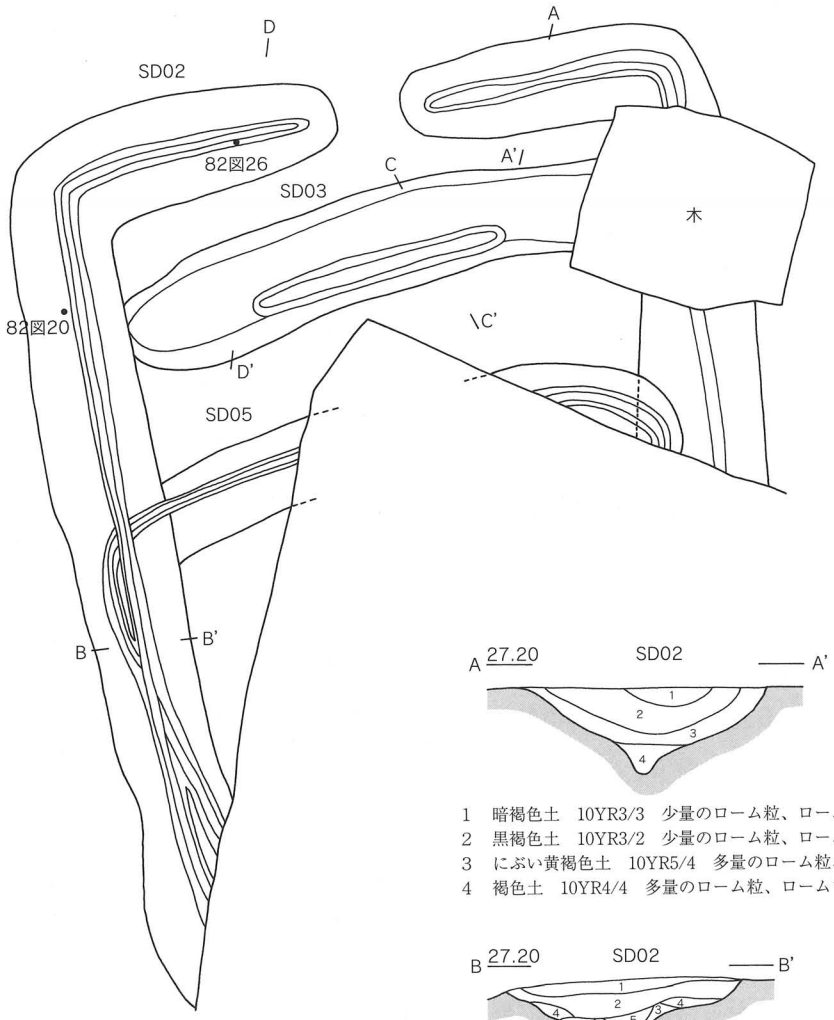
所見　本遺構は出土遺物から13世紀から14世紀の中世前期のものと考えられる。

３号溝跡（ＳＤ０３）（第79図）

調査区側のＳ－42、Ｔ－42・43・44、Ｕ－44区、標高26.94～26.99mに位置する方形区画溝と推定される。本跡は溝跡SD02によって南北両溝を切られ、東側が未調査区域に延びている。形状は西溝のみ検出であるが、西溝側が狭く、南北溝側が広い長方形を呈するものと推定される。主軸を長軸方向とすると主軸方向はＮ－78°－Ｅを指す。検出された西溝の規模は、長さ10.5m、幅2.21m、深さ19.5cmを測り、底面はほぼ平坦であるが、東壁際に長さ510cm、幅61cm、深さ10.5cmの小溝が掘削されている。断面形は逆台形を呈し、壁は外傾して立ち上がる。遺物は検出できなかった。

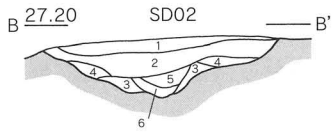
４号溝跡（ＳＤ０４）（第80・83図　PL.21）

調査区北西側のＣ－37、Ｄ－36・37、Ｅ－36・37、Ｆ－36・37、Ｇ－36、Ｈ－36区、標高26.78～26.96mに位置し、方位をＮ－84°－Ｅにとる東西方向にほぼ直線的に走る溝である。検出された全長は20.19mで、溝の幅1.59～1.95cm、深さ37～42cmを測り、断面形は箱状を呈し、底面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で、西側が浅く、東側が低くわずかに傾斜している。その比高差は14.5cmである。覆土は３層に分層でき、上層は黒褐色土、下層は褐色土で覆われている自然堆積。遺物は覆土中から瀬戸美濃系陶器、常滑産陶器等が出土している。なお、東端には掘立柱建物跡SB01がほぼ同じ方位に位置するが、関連性については把握できていない。

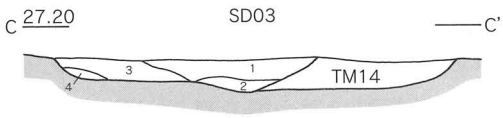


0　4m
(1/160)

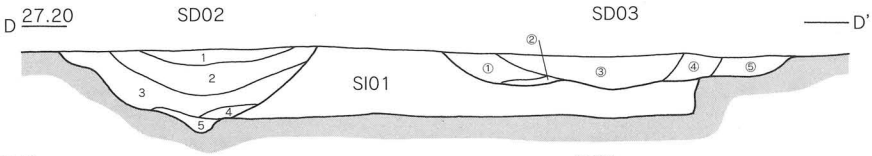
1　暗褐色土　10YR3/3　少量のローム粒、ロームブロックを含む
2　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒、ロームブロックを含む
3　にぶい黄褐色土　10YR5/4　多量のローム粒、ロームブロックを含む
4　褐色土　10YR4/4　多量のローム粒、ロームブロックを含む



1　にぶい黄褐色土　10YR5/4　少量のローム粒を含む
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3　少量のローム粒を含む
3　暗褐色土　10YR3/3　少量のローム粒、ロームブロックを含む
4　暗褐色土　10YR3/4　少量のローム粒、ロームブロックを含む
5　暗褐色土　10YR3/3　少量のローム粒、灰色粘土を含む
6　暗褐色土　10YR3/3　少量のローム粒、多量の灰色粘土を含む



1　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒、ロームブロックを含む
2　褐色土　10YR4/4　少量のローム粒、多量のロームブロックを含む
3　褐色土　10YR4/4　少量のローム粒、ロームブロックを含む
4　にぶい黄褐色土　10YR4/3　多量のローム粒、ロームブロックを含む



SD02
1　灰黄褐色土　10YR4/2　少量のローム粒、微量の炭化粒を含む
2　黒褐色土　10YR3/2
　少量のローム粒、微量の炭化粒、少量の焼土粒を含む
3　黒褐色土　10YR3/1　少量のローム粒、微量の炭化粒を含む
4　黒褐色土　10YR3/1　多量のローム粒を含む
5　黒褐色土　10YR3/1　少量のローム粒、少量の粘土粒を含む

SD03
1　黒褐色土　10YR3/2　少量のローム粒、ロームブロックを含む
2　暗褐色土　10YR3/3　多量のローム粒、ロームブロックを含む
3　黒褐色土　10YR3/1　少量のローム粒、ロームブロックを含む
4　暗褐色土　10YR3/4　少量のローム粒を含む
5　褐色土　10YR4/6　多量のローム粒を含む

0　2m
(1/60)

第79図　2・3・5号溝跡実測図

遺物　覆土中から瀬戸美濃系陶器の灰釉丸皿のほか、土師質土器の皿２点と常滑産陶器の甕類破片３点出土している。第83図１は瀬戸美濃系陶器の灰釉丸皿である。底部破片であるが、見込みに葉文スタンプが施され、高台は削り高台である。中世後期の16世紀代に比定される。また、２・３は土師質土器の皿である。２は非ロクロ成形によるもので、外面口縁部はヨコナデ、体部はナデ。内面はヨコナデによって仕上げられている。13世紀から14世紀の中世前期に比定され、３はロクロ成形で、底部に回転糸切り痕を残している。また、内面にはナデ整形がみられない。４～６は常滑産の甕類の破片である。４は甕の肩部付近の破片。５・６は胴部下半部の破片である。

所見　本遺構は出土遺物から13世紀から14世紀の中世前期の遺物が主体を占めている。

５号溝跡（ＳＤ０５）（第79図）

調査区側のＵ－41・42・43・44、Ｖ－44、Ｗ－43・44、Ｘ－44区、標高26.96mに位置する方形区画溝である。本跡は溝跡ＳＤ02によって南北両溝を切られ、東側が未調査区域に延びている。形状は溝のみで、西溝側が狭く、南北溝側が広い長方形を呈するものと推定される。主軸方向はＮ－78°－Ｅを指す。規模は、南北軸12.25m、検出された東西軸は9.13mを測る。また、溝断面形は漏斗状を呈し、溝の幅は上幅172cm、中段幅30cm、溝底幅15cm、深さ 50cmを測り、溝底は平坦である。覆土は４層に分層され、レンズ状堆積を示す自然堆積層である。遺物は検出できなかった。

６号溝跡（ＳＤ０６）（第80・83・85図　PL.20・21・26）

調査区西端から南側のＢ－35～43、Ｃ－39～46、Ｇ－48、Ｈ－48、Ｉ－48、Ｊ－48、Ｋ－47・48、Ｌ－47・48、Ｍ－47・48、Ｎ－47・48、Ｏ－47、Ｐ－47、Ｑ－47、Ｒ－47、Ｓ－46・47、Ｔ－46・47、Ｕ－46・47、Ｖ－46・47、Ｗ－46・47、Ｘ－46、Ｙ－46、Ｚ－46、２Ａ－46区に及ぶ標高26.74～26.88mに位置する大規模な方形区画溝である。本跡は過去４ヵ年の調査により、漸くその全体的な様相が把握されたわけであるが、まだ一部未調査区域に延びているため、その全貌を今回も明らかにすることができなかった。まず調査は神明遺跡第１次調査で確認された南北に走る「西溝」の南側約半分が確認された。北側から７・18・27・26号墳を切って直線的に延びている。方位はＮ－２°－Ｗを示している。溝の規模は上幅1.85～2.17m、下幅0.34～0.52mを測り、深さは74.5～86.0mで北側よりも南側が低くなっている。その比高差は26.5cmである。断面形は逆台形の箱薬研を呈し、覆土はレンズ状の自然堆積層であり、調査区の北端から南端まで46.0mの区間を検出できた。しかし、南端にあたる南西角は調査区域に延び確認できなかったが、未確認部分である南側延長先から90°東側に振ると、これに接続すると思われる東西に走る「南溝」を確認できる。やはり、西から30・23・16・19号墳を切って直線的に延び、方位はＮ－87°－Ｅを示している。16号墳北溝にかかる部分は幅広くなっているが、溝の規模は上幅1.58～2.28m、下幅0.38～0.89mを測り、深さは52.1～69.4cmで西側よりも東側が低くなっており、その比高差は10.0cmである。断面形はやはり逆台形の箱薬研を呈し、覆土はレンズ状堆積の自然堆積層であり、調査区の北端から南端まで81.0mの区間を検出できた。これによって、未完掘であるが、南北約125m、東西約103mの方形区画溝であることが判明した。なお、山川古墳群第２次調査において東溝覆土中央に人の往来により形成された「道」と思われる硬化面がみられたが、今回の西溝および南溝では確認できなかった。

遺物　調査面積に比べると遺物量は少ないが、それでも土師質土器の皿３点と常滑産陶器の甕類破片が６点、さらに土錘の破片が１点出土しており、時期を特定できるものが多い。第83図７～９は土師質土器の皿であ

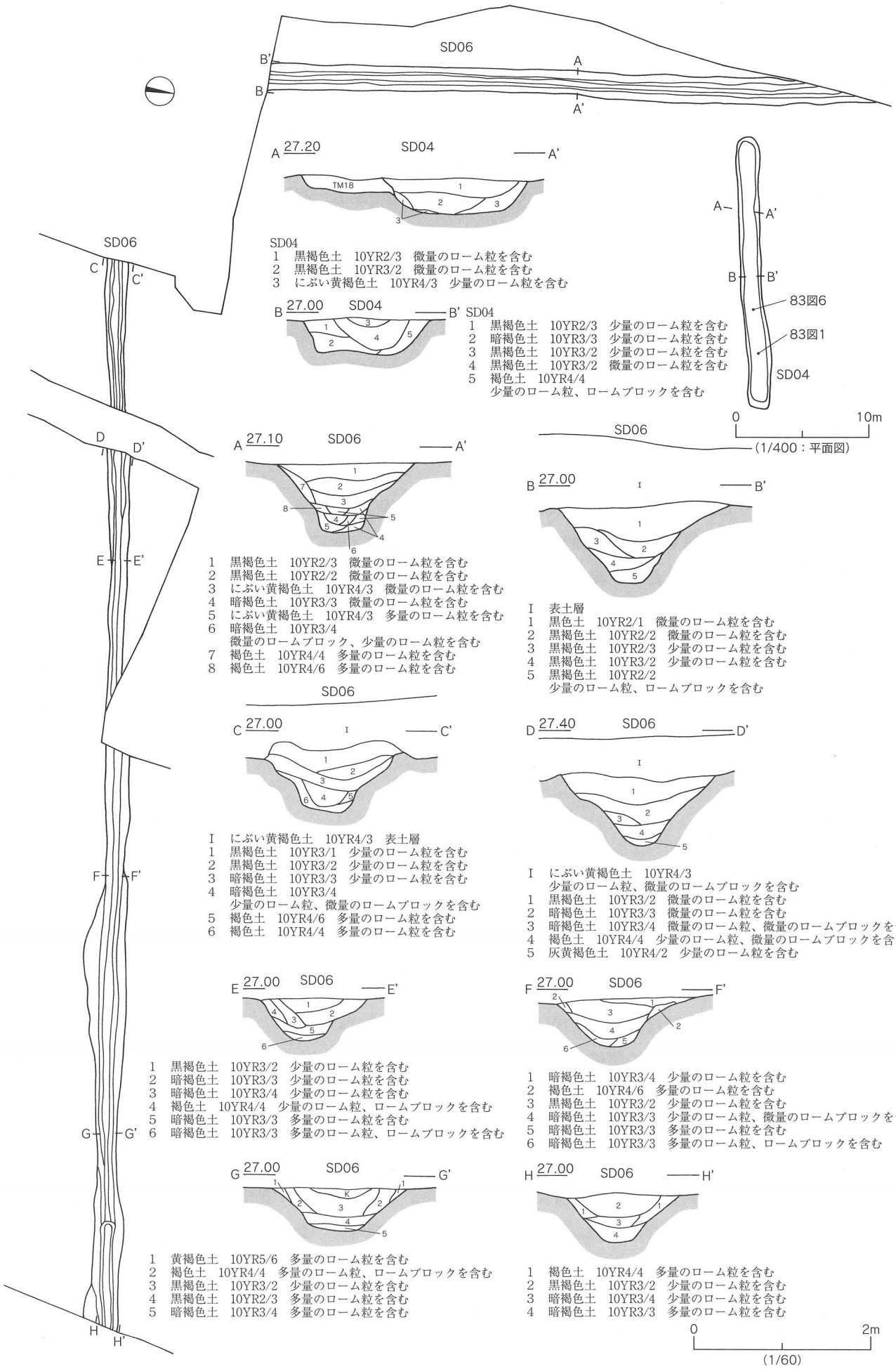
る。非ロクロ成形によるもので、外面口縁部はヨコナデ、体部はナデ。内面はヨコナデによって仕上げられている。13世紀から14世紀の中世前期に比定されている。同図10～15は常滑産陶器の甕類の破片である。10～12は甕の肩部付近の破片。13～15は胴部下半部の破片である。16は土錘の欠損品である。

所見　以前の調査結果同様に、本遺構は出土遺物から13世紀から14世紀の中世前期のものと考えられる。

註釈

1）今回の調査で６号溝跡（SD06）とした遺構の名称について、過去の神明遺跡第３次調査では「第６号溝（SD－６）」、神明遺跡第４次調査では「堀である第６号溝跡」、山川古墳群第２次調査では「堀（SD06）」が用いられ、様々な表現をとってきた。今報告では、堀としての機能も考慮できる溝跡として、当初の表現と同様な名称を用いた。

６号溝跡調査状況



第80図　4・6号溝跡実測図

５．土坑

３号土坑（ＳＫ０３）（第81図　PL.4）

調査区中央のＮ－42区、標高27.09mに位置し、南側約半分は未調査区域に広がっている。検出された規模は長軸161cm、短軸86cmの円形を呈するものと推定される。深さ37cmを測り、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は５層に分層され、レンズ状の自然堆積層である。遺物は検出できなかったが、覆土の状態から中世に推定される。

１５号土坑（ＳＫ１５）（第81図　PL.5）

調査区側のＭ－33、Ｎ－33区、標高26.92mに位置する。規模は長軸126cm、短軸124cmの円形を呈する。深さ12cmを測り、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は暗褐色土の単一層からなり、人為的な埋め戻し土層である。遺物は検出できなかったが、覆土の状態から中世に推定される。

１６号土坑（ＳＫ１６）（第81図　PL.5）

調査区北端のＭ－32区、標高26.89～26.93mに位置する。規模は長軸108cm、短軸98cmの円形を呈し、深さは９cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は２層に分層され、人為的な埋め戻し土層である。遺物は検出できなかったが、覆土の状態から中世に推定される。

１７号土坑（ＳＫ１７）（第81図　PL.5）

調査区北端のＮ－32区、標高26.92mに位置し、東側約半分は未調査区域に広がっている。規模は長軸103cm、短軸87cmの円形を呈するものと推定される。深さ30cmを測り、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。覆土は２層に分層され、人為的な埋め戻し土層である。遺物は検出できなかったが、覆土の状態から中世に推定される。

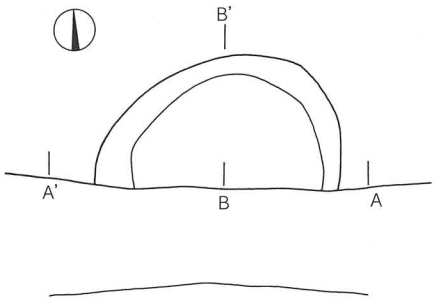
６．井戸跡

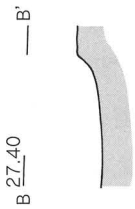
１号井戸跡（ＳＥ０１）（第81図　PL.21・26）

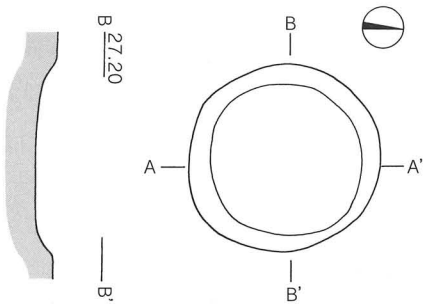
調査区北東側、8号墳周溝内のＱ－35・36区、標高26.02～26.07mに位置する。規模は長軸1.54m、短軸1.42mのやや南北に長い楕円形を呈し、主軸方向はＮ－31°－Ｗを指す素掘りの井戸である。人力の調査では、８号墳周溝底にあたる確認面から２ｍまで調査したが、壁面の崩落の危険があると判断したため底面までは至らなかった。井戸の壁面はほぼ垂直な筒状に掘削され、掘削痕は認められず、起伏もなく丁寧な造りの井戸である。そして、覆土は、調査の関係で確認面から１ｍまでしか観察できなかった。したがって、分層できたのは上層の７層である。ほぼ上層は黒褐色土で覆われ、下層は黒色土を確認した。少なくとも上層はレンズ状をなす自然堆積層である。遺物は確認面から20～30cmと比較的浅い覆土から出土しているが、古墳周溝内の検出であることから、本来は40～50cmほど高い位置に確認面を設定しなおさねばならないであろう。

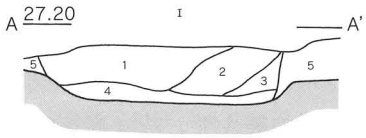
この井戸に関しては、調査終了時に重機によって確認面から６ｍ近くまで掘削を行うことができたが、やはり底面まで至ることはできなかった。この重機による井戸掘削時に、以下で述べる第82図15の青磁破片や同図16の土師質土器の皿、そして同図18の常滑産陶器が出土した。

遺物　確認面から２ｍ以下の覆土中から青磁碗の破片、土師質土器の皿２点と常滑産陶器の甕破片が出土している。第82図15は竜泉窯系青磁の画花文碗（Ｉ－４類）で、体部下半部の破片である。中世前期12世紀後



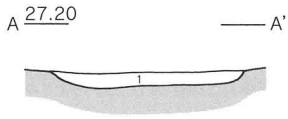






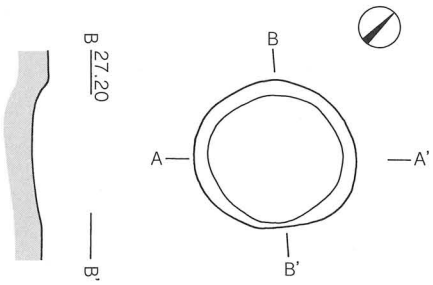
I　褐色土　7.5YR4/3　表土層
1　暗褐色土　7.5YR3/3
　少量のローム粒、微量のロームブロックを含む
2　暗褐色土　7.5YR3/4
　多量のローム粒、微量のロームブロックを含む
3　にぶい黄褐色土　10YR4/3　多量のローム粒を含む
4　黄褐色土　10YR5/6　多量のローム粒を含む
5　黄褐色土　10YR5/8　多量のローム粒を含む

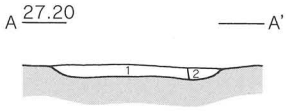
SK03



1　暗褐色土　10YR3/3　多量のローム粒、ロームブロックを球状に含む

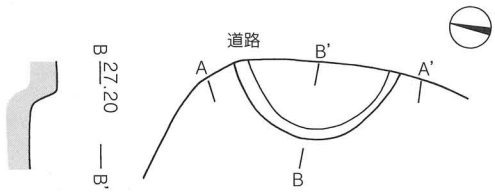
SK15

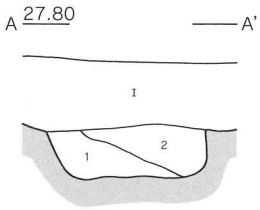




1　暗褐色土　10YR3/3
　多量のローム粒、ロームブロックを球状に含む
2　黒褐色土　10YR3/1　少量のローム粒を含む

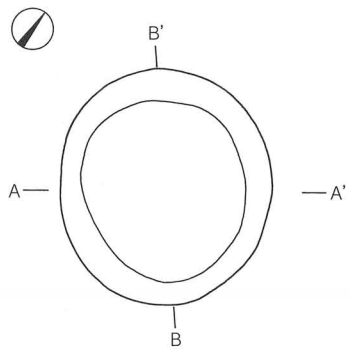
SK16

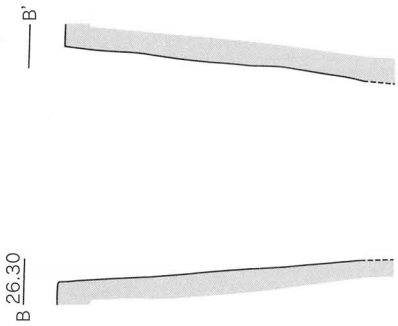


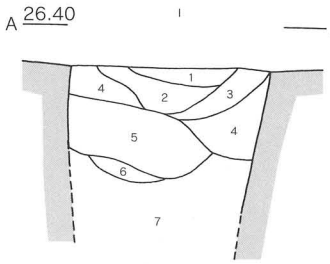


I　灰黄褐色土　10YR4/2　表土層
1　褐色土　10YR4/4
　多量のローム粒、ロームブロックを球状に含む
2　暗褐色土　10YR3/4
　多量のローム粒、ロームブロックを球状に含む

SK17

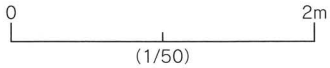






1　黒褐色土　10YR3/1　微量のローム粒を含む
2　黒褐色土　10YR2/2　微量のローム粒を含む
3　黒褐色土　10YR2/2　少量のローム粒を含む
4　黒褐色土　10YR2/3　少量のローム粒を含む
5　黒褐色土　10YR3/1　少量のローム粒、焼土粒を含む
6　黒褐色土　10YR2/3　多量のローム粒を含む
7　黒色土　10YR2/1　少量のローム粒を含む

SE01



第81図　3・15・16・17号土坑、1号井戸跡実測図

半から13世紀前半に比定される。16・17は土師質土器の皿である。いずれも非ロクロ成形によるもので、外面口縁部はヨコナデ、体部はナデ。内面はヨコナデによって仕上げられている。13世紀から14世紀の中世前期に比定され、17は完形品である。18は常滑産陶器の甕類胴部下半部の破片である。

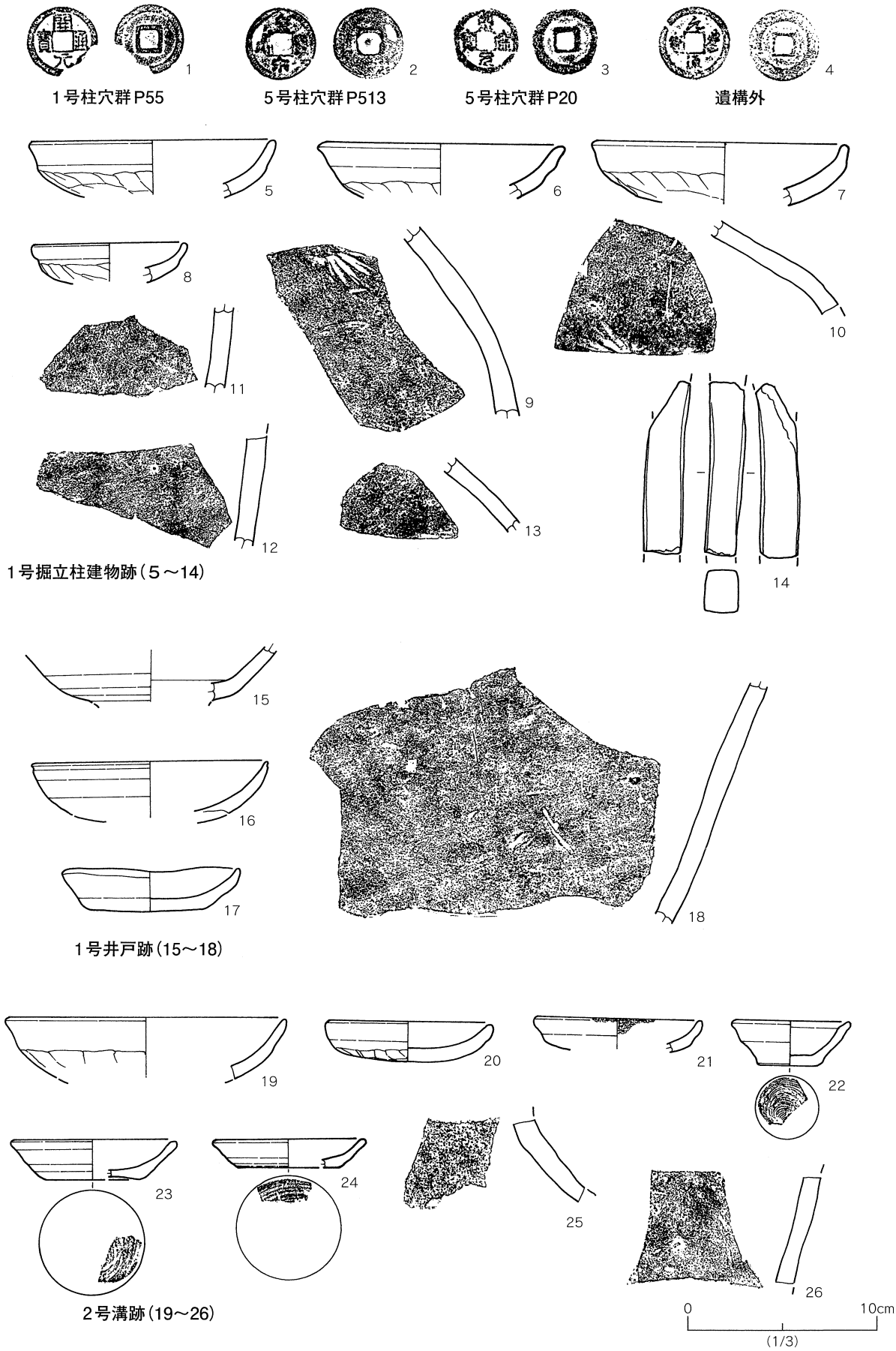
所見　本遺構は出土遺物から中世前期のものと考えられる。

（小川和博）

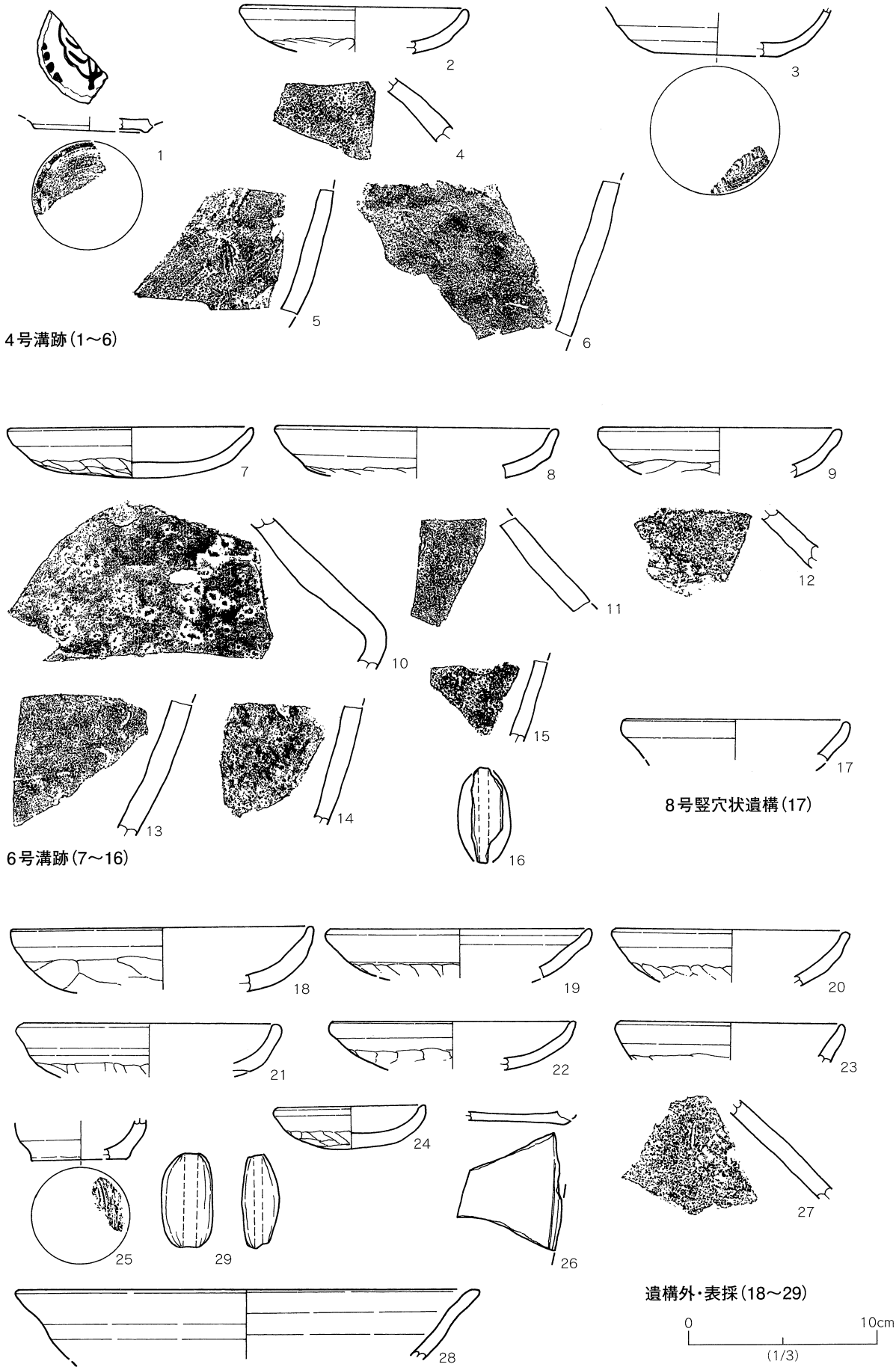
7．遺構外出土遺物（第83図　PL.26）

調査区内では、古墳時代の遺構覆土中から中世の遺物が若干出土している。第83図18～25は土師質土器の皿である。25以外は非ロクロ成形されている。これらの土師質土器皿の口径法量はおよそ大小の２種類見られる。26は土師質土器の内耳土鍋の底部破片である。27・28は常滑産陶器の破片で、27は甕類の胴部破片である。28は片口鉢の口縁部破片を回転復元したものである。片口鉢でもⅠ類と考えられ、6b型式以前のものと思われる。29は偏平な土錘で長軸に孔が完通している。この他、第82図４の銭貨「元豊通寶」が出土している。

（関口　満）



第82図　中世出土遺物（1）



第83図　中世出土遺物(2)

表５．山川古墳群第３次調査出土遺物観察表

（１）古墳時代出土遺物

遺構	挿図番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
７号墳	第28図－１	土師器	坏	14.80	5.70	3.50	黒色粒子・石英・長石を含む	赤褐色2.5YR4/6	良好	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	ほぼ完形品 内外面赤彩
８号墳	第28図－２	土師器	壷	20.80	33.00	7.50	石英・長石を含む	黄橙色10YR8/6	良好	口唇部刻目、外面口縁部ハケ目ヘラナデ、体部ハケ目ヘラナデヘラミガキ、内面口縁部ヘラナデ、体部ヘラナデ。	口唇部一部欠損 外面・口縁部内面赤彩
12号墳	第28図－３	土師器	高坏	－	（2.70）	11.00	石英・長石を含む	明黄褐色10YR7/6	良好	外面ヘラミガキ、内面ハケ目ヘラナデ。	脚部1/2残存 外面赤彩
12号墳	第28図－４	土師器	甕	17.80	（25.00）	6.70	石英・長石を含む	にぶい褐色7.5YR5/4	良好	外面口縁部ヨコナデ、体部ハケ目ヘラナデ、内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	口縁1/8欠損 底部残存
15号墳	第39図－１	土師器	壷	17.20	（2.50）	－	チャート･黒色粒子･石英･長石を含む	浅黄橙色7.5YR8/4	良好	外面口縁部ハケ目ヨコナデ、体部ハケ目ヘラケズリ、内面口縁部ハケ目､体部ヘラナデ。	底部欠損 外面・口縁部内面赤彩
16号墳	第39図－２	土師器	埦	11.20	7.40	4.00	チャート・石英・長石を含む	にぶい褐色7.5YR5/4	良好	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ、内面口縁部ヘラミガキヘラナデ。	ほぼ完形品 内外面赤彩
16号墳	第39図－３	土師器	高坏	14.40	10.00	11.00	チャート・石英・長石を含む	黄橙色10YR8/6 明赤褐色2.5YR5/6	良好	外面ヘラミガキ、内面坏部ヘラミガキ、脚部ハケ目ヘラナデ。	底部2/3欠損 内外面赤彩
16号墳	第39図－４	土師器	小型鉢	9.20	4.70	4.40	黒色粒子・石英・長石を含む	明赤褐色5YR5/6	良好	外面ヨコナデヘラナデ、内面ヨコナデヘラナデ。	口縁1/6欠損 内外面赤彩
16号墳	第39図－５	土師器	直口壷	15.00	23.30	5.50	黒色粒子・石英・長石を含む	橙色5YR6/8	良好	外面ハケ目ヘラミガキ、内面口縁部ヨコナデヘラミガキ、体部ヘラナデ。	底部欠損 外面・口縁部内面赤彩
16号墳	第39図－６	土師器	直口壷	16.80	26.00	6.00	黒色粒子・石英・長石を含む	明赤褐色2.5YR5/6	良好	外面ヘラミガキ、内面口縁部ヘラミガキ、体部ヘラナデ。	口唇部一部欠損 スス付着 外面・口縁部内面赤彩
16号墳	第39図－７	土師器	甕	15.40	18.10	5.50	チャート・黒色粒子・石英・長石を含む	橙色7.5YR6/6	良好	外面ハケ目ヨコナデ、内面口縁部ハケ目、体部ヘラナデ。	口縁1/8欠損 底部1/3欠損 内面に赤色顔料付着
16号墳	第40図－１	土師器	壷	16.50	（19.50）	－	石英・長石を含む	橙色7.5YR6/6	良好	外面口縁部ヨコナデヘラナデ、体部ハケ目ヘラナデヘラケズリ、内面口縁部ヘラミガキ、体部ヘラナデ。	底部欠損 外面・口縁部内面赤彩
16号墳	第40図－２	土師器	壷	15.50	2.50	7.50	黒色粒子・石英・長石を含む	灰黄褐色10YR4/2	良好	外面ハケ目、内面口縁部ハケ目ヨコナデ、体部ヘラナデ。	口唇部欠損 外面に赤彩
16号墳	第40図－３	土師器	壷	17.40	31.00	9.00	黒色粒子・石英・長石を含む	橙色7.5YR6/6	良好	外面口縁部ハケ目、体部ハケ目ヘラミガキ、内面口縁部ハケ目。	口縁1/4欠損 外面・口縁部内面赤彩
16号墳	第40図－４	土師器	甕	13.00	（10.30）	－	黒色粒子・石英・長石を含む	にぶい黄橙色10YR7/3	良好	外面口縁部ヨコナデ、体部ハケ目。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	
18号墳	第58図－１	土師器	小型甕	13.90	11.20	4.00	石英・長石を含む	黒褐色10YR2/2	良好	外面口縁部ヨコナデ、体部ハケ目ヘラナデ、内面口縁部ハケ目、体部ヘラナデ。	ほぼ完形品 底部欠損
18号墳	第58図－２	土師器	甕	－	（15.20）	－	石英・長石を含む	にぶい黄橙色10YR7/4 黒褐色10YR3/2	良好	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	体部1/3残存
18号墳	第58図－３	土師器	壷	－	（17.40）	5.60	チャート・石英・長石を含む	橙色7.5YR6/6	良好	外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ、底部ヘラナデ。	口縁部欠損 外面赤彩
20号墳	第58図－４	土師器	壷	－	（19.0 ）	4.0	黒色粒子・石英・長石を含む	浅黄橙色10YR8/4	良好	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	底部残存
21号墳	第58図－５	土師器	坩	9.50	6.50	2.40	チャート・石英・長石を含む	橙色7.5YR6/6	良好	外面ヘラミガキ、内面口縁部ヘラミガキ、体部ヘラナデ。	口縁1/4欠損 内外面赤彩
22号墳	第58図－６	土師器	壷	－	（16.00）	6.00	石英・長石を含む	明赤褐色2.5YR5/6	良好	外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキ、底部ヘラナデ。	口縁部欠損 外面赤彩
24号墳	第58図－７	土師器	高坏	12.50	（9.00）	－	黒色粒子・石英・長石を含む	浅黄橙色10YR8/4	良好	外面坏部ヘラミガキ、脚部ヘラミガキ、内面坏部ヨコナデヘラミガキ､脚部ヘラケズリ。	透孔上下２段に３個づつ 内外面赤彩
26号墳	第58図－８	土師器	器台	9.00	8.00	13.40	黒色粒子・石英・長石を含む	橙色5YR6/8	良好	外面ヘラミガキ、内面受け部ヘラミガキ、脚部ハケ目、シボリ。	受け部2/3欠損 内外面赤彩
26号墳	第58図－９	土師器	器台	8.20	7.00	13.40	石英・長石を含む	橙色5YR6/8	良好	外面ヘラミガキ、内面受け部ヘラミガキ、脚部ハケ目	裾部一部欠損 透孔３個 内外面赤彩
26号墳	第59図－１	土師器	壷	13.00	21.00	8.00	黒色粒子・石英・長石を含む	橙色7.5YR6/6	良好	外面口縁部ヨコナデ、体部ハケ目、ヘラミガキヘラナデ、内面ヘラナデ。	口唇部3/4欠損 外面・口縁部内面赤彩
26号墳	第59図－２	土師器	壷	14.60	（10.50）	－	黒色粒子・石英・長石を含む	橙色7.5YR7/6	良好	外面口縁部ヨコナデ、体部ハケ目ヘラミガキ、内面口縁部ヘラナデ、体部ヘラナデ。	口縁部残存 外面赤彩
27号墳	第59図－３	土師器	壷	13.40	30.50	8.00	黒色粒子・石英・長石を含む	橙色7.5YR6/6 にぶい橙色7.5YR6/4	良好	外面口縁部ハケ目、体部ハケ目、内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。底部木葉痕	ほぼ完形
28号墳	第62図－１	土師器	坩	9.60	15.00	4.40	黒色粒子・石英・長石を含む	赤色10R4/8	良好	外面ヘラミガキ、内面口縁部ヘラミガキ、体部ヘラナデ。	底部欠損 外面・口縁部内面赤彩
28号墳	第62図－２	土師器	器台	7.40	7.40	11.70	黒色粒子・石英・長石を含む	明黄褐色10YR7/6	良好	外面ヘラミガキ、内面受部ヘラミガキ、脚部ハケ目。	ほぼ完形品 外面赤彩
28号墳	第62図－３	土師器	壷	－	（25.50）	7.00	黒色粒子・石英・長石を含む	橙色5YR6/6	良好	外面ヘラケズリヘラミガキ、内面ヘラナデ。	口縁部欠損 外面赤彩
28号墳	第62図－４	土師器	壷	－	（23.00）	7.20	黒色粒子・石英・長石を含む	橙色5YR6/6	良好	外面ハケ目ヘラミガキ、内面ヘラナデヘラミガキ。	底部残存 体部破片 外面赤彩
28号墳	第62図－５	土師器	甕	－	（15.10）	4.60	チャート・石英・長石を含む	浅黄橙色10YR8/3	良好	外面ハケ目、内面ヘラナデ。	口縁部欠損
SX06	第67図－１	土師器	壷	－	（28.20）	8.40	黒色粒子・石英・長石を含む	橙色7.5YR6/6	良好	外面口縁部ハケ目ヘラナデヘラミガキ､内面体部ヘラナデ。	口縁部欠損 外面・口縁部内面赤彩

（2）中世出土遺物

遺構	挿図番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
SB01	第82図－5	土師質土器	皿	(17.0)	(2.9)	－	石英・長石を含む	暗赤色（10R3/6）	良好	手づくね。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面ヨコナデ。	口縁部1/8残 中世前期13～14c代
SB01	第82図－6	土師質土器	皿	(12.6)	(2.8)	－	黒色粒子・石英・長石を含む	浅黄橙色（10YR8/4）	良好	手づくね。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面ヨコナデ。	口縁部1/8残 中世前期13～14c代
SB01	第82図－7	土師質土器	皿	(12.8)	(3.3)	－	石英・長石を含む	にぶい橙色（5YR7/4）	良好	手づくね。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面ヨコナデ。	口縁部1/8残 中世前期13～14c代
SB01	第82図－8	土師質土器	皿	(8.0)	(2.1)	－	石英・長石を含む	浅黄橙色（7.5YR8/4）	良好	手づくね。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面ヨコナデ。	口縁部1/8残 中世前期13～14c代
SB01	第82図－9	常滑	甕	－	－	－	長石を含む	暗赤色（7.5R3/3）	良好	外面スタンプ文。外面ナデ、内面ナデ。	体部破片 中世
SB01	第82図－10	常滑	甕	－	－	－	長石を含む	暗赤色（7.5R3/3）	良好	外面スタンプ文。外面ナデ、内面ナデ。	肩部破片 中世
SB01	第82図－11	常滑	甕	－	－	－	長石を含む	暗赤色（7.5R3/3）	良好	外面ナデ、内面ナデ。	体部破片 中世
SB01	第82図－12	常滑	甕	－	－	－	長石を含む	暗赤色（7.5R3/3）	良好	外面ナデ、内面ナデ。	体部破片 中世
SB01	第82図－13	常滑	甕	－	－	－	長石を含む	暗赤色（7.5R3/3）	良好	外面スタンプ文。外面ナデ、内面ナデ。	10と同一個体 肩部破片 中世
SE01	第82図－15	青磁	画花文碗	－	(2.9)	－	緻密	オリーブ色（5Y6/3）	良好	竜泉窯系。内面のみ画花文あり。	体部破片 中世前期12～13c代
SE01	第82図－16	土師質土器	皿	12.3	(2.9)	－	石英・長石を含む	浅黄橙色（7.5YR8/6）	良好	手づくね。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面ヨコナデ。	体部欠損
SE01	第82図－17	土師質土器	皿	9.2	2.3	6.2	石英・長石を含む	浅黄橙色（7.5YR8/4）	良好	手づくね。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面ヨコナデ。	完形
SE01	第82図－18	常滑	甕	－	－	－	長石を含む	暗赤色（7.5R3/3）	良好	外面ナデ、内面ナデ。	体部下半破片
SD02	第82図－19	土師質土器	皿	(14.5)	(3.2)	－	石英・長石を含む	にぶい橙色（7.5YR6/4）	良好	手づくね。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面ヨコナデ。	口縁部1/10残 中世前期13～14c代
SD02	第82図－20	土師質土器	皿	(8.6)	(2.2)	－	黒色粒子・石英・長石を含む	橙色（5YR7/8）	良好	手づくね。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面ヨコナデ。	体部2/3残 中世前期13～14c代
SD02	第82図－21	土師質土器	皿	(9.0)	(1.7)	－	石英・長石を含む	浅黄橙色（10YR2/4）	良好	手づくね。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面ヨコナデ。	体部1/10残 灯明皿 タール付着 中世前期
SD02	第82図－22	土師質土器	皿	(6.3)	2.4	(3.0)	黒色粒子・石英・長石を含む	橙色（5YR7/6）	良好	回転糸切り。	体部1/5残 中世
SD02	第82図－23	土師質土器	皿	(8.8)	2.1	(5.0)	黒色粒子・石英・長石・チャートを含む	にぶい橙色（7.5YR6/4）	良好	回転糸切り。内面ヨコナデなし。	体部1/5残 中世前期13～14c代
SD02	第82図－24	土師質土器	皿	(8.0)	1.5	(5.4)	石英・長石を含む	にぶい橙色（7.5YR6/4）	良好	回転糸切り。内面ヨコナデなし。	体部1/7残 中世
SD02	第82図－25	常滑	甕	－	－	－	長石を含む	暗赤色（7.5R3/3）	良好	外面ナデ、内面ナデ。	肩部破片 中世
SD02	第82図－26	常滑	甕	－	－	－	長石を含む	暗赤色（7.5R3/3）	良好	外面ナデ、内面ナデ。	体部下半破片 中世
SD04	第83図－1	瀬戸美濃	灰釉丸皿	－	0.7	5.9	緻密	オリーブ灰色（10Y6/2）	良好	見込み葉文スタンプ。高台削り高台。	底部破片 中世後期16c代
SD04	第83図－2	土師質土器	皿	12.0	(2.4)	－	石英・長石を含む	浅黄橙色（7.5YR8/4）	良好	手づくね。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面ヨコナデ。	口縁部1/10残 中世前期13～14c代
SD04	第83図－3	土師質土器	皿	－	(2.5)	6.8	石英・長石を含む	浅黄橙色（7.5YR8/4）	良好	回転糸切り。内面同心円状ナデ。	底部破片 中世
SD04	第83図－4	常滑	甕	－	－	－	長石を含む	暗赤色（7.5R3/3）	良好	外面ナデ、内面ナデ。	胴部破片
SD04	第83図－5	常滑	甕	－	－	－	長石を含む	暗赤色（7.5R3/3）	良好	外面ナデ、内面ナデ。	胴部破片
SD04	第83図－6	常滑	甕	－	－	－	長石を含む	暗赤色（7.5R3/3）	良好	外面ナデ、内面ナデ。	胴部破片
SD06	第83図－7	土師質土器	皿	12.6	2.7	－	石英・長石を含む	浅黄橙色（5YR8/3）	良好	手づくね。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面ヨコナデ。	体部1/8残 中世前期13～14c代
SD06	第83図－8	土師質土器	皿	14.6	(2.6)	－	石英・長石を含む	浅黄橙色（7.5YR8/6）	良好	手づくね。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面ヨコナデ。	口縁部1/8残 中世前期13～14c代
SD06	第83図－9	土師質土器	皿	12.6	(2.6)	－	黒色粒子・石英・長石を含む	橙色（5YR7/6）	良好	手づくね。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面ヨコナデ。	口縁部1/10残 中世前期13～14c代
SD06	第83図－10	常滑	甕	－	－	－	長石を含む	暗赤色（7.5R3/3）	良好	外面ナデ、内面ナデ。	肩部破片 中世
SD06	第83図－11	常滑	甕	－	－	－	長石を含む	暗赤色（7.5R3/3）	良好	外面ナデ、内面ナデ。	体部破片
SD06	第83図－12	常滑	甕	－	－	－	長石を含む	暗赤色（7.5R3/3）	良好	外面ナデ、内面ナデ。	体部破片 中世
SD06	第83図－13	常滑	甕	－	－	－	長石を含む	暗赤色（7.5R3/3）	良好	外面ナデ、内面ナデ。	体部破片 中世
SD06	第83図－14	常滑	甕	－	－	－	長石を含む	暗赤色（7.5R3/3）	良好	外面ナデ、内面ナデ。	体部破片
SD06	第83図－15	常滑	甕	－	－	－	長石を含む	暗赤色（7.5R3/3）	良好	外面ナデ、内面ナデ。	体部破片
SX08	第83図－17	土師質土器	皿	11.8	(2.1)	－	石英・長石を含む	浅黄橙色（7.5YR8/4）	良好	手づくね。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面ヨコナデ。	体部1/15残 中世
TM08	第83図－18	土師質土器	皿	15.8	(3.3)	－	黒色粒子・石英・長石を含む	にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	手づくね。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面ヨコナデ。	口縁部1/7残 中世前期13～14c代
表採	第83図－19	土師質土器	皿	12.0	(2.6)	－	石英・長石を含む	浅黄橙色（7.5YR8/4）	良好	手づくね。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面ヨコナデ。	体部1//10残 中世前期13～14c代
TM08	第83図－20	土師質土器	皿	12.0	(2.8)	－	石英・長石を含む	浅黄橙色（7.5YR8/3）	良好	手づくね。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面ヨコナデ。	口縁部1/10残 中世
TM20	第83図－21	土師質土器	皿	11.8	(2.8)	－	石英・長石を含む	にぶい橙色（7.5YR7/4）	良好	手づくね。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面ヨコナデ。	口縁部1/7残 中世
表採	第83図－22	土師質土器	皿	13.0	(2.6)	－	石英・長石を含む	にぶい橙色（7.5YR6/4）	良好	手づくね。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面ヨコナデ。	口縁部1/7残 中世前期13～14c代
TM14	第83図－23	土師質土器	皿	11.8	(3.0)	－	石英・長石を含む	橙色（5YR6/8）	良好	手づくね。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面ヨコナデ。	1/10残 中世前期13～14c代
TM12	第83図－24	土師質土器	皿	7.8	(2.2)	－	石英・長石を含む	浅黄橙色（7.5YR8/6）	良好	手づくね。外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。内面ヨコナデ。	体部1/4残 中世
表採	第83図－25	土師質土器	皿	－	(2.0)	5.0	雲母・石英・長石を含む	橙色（5YR7/6）	良好	回転糸切り。	底部1/5残 中世前期13～14c代

遺構	挿図番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
TM29	第83図－26	土師質土器	内耳土鍋	－	－	－	雲母・石英・長石を含む	褐色（7.5YR4/3）	良好	ナデ。	底部破片 中世後期15～16c代
表採	第83図－27	常滑	甕	－	－	－	長石を含む	にぶい黄褐色（10YR7/3）	良好	外面スタンプ文。外面ナデ、内面ナデ。	体部破片 中世
表採	第83図－28	常滑	片口鉢Ⅰ類	－	－	－	黒色粒含む	オリーブ色（5YR5/4）	良好	外面に自然釉がかかる。	口縁部6b型式以前 中世

表６．掘立柱建物跡及び柱穴群柱穴計測表

１号掘立柱建物跡・５号柱穴群

番号	深さ(cm)	備考	番号	深さ(cm)	備考	番号	深さ(cm)	備考	番号	深さ(cm)	備考	番号	深さ(cm)	備考	番号	深さ(cm)	備考
P 1	3.6		P 63	12.0		P 125	18.4		P 187	49.5		P 249	16.8		P 311	29.3	SB01
P 2	5.0		P 64	35.9		P 126	22.1		P 188	18.8		P 250	3.8		P 312	13.5	
P 3	7.3		P 65	19.1		P 127	42.0		P 189	0.3		P 251	61.5		P 313	0.5	
P 4	7.5		P 66	24.5		P 128	14.5		P 190	26.3		P 252	19.0		P 314	34.4	
P 5	8.5		P 67	12.6		P 129	10.1		P 191	5.0		P 253	45.0	SB01	P 315	1.3	
P 6	6.1		P 68	8.4		P 130	39.0		P 192	7.5		P 254	17.5		P 316	23.1	
P 7	4.6		P 69	9.1		P 131	12.1		P 193	7.0		P 255	5.0	SB01	P 317	30.5	
P 8	9.3		P 70	42.8		P 132	6.8		P 194	30.0		P 256	17.0		P 318	19.8	
P 9	13.2		P 71	40.3		P 133	35.8		P 195	2.3		P 257	5.3		P 319	36.5	SB01
P 10	56.6		P 72	21.3		P 134	16.8		P 196	13.0		P 258	14.5		P 320	50.6	
P 11	19.3		P 73	18.0		P 135	2.5		P 197	5.0		P 259	39.8		P 321	27.5	
P 12	17.5		P 74	5.7		P 136	8.1		P 198	28.0		P 260	36.3		P 322	31.5	
P 13	18.1		P 75	9.0		P 137	1.9		P 199	6.0		P 261	19.5		P 323	24.5	
P 14	9.9		P 76	51.0		P 138	6.4		P 200	11.5		P 262	5.3		P 324	25.0	
P 15	15.5		P 77	15.5		P 139	32.4		P 201	19.5		P 263	45.5	SB01	P 325	18.3	SB01
P 16	9.3		P 78	12.9		P 140	10.5		P 202	32.3		P 264	7.8		P 326	26.5	
P 17	42.6		P 79	17.6		P 141	7.0		P 203	10.1		P 265	18.1		P 327	10.5	
P 18	5.8		P 80	5.6		P 142	31.0		P 204	41.8		P 266	2.0	SB01	P 328	7.0	
P 19	8.0		P 81	43.1		P 143	21.6		P 205	10.0		P 267	13.8		P 329	28.3	
P 20	19.5		P 82	21.9		P 144	30.5		P 206	9.0		P 268	49.8		P 330	27.0	SB01
P 21	28.4		P 83	12.6		P 145	25.0		P 207	18.3		P 269	18.3	SB01	P 331	32.2	
P 22	2.9		P 84	14.5		P 146	15.3		P 208	5.8		P 270	43.5	SB01	P 332	3.4	
P 23	40.2		P 85	22.0		P 147	55.4		P 209	6.3		P 271	65.3		P 333	6.9	
P 24	3.8		P 86	13.9		P 148	20.9		P 210	19.8		P 272	17.8	SB01	P 334	25.8	
P 25	6.6		P 87	18.0		P 149	16.5		P 211	13.5		P 273	3.5		P 335	41.3	SB01
P 26	2.5		P 88	12.0		P 150	30.0		P 212	9.5		P 274	3.3		P 336	5.0	
P 27	6.1		P 89	22.9		P 151	29.9		P 213	22.0		P 275	61.3		P 337	3.5	
P 28	35.0		P 90	25.3		P 152	17.8		P 214	51.5		P 276	6.5		P 338	15.3	
P 29	21.8		P 91	21.0		P 153	22.6		P 215	48.5		P 277	33.9	SB01	P 339	43.8	
P 30	15.4		P 92	31.8		P 154	28.8		P 216	6.5		P 278	35.6		P 340	37.3	SB01
P 31	13.1		P 93	14.9		P 155	26.6		P 217	22.5		P 279	10.8		P 341	39.5	
P 32	11.1		P 94	8.2		P 156	10.0		P 218	29.0		P 280	20.2	SB01	P 342	22.5	
P 33	8.3		P 95	22.8		P 157	24.1		P 219	14.5		P 281	35.2		P 343	31.5	
P 34	8.6		P 96	16.4		P 158	14.9		P 220	18.8		P 282	24.3		P 344	33.5	
P 35	9.0		P 97	12.5		P 159	37.0		P 221	13.8		P 283	12.0		P 345	30.5	
P 36	11.4		P 98	5.9		P 160	8.9		P 222	5.8		P 284	2.0		P 346	39.5	
P 37	4.2		P 99	5.0		P 161	34.6		P 223	8.5		P 285	5.0		P 347	70.1	
P 38	27.4		P 100	21.7		P 162	39.0		P 224	7.0		P 286	12.5		P 348	1.0	
P 39	6.4		P 101	27.2		P 163	45.0		P 225	22.0		P 287	15.0		P 349	0.4	
P 40	13.4		P 102	15.1		P 164	16.5		P 226	25.0		P 288	19.3		P 350	0.5	
P 41	7.1		P 103	29.1		P 165	56.4		P 227	20.8		P 289	18.5		P 351	5.8	
P 42	2.5		P 104	1.8		P 166	21.0		P 228	16.3		P 290	9.8		P 352	23.8	
P 43	11.2		P 105	15.1		P 167	22.5		P 229	24.0		P 291	10.5		P 353	49.0	
P 44	20.1		P 106	43.1		P 168	28.0		P 230	30.0		P 292	8.1	SB01	P 354	24.5	
P 45	38.8		P 107	11.0		P 169	41.8		P 231	10.5		P 293	21.5		P 355	19.0	
P 46	15.1		P 108	2.3		P 170	0.3		P 232	53.5	SB01	P 294	15.4		P 356	22.6	
P 47	33.6		P 109	10.8		P 171	14.0		P 233	9.7		P 295	20.3		P 357	12.8	
P 48	15.8		P 110	42.8		P 172	35.5		P 234	54.8	SB01	P 296	15.5		P 358	34.9	
P 49	16.1		P 111	22.5		P 173	53.5		P 235	17.8		P 297	11.0		P 359	4.4	
P 50	38.8		P 112	34.1		P 174	47.4		P 236	38.5	SB01	P 298	10.5		P 360	31.5	
P 51	17.8		P 113	12.1		P 175	28.8		P 237	16.5		P 299	13.5		P 361	79.4	
P 52	39.1		P 114	10.4		P 176	10.6		P 238	32.3	SB01	P 300	24.5		P 362	43.4	
P 53	28.6		P 115	1.0		P 177	5.3		P 239	63.3		P 301	6.5		P 363	27.2	
P 54	23.3		P 116	7.3		P 178	16.6		P 240	1.8		P 302	27.5	SB01	P 364	30.0	
P 55	21.1		P 117	7.8		P 179	4.7		P 241	13.0		P 303	5.0		P 365	20.6	
P 56	10.7		P 118	15.8		P 180	2.0		P 242	3.0		P 304	16.0		P 366	12.6	
P 57	13.8		P 119	21.5		P 181	57.8		P 243	6.8		P 305	15.5		P 367	41.8	
P 58	48.5		P 120	17.0		P 182	33.7		P 244	39.0	SB01	P 306	8.8	SB01	P 368	25.8	
P 59	16.8		P 121	33.8		P 183	43.1		P 245	6.5		P 307	21.0		P 369	35.5	
P 60	16.0		P 122	2.3		P 184	15.8		P 246	24.4	SB01	P 308	2.1		P 370	63.1	
P 61	25.1		P 123	1.5		P 185	50.0		P 247	13.0		P 309	24.0		P 371	41.6	
P 62	17.0		P 124	8.1		P 186	46.0		P 248	10.0		P 310	4.0		P 372	51.3	

番号	深さ(cm)	備考
P373	48.5	
P374	10.3	
P375	23.0	
P376	6.3	
P377	37.0	
P378	27.3	
P379	33.5	
P380	35.6	
P381	46.3	
P382	9.9	
P383	63.9	
P384	38.8	
P385	2.3	
P386	1.1	
P387	17.8	
P388	3.3	
P389	11.5	
P390	8.0	
P391	5.3	
P392	13.5	
P393	15.0	
P394	14.8	
P395	9.5	
P396	15.5	
P397	29.0	SB01
P398	30.7	
P399	33.7	SB01
P400	25.5	
P401	21.2	SB01
P402	6.8	
P403	27.4	SB01
P404	11.5	SB01
P405	5.0	
P406	5.0	
P407	19.8	SB01
P408	23.3	
P409	11.3	
P410	16.0	
P411	11.5	
P412	43.3	
P413	8.0	
P414	6.5	
P415	1.3	
P416	7.0	
P417	3.5	
P418	13.3	
P419	13.8	
P420	11.8	
P421	0.5	
P422	21.5	
P423	21.8	
P424	4.3	
P425	26.5	
P426	11.9	SB01
P427	4.5	
P428	30.1	
P429	23.8	SB01
P430	34.6	SB01
P431	20.8	SB01
P432	7.3	
P433	2.3	
P434	13.5	
P435	8.3	
P436	3.5	
P437	21.0	
P438	16.5	
P439	21.8	
P440	4.0	
P441	20.5	
P442	26.5	
P443	17.1	SB01
P444	27.9	SB01
P445	8.3	
P446	10.5	

番号	深さ(cm)	備考
P447	25.5	SB01
P448	36.0	SB01
P449	2.5	
P450	3.8	
P451	17.8	
P452	5.8	
P453	3.5	
P454	6.8	
P455	42.5	
P456	6.5	
P457	10.0	
P458	27.3	
P459	40.3	
P460	11.3	
P461	29.0	
P462	29.3	
P463	4.3	
P464	3.8	
P465	26.9	
P466	5.8	
P467	5.3	
P468	10.5	
P469	10.0	
P470	1.0	
P471	4.0	
P472	18.0	
P473	14.5	
P474	2.0	
P475	47.5	
P476	13.0	
P477	4.5	
P478	3.5	
P479	4.5	
P480	9.8	
P481	16.5	
P482	0.3	
P483	5.5	
P484	14.3	
P485	20.0	
P486	35.4	
P487	33.8	
P488	48.0	
P489	5.5	
P490	24.1	
P491	10.8	
P492	8.0	
P493	17.1	
P494	21.0	
P495	13.3	
P496	6.5	
P497	12.0	
P498	34.1	
P499	4.0	
P500	7.5	
P501	7.8	
P502	7.5	
P503	7.0	
P504	5.5	
P505	4.8	
P506	26.8	
P507	8.8	
P508	2.0	
P509	2.3	
P510	46.8	
P511	5.3	
P512	38.5	
P513	28.9	
P514	21.3	
P515	47.8	
P516	11.0	
P517	8.0	
P518	48.0	
P519	28.5	
P520	11.5	

番号	深さ(cm)	備考
P521	3.0	
P522	2.5	
P523	23.0	
P524	47.3	
P525	10.0	
P526	18.3	
P527	5.0	
P528	4.3	
P529	31.5	
P530	1.5	
P531	0.5	
P532	9.2	
P533	31.5	
P534	31.5	
P535	25.0	
P536	43.3	
P537	8.3	
P538	13.5	
P539	16.3	
P540	8.8	
P541	32.5	
P542	7.0	
P543	12.0	
P544	11.8	
P545	37.0	
P546	3.5	
P547	5.0	
P548	22.5	
P549	7.5	
P550	15.0	
P551	40.3	SB01
P552	37.0	
P553	48.0	
P554	40.7	
P555	10.0	
P556	8.5	
P557	8.5	
P558	25.3	
P559	32.6	SB01
P560	9.5	
P561	5.0	
P562	24.1	
P563	13.5	
P564	1.0	
P565	4.8	
P566	11.0	
P567	19.5	
P568	34.5	
P569	30.5	
P570	2.0	
P571	14.8	
P572	33.8	
P573	7.0	
P574	31.5	
P575	3.0	
P576	11.5	
P577	4.0	
P578	2.8	
P579	17.3	
P580	5.5	
P581	45.0	
P582	8.5	
P583	11.5	
P584	16.0	
P585	40.0	
P586	29.5	
P587	27.3	
P588	25.5	
P589	13.0	
P590	17.0	
P591	11.0	
P592	20.8	
P593	35.3	
P594	10.0	

番号	深さ(cm)	備考
P595	17.0	
P596	11.5	
P597	17.8	
P598	17.5	
P599	12.0	
P600	41.1	
P601	16.5	
P602	2.5	
P603	11.0	
P604	10.8	
P605	17.3	
P606	10.0	
P607	32.0	
P608	27.0	
P609	4.3	
P610	18.8	
P611	8.8	
P612	21.0	
P613	13.8	
P614	14.8	
P615	7.0	
P616	14.3	
P617	2.5	
P618	29.5	
P619	15.5	
P620	5.3	
P621	15.8	
P622	9.3	
P623	19.5	
P624	53.3	
P625	21.4	
P626	45.4	
P627	25.4	
P628	43.4	
P629	25.9	
P630	14.8	
P631	25.9	
P632	41.4	
P633	22.5	
P634	30.3	
P635	17.8	
P636	26.4	
P637	14.0	
P638	10.5	
P639	13.3	
P640	21.5	
P641	24.9	
P642	20.0	

1号柱穴群

番号	深さ(cm)	備考
P1	22.5	
P2	5.1	
P3	9.0	
P4	3.1	
P5	14.5	
P6	16.8	
P7	4.8	
P8	32.6	
P9	13.5	
P10	28.6	
P11	4.8	
P12	21.1	
P13	13.1	
P14	17.8	
P15	38.9	
P16	26.5	
P17	12.0	
P18	13.8	
P19	17.6	
P20	37.9	
P21	12.9	
P22	43.3	
P23	13.0	

番号	深さ(cm)	備考
P24	30.4	
P25	13.6	
P26	17.4	
P27	5.3	
P28	24.8	
P29	29.9	
P30	12.3	
P31	5.9	
P32	27.8	
P33	4.0	
P34	28.4	
P35	22.5	
P36	28.1	
P37	19.0	
P38	39.8	
P39	41.0	
P40	35.8	
P41	41.5	
P42	45.0	
P43	4.8	
P44	13.8	
P45	9.2	
P46	45.8	
P47	36.5	
P48	11.1	
P49	25.0	
P50	5.0	
P51	29.0	
P52	12.4	
P53	3.7	
P54	3.0	
P55	17.4	
P56	19.1	
P57	44.4	
P58	16.6	
P59	6.3	
P60	25.8	
P61	26.9	
P62	20.0	
P63	23.6	
P64	27.0	
P65	9.0	
P66	10.4	
P67	16.3	
P68	7.5	
P69	9.4	
P70	3.0	
P71	34.8	
P72	23.0	
P73	10.0	
P74	28.1	
P75	17.1	
P76	5.9	
P77	7.9	
P78	7.8	
P79	4.9	
P80	11.0	
P81	20.9	
P82	15.5	
P83	17.0	
P84	31.4	
P85	30.0	
P86	40.6	
P87	9.0	

2号柱穴群

番号	深さ(cm)	備考
P1	26.3	
P2	33.6	
P3	12.0	
P4	7.6	
P5	11.2	
P6	15.1	
P7	10.4	

番号	深さ(cm)	備考
P8	7.1	
P9	3.0	
P10	28.3	
P11	9.1	
P12	11.0	
P13	5.0	
P14	25.3	
P15	5.6	
P16	4.6	
P17	13.0	
P18	9.6	
P19	6.5	
P20	14.8	
P21	17.1	
P22	3.8	
P23	28.8	
P24	15.9	
P25	19.8	
P26	14.5	
P27	13.0	
P28	5.4	
P29	7.3	
P30	21.5	
P31	12.6	
P32	8.9	
P33	2.5	
P34	28.0	
P35	13.0	
P36	11.1	
P37	10.7	
P38	19.1	
P39	25.8	
P40	12.2	
P41	21.5	
P42	30.1	
P43	25.7	
P44	6.2	
P45	12.4	
P46	7.8	
P47	3.4	
P48	21.3	
P49	19.1	
P50	29.3	
P51	6.6	
P52	34.3	
P53	20.9	
P54	–	
P55	7.9	
P56	14.3	
P57	41.1	
P58	–	
P59	7.6	
P60	16.2	
P61	3.5	
P62	10.9	
P63	3.5	
P64	5.5	
P65	9.6	
P66	3.9	
P67	28.6	
P68	6.0	
P69	21.1	
P70	10.1	

3号柱穴群

番号	深さ(cm)	備考
P1	34.9	
P2	17.8	
P3	24.1	
P4	22.9	
P5	15.4	
P6	15.3	
P7	29.3	
P8	12.4	

番号	深さ(cm)	備考
P9	52.8	
P10	24.5	
P11	5.0	
P12	6.5	
P13	4.8	
P14	8.5	
P15	10.0	
P16	24.3	
P17	24.3	

4号柱穴群

番号	深さ(cm)	備考
P1	19.1	
P2	14.3	
P3	21.9	
P4	16.3	
P5	6.3	
P6	15.8	
P7	14.9	
P8	7.4	
P9	9.6	
P10	7.3	
P11	9.9	
P12	8.4	
P13	28.8	
P14	18.4	
P15	2.5	
P16	18.0	
P17	4.6	
P18	3.4	
P19	13.6	

第４章　総括

山川古墳群およびその周辺の調査は、平成７年度の第１次調査、平成15年度の第２次調査、さらに隣接し遺跡名は異なるが、平成14年度に実施された神明遺跡第４次調査にいたるまで、断続的に３回行われている。そして、今回の第３次調査の対象区域および調査面積の策定は、平成13年度に実施した確認調査結果に基づくものであり、その範囲はトレンチによる確認調査で溝等の遺構が検出された19a、19b、20a、20b、21a、22トレンチ（小川ほか2002）すべてが含まれている。これによって、未調査区域を除き新治台地南縁に展開された常名台遺跡群における南東側の様相が漸く把握したことになる。こうした確認調査を含め、第２次調査までの調査結果と比較してもその差はほんどない。しかし、その内容の点でいくつか特筆すべき事態がある。ここに内容的にも新たな成果が得らたことから時代を追ってまとめとしたい。

今回調査した山川古墳群第３次調査では、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代および中近世の遺構・遺物が検出された。まず、旧石器時代では明確な遺構の検出はなかったものの、ナイフ形石器１点のほか剥片が調査区南側の20号墳周溝内から出土している。黒色安山岩製の縦長剥片を素材とするものであるが、あいにく石器ブロックからの検出ではなく、完成品の単独出土である。ここから100m北側の区域では、Ⅳ層からⅨ層における良好な石器ブロックが確認されており（窪田ほか2004）、石器編年や石材同定等を含めた旧石器時代の総括的な調査を可能にする環境が整いつつある、ここ常名台遺跡群に新たな一資料を提供することとなった。

縄文時代では、陥穴４基のほか屋外炉跡２基と土坑11基が検出された。出土遺物として早期から後期にかけての土器片と土製品である土器片錘、さらに石器類が出土している。また出土土器のなかで中心となる時期は前期中葉・黒浜式期である。特に調査区南東端の19号墳及び20号墳周辺に黒浜式期の薄い包含層の存在が確認されている。しかし、検出された縄文遺構からの出土遺物は少なく、時期の確定だけではなく、遺構の性格までも把握できないという問題がある。そのため、全体的に遺物量が多いとはいえ時期の確定できない遺構を前期・黒浜式期として限定することはできなかった。まず、検出された遺構として陥穴４基がある。土坑SK04とSK10の２基は底面に逆茂木状ピットを備えた陥穴であり、土坑SK01とSK09は溝状陥穴である。いずれも時期を特定できる遺物は出土しておらず、調査区中央から南東側にかけて分布するものの集中することはなく、地形との関連性も把握できない。おそらく周辺の遺物から判断して、早期後半から前期中葉にかけての時期が比定される。また、屋外炉跡についても時期を確定できていないが、陥穴と同じ立地を呈していることから同時期性を示している可能性が高い。また、土坑についても共通する部分が少なく、その形態はバラェティーに富んでいる。しかし、わずかであるが遺物の出土があるものもあり、楕円形土坑であるSK06は早期後半・条痕文系土器群である茅山式期に比定され、SK08、14の楕円形土坑は前期・黒浜式期、SK11は諸磯式期に比定される。遺物としては、土器は早期の条痕文系や前期の黒浜式のほかに直接遺構に伴うものではないが、中期後半・加曽利Ｅ式、後期・堀之内１・２式、加曽利Ｂ1～３式と幅広い時期にわたったものが出土している。また、土器片錘が12点出土している。前期・黒浜式期の１点を除き、いずれも中期・加曽利Ｅ式期に比定される。黒浜式期の土器片錘は、胴部破片を打欠により成形したもので、長軸5.577cm、短軸5.693cmの長方形を呈し、重さは32.14ｇを測る優品である。また加曽利Ｅ式期の土器片錘は、土浦市をはじめ霞ヶ浦周辺で確認されるものと全く同じで、楕円形もしくは長方形を呈し、大きさにはばらつきがあり、長軸に紐掛溝を刻んでいる。そのほか時期が特定できないが、磨製石斧・磨石類・台石といった石器が

出土している。

弥生時代は２軒の住居跡が検出された。１軒は他の遺構の切り合いにより削平され、遺物の出土はなかったものの、１号（SI01）とした住居跡からは後期の土器片と共に土製紡錘車が出土している。土器片はいずれも小破片で、付加条縄文、平行沈線文による文様施文で、後期中葉段階に比定される。また、土製紡錘車は無施文の円形を呈し、完存品である。その大きさは径4.977cm、厚さ1.277cm、軸孔径0.678cm、重さ39.1ｇを測る。かつて土浦市原田遺跡群で分析を試みた江幡氏の分類（江幡1995）でいう厚さが「薄く径の大きい」“Ｉａ”形態に分類され、圧倒的な出土量を示している。これらの多くは本例と同形態で無施文である。しかし、報告された氏の統計をみると本遺跡出土例と若干異なることが判る。すなわち原田遺跡群のＩａ類は厚さに対する径の肥厚係数（厚さ÷径×100）が係数35前後に集中しているのに対し、本例は係数25であり、径の割に厚さが薄い紡錘車であることが判るが、こうした形態的な係数差が機能に影響することはないであろう。また、江幡氏の指摘している重量差について「紡錘車の性格や使用目的が異なっていたことを意味」していたことは確かであろうが、「意図的な作り分け」すなわち重量を意識して製作を行っていたかどうかは疑問である。原田遺跡群出土の紡錘車の重量は20～80ｇという幅広い範囲であるものの、使用目的に合わせた重さの加減は個数の増減や付加的な錘を加えるなどの調整で容易に解消できたはずである。すなわち紡錘車の製作は、当初から糸の素材あるいは撚り方や太さの違いなど機能により「製作・作り分け」るのではなく、逆に素材や撚り方にあわせて、既に製作されている紡錘車を選択し、さらに重量の過不足についても付加的な調整を行い使用していたはずであるからである。それが１住居跡における保有数（出土数）１個が圧倒的に占めていることからも傍証できるであろう。

次の古墳時代は本遺跡の中心となる時期で、22基に及ぶ古墳が調査され、これらは前期中葉から後葉に比定されている。しかも、これらの大半が前期古墳である17基の方墳と１基の円墳によって構成されている。しかし、これらはいずれも墳丘が確認できず、わずかに第２次調査で検出され、今回南溝の限界を確認した大型方墳の８号墳において墳丘の存在が明らかにされた以外いずれも封土が明確ではなく、かつて第１次調査時において方形周溝墓として認識していたものと大きな違いはない。これらの前期方墳は前２回の調査でも確認され、今回その全貌が判明した２基と新たに16基が検出されている。また、重複関係は２例４基以外いずれも単独造営であり、構築方位もほぼ一致していることに注目したい。そこには、各墳墓のもつ様相が規模、周溝内の埋葬施設、出土土器を含めて各自異なることから18基同時構築ではないが、比較的短期間における消長が推定される。特に出土土器に見る特徴は、明らかに前段階の方形周溝墓の流れをくむ方形区画溝内に展開された埋葬儀礼のひとつとされる儀器化土器にみられる変化であり、しかもそれは階層による序列化によるものではなく、時代の流れに沿った一過程（崩壊→消滅）を反映したものと判断される。

そこでまず、明らかになった前期方墳および円墳の形状からみてみたい。規模については別表のとおりである。

規模計測表のように、周溝幅から推定して８号墳の外周長36.20mを最大とし、最小は27号墳の6.27mであるが、大きさからみた規模分けを試みると、外周長25m以上の超大型（８号墳）、17～25mの大型（16・22・28号墳）、10～17mの中型（12・13・18・20・21・24・25・29・30号墳）、10m以下の小型（27・31号墳）に分類することが可能である。ここでは中型とした長さ15m前後が主体となり、全体的にはやや大型のものが目立つ。なお、方墳の形態では基本的に角のやや丸みをもつ方形を維持するものの、正確に計測すると内周に比べ外周は直線的でないものが多く、また、内周でも正方形ではなく長方形となるものが主体である。また、形態的に特筆すべきものとして、周溝が全周せずに途切れるタイプがある。まず、22号墳は南側が未調査区

表７．山川古墳群第３次調査前期方墳・円墳規模計測表

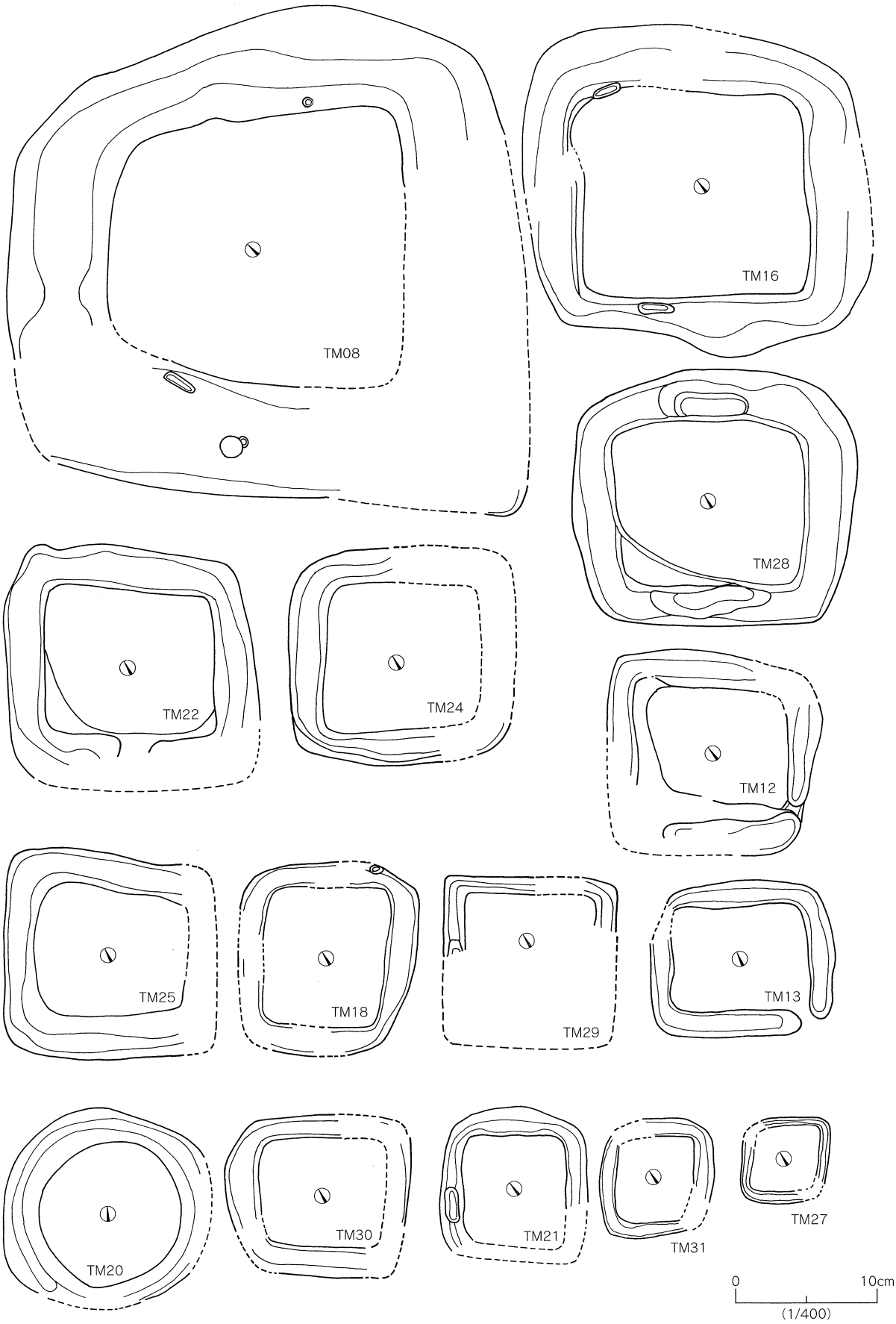
古墳番号	形態		墳外周規模	規格	主軸方向	周溝内埋葬施設	周溝内出土土器	出土位置	備考
TM08	方形	全周（？）	(36.20)×34.80	超大形	N－32°－W	土坑１．土器棺１	壷１（土器棺）	南溝土坑を伴う土器棺	２次調査
TM12	方形	一隅切れ	15.12×13.63	中型	N－43°－W		高坏１・甕１	北溝	一部未調査
TM13	方形	一隅切れ	13.18×11.15	中型	N－64°－W		土師器片		
TM15	方形	全周（？）	―×―	不明	N－44°－E		壷１	北溝	一部未調査
TM16	方形	全周	23.50×23.40	大型	N－48°－W	土坑２(北溝・南溝)	壷３・直口壷２・高坏１・埦１・鉢１・甕２	２号埋葬施設（壷３・甕・高坏）、西溝（直口壷２・甕）東溝（鉢）	
TM18	方形	全周	13.82×12.81	中型	N－45°－E	土坑１（北溝）	甕２・壷１	西溝（甕・壷）、南・東溝（甕）	一部未調査
TM20	円形	全周	15.89×15.29	中型	―		壷１		一部未調査
TM21	方形	全周（？）	10.41×(8.94)	中型	N－37°－E	土坑１（西溝）	坩１	北溝（坩）	一部未調査
TM22	方形	中央陸橋状	17.64×(16.32)	大型	N－54°－W		壷１	北溝	一部未調査
TM23	方形	全周（？）	―×―	不明	N－58°－W				一部未調査
TM24	方形	全周（？）	(15.70)×15.32	中型	N－39°－W		高坏１	西溝（高坏）	一部未調査
TM25	方形	全周（？）	(12.45)×14.68	中型	N－47°－W		土師器片（坩・壷）		一部未調査
TM26	方形	全周（？）	―×―	不明	N－53°－W		器台２・壷２	北溝（壷・器台２）、西溝（壷）	一部未調査
TM27	方形	全周	6.27×6.09	小型	N－41°－E		壷１	南溝	
TM28	方形	全周	19.72×18.28	大型	N－58°－W		壷２・坩１・器台１・甕１	北溝（壷２・坩）、西溝（器台）、東溝（甕）	
TM29	方形	全周（？）	(5.15)×9.37	中型	N－65°－W				一部未調査
TM30	方形	全周	13.08×(11.35)	中型	N－31°－E				
TM31	方形	全周	8.40×7.85	小型	N－20°－E				２次調査

域に広がっており不明な点が多いが、南溝中央部が途切れ、中央陸橋型である。これがさらに南方向へ突出するならば、前方後方墳の前方部に相当する可能性もあろう。同じように８号墳においても今回の道路部の調査により東溝中央に周溝が途切れる可能性が考えられる状況がみられ、やはり前方後方墳である可能性も考えられるが、残念ながら今回２基ともその確証を得らず、今後の課題として問題提起しておきたい。そして、ここで明確なのは隅陸橋を形成しているものである。13号墳は南東角が途切れる一隅陸橋型の典型であるが、12号墳も南東角に周溝の途切れが確認されており、陸橋として認識している。しかし、調査段階では深度が浅いといえ、確認面から深さ10cmの掘り込みがみられたことから、地表面からの陸橋ではなく、地表下の陸橋とみられ、本来周溝は全周していたことになり、「みかけの陸橋」と呼称されるひとつの在り方としてみることができる。

次に埋葬施設について触れたい。18基の前期方墳・円墳すべてにおいて墳丘下における埋葬施設が確認できず、わずか４基に周溝内埋葬施設が設置されていた。また、特殊なケースとして土坑内埋設土器棺が１基検出されている。こうした埋葬施設が墳丘下に確認ができなかったことは、逆にみると墳丘の存在を示唆していることになる。調査時において墳丘の存在を確認できた８号墳を除き、他の17基すべて封土は完全に削平され残存していなかった。これは埋葬施設が地山面まで達するまでの深さを要していなかったこと、そして、封土内に設置されていたことを意味しており、結果的にある程度の墳丘の存在を想定させることとなった。また、周溝内埋葬施設は４基の古墳から検出された。16号墳で２基、８・18・21号墳でそれぞれ各１基である。その形態はほぼ共通しており、いずれも長方形もしくは楕円形の竪穴状の掘り込みである。中でも16号墳２号埋葬施設とした長方形土坑では、その施設周縁で穿孔もしくは打欠された壷、埦、高坏の合計５個体の儀器化土器が出土した。しかもそれらは、埋葬施設内ではなくその周縁に埋納されていたことに注目したい。なお、これら溝中土坑については、埋葬施設、祭祀施設土坑、掘り方としての土坑といった機能説明が明らかにされている（福田1990、坂本1996）が、ここでは伊藤敏行氏が指摘しているとおり（伊藤1996)、墓壙として解釈して良いであろう。また、８号墳には今回で２基目となる土器棺の出土がある。周

溝のほぼ中央に掘削された径60cm、深さ54cmの２号埋葬施設とした円形土坑の底面に口縁部を逆さにした壷形土器が埋納されていた。この土器は胴部と口縁部を打欠した壷である。また、底面にあたる口縁部には蓋にあたるものが確認されていないが、木板などが使用されていたものと推定される。なお、第２次調査で検出された土器棺は、北溝内周寄りの覆土中に置かれたもので、甕底部を切断し蓋にした土器棺であった。この２基の土器棺は乳幼児埋葬棺と考えられるが、この８号墳の溝中には土坑埋葬施設を含め３種の異なる埋葬方法が確認され、時期的には２次調査時の土器棺埋葬が最後に執行されたものと推定されるが、それぞれ細かな時間差について、土器型式だけでは判断できなかった。少なくとも本墳は最大規模の方墳でもあり、山川古墳群のなかでは古期でしかも中核的な有力首長墓でありながら、複数の土器棺の存在は、ある一面で家族墓的な様相を呈している墳墓であるとみることができる。

こうした８号墳あるいは16号墳で検出され、ここで特殊として扱った埋納土器のほかにも、土器の周溝内遺棄行為がみられる古墳がある。これら多くの土器は局部的な破砕行為を受けているだけで完形に近い、遺存度の高い土器が主体であり、全体的に破片のみという器種は少ない。ここでは10基において周溝内遺棄土器が出土している。多くは底部を中心に孔を開ける穿孔あるいは口縁部・胴部の打欠行為が行われた儀器化土器である。ただし底部の穿孔・打欠は別にして、口縁部や胴部の欠損が人為的行為によるものか判断を困難にしているものもあり、少なくとも本体が完形に近く、しかも出土地点の周辺から接合可能な土器片が検出できないものについては、その欠損部位は意図的な破砕行為により消失したものと判断した。またこれら破砕土器はいずれも土器焼成後、木もしくは石などの敲打により打欠されたものである。しかも、ここにはさまざまな孔開け打欠行為がみられ、一個体ずつ異なる破砕行為が行われているようにも看取できる。これらは打撃行為という偶発的要素の強い結果によるものであって、破砕範囲の大きさは土器の本来もっている性質とくに器種や製作方法の違いに加え、打撃力の加減、打撃の打点場所によって土器の割れ方や範囲が各個体異なるためと判断される。そして、儀器化土器の対象となる器種も決して限定されているわけではない。今ここで底部を中心に孔の開けられた土器をみてみると、15号墳の壷（第39図１）、16号墳の直口壷（第39図６）と甕（第39図７）、26号墳（第59図１）の壷、28号墳の坩（第62図１）の５点が確認されている。これら孔の形状をみるといずれも底部から胴下部にかけて打欠が行われ、いわゆる厳密な意味での底部穿孔と異なる。底部穿孔の規定はさまざまであるが、大方は焼成前の穿孔を含めて、底部に円形の孔を開け、ドーナツ状に底部の中央を抜いたもので、穿孔の後破断面に研磨を施すものなど、底部の機能が保たれ正位して安定しているもの（立花1996、及川1996等）と限定すると本例はすべて底部打欠となる。そしてこれら５点のほかに、底部を意図的に剥ぎ取るように打欠している16号墳の直口壷（第39図５）がある。これは底部未貫通のため底部穿孔の中途行為にもみえるが、おそらくこれも破砕行為のひとつと考えられる。なお16号墳の直口壷（第39図６）は胴部上位にも打欠を行い２ヶ所の破砕行為が認められ、また26号墳の壷（第59図１）は胴部下半部を打欠、さらに口縁部の打欠も行われており、３ヶ所の破砕行為が確認される。さらに15号墳の壷は底部から胴部下半部にかけて大きく打欠しているなどすべて「底部打欠」行為として確認しておきたい。いずれにしても、本遺跡で確認された前期古墳群出土の土器群は前期中葉から後葉段階に比定されており、比較的短期間に造営された墳墓群である。こうした時間幅にも係わらず、底部穿孔行為だけでも、一個体ずつ異なる結果が得られたことで、例えば器種の選定、破砕箇所、破砕行為の場、さらには埋納や投棄行為の場などさまざまな様相において一貫性あるいは共通性が読み取れない。その要因として考えられることは、政治的にしろ、祭祀・宗教的にしろこうした埋葬行為のひとつ「土器破砕」「土器埋納」に厳格な規制が存在しなくなったことを意味している。むしろそれは、簡略化された通過儀礼程度の許容範囲の広い行為となったとみるこ



第84図　山川古墳群第３次調査前期方墳・円墳集成図

ともできる。少なくともここ山川古墳群の前期方墳・円墳造営における、古墳前期中葉から後葉段階では「土器の破砕行為」そのものは首長クラスにおける埋葬儀礼の一過程として“伝統”のみ引き継がれていても、それに伴う属性行為、すなわち破砕対象器種の選択、破砕箇所などについての拘りはすでに形骸化となり、ここに土器穿孔・打欠行為の崩壊した終焉段階と推定される。そのため多種多様な「土器破砕」行為が窺え、やがて次段階においては、こうした行為を行わない墳墓の存在によって、土器破砕が埋葬行為において意味のもつものではなくなったことが予想されるのである。

また、これらとは別に明らかに中期古墳である方墳１基（７号墳）と後期古墳と判断できる箱式石棺を伴う帆立貝式前方後円墳１基（14号墳）がある。そして、時期を確定できない古墳（17・19号墳）が２基存在する。そのほか長方形もしくは長楕円形を呈する竪穴状遺構５基が検出された。なかでもＳＸ06とした遺構内から前期の壷形土器が出土している。したがって、これら竪穴状遺構も埋葬施設のひとつであった可能性が高い。

中世では、神明遺跡第１・３・４次調査、山川古墳群第２次調査で確認された方形区画溝の西側と南側の限界が把握できた。未調査部分を残しているため、今回でも全貌を明らかにできたわけではないが、東西長約125m、南北約103mの規模をもつ方形館跡であることを明確にした。この溝内側の館跡内では、掘立柱建物跡１棟、竪穴状遺構４基、土坑４基、井戸跡１基の他、溝跡４条が検出されている。

最後に近世以降の遺構としては調査区東側に位置する溝状遺構SD01がある。

参考文献

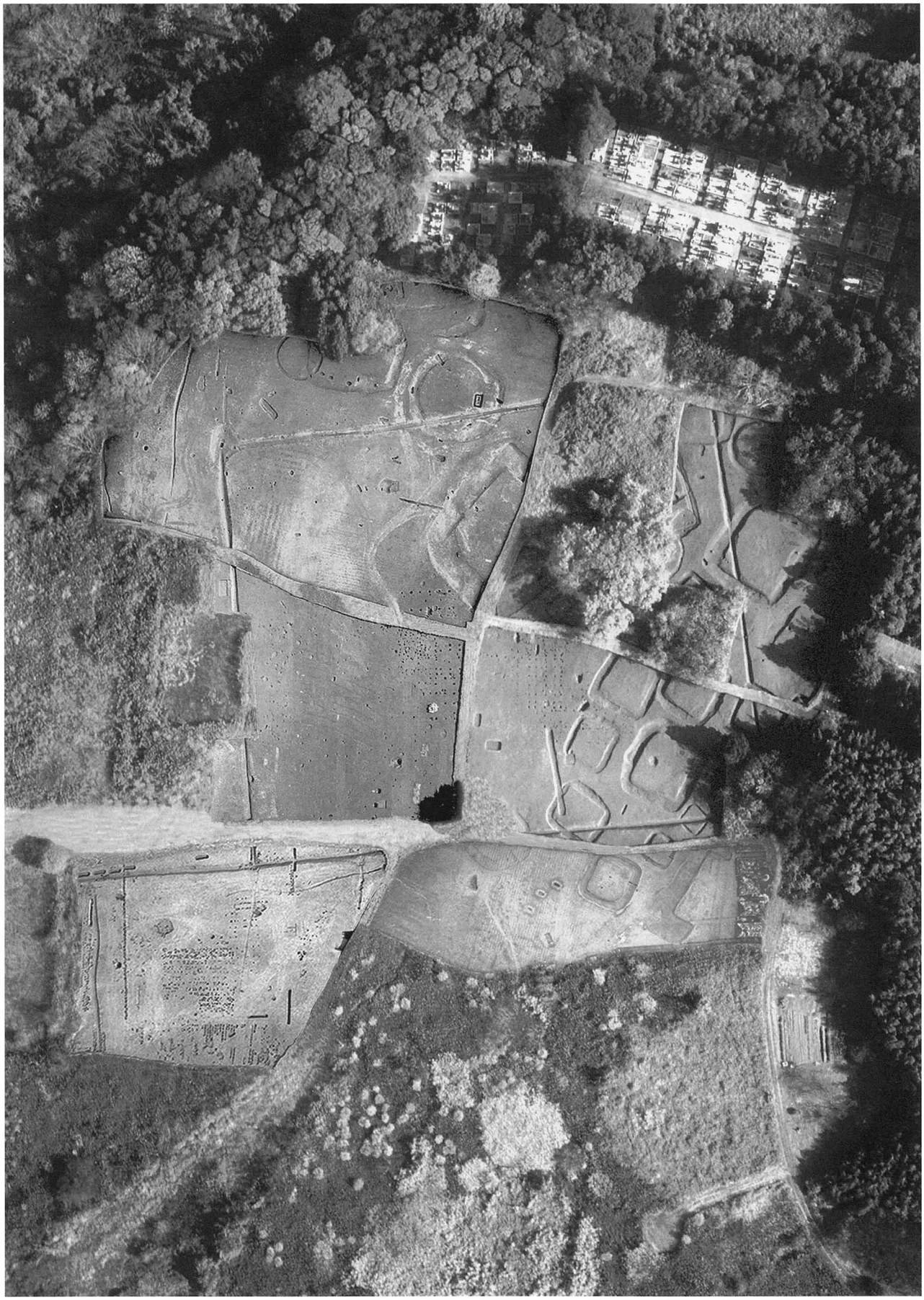
福田　聖　「溝中土坑小考」『研究紀要』８㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1991
塩谷　修　「茨城県の方形周溝墓」山岸良二編『関東の方形周溝墓』所収　1996
立花　実　「「方形周溝墓」出土の土器南関東①神奈川県」山岸良二編『関東の方形周溝墓』所収　1996
及川良彦　「「方形周溝墓」出土の土器南関東②東京都」山岸良二編『関東の方形周溝墓』所収　1996
伊藤敏行　「個別形態論」山岸良二編『関東の方形周溝墓』所収　1996
坂本和俊　「埋葬施設の諸問題」山岸良二編『関東の方形周溝墓』所収　1996
加藤修司・高田博他　「房総地方における前期古墳の展開」千葉県文化財センター研究紀要21　2000
皆川　修　「十万原遺跡の方形周溝墓」『研究ノート10号』所収㈶茨城県教育財団　2001
吉澤　悟ほか　『常名遺跡群確認調査　神明遺跡（第３次調査）』土浦市教育委員会　2002
比毛君男ほか　『山川古墳群確認調査　西谷津遺跡　北西原遺跡（第６次調査）　神明遺跡（第４次調査）』土浦市教育委員会　2003
浅井哲也　「茨城県における古墳時代前期の土器」『領域の研究－阿久津久先生還暦記念論集』　2003
皆川　修　「茨城の方形周溝墓の一考察」『領域の研究－阿久津久先生還暦記念論集』　2003
比毛君男ほか　『北西原遺跡（第３次・第４次調査）　山川古墳群（第１次調査）』土浦市教育委員会　2004
石川　功・小川和博・窪田恵一ほか　『山川古墳群（第２次調査）』土浦市教育委員会　2004

（小川和博）

第85図　6号溝跡（SD06）確認状況図

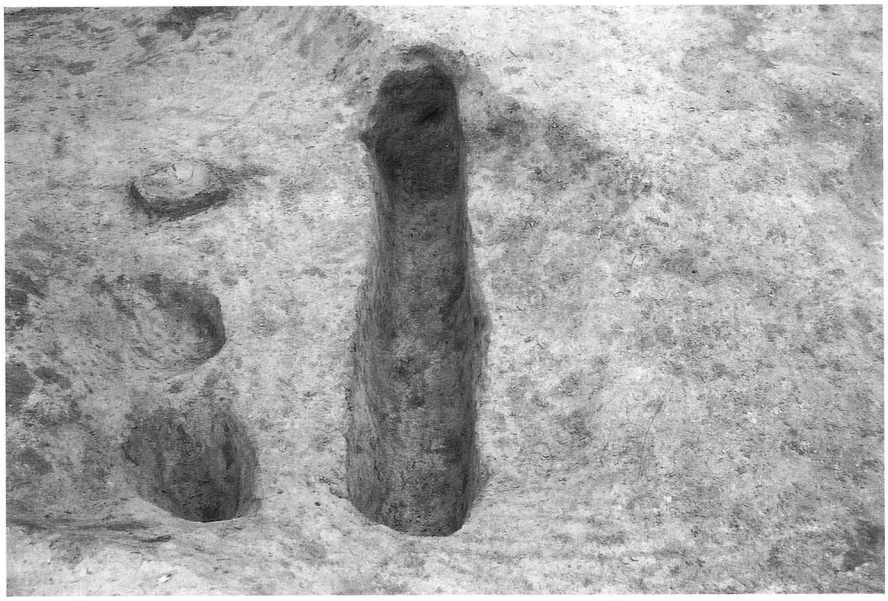
写　真　図　版

山川古墳群第３次調査航空写真



山川古墳群（第１～３次調査）等合成写真

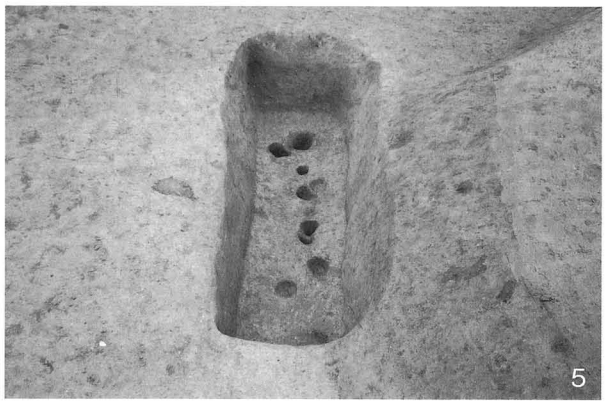
調査前風景

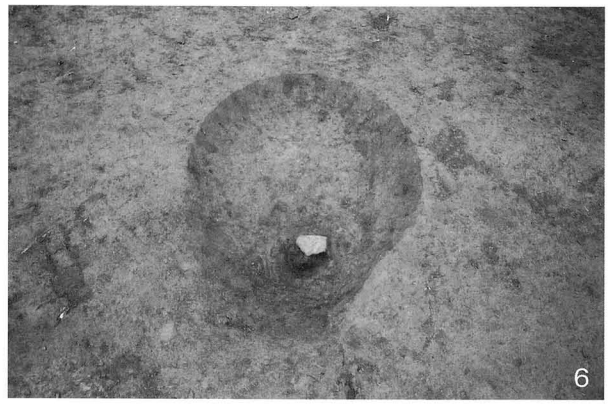


１号土坑

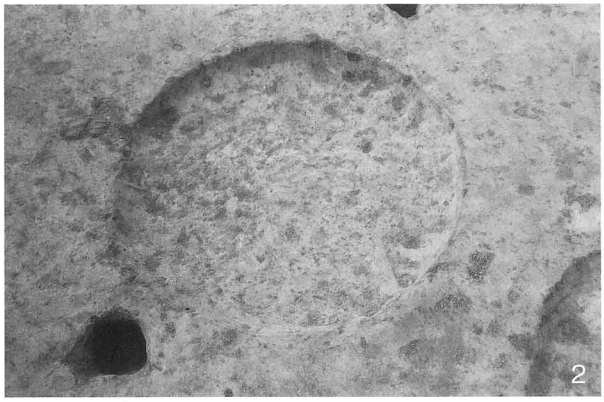
２号土坑

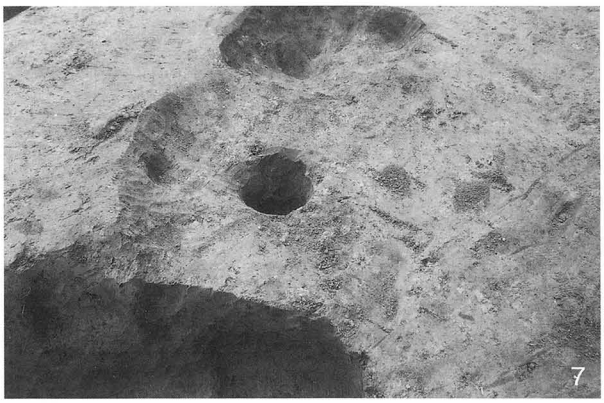
PL. 4



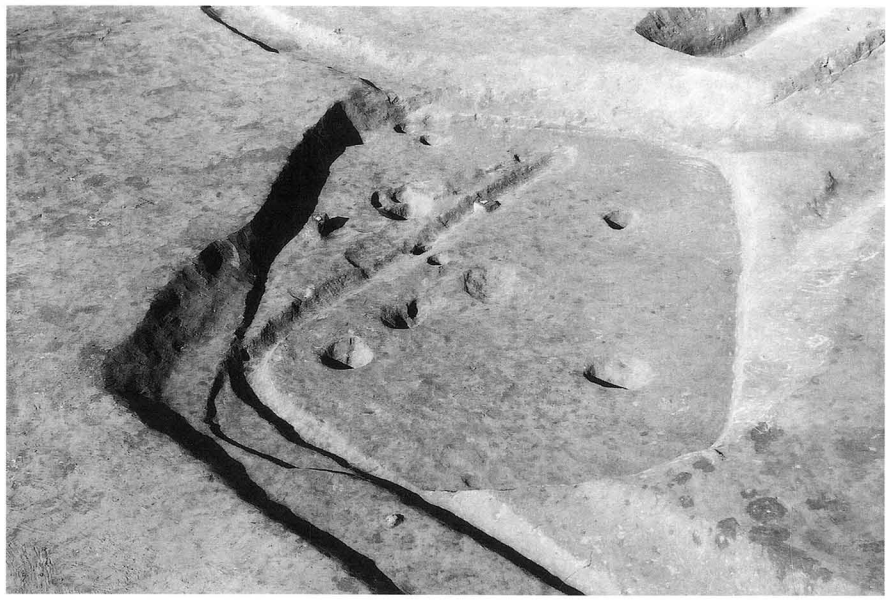


1：3号土坑　　2：4号土坑
3：7号土坑　　4：9号土坑
5：10号土坑　　6：11号土坑
7：12号土坑　　8：13号土坑

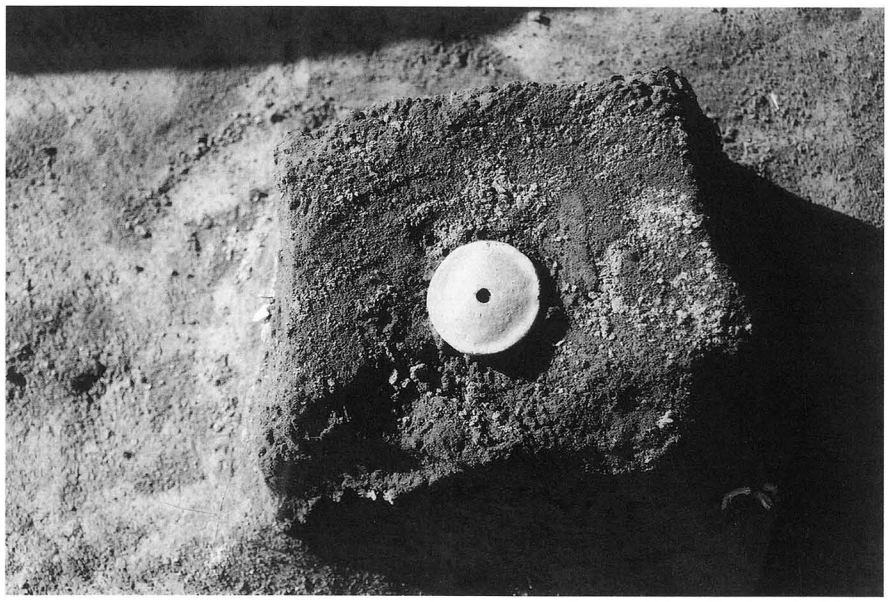




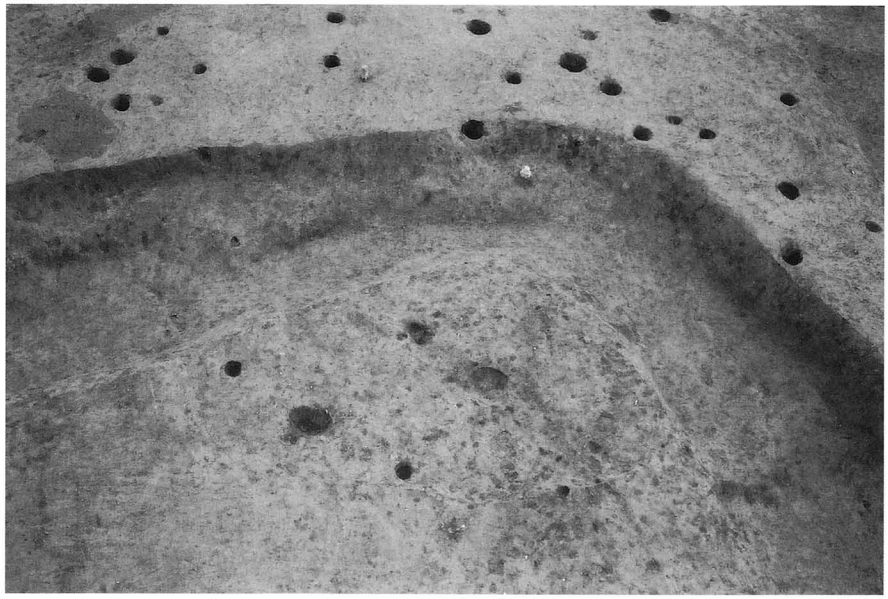
1：14号土坑　　2：15号土坑
3：16号土坑　　4：17号土坑
5：18号土坑　　6：19号土坑
7：１号屋外炉跡　　8：２号屋外炉跡



１号住居跡



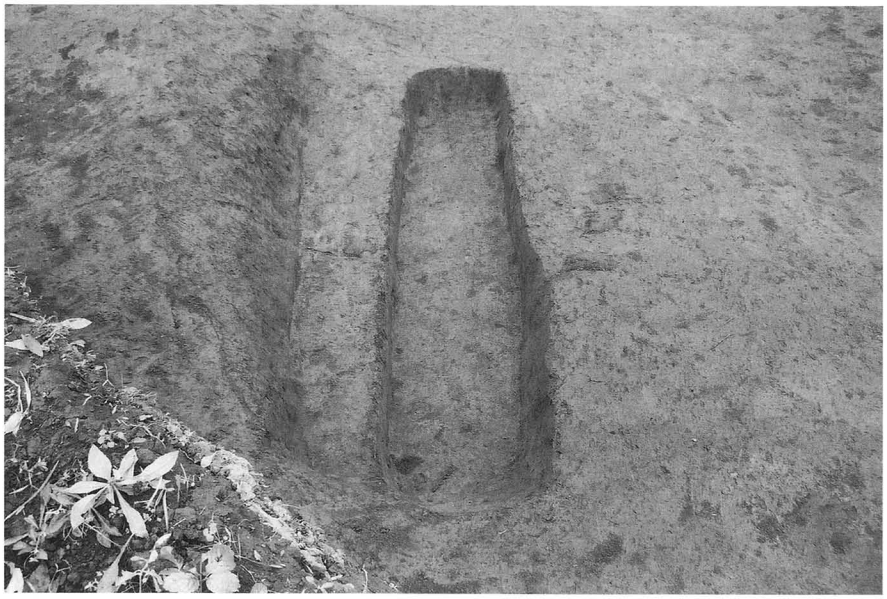
１号住居跡
遺物出土状況



２号住居跡

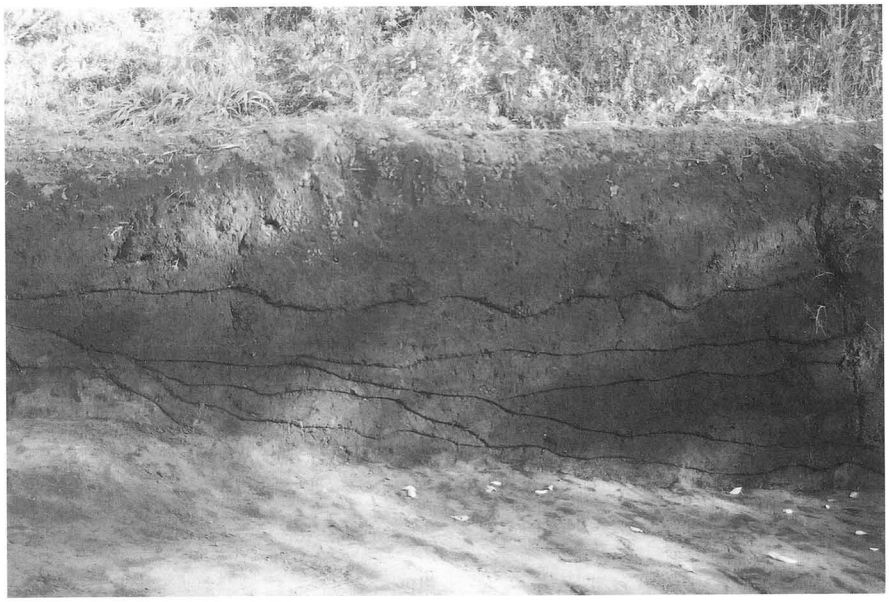
７号墳全景

８号墳全景



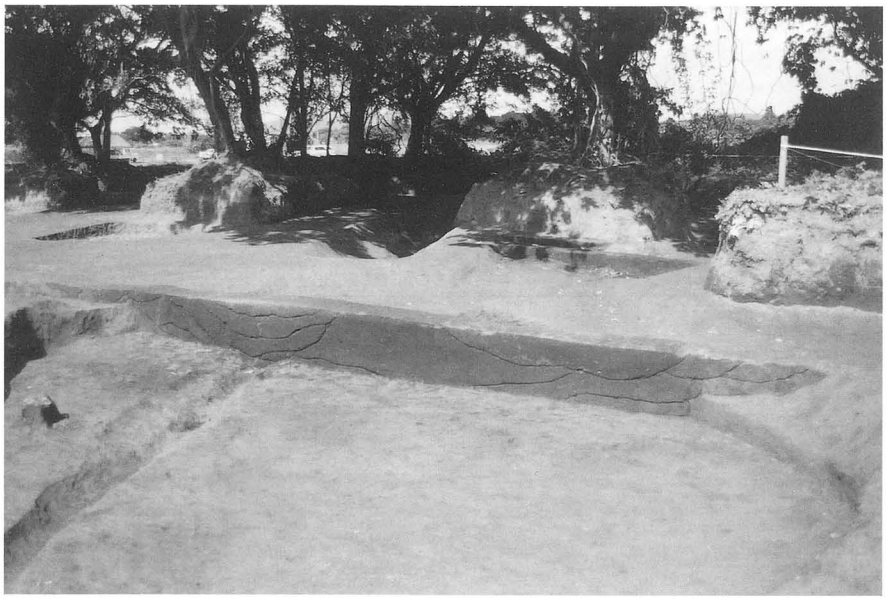
８号墳
１号埋葬施設

８号墳
２号埋葬施設



８号墳土層断面

13号墳全景



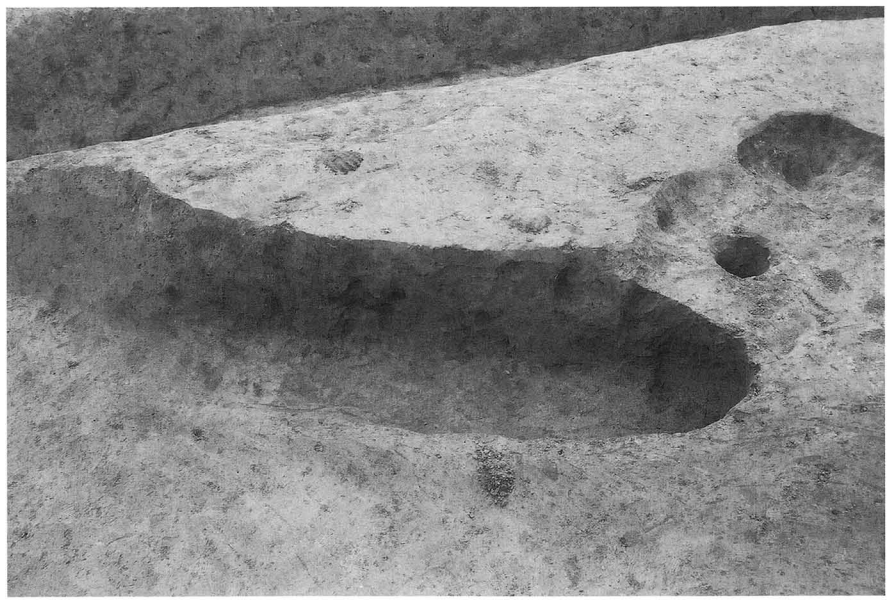
14号墳全景

14号墳主体部

14号墳主体部
掘り方

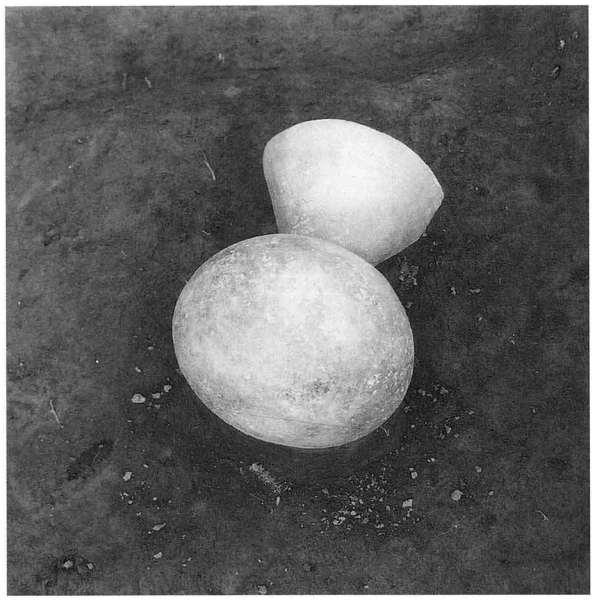
15号墳全景

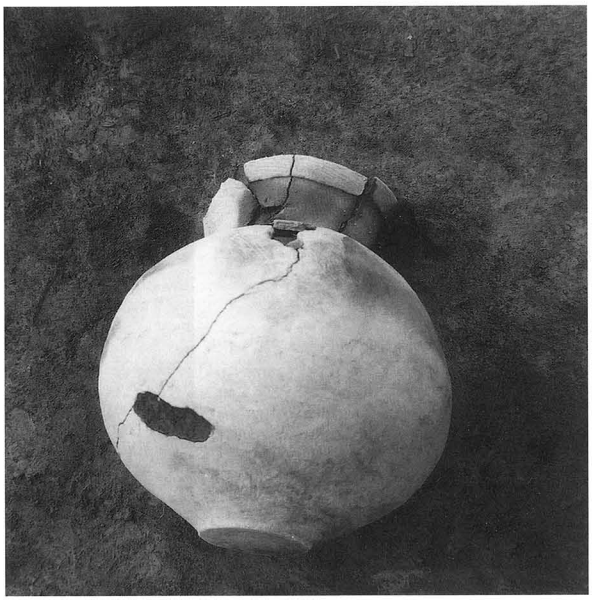
16号墳全景

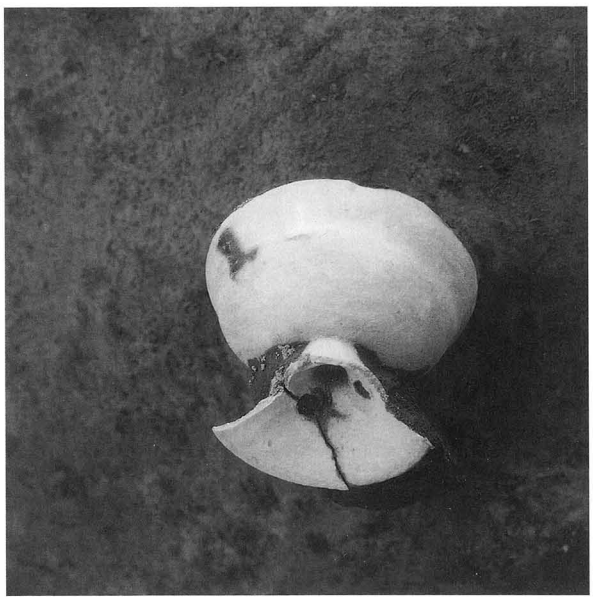


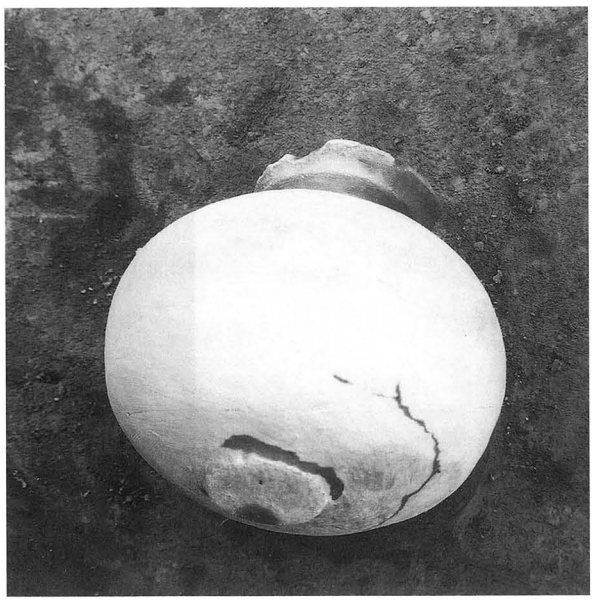
16号墳
1号埋葬施設

16号墳
遺物出土状況（左、下）

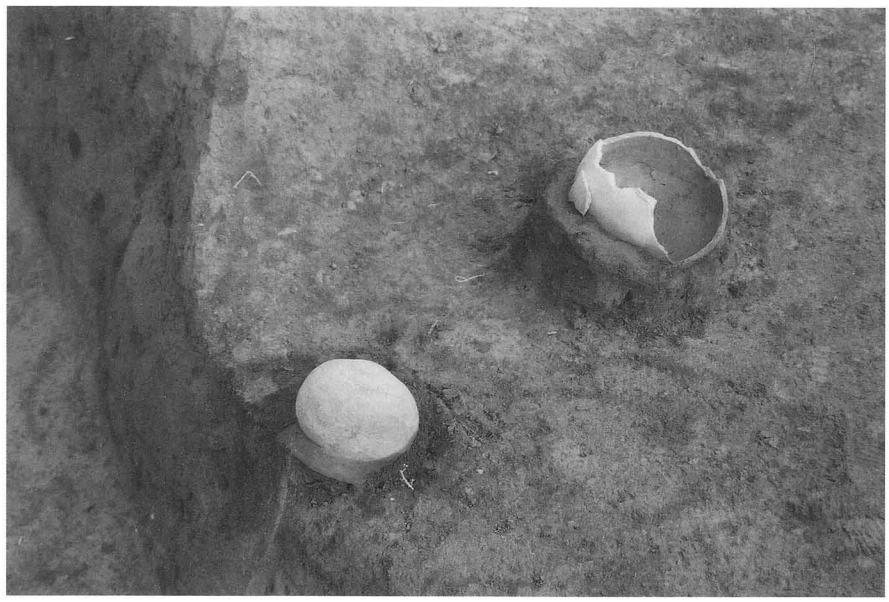






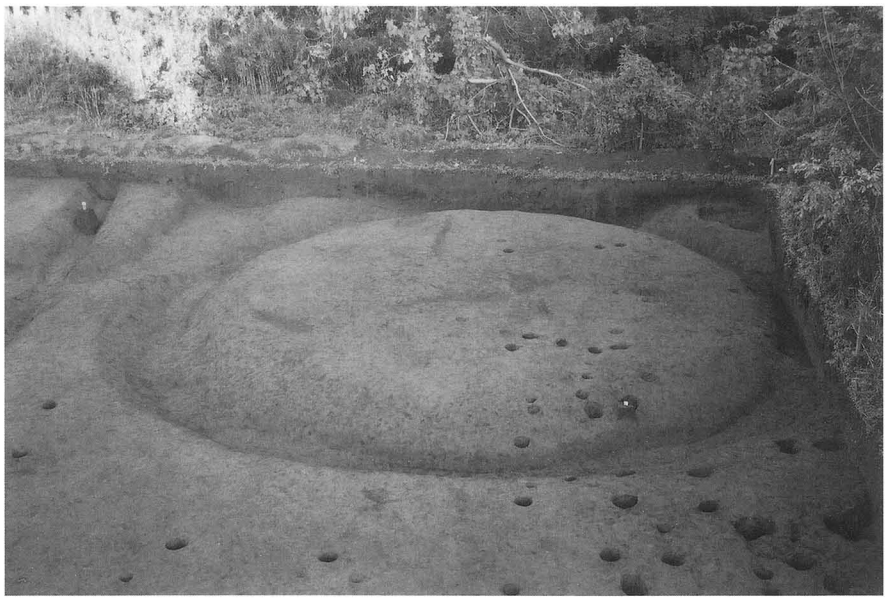


18号墳全景



18号墳
遺物出土状況

19号墳全景

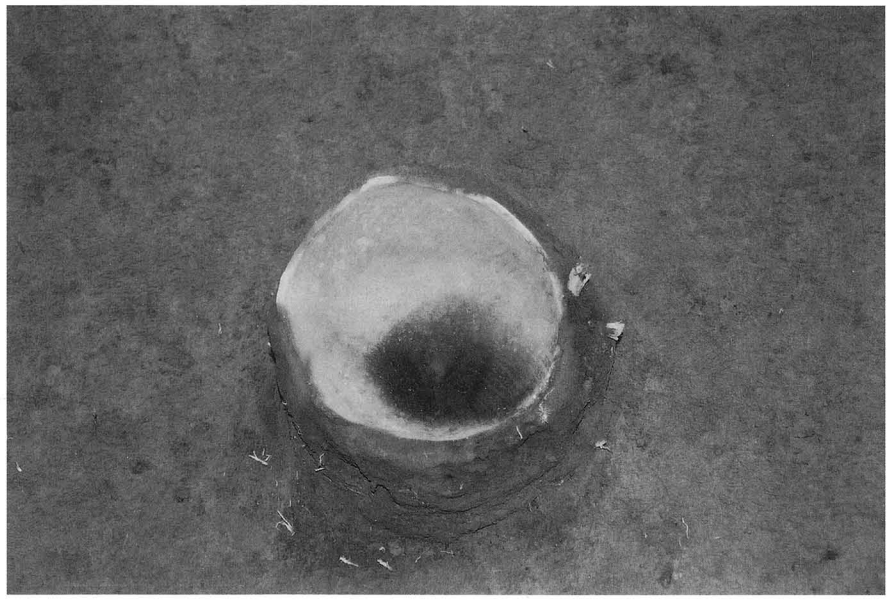


20号墳全景

21号墳全景

21号墳
1号埋葬施設

22号墳全景



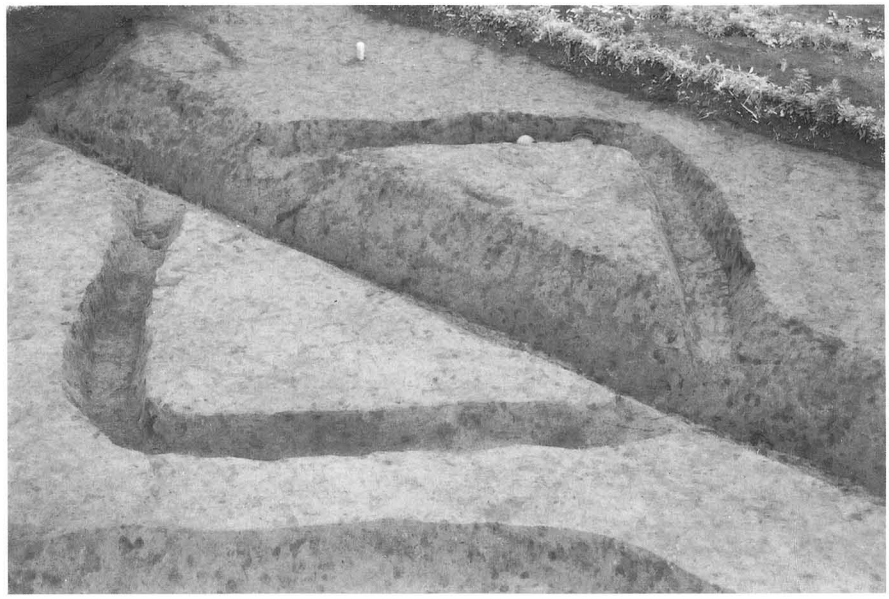
22号墳
遺物出土状況

23号墳全景

24号墳全景

25号墳全景

26号墳
遺物出土状況



27号墳全景

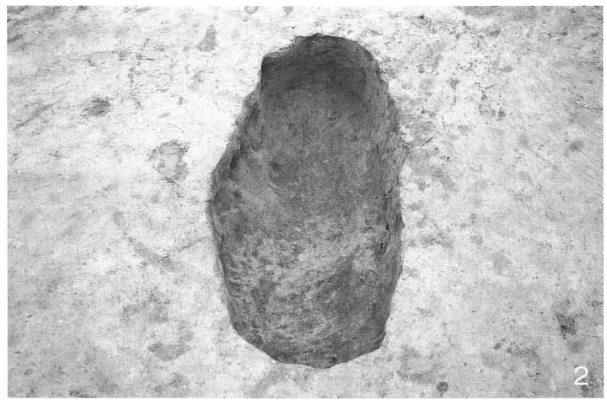
28号墳全景

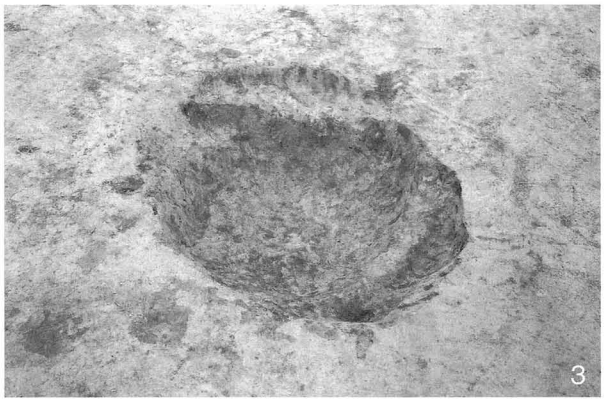
29・30号墳全景

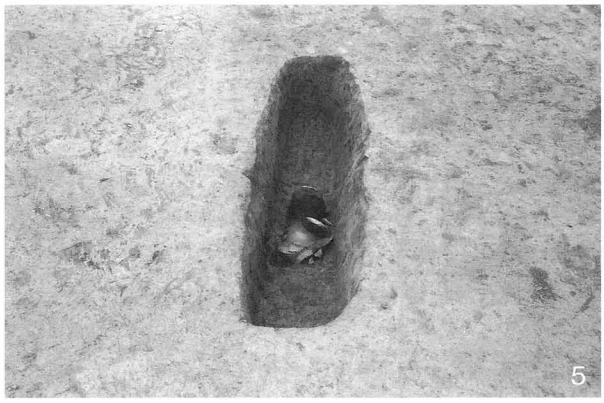
30号墳全景

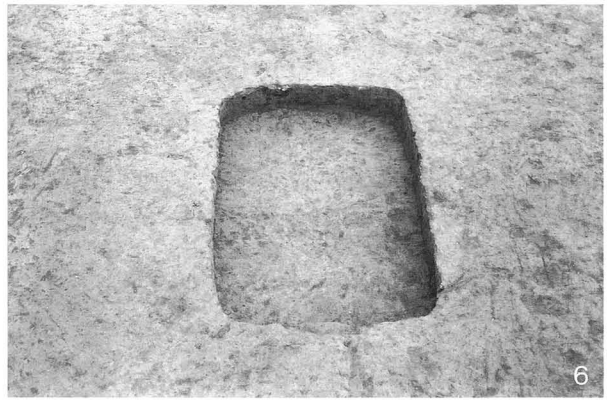
29号墳全景

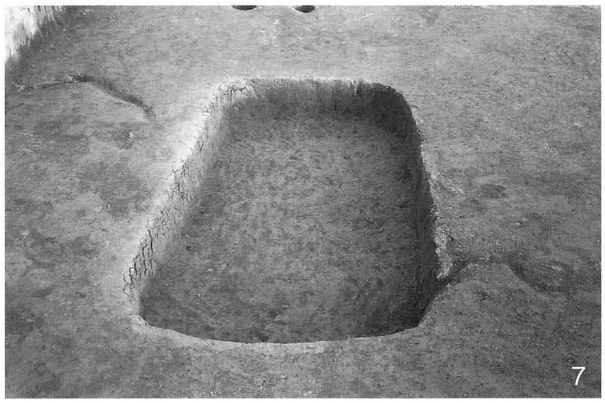
31号墳全景



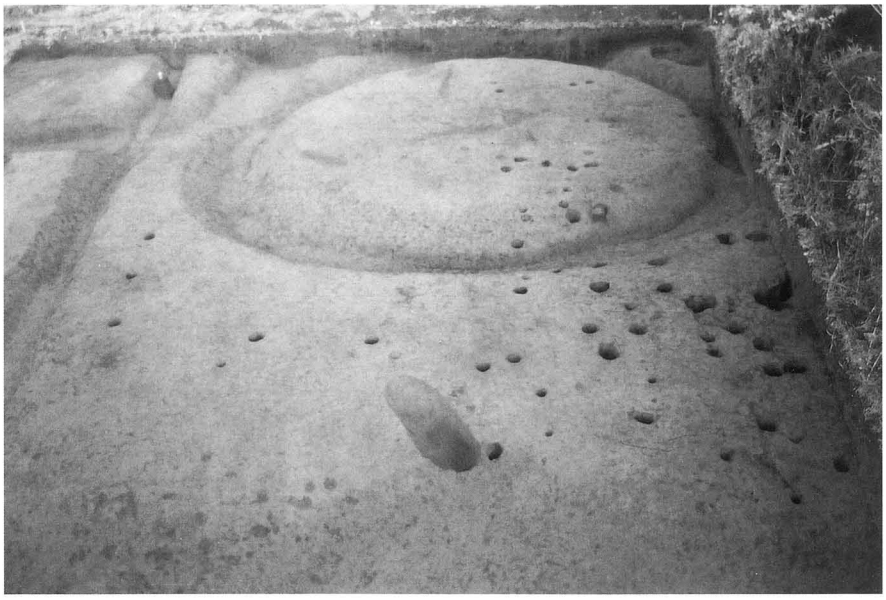








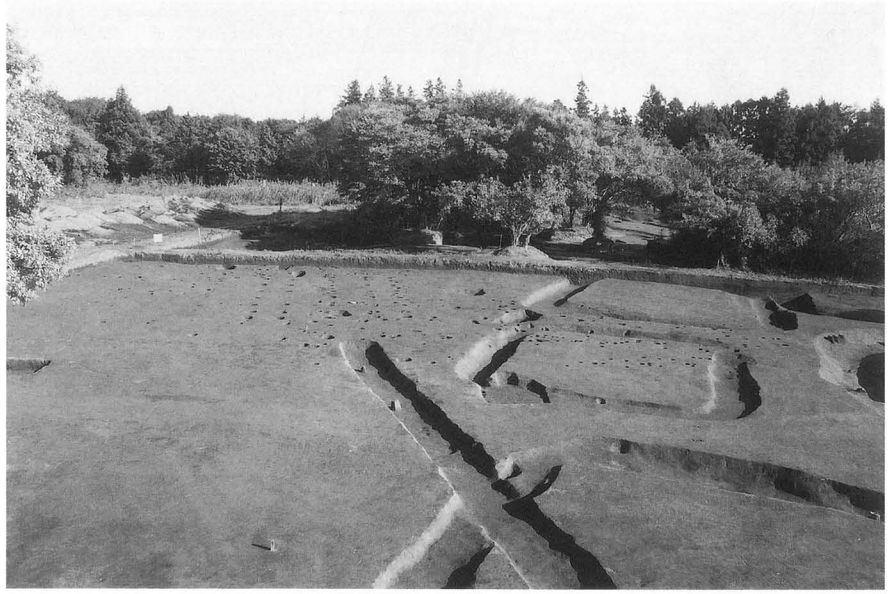
1：1号竪穴状遺構　2：3号竪穴状遺構
3：4号竪穴状遺構　4：5号竪穴状遺構
5：6号竪穴状遺構　6：7号竪穴状遺構
7：8号竪穴状遺構　8：9号竪穴状遺構



1 号柱穴群全景

1 号柱穴群P55遺物出土状況

1 号掘立柱建物跡・
5 号柱穴群全景



１号掘立柱建物跡・
５号柱穴群全景

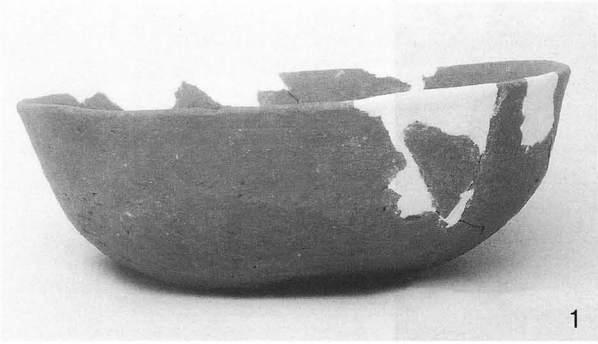
６号溝跡

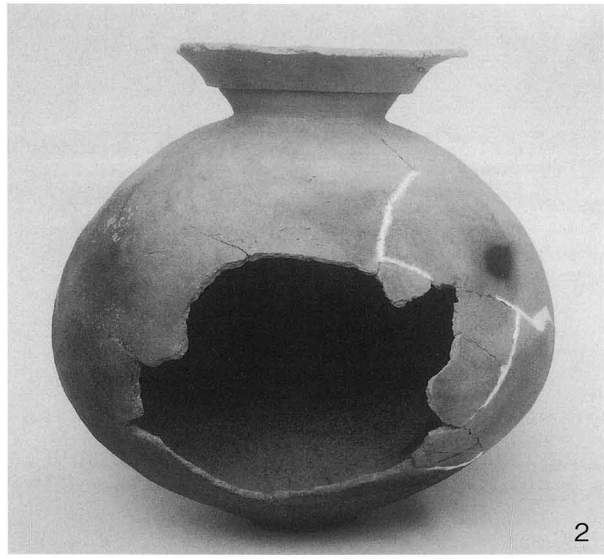
６号溝跡

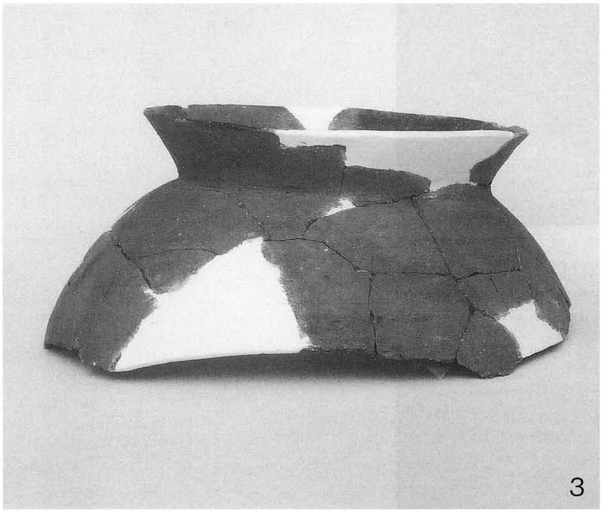
6号溝跡

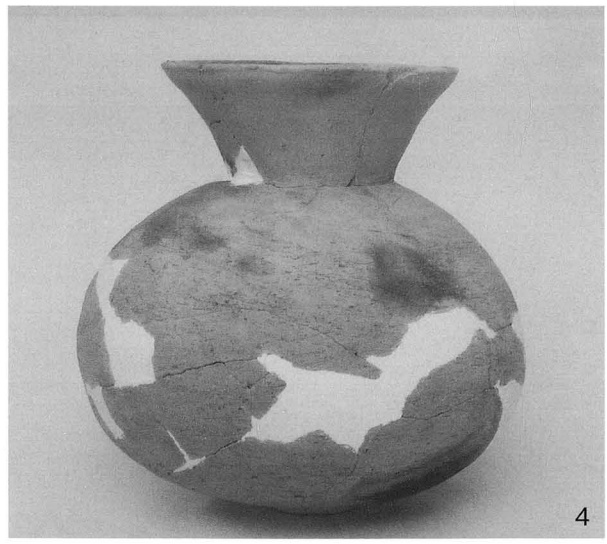
4号溝跡

1号井戸跡



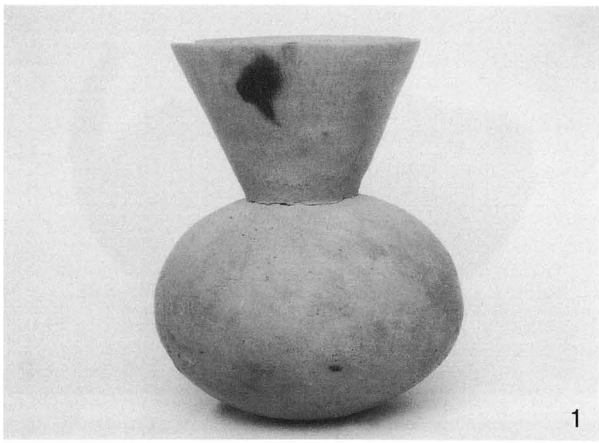


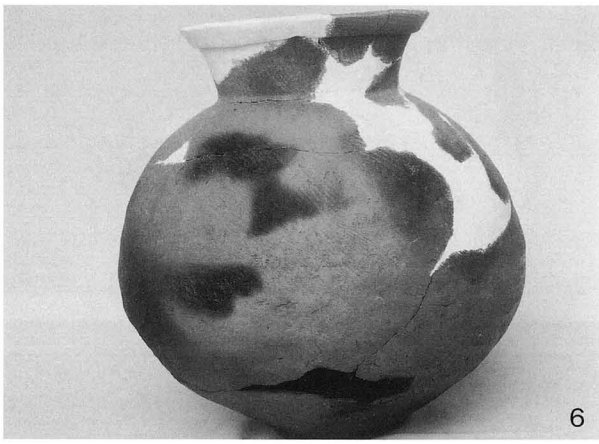


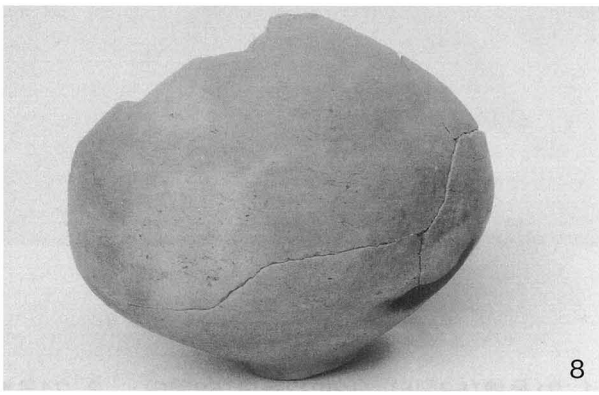


1：７号墳（28図1）　2：８号墳（28図2）　3：12号墳（28図4部分）　4：15号墳（39図1）　5：16号墳（39図2）
6：16号墳（39図4）　7：16号墳（39図3）

古墳時代出土遺物（１）

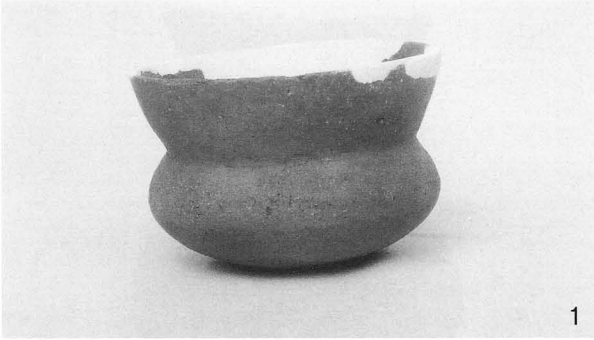


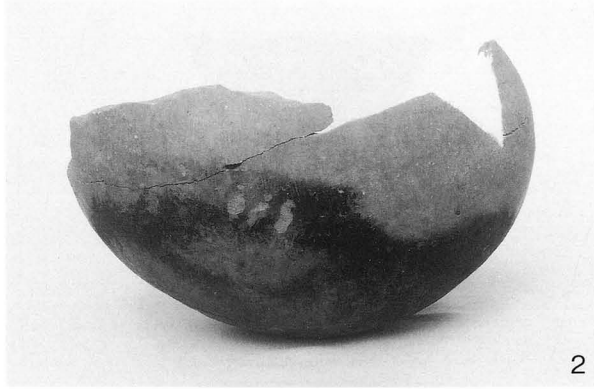


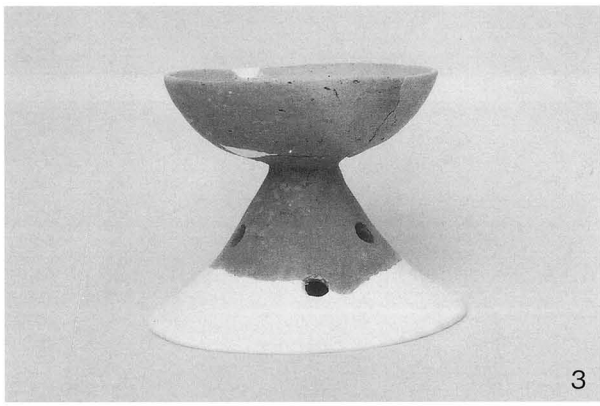


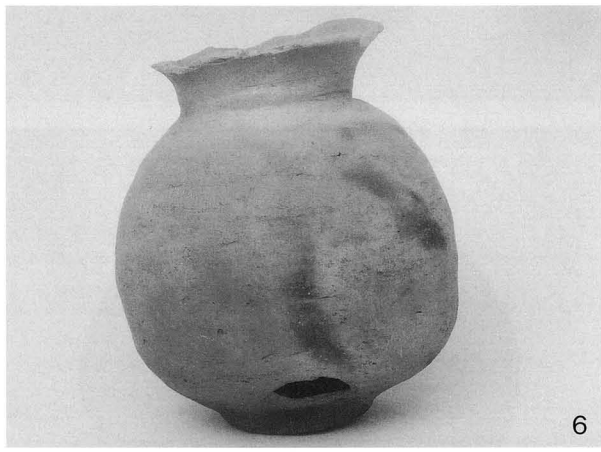
1：16号墳（39図5）　2：16号墳（39図6）　3：16号墳（39図7）　4：16号墳（40図1）　5：16号墳（40図2）
6：16号墳（40図3）　7：18号墳（58図1）　8：18号墳（58図3）

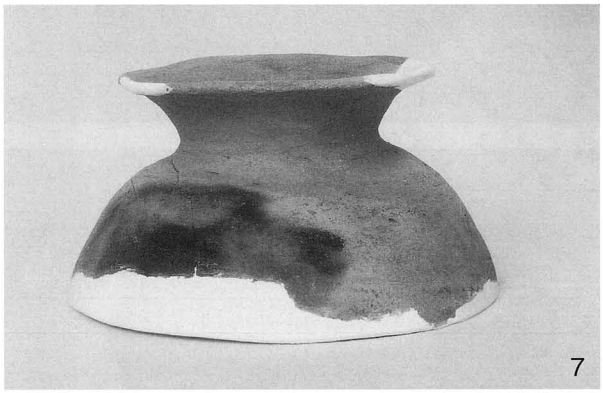
古墳時代出土遺物（2）

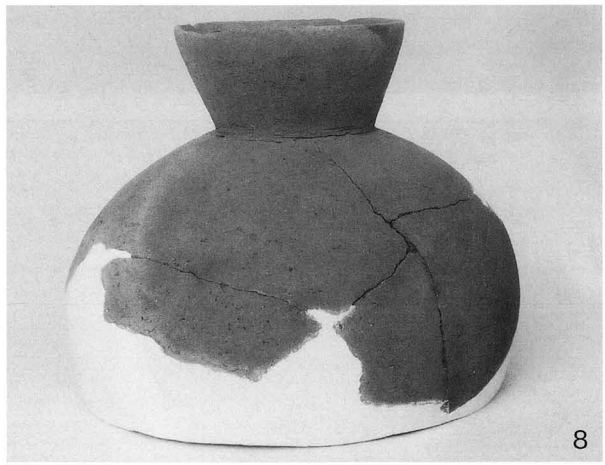






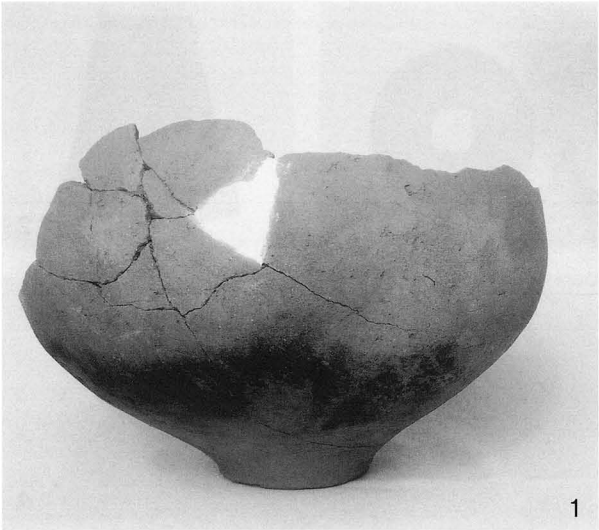


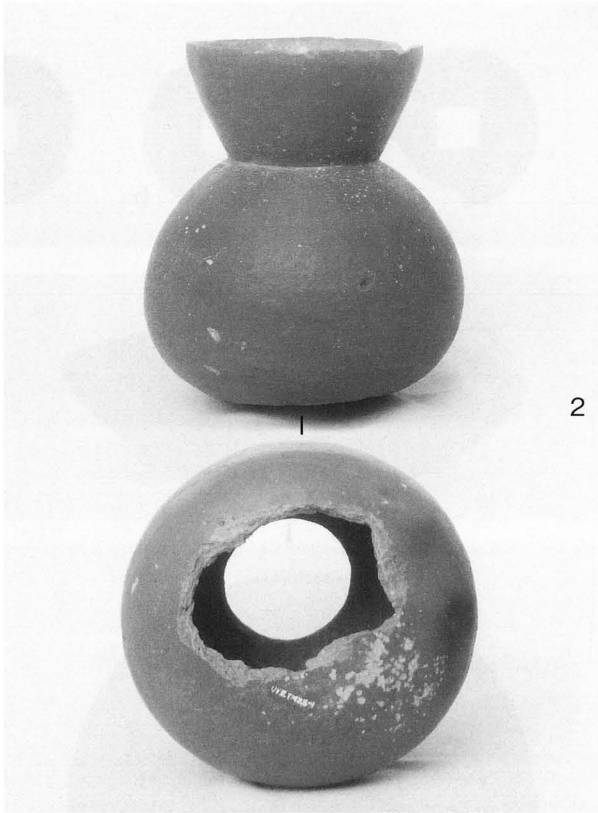


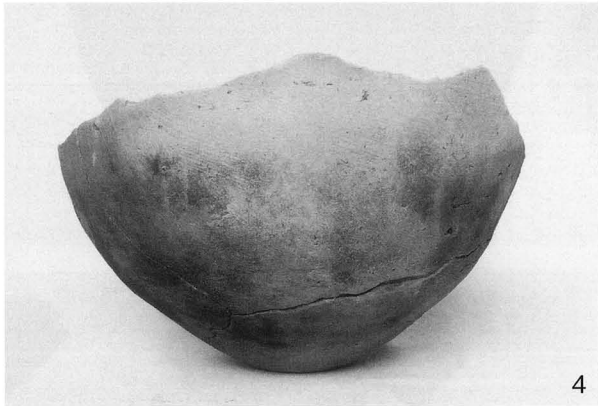


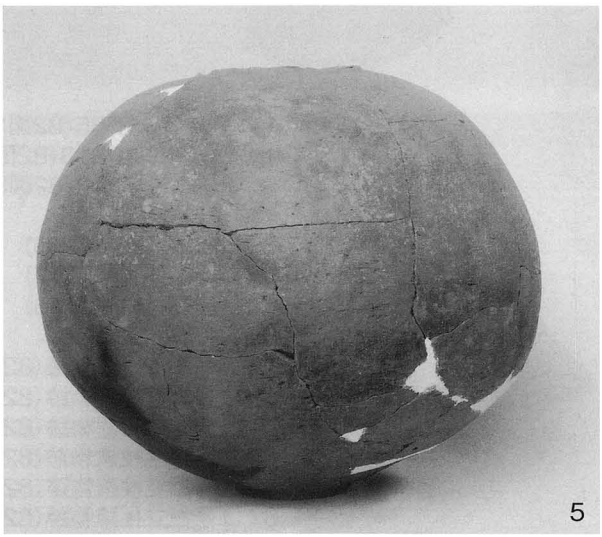
1：21号墳（58図5）　2：22号墳（58図6）　3：24号墳（58図7）　4：26号墳（58図9）　5：26号墳（58図8）
6：26号墳（59図1）　7：26号墳（59図2）　8：27号墳（59図3部分）

古墳時代出土遺物（３）



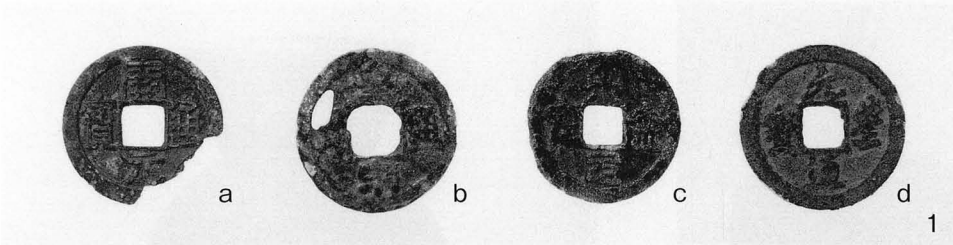


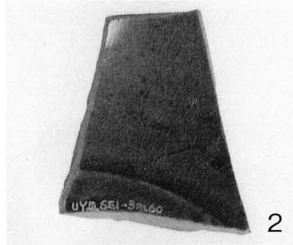


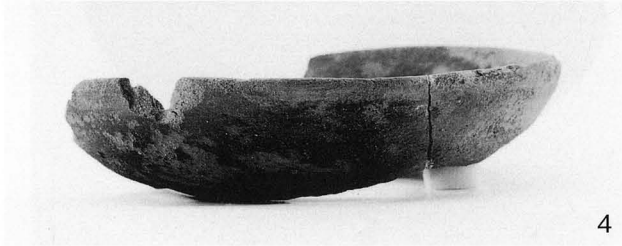


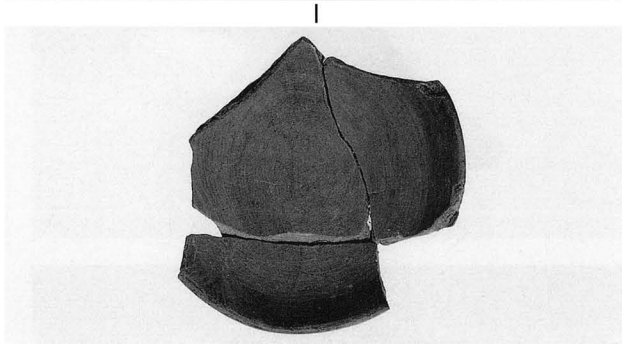
1：27号墳（59図3部分）　2：28号墳（62図1）　3：28号墳（62図2）　4：28号墳（62図5）　5：28号墳（62図3）
6：6号竪穴状遺構（67図1）

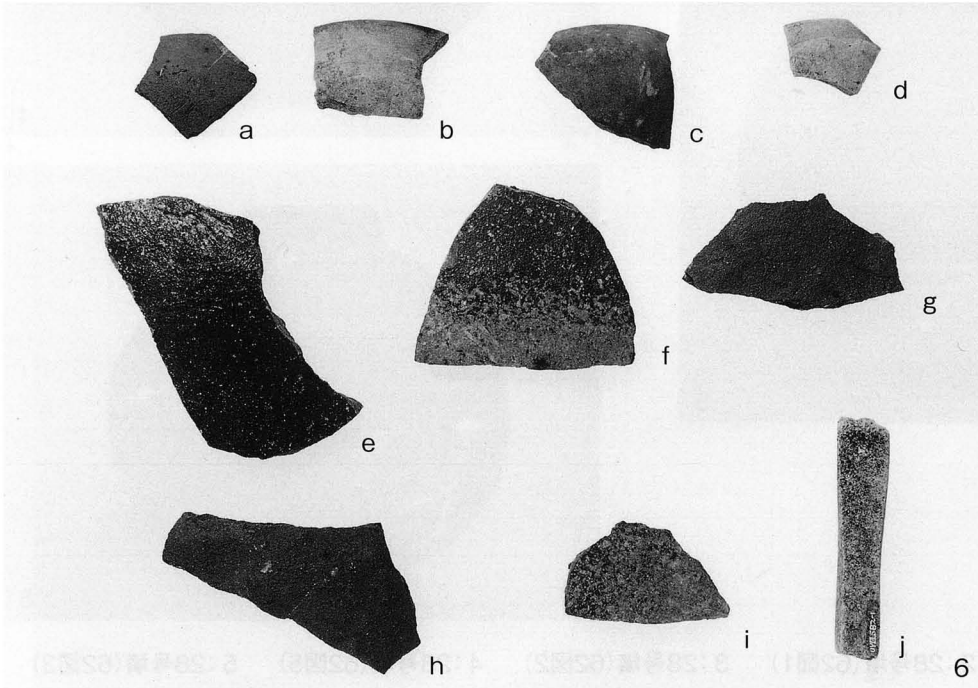
古墳時代出土遺物（4）











1a：1号柱穴群P55（82図1）
1b：5号柱穴群P513（82図2）
1c：5号柱穴群P20（82図3）
1d：遺構外（82図4）
2：1号井戸跡（82図15）
3：1号井戸跡（82図17）
4：1号井戸跡（82図16）
5：2号溝跡（82図20）
6a：1号掘立柱建物跡（82図5）
6b：1号掘立柱建物跡（82図6）
6c：1号掘立柱建物跡（82図7）
6d：1号掘立柱建物跡（82図8）
6e：1号掘立柱建物跡（82図9）
6f：1号掘立柱建物跡（82図10）
6g：1号掘立柱建物跡（82図11）
6h：1号掘立柱建物跡（82図12）
6i：1号掘立柱建物跡（82図13）
6j：1号掘立柱建物跡（82図14）

中世出土遺物

報告書抄録

ふりがな	やまかわこふんぐん（だいさんじちょうさ）
書　　名	山川古墳群（第３次調査）
副 書 名	土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	第10集
シリーズ名	
編著者名	小川和博　大渕淳志　関口　満
編集機関	山川古墳群第三次調査会
所 在 地	〒300-0811　TEL029（826）7111 茨城県土浦市上高津1843番地　上高津貝塚ふるさと歴史の広場内
発行機関	土浦市教育委員会
発行年月日	西暦2007年（平成19年）１月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード		経緯度		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺構番号	北緯	東経			
山川古墳群 第３次調査	土浦市常名 2710ほか	08203	235	36° 9'50"	140° 11'05"	平成17年 ９月１日～ 12月１日	約6,500㎡	総合運動公園建設事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山川古墳群 第３次調査	古墳群	縄文時代 弥生時代 古墳時代 中世	土坑15、屋外炉跡２基 竪穴住居跡２軒 古墳22基（方墳19、円墳２、帆立貝式前方後円墳１）、竪穴状遺構５基 掘立柱建物跡１棟、柱穴群５箇所、井戸跡１基、竪穴状遺構４基、溝跡６条など	縄文土器、石器 弥生土器、土製品 土師器 土師質土器、陶磁器、銭貨	古墳群の中では、古墳時代前期の方墳を中心に古墳が群在して確認され、県内でも有数な規模を誇る方墳群と言える。中世の遺構としては、以前から部分的に確認されて来た方形館跡の全体像が把握できた。

要　約

今回の調査は山川古墳群の第３次調査となる。今回の調査で確認された遺構や遺物の中心は、古墳時代と中世と言える。このうち古墳時代の調査成果としては、古墳群内で前期から後期に及ぶ古墳が確認され、その大半は前期の方墳である。そのあり方は特徴的で、各々の方墳がほぼ同様な方向性を持ち、群在して作られている。これらの方墳は、墳丘の存在が明確でなく、墳丘下にあたる位置で主体部は全く確認されていない。周溝からは土師器の壷・甕・器台などが良好な状態で出土しており、なかには胴部を意図的に穿孔しているものもある。本古墳群は古墳時代前期を中心に、長きにわたり形成された墓域であったことが理解できる。

中世の遺構・遺物の特徴として、過去の調査でも部分的に確認されてきた方形館跡の全体像が理解できる成果が得られた。この館跡の規模は南北約125m、東西約103mの方形で、やや南北が長い特徴がある。方形に区画された館跡内の中央付近には掘立柱建物跡や柱穴群が密集して確認された。館跡内からの出土遺物は、土師質土器の皿や常滑産陶器・竜泉窯系青磁・銭貨などが出土し、およそ13世紀から14世紀の中世前期のものと考えられる。これらの出土遺物の出土量は少なく、かえってこの時期の特徴とも考えられている。

山川古墳群（第３次調査）
土浦市総合運動公園建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書　第10集

発行日　2007(平成19)年１月31日
編　集　山川古墳群第三次調査会
発　行　土浦市教育委員会
問合せ先　上高津貝塚ふるさと歴史の広場
〒300-0811　茨城県土浦市上高津1843番地
TEL　029（826）7111
印　刷　株式会社　横山印刷